橿原市埋蔵文化財調査報告　第 14 冊

新 堂 遺 跡 Ⅱ

－京奈和自動車道「御所区間」建設に伴う発掘調査報告書－

2018 年 3 月

奈良県橿原市教育委員会

序

ここに新堂遺跡の発掘調査報告書を『橿原市埋蔵文化財調査報告 第14冊　新堂遺跡Ⅱ』として刊行します。本書は、奈良県橿原市新堂町に所在する新堂遺跡において橿原市教育委員会が平成17年に実施した発掘調査の成果をまとめたものです。

橿原市の西部では近年、京奈和自動車道の建設に伴う発掘調査によって、様々なめざましい発見が相次ぎました。新堂遺跡はその代表格で、渡来系要素を有す古墳時代の集落跡が発見されるなど、多くの新知見が得られており、橿原市で今もっとも注目を集めている遺跡の一つとなっています。

本書で報告を行う橿教委2005－4次調査では、古墳時代中期の遺物が多数出土しました。その中には日本（倭）製の土師器や須恵器とともに、渡来系の遺物とされる陶質土器や韓式系土器が含まれていました。この他にも多量の製塩土器や鍛冶関連遺物といった特徴的な遺物も出土しています。これらの遺物は、古墳時代中期の社会を探る重要な手掛かりとして、期待が寄せられています。

出土した陶質土器は現在、平成26年度に開館した「歴史に憩う橿原市博物館」において、目玉資料の一つとして常設展示しておりますので、ぜひ足をお運びください。

最後になりましたが、現地の発掘調査並びに本書の刊行にあたって御協力いただいた関係諸氏ならび諸機関に厚く御礼申し上げると共に、本書が多くの方々に活用され、遺跡の重要性を周知する機縁となることを願います。

平成30年3月9日

橿原市教育委員会
教育長　吉本重男

例　言

1　本書は、奈良県橿原市新堂町に所在する新堂（しんどう）遺跡の発掘調査報告書である。

2　本書で報告を行う発掘調査は、京奈和自動車道（御所区間）建設に伴って実施している。国土交通省 近畿地方整備局 奈良国道事務所の委託を受け、奈良県教育委員会の指導のもと、奈良県橿原市教育委員会が発掘調査及び整理・報告作業を担当している。

3　発掘調査及び整理・報告作業にかかる費用については、国土交通省 近畿地方整備局 奈良国道事務所が負担している。

4　現地調査期間は平成 17（2005）年 9 月 14 日～同年 12 月 20 日である。

5　遺物整理・報告書作成期間は平成 25（2013）年度～平成 29（2017）年度である。

6　現地調査時の体制は、橿原市教育委員会事務局　文化財課長 佐藤幸一、課長補佐 齊藤明彦、係長 竹田正則、主査 平岩欣太、嘱託 桝田治である。現地調査は平岩・桝田が担当している。

また、遺物整理時の体制は文化財課長 竹田正則（平成 25～29 年度）、課長補佐 濱口和弘（平成 25～29 年度）・中川明彦（平成 25 年度）、統括調整員 平岩欣太（平成 25～29 年度）・米田一（平成 26 年度）、事業調整係長 米田一（平成 25 年度）・田原明世（平成 27～29 年度）、主査 松井一晃（平成 25 年度）・石坂泰士（平成 25～29 年度）である。平成 25 年度の整理作業は松井が、平成 26～29 年度の整理作業は石坂が、主に担当した。

7　発掘調査及び整理作業を実施するにあたって、地元各位をはじめ、奈良国道事務所、独立行政法人奈良文化財研究所、奈良県教育委員会、奈良県立橿原考古学研究所より多大な御協力を得た。記して感謝申し上げたい。なお、紙幅の都合もあり、個人名は省略させていただきます。

8　出土遺物をはじめ調査記録は、橿原市教育委員会で保管している。遺物の一部は、歴史に憩う橿原市博物館にて常設展示を行っている。

9　本書所収の写真のうち、現場調査写真は調査担当者が撮影を行った。遺物写真はアートフォト右文および株式会社エイ・テックが撮影を行った。

10　本書の編集及び執筆は、石坂が担当した。

凡　例

1　本書で示す方位は座標北を使用した。座標値は世界測地系（平面直角座標第Ⅵ系）に基づく。

2　写真図版に掲載している遺物の縮尺率は任意である。

3　遺構・遺物の図面縮尺は各図に示している。

4　土層名における色調は『新版標準土色帖 24 版』（小山正忠・竹原秀雄 編著、 日本色研事業株式会社 発行）を使用した。

5　遺構断面図の標高値はメートル表記である。小数点以下の記述が無い場合、小数点下の値は０である。標高値は東京湾平均海面（T.P.）からの値である。

6　遺物実測図の番号は、一部の例外（SX523 出土玉類）を除き、本書全体の通し番号で示している。図版の遺物番号もこれと一致している。

7　土器の実測図については、須恵器・陶質土器・陶器は断面を黒塗りで、その他の土器は断面を白抜きで、それぞれ表現している。

8　掲載している土器の拓本図は、いずれも外面の拓本である。

目　次

序・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ⅰ
例言・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ⅱ
凡例・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ⅲ
目次・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ⅳ
挿図表目次・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ⅴ

第Ⅰ章　調査の経過
　第1節　調査に係る経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
　第2節　発掘作業の経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
第Ⅱ章　遺跡の位置と環境
　第1節　地理的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
　第2節　歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
第Ⅲ章　調査の成果
　第1節　調査の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
　第2節　基本層序・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
　第3節　遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
　第4節　遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・34
第Ⅳ章　総括
　第1節　調査成果のまとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・130
　第2節　遺構・遺物・遺跡の評価・・・・・・・・・・・・・・・・・・・131
報告書抄録・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・134
図版

挿 図 表 目 次

図1　調査地位置図 ・・・・・・・・・・ 5
図2　調査地周辺遺跡地図（S＝1/12,500。遺跡範囲は 2017 年度当初の内容）・・・・・・・・・・ 7
図3　調査地周辺の地形と発掘調査地点（S=1/2,500）・・・・・・・・・・ 8
図4　調査区北壁　上層断面（S＝1/50）・・・・・・・・・・12
図5　調査区東壁　上層断面①（S＝1/50）・・・・・・・・・・13
図6　調査区東壁　上層断面②（S＝1/50）・・・・・・・・・・14
図7　上層遺構配置図（S＝1/250）・・・・・・・・・・16
図8　中層遺構平面図（S＝1/250）・・・・・・・・・・17
図9　中層遺構北東部（屋敷地）平面図（S＝1/150）・・・・・・・・・・18
図10　中層遺構　SD 土層断面①（S＝1/40）・・・・・・・・・・19
図11　中層遺構　SD 土層断面②（S＝1/40）・・・・・・・・・・20
図12　中層遺構　SE 土層断面（S＝1/40）・・・・・・・・・・23
図13　中層遺構　土坑墓 SK284・295 平面・断面（S＝1/40）・・・・・・・・・・24
図14　中層遺構　SK 土層断面（S＝1/40）・・・・・・・・・・25
図15　中層遺構　SX 土層断面（S＝1/40）・・・・・・・・・・26
図16　下層遺構平面図（S＝1/250）・・・・・・・・・・28
図17　下層遺構　SX524・SR525 東西畦断面（S＝1/50）・・・・・・・・・・29
図18　下層遺構　SX523・SX524 南北畦断面（S＝1/50）・・・・・・・・・・30
図19　下層遺構　SK 土層断面（S＝1/20）・・・・・・・・・・32
図20　上層遺構出土　鉄器・鉄滓（S＝1/4・1/2）・・・・・・・・・・34
図21　SD153 上層・一括出土　土器・石器（S＝1/4）・・・・・・・・・・35
図22　SD153 下層出土　土器（S＝1/4）・・・・・・・・・・36
図23　SD343・421 出土　土器・石器（S＝1/4）・・・・・・・・・・37
図24　SD157 出土　土器・瓦（S＝1/4）・・・・・・・・・・39
図25　SD156 上層出土　土器①（S＝1/4）・・・・・・・・・・41
図26　SD156 上層出土　土器②・石器（S＝1/4）・・・・・・・・・・44
図27　SD156 下層出土　土器・石器（S＝1/4）・・・・・・・・・・45
図28　SD154 出土　土器（S＝1/4）・・・・・・・・・・46
図29　SD163・454 出土　土器（S＝1/4）・・・・・・・・・・47
図30　SD476・553・162 出土　土器（S＝1/4）・・・・・・・・・・48
図31　SE211 埋戻土・井戸枠内出土　土器（S＝1/4）・・・・・・・・・・49
図32　SE211 掘方埋土出土　土器（S＝1/4）・・・・・・・・・・50
図33　SE422 出土　土器（S＝1/4）・・・・・・・・・・51
図34　中層遺構 SK・SX 出土　土器（S＝1/4）・・・・・・・・・・52
図35　SK167 出土　土器・鉄滓（S＝1/4・1/2）・・・・・・・・・・53
図36　SX423 出土　土器（S＝1/4）・・・・・・・・・・54
図37　SX423 出土　石器（S＝1/4）・・・・・・・・・・55
図38　SX426・344 出土　土 器（S＝1/4）・・・・・・・・・・56
図39　SX158 出土　土器（S＝1/4）・・・・・・・・・・57
図40　SX158 出土　瓦・石器・鉄滓（S＝1/4・1/2）・・・・・・・・・・58
図41　SX159 出土　土器（S＝1/4）・・・・・・・・・・59
図42　中層遺構 SP 出土　土器・土製品（S＝1/4）・・・・・・・・・・60
図43　中層遺構面出土　土器①（S＝1/4）・・・・・・・・・・61
図44　中層遺構面出土　土器②（S＝1/4）・・・・・・・・・・63
図45　中層遺構面出土　石器・鉄滓（S＝1/4・1/2）・・・・・・・・・・64
図46　SX523 上層出土　土器①（S＝1/4）・・・・・・・・・・65
図47　SX523 上層出土　土器②・土製品・石器（S＝1/4）・・・・・・・・・・67
図48　SX523 上層出土　土器③（S＝1/4）・・・・・・・・・・68
図49　SX523 上層出土　鉄滓（S＝1/2）・・・・・・・・・・69

図 50　SX523 下層出土　土器①（S = 1/4）・・・・・・ 70
図 51　SX523 下層出土　土器②（S = 1/4）・・・・・・ 73
図 52　SX523 下層出土　土器③・石器（S = 1/4）・・・・・・ 74
図 53　SX523 下層出土　土器④（S = 1/4）・・・・・・ 75
図 54　SX523 下層出土　土器⑤（S = 1/4）・・・・・・ 76
図 55　SX523 下層出土　鉄滓・鉄器（S = 1/2）・・・・・・ 79
図 56　SX523 一括出土　土器①（S = 1/4）・・・・・・ 80
図 57　SX523 一括出土　土器②（S = 1/8）・・・・・・ 81
図 58　SX523 一括出土　土器③（S = 1/4）・・・・・・ 83
図 59　SX523 一括出土　土器④（S = 1/4）・・・・・・ 84
図 60　SX523 一括出土　石器・鉄滓（S = 1/4・1/2）・・・・・・ 85
図 61　SX523 出土　玉類・土器（S = 1/2）・・・・・・ 87
図 62　SX524 上層出土　土器①（S = 1/4）・・・・・・ 90
図 63　SX524 上層出土　土器②（S = 1/4）・・・・・・ 91
図 64　SX524 一括・下層出土　土器①（S = 1/4）・・・・・・ 92
図 65　SX524 一括・下層出土　土器②（S = 1/4）・・・・・・ 94
図 66　SX524 一括・下層出土　土器③（S = 1/4）・・・・・・ 96
図 67　SX524 一括・下層出土　土器④（S = 1/4）・・・・・・ 98
図 68　SX524 一括・下層出土　土器⑤（S = 1/4）・・・・・・ 99
図 69　SX524 一括・下層出土　土器⑥（S = 1/4）・・・・・・ 100
図 70　SX524 一括・下層出土　土器⑦（S = 1/4）・・・・・・ 102
図 71　SX524 一括・下層出土　土器⑧（S = 1/4）・・・・・・ 104
図 72　SX524 一括・下層出土　土器⑨（S = 1/4）・・・・・・ 106
図 73　SX524 一括・下層出土　土器⑩（S = 1/4）・・・・・・ 107
図 74　SX524 一括・下層出土　土製品・石器・鉄滓（S = 1/4・1/2）・・・・・・ 109
図 75　SX526 出土　土器（S = 1/4）・・・・・・ 110
図 76　SK527 出土　土器（S = 1/4）・・・・・・ 110
図 77　SK542 出土　土器（S = 1/4）・・・・・・ 111
図 78　SK540 出土　土器（S = 1/4）・・・・・・ 112
図 79　SD160 出土　土器（S = 1/4）・・・・・・ 113
図 80　SD161 出土　土器（S = 1/4）・・・・・・ 114
図 81　SR525 上層出土　土器①（S = 1/4）・・・・・・ 115
図 82　SR525 上層出土　土器②（S = 1/4）・・・・・・ 116
図 83　SR525 上層出土　土器③（S = 1/4）・・・・・・ 118
図 84　SR525 上層出土　土器④（S = 1/4）・・・・・・ 119
図 85　SR525 上層出土　土器⑤・石器（S = 1/4・1/2）・・・・・・ 120
図 86　SR525 下層出土　土器①（S = 1/4）・・・・・・ 121
図 87　SR525 下層出土　土器②（S = 1/4）・・・・・・ 122
図 88　SR525 下層出土　土器③・石器（S = 1/4）・・・・・・ 123
図 89　下層遺構面出土　土器・石器・石製品（S = 1/4・1/2）・・・・・・ 124
図 90　重機掘削時・排水溝掘削時出土　土器①（S = 1/4）・・・・・・ 126
図 91　重機掘削時・排水溝掘削時出土　土器②・石器・鉄滓（S = 1/4・1/2）・・・・・・ 128
図 92　新堂遺跡・東坊城遺跡周辺の調査地と河道復元図（S=1/3,000）・・・・・・ 132

表 1　SX523 出土　玉類計測表・・・・・・ 88

第Ⅰ章　調査の経過

第１節　調査に係る経緯

本書は、京奈和自動車道建設に伴って実施した新堂遺跡（橿教委 2005－4 次調査）の発掘調査報告書である。

京奈和自動車道は、京都・奈良・和歌山を結ぶ自動車専用道で、国土交通省により各地で建設が進められている。奈良盆地内の京奈和自動車道は、平成 29 年度現在、「大和区間」のうち郡山下ツ道ジャンクションから橿原北インターチェンジまで開通・供用している。また、その南にあたる「御所区間」では残されていた御所南インターチェンジから五条北インターチェンジまでの区間が平成 29 年８月に供用され、橿原高田インターチェンジ以南の区域が全線開通となった。

橿原市域における京奈和自動車道建設に伴う本格的な調査は、国道 24 号線より南において昭和 63（1988）年より断続的に実施されてきた。当教育委員会では奈良県教育委員会の依頼を受け、橿原バイパスと国道24号線の接続部から南の御所インターチェンジまでの距離約５㎞の区間を対象に、平成 13（2001）年度から平成 22（2010）年度にわたり発掘調査を実施した。同区間は大和高田バイパスと交差する橿原高田インターチェンジを境として、北が「大和区間」、南が「御所区間」となる。発掘調査を実施する区域の分担については、国土交通省、奈良県教育委員会、奈良県立橿原考古学研究所、大和高田市教育委員会、御所市教育委員会及び当教育委員会の協議の元で決定された。

当市域内における京奈和自動車道の建設予定地では、これまで本格的な調査が行われておらず、遺跡の詳細が不明、あるいは埋蔵文化財の包蔵地外とされてきた地域が大半であった。しかし京奈和自動車道建設を契機とする一連の発掘調査によって、遺跡の範囲・内容が変更される、あるいは新たな遺跡の存在が認識されるような発見が相次いだ。

当教育委員会では、調査年度を西暦で表し、その年度内に行われた発掘調査名称を年度－調査次数の形で示している。本書で報告を行う調査に対しては、橿教委 2005－4 次調査という番号を付与している。調査記録や出土遺物には、この番号を記して整理・保管している。

新堂遺跡は、「大和区間」と「御所区間」にまたがる範囲に位置する。本書で報告を行う発掘調査は、現在の橿原高田インターチェンジから南に約 150 m の地点で実施している。新堂遺跡の発掘調査は平成 13（2001）年度から平成 22（2010）年度にかけて、当教育委員会が実施している。調査開始時点では西新堂遺跡という名称の遺跡であったが、周辺における調査の積み重ねを受けて平成 17（2005）年８月に新堂遺跡への改称、及び遺跡内容・範囲の変更が行われた。橿教委 2005－4 次調査は、その後に実施した最初の発掘調査であり、新堂遺跡の南東端付近に位置する。なお、新堂遺跡の範囲は平成 26 年にさらに北西へと広がっている。図２の遺跡地図では平成 28 年度時点での範囲を示している。

調査時には、調査地の小字名・角田から採って新堂遺跡 角田地区との名称も用いているが、南隣で実施した橿教委 2006－2 次調査も同じく字角田の範囲に含まれており角田地区の名称が用いられている。混同を避けるために本書では角田地区の名称は用いず、ここで触れるに留めることとする。

第２節　発掘作業の経過

本発掘調査は平成 17（2005）年９月 14 日から同年 12 月 20 日までの期間実施した。実働日数は 59 日を要した。その間、作業員は延べ 670 人を要した。調査の日々の記録は、以下の調査日誌抄録に掲げた。

平成 17 年９．14（水）
本日より重機掘削開始。現地表面より約 -1.1 m の深さで灰褐・暗褐色系粘質土の遺構面を確認。壁面の整形作業。

９．15（木）
引き続き重機掘削。壁面整形及び排水溝掘削。灰色粘質土を埋土とする耕作溝多数あり。土器も多く含まれる。完形に近い瓦器埦・土師皿がまとまって出土する遺構あり。

９．16（金）
重機掘削。調査区西側にある南北溝状の攪乱の除去。中世耕作溝以外に数時期の遺構あり。攪乱周辺で柱穴、ピット、溝などの存在を確認。現在の所、時期不明。

９．20（火）
重機掘削。南側より遺構面精査作業。一番新しい南北方向の素掘溝の検出及び掘削に入る。調査区南東部には、南北耕作溝より下層に斜方向の耕作溝群が存在することを確認。調査区北東部で瓦器・土師器がまとまって出土。調査区南半には古墳時代の大型遺構が存在する。

９．21（水）
重機掘削。調査区南側で中世耕作溝の検出及び掘削作業。調査区北東部でＬ字に曲がる溝を検出。瓦器埦・土師皿を多量に含む。

９．22（木）
重機掘削終了。調査区北壁の整形。

９．26（月）
ベルコン・発電機の搬入と設置。基準点測量杭の打設。調査区南側より遺構配置図作成。耕作溝出土遺物の取り上げ。中世耕作溝（南北方向）の掘削は全体の約 1/3 が終了。

９．27（火）
遺構配置図・平面図の作成。耕作溝の掘削。

９．29（木）
遺構平面図の作成。耕作溝の掘削、全体の約半分が終了。

９．30（金）
遺構平面図の作成。耕作溝の掘削。

10．３（月）
遺構平面図の作成。耕作溝の掘削。

10．６（木）
遺構平面図の作成。耕作溝の掘削、約８割が終了。

10．７（金）
遺構平面図の作成。耕作溝の掘削。午後から降雨のため作業中止。

10．12（水）
遺構平面図の作成。耕作溝の掘削、正方位の耕作溝の掘削終了。耕作溝より下層ではＬ字溝と平行する南北溝の存在を確認。

10．13（木）
調査区南東部の斜方向耕作溝の掘削。

10．14（金）
斜方向耕作溝の掘削。

10．17（月）
上層遺構完掘写真撮影のため清掃。降雨のため３時で作業中止。

10．18（火）

平面の水取り。調査区清掃を行い全体の６～７割終了。

10．19（水）

平面・壁面の清掃。ベルコン等資材の移動。清掃作業終了。

10．20（木）

上層遺構完掘・中層遺構検出状況写真の撮影。中層遺構は SD153・156・157・154・163 の検出写真撮影。

10．21（金）

SX158・159 検出状況、SD154 検出状況の撮影。壁面及び床面のシート養生とベルコン設置作業。SX158、SD157 の掘削開始。SX158 の南半に位置する SD165 は SX158 とは別遺構と認識して作業を進める。

10．24（月）

SD162、SX158 の掘削。SX158 の遺物は北西・北東・東南・南西部の４区画に分けて取り上げ。北西部に炭の集中する部分があり、全体に角礫・円礫等（拳大程度）が散乱。SD157 の掘削。断面は整った逆台形を呈する。

10．25（火）

SX158・159 完掘写真撮影。SD157・162 の土層断面写真撮影。SD153 の掘削開始。遺物は上層と下層に分けて取り上げを行う。調査区南側より中層遺構精査。柱穴や土坑などの遺構を確認。

10．26（水）

SD157・162 の土層断面図作成。SD153 の掘削、土器出土状況写真を撮影。SK167 検出写真撮影後、半截。調査区北東部の遺構精査作業。

10．27（木）

SK166・167・170 の土層断面図作成。SE211 検出写真撮影。調査区南半部の遺物取り上げ。

10．28（金）

SK166・170 の土層断面図作成。記録作成後、完掘。SE211 枠内の半截。調査区北東部の遺構精査、柱穴群の一段下げ確認作業。

10．31（月）

調査区北東部の遺構精査、柱穴群の掘削。SD157（SE211 以北部分）・153 の掘削。SD153 は北隣の SD343 より新しい遺構であることを断面で確認。

11．1（火）

SK267・332・333・334・335 の土層断面撮影、作図。SK166・170 の完掘状況写真撮影。SD157 完掘。SD153・343 合流部以西（SX423）の掘削。調査区北東部の柱穴群の中にある長方形土坑（SK284・295）の半截。中層で炭層を検出。供献用と考えられる土師皿も出土しており、土坑墓と考えられる。SD156 のコーナー部分の掘削。

11．2（水）

SK284 炭化物検出状況の撮影。SX423 完掘。すり鉢状に中央が落ち込む。下層は黒灰色の有機物を含む粘土層で、瓦器椀や土師皿が多く出土する。SD153・343 の水溜遺構か？ SE422 の井戸枠は抜き取られている。

11．4（金）

SD153・343 の土層断面写真撮影、図面作成。SE422 土層断面写真撮影。SD156 屈曲部の土器出土状況写真撮影。

11．7（月）

SK284・295 の土層断面写真撮影、図面作成。調査区西側攪乱以西の遺構精査。SD156 北半の掘削。溝の北側で一段浅くなる部分が存在することを確認。土橋状遺構か。

11．8（火）

SX423 の土層断面写真、図面作成。SD156 の掘削。SE211 の半截。井戸枠は抜き取られている可能性あり。SK284・295 完掘。

11．9（水）

SD156、SE211 の土層断面写真、図面作成。SX423、SD153・343 土層断面用の畦を除去。SD154 の掘削。橿原市立大成中学校の生徒が調査現場を体験・見学に来訪。

11．10（木）
SD454・154、SE211、SK424を完掘、図面作成。SX158・159の断面記録、畦除去。

11．11（金）
SE211完掘、底部付近から井戸枠の残りと考えられる曲物一段分が出土。SD156の掘削。

11．14（月）
SD156東南部完掘。SK455・457完掘。中層遺構完掘状況の写真撮影のため、調査区北西部から清掃開始。

11．15（火）
写真撮影に向けての清掃作業。

11．16（水）
清掃作業。下層遺構の精査。

11．17（木）
中層遺構完掘状況・下層遺構検出状況の写真撮影。

11．18（金）
前日に引き続いて写真撮影。正午、航空写真撮影・測量。終了後、調査区壁面のシート養生。

11．21（月）
下層遺構の調査開始。SX523の掘削。

11．22（火）
SX523の掘削。SX523・525、SR525をまたぐ形で十字に土層断面用畦を設定。

11．24（木）
SX524、SR525の掘削。

11．25（金）
SX524、SR525の掘削。下層遺構平面図の作成。

11．28（月）
SX524、SR525の掘削。SK527完掘。

11．29（火）
SX524、SD161の掘削。

11．30（水）
SX523・524、SD160・161の掘削。

12．1（木）
SX523の掘削。埋土は新旧に分けられる。ビールタンブラー様の陶質土器1点出土。他、須恵器や土師器、韓式系土器など出土遺物多数。SD160・161、調査区南半部分について完掘。

12．2（金）
SX523・524の掘削。

12．5（月）
SX524完掘。

12．8（木）
下層遺構完掘状況写真の撮影のため清掃開始。

12．9（金）
下層遺構完掘写真の撮影。

12．12（月）
調査区北・東壁、及びSX523・524、SR525畦の土層断面写真撮影。

12．13（火）
調査区北・東壁、SX524、SK542・540の土層断面図作成。

12．14（水）
下層遺構平面図作成。調査区壁面等に取り残された遺物の取上げ。

12．15（木）
SX524周辺の畦を除去。SR525最下層の掘削。重機による埋戻し開始。

12．16（金）
重機による埋戻し。機材等の撤収作業。

12．19（月）
重機による埋戻し。

12．20（火）
重機による埋戻し、終了。本日で現地調査完了。

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

橿原市は奈良盆地の南部に位置し、北は磯城郡田原本町・北葛城郡広陵町、東は桜井市、南は高市郡明日香村・同高取町、南西は御所市、西は大和高田市に接している。新堂遺跡の所在する橿原市新堂町は、橿原市域の西辺沿い中央付近に位置しており、調査地点から西に数百ｍほど移動すると大和高田市域に至る。

橿原市の南～南東部には龍門山地から派生する丘陵地が広がっており、北に向かって緩やかに下降する斜面地形を経て、北に肥沃な沖積地が広がっている。調査地はその沖積地に位置している。調査地から東南東に約２㎞の地点には名勝大和三山のひとつ、畝傍山が所在する。

調査地周辺の標高は、盆地の中部に向かって、おおむね南から北に向かってなだらかに低くなる。調査地周辺における現在の水田面の上面標高は約 64～65 ｍである。調査地から東に約 600 ｍの距離には曽我川が、西に約１㎞の距離には葛城川が、いずれも北流している。曽我川は龍門山地西部に、葛城川は金剛山地に源流をもつ。調査地は現在、この二つの河川の中間に位置する微高地となっている。しかし、河川の位置も時代と共に大きく変化しており、かつては調査地近辺にも河川が存在していたことが現地形の観察や発掘調査によって明らかとなっている（詳細は次項）。

調査地は北西の新堂集落と南東の東坊城集落の間に位置する耕作地帯であったが、近年は京奈和自動車道建設を筆頭に造成工事が進められており、かつての景観は今まさに大きく変化しつつある。『大和国条里復元図』による調査地の小字名は「角田」である。

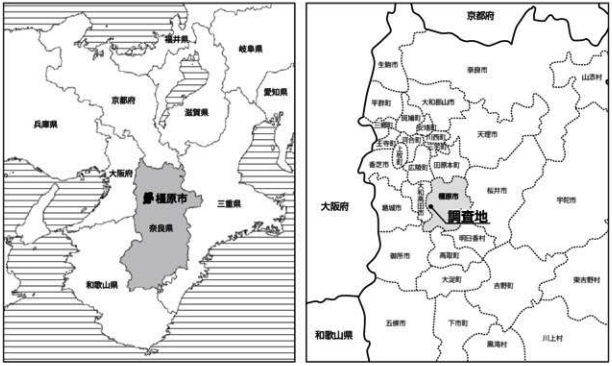


図１　調査地位置図

第２節　歴史的環境

橿原市の西部から南西部にかけての地域は、従来、遺跡があまり確認されていない地域であったが、京奈和自動車道建設に伴う一連の発掘調査により、路線沿いに新たな遺跡が多数発見されている。路線沿いからさらに周辺への遺跡の広がりが想定される調査成果も挙げられている。得られた成果は主に縄文時代以降の各時代にわたり、奈良盆地南西の低地部における遺跡の様相が大幅に更新されたと言える。調査地周辺は近年の開発行為によって遺跡地図が次々と書き換えられつつある地域である。

調査地の含まれる新堂遺跡の近辺に目を向けると、北に曲川遺跡、南に東坊城遺跡が所在する（図２）。これらの橿原市域の西部に位置する遺跡は、曽我川と葛城川に挟まれた平地に立地し、南北約 2.0 ㎞・東西約 0.8 ㎞の範囲で南北に並ぶ。なお、京奈和自動車道路線沿いから東西に離れた地域については、現在のところ調査例に乏しく実態は不明である。しかし新堂遺跡の西方一帯など、遺物散布地は複数確認されており、今後、遺跡の範囲がさらに広がっていく可能性も高い。以下に、これらの遺跡の調査成果を軸に調査地近辺における各時代の様相に触れる。

調査地周辺において遺構・遺物の存在が明確になり始めるのは、縄文時代後期以降のことである。曲川遺跡では晩期中葉から末葉にかけての土器棺墓が約 80 基検出されている。これは西日本有数の規模である。他、貯蔵穴や住居跡などの遺構も確認されている。新堂遺跡では遺構の数こそ限られるものの土器棺墓や貯蔵穴、流路に伴う水場遺構などがあり、後期から晩期にかけての遺物も出土している。一方、東坊城遺跡では縄文時代後期後半から晩期の遺物が出土する河川や晩期の土坑の存在が確認されている。遺物については後期前半に遡る土器も含まれる。京奈和自動車道沿線でさらに南に目を向けると、川西根成柿遺跡や観音寺本馬遺跡では後期以降の遺構が確認されている。観音寺本馬遺跡では人工的に管理されたと想定される晩期のクリ林も検出されている。また、この周辺の遺跡からは前期および中期の遺物も出土している。

弥生時代には曽我川流域や葛城川流域においては、多くの遺跡の存在が知られている。京奈和自動車道沿線でも前期の大規模水田や環濠集落、中期の方形周溝墓群などが確認されている。その中においては、新堂遺跡の一帯は比較的弥生時代の遺構・遺物が疎な地域であると言える。ただし竪穴建物や土坑などの弥生時代の遺構は少量ながら存在するため、完全な空白であるというわけではない。また、曲川遺跡の北部や土橋遺跡においては中期の周溝墓群も確認されている。

弥生時代末頃から古墳時代初頭になると、新堂遺跡周辺では遺構・遺物といった活動痕跡が増加し始める。新堂遺跡では、この時期の水田や竪穴建物、土坑、溝などが確認されており、遺構からの出土遺物量も多くなる。河川及びそれに繋がる溝（水路）に設置された井堰も存在し、積極的な土地開発に乗り出していることがうかがえる。遺構は古墳時代前期を通じて見られる。曲川遺跡では前期後半以降、曲川古墳群が形成されていく。曲川古墳群は墳丘が削平されたいわゆる埋没古墳で、一辺 10～18 m の方墳 10 基が検出されている。古墳の築造は中期にかけて続く。

古墳時代中期は、調査地周辺での活動が非常に盛んになる時期である。東坊城遺跡では 1991 年度に実施した店舗建設に伴う発掘調査において中期の大溝から土師器、初期須恵器、韓式系土器に加え、鉄滓・鞴の羽口・砥石といった生産関連遺物や鋳造鉄斧が出土しており、以前から注目されてきた。近年の調査によって新堂遺跡と曲川遺跡からも陶質土器・韓式系土器を含む多量の土器や金属器生産

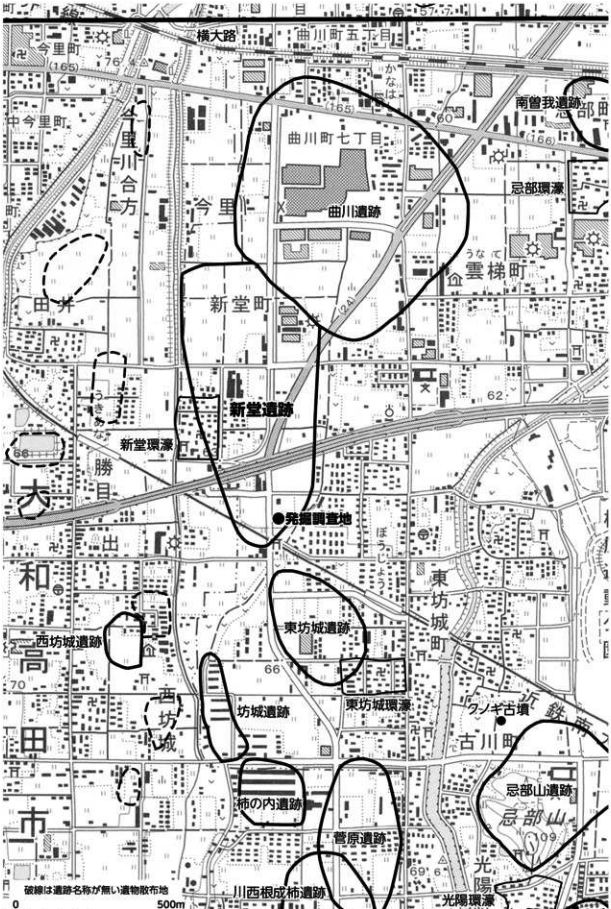


図２　調査地周辺遺跡地図（S＝1/12,500。遺跡範囲は 2017 年度当初の内容）

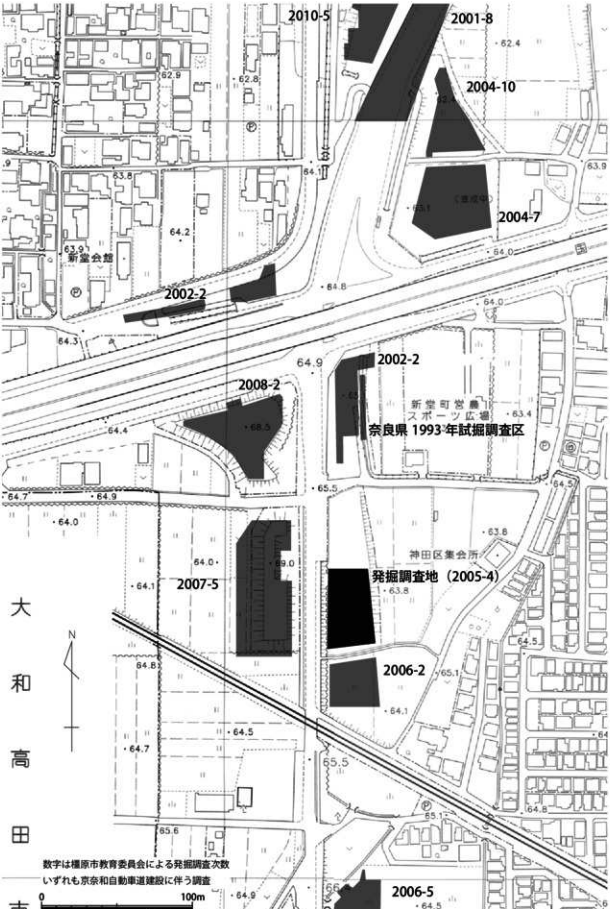


図3　調査地周辺の地形と発掘調査地点（S=1/2,500）

関連遺物、祭祀具などが多数出土し、渡来系遺物を多く含む中期（一部は後期まで続く）の集落が、この一帯に展開していることが明らかとなっている。中期の遺構は土坑や河川が主であり明確な建物跡の存在は確認されていないが、遺構からの遺物出土量は多く、近隣に集落の居住区が存在する可能性は高いと考えられる。橿原市中央部の四条遺跡周辺や、飛鳥地域の遺跡などとともに、古墳時代の奈良盆地南部の集落における外来要素の受容過程を知ることのできる重要な地域と言える。調査地のすぐ北隣で実施した発掘調査（橿教委 2002－2 次調査）においても古墳時代の河道から中期後半～後期前半を中心とする多量の土器などの遺物が出土しており、今回の調査地にも関連する遺構・遺物の存在が予想される状況であった。

曽我川の下流域では古墳時代中期後半から後期前半にかけての大規模な玉作り遺跡である曽我遺跡が形成される。曽我川の上流、調査地から南南東に約 2 ㎞の距離に位置する新沢千塚古墳群も、この時期に造墓活動の最盛期を迎える。

古墳時代後期後半から古代にかけての時期には、新堂遺跡周辺では遺構の存在が希薄になる。その後、再び遺構が多く確認されるようになるのは 12 世紀頃である。

新堂遺跡では京奈和自動車道建設による複数の発掘調査で 12～13 世紀にかけての遺構の存在が確認されている。遺構から出土する遺物の量も多い時期である。この時期の遺構・遺物は新堂遺跡の南部に特に多く、本書で報告を行う区画溝を伴う屋敷地や井戸、土坑といった遺構の存在や耕作地としての利用状況が明らかにされている。新堂遺跡の南端では 12 世紀頃に埋没したと考えられる河道(先述した現地表に残る旧河道跡と同一）が確認されている。河の両岸が発掘調査で検出されており、検出地点での川幅は最大で約 60m に及ぶ。屋敷地や耕作地としての利用も、この河道との関係の中での変遷が窺える。河道は発掘調査で確認されているほか、条里地割の乱れ、また堤防状の高台として現地形でも確認することができる（図 3 右下)。その痕跡は、南は大和高田市根成柿、北は橿原市曲川環濠付近までの範囲で追うことができる。また、新堂遺跡の北部においても河道沿いに 12 世紀代と考えられる建物や井戸、土坑などの遺構の存在が確認されている。井戸出土の鬼面墨書土器といった特徴的な遺物も見られる。

このような平安時代末から鎌倉時代前半にかけての遺構は曲川遺跡と東坊城遺跡にも存在するが、量は新堂遺跡がもっとも多い。これ以降の時期は、曲川遺跡において室町時代の建物跡がわずかに検出されている程度で、他は耕作地としての利用が主となっていったようである。

なお、調査地は『大和国条里復元図』によると高市郡路西二十七条五里（葛下郡二十七条一里）二十九坪にあたる。

第Ⅲ章　調査の成果

第１節　調査の方法

調査区の位置と形状

調査開始時点の調査地は道路用地として盛土造成が行われた状態であったが、それ以前は水田として利用されていた土地である。調査区は、その東西２枚分の水田にまたがる位置に設定されている。

調査区の形状は南北方向に長い台形で、南北長 41 ～ 46 m・東西長 26 ～ 30 m・面積 1600 ㎡を測る。調査区北辺・西辺はほぼ方位に沿うが南辺・東辺は方位からずれており、調査区南東隅がやや飛び出す形となっている。これは調査区東辺が工事敷地の形状に、南辺が調査時の水田敷地の形状に、それぞれ合わせているためである。

調査の手順

上層遺構面直上まで重機（バックホウ）による掘削を行い、以降の掘削・記録作業は人力で行っている。調査区の西辺沿いの位置には南北溝状の現代の攪乱があり、これも重機掘削作業と並行して除去を行っている。調査地は全体に遺構面付近からの湧水量が多く、遺構面保護のため調査区壁面沿い四周に人力によって排水溝を掘削している。

詳細は後述するように中層遺構・下層遺構の調査に必要な掘削作業・記録作業の量が非常に多く、調査期間内にすべてを十分に行うことはできていない。中層遺構の調査については遺構の掘削及び記録作業を一部の遺構に限定し、下層遺構の調査については重要な遺構が集中する調査区南半を中心に進める形で実施している。

遺構名

遺構種と遺構番号は、その種別を示す通有の２字のアルファベット、数字の順で組み合わせて記録・報告している。遺構番号は遺構全体を通して１から順に付与している。主として遺構を認識した順に番号を付与しており、遺構面や時期との対応関係は無い。遺構名は基本的に調査時のものをそのまま使用して報告を行っているが、遺構に対する認識の変更や番号の重複などの理由で本報告段階で一部、変更を行った遺構が存在する。それらの遺構については、各遺構の項でその旨を明記している。

写真撮影

写真撮影は各遺構面の検出・完掘状況の他、調査区及び遺構の土層断面や遺物の出土状況など、調査の過程で記録が必要な段階で行っている。

撮影の際に使用したフィルムは、主に４×５インチサイズの白黒フィルムとカラーポジフィルムである。また、バックアップ用に 35 ㎜サイズの同フィルムを使用している。

第２節　基本層序

基本層序は以下のとおりである。各層の状況は調査区全域で概ね共通する。ただしⅤ層については中層・下層遺構掘削後の遺構壁面～底面においてのみ確認したものであるため、詳細な状況を確認できている範囲は限定される。各層序の上面は全体に平坦であるが、周辺地形と同様、概して南から北に向かって低くなる。

基本層序

現代造成土（上面高は標高約 64.3～64.4 m。厚さ最大約 0.6 m。図４では省略）

Ⅰ層：耕作土（現代。上面高は標高約 63.7～64.0 m。厚さ約 0.2～0.3 m）

Ⅱ層：旧耕作土（近世以降の耕作層。上面高は約 63.6～63.7 m。厚さ約 0.1～0.2 m）

Ⅲ層：旧耕作土（12 世紀以降の耕作層。上面高は約 63.5～63.6 m。厚さ約 0.1～0.3 m）

Ⅳ層：遺構基盤層（上面が上層・中層・下層遺構面。弥生時代以前の自然堆積層。上面高は約 63.3～63.4 m。厚さ約 0.2～0.5 m）

Ⅴ層：地山（上面高は約 62.8～63.2 m）

調査地は全体が造成地であり、調査開始時には周辺の水田地よりも一段高い土地となっていた。これは道路用地として取得後に盛土造成されたものである。なお、図４は現代造成土がほぼ省略された状態の断面図である。

Ⅰ層（図４－１～６層、図５－１層）上面が造成前の現代水田面にあたる。明緑灰色粘質土からなる。上面の標高は約 64.0 mであるが、部分的に削り込まれている地点が見受けられる。とくに調査区西半にはⅠ層上から掘り込まれる攪乱が広範囲に存在し、一部は遺構面付近、さらに遺構面下へと影響を与えている。

Ⅱ層（図４－７～９層、図５－２～８層）は近世以降の耕作層であると考えられる。ごく少量ながら近世の陶磁器片などを含む。にぶい黄橙色粘質土・浅黄色粘質土からなる。調査区北半、とくに北東部はⅡ層を形成した耕作活動がⅢ層を大きく削り込む傾向にある。

Ⅲ層（図４－10～12 層、図５－９～31 層）は 12 世紀以降の耕作層であり、いわゆる素掘り耕作溝の埋土もここに含まれる。主として黄灰～褐灰色・にぶい灰色の粘質土からなるが、調査区東側などでは下層の遺構埋土や地山層に由来すると考えられる粗砂を含む。

Ⅳ層（図４－37～40 層）は弥生時代の堆積層であると考えられる。Ⅳ層上面が後述する上層・中層・下層遺構の各遺構面となる。遺構面の標高は約 63.3～63.4 mである。明黄褐色粘質土・暗褐色粘質土からなる。調査区南半ではⅣ層上層に、ごく少量の弥生土器片が含まれる。各図中においてⅣ層として扱っている中にも本来はⅤ層とすべき弥生時代より古い自然堆積層を含んでいる可能性があるが、調査範囲や期間の制限から明確に分別しえていない部分がある。調査区東壁土層断面（図５）は遺構面以下の全体が下層遺構 SR525 の縦断面にあたっており、その掘削作業を行えていないため、Ⅳ・Ⅴ層が図に表われない。

Ⅴ層は弥生時代よりも古い自然堆積層である。遺物を含まない、いわゆる地山である。上面の標高は約 62.8～63.2 mである。厚さ約 0.5m 前後の黄褐色粘土層下に青色・灰色粘土が厚く堆積する。

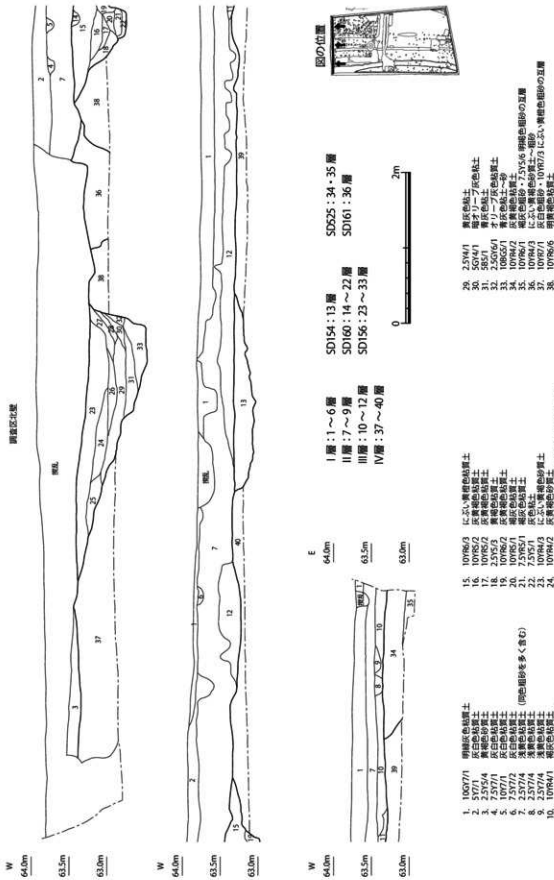


図4　調査区北壁　土層断面（S＝1/50）

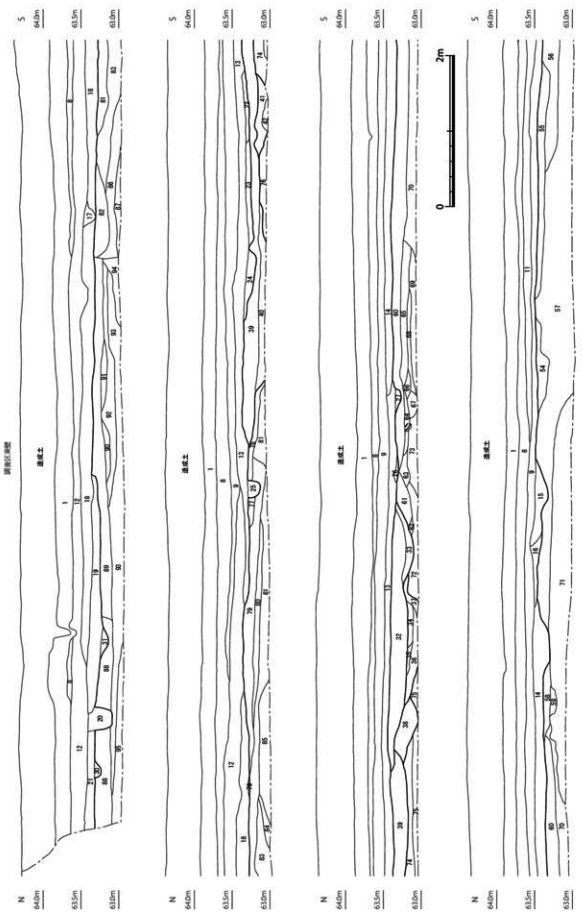
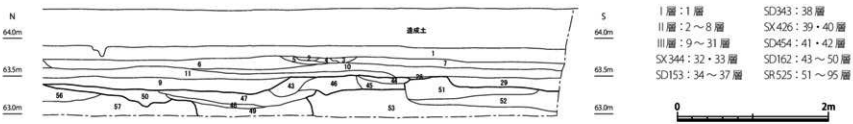


図５　調査区東壁　土層断面①（S = 1/50）



1. 10BG7/1 明青灰色粘質土
2. 2.5Y6/2 灰黄色粘質土
3. 2.5Y6/2 灰黄色粘質土
4. 10YR5/6 黄褐色粘質土
5. 5Y5/3 灰オリーブ色粘質土
6. 2.5Y5/3 黄褐色粘質土
7. 10YR5/6 黄褐色粘質土
8. 10YR6/4 にぶい黄橙色粘質土
9. 2.5Y7/4 浅黄色粘質土
10. 2.5Y5/4 黄褐色粘質土
11. 10YR6/4 にぶい黄橙色粘質土
12. 2.5Y7/4 浅黄色粘質土（粗砂を多く含む）
13. 7.5YR5/2 灰褐色粘質土
14. 7.5YR6/1 褐灰色粘質土（粗砂を含む）
15. 10YR5/2 灰黄褐色粘質土
16. 5YR5/3 にぶい赤褐色粗砂
17. 2.5Y5/3 黄褐色粘質土
18. 2.5Y6/4 にぶい黄色粘質土
19. 7.5YR5/1 褐灰色粘質土（一部粗砂を含む）
20. 2.5Y5/1 黄灰色粘質土
21. 10YR4/1 褐灰色粘質土
22. 2.5Y6/2 灰黄色粗砂
23. 7.5YR5/4 にぶい褐色粗砂
24. 7.5YR5/4 にぶい褐色粗砂
25. 7.5YR4/2 灰褐色粘質土・10YR6/1 褐灰色粗砂の互層
26. 7.5YR6/1 褐灰色粘質土
27. 5Y5/2 灰オリーブ色粘質土
28. 10YR5/1 褐灰色粘土
29. 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土
30. 2.5Y5/1 黄灰色粘質土
31. 2.5Y5/1 黄灰色粘質土
32. 10YR5/2 灰黄褐色粘質土（粗砂を含む）
33. 2.5Y5/1 黄灰色粘土
34. 10YR6/1 褐灰色粘質土
35. 10YR6/3 にぶい黄橙色粘質土
36. 10YR6/2 灰黄褐色粘質土
37. 7.5YR4/1 褐灰色粘土
38. 7.5YR5/2 灰褐色粘質土
39. 7.5YR5/4 にぶい褐色砂質土
40. 2.5Y3/1 黒褐色粘土
41. 2.5Y5/1 黄灰色粘土
42. 2.5Y6/2 灰黄色砂質土
43. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土（粗砂を多く含む）
44. 10YR5/2 灰黄褐色粘質土
45. 2.5Y6/2 灰黄色粘質土（粗砂を含む）
46. 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質土
47. 10YR4/1 褐灰色砂質土
48. 2.5Y4/1 黄灰色粘土
49. N4/0 灰色粘土
50. 5Y4/1 灰色粘質土（粗砂を含む）
51. 5Y7/1 灰白色粗砂
52. 10YR5/4 にぶい黄褐色砂
53. 7.5YR5/6 明褐色粘質土・10YR6/1 褐灰色粗砂
54. 10YR5/2 灰黄褐色粘質土
55. 10YR5/2 灰黄褐色粘質土
56. 7.5YR5/3 にぶい褐色粗砂
57. 5YR5/3 にぶい赤褐色粘質土（粗砂を含む）
58. 7.5YR6/2 灰褐色粘質土
59. 7.5YR4/1 褐灰色粘質土
60. 7.5YR6/2 灰褐色粘質土
61. 7.5YR5/1 褐灰色粘質土
62. 2.5Y6/1 黄灰色粘土
63. 10YR6/2 灰黄褐色粘質土
64. 2.5Y6/1 黄灰色粗砂
65. 7.5YR4/1 褐灰色粘質土（粗砂を多く含む）
66. 10YR7/1 灰白色砂
67. 10YR5/1 褐灰色粗砂
68. 7.5YR5/8 明褐色砂
69. 10YR5/2 灰黄褐色微砂・7.5YR5/8 明褐色砂の互層
70. 10YR5/2 灰黄褐色粘質土
71. 7.5YR5/3 にぶい褐色粗砂
72. 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土
73. 10YR5/2 灰黄褐色微砂
74. 2.5Y6/2 灰黄色砂質土
75. 2.5Y5/2 暗灰黄色微砂
76. 5Y4/1 灰色粘土
77. 7.5YR4/2 灰褐色粘質土
78. 10YR6/1 褐灰色粗砂
79. 7.5YR4/3 褐色砂
80. 7.5YR4/3 褐色細砂・10YR6/1 褐灰色粗砂
81. 7.5YR5/4 にぶい褐色粘質土
82. 7.5YR4/2 灰褐色粘質土
83. 10YR6/2 灰黄褐色微砂
84. 10YR6/1 褐灰色粗砂
85. 10YR6/2 灰黄褐色微砂・10YR6/1 褐灰色粗砂
86. 7.5YR4/1 褐灰色粘質土
87. 10YR4/2 灰黄褐色粘質土
88. 10YR4/2 灰黄褐色粘質土
89. 10YR5/2 灰黄褐色粘質土（一部粗砂を含む）
90. 2.5Y7/1 灰白色粗砂
91. 2.5Y7/1 灰白色粗砂
92. N6/0 灰色微砂
93. 2.5Y6/6 明黄褐色微砂・2.5Y6/1 黄灰色粗砂
94. 7.5Y7/1 灰白色微砂
95. 10YR6/1 褐灰色粗砂・7.5YR5/6 明褐色粗砂の互層

図の位置

図6 調査区北壁土層断面図（S＝1/40）

第３節　遺構

遺構は大きく３時期に分かれる。便宜上、上層遺構・中層遺構・下層遺構としてまとめる。いずれも検出面はⅣ層上面であるが、下層遺構の一部に例外がある。上層遺構は 12 世紀以降の耕作溝群である。中層遺構は 12 世紀代の遺構群で区画溝を伴う屋敷地遺構が中心となる。下層遺構は古墳時代中期以前の遺構群である。以下に上層から順に詳細を述べる。

上層遺構（図７）

上層遺構は耕作活動によって形成されたと考えられる素掘り溝群で、13 世紀以降を中心とする時期の遺構であると考えられる。それぞれの溝の規模は幅約 0.2 ～ 0.3m、深さ最大約 0.3 m を測る。

耕作溝は調査区南半には密に存在するが、北半は相対的に数が少なくなる。調査区北半は後世の耕作活動（基本層序Ⅱ層の形成）によって耕作溝が削平された可能性がある。あるいは耕作地としての利用が開始される以前に存在した屋敷地（中層遺構）が調査区北半に集中していることが、それ以降の土地利用に影響を与えた結果である可能性も考えられる。

耕作溝は正方位に沿う一群と斜方向の一群が存在し、前者が新しい時期の遺構である。正方位の一群は調査区全域に広がって存在する。向きはさらに南北方向と東西方向とに分かれるが、東西方向の溝は数が少ない。

一方、斜方向の一群は調査区の南東部に偏って存在する。全体に座標に対して約 20～30°程度振れる。北北東－南南西方向の溝と東南東－西北西方向の溝に分かれ、基本的に前者の方が新しい。これら斜方向の溝は調査地より南東に存在する旧河道の向きに影響される土地利用の在り方によって、このような方向に掘削されたと考えられる。

上層遺構からの出土遺物は、中層・下層遺構に由来すると考えられる土器片が主である。上層遺構の形成時期を示すと考えられる遺物は、上層遺構および基本層序Ⅰ～Ⅲ層から少量出土する中層遺構よりも後の時代の土師器や瓦器、陶磁器の細片のみである。

中層遺構（図８・９）

中層遺構は 12 世紀代を中心とする時期の遺構である。調査区北半に展開する区画溝・建物・塀・井戸などで構成される屋敷地と考えられる遺構群と、その周辺に存在する土坑や溝、ピットなどの遺構が中心となる。小規模なピットなど、詳細時期が不明な遺構も中層遺構に含まれている。出土遺物は 12 世紀代を中心とし、一部に 11・13 世紀代に属す遺物も存在する。

遺構には溝、井戸、建物・柵、土坑（土坑墓を含む）、ピットなどがある。以下に、屋敷地の範囲を規定する区画溝をはじめとする溝および、その関連遺構から順に詳細を述べる。

SD153・343・421 は調査区中央部を横断する東西方向の溝である。屋敷地（北）と外部（南）の土地を画す溝である可能性が考えられる。SD153 と SD343 は遺構の東側と西側で重複関係があり、SD153 のほうが新しい溝であることが確認できる。両者は位置と規模が似ており、近い位置に掘り

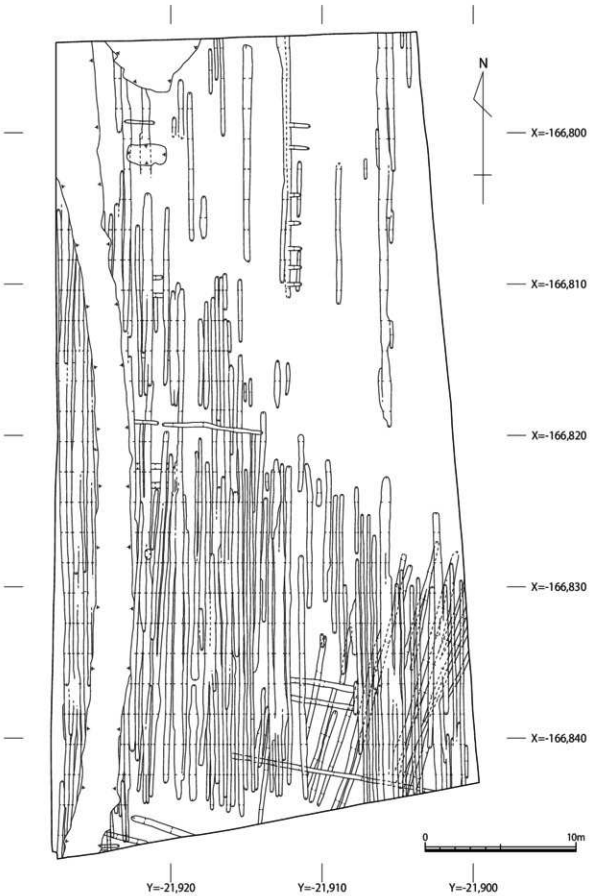


図７　上層遺構配置図（S＝1/250）

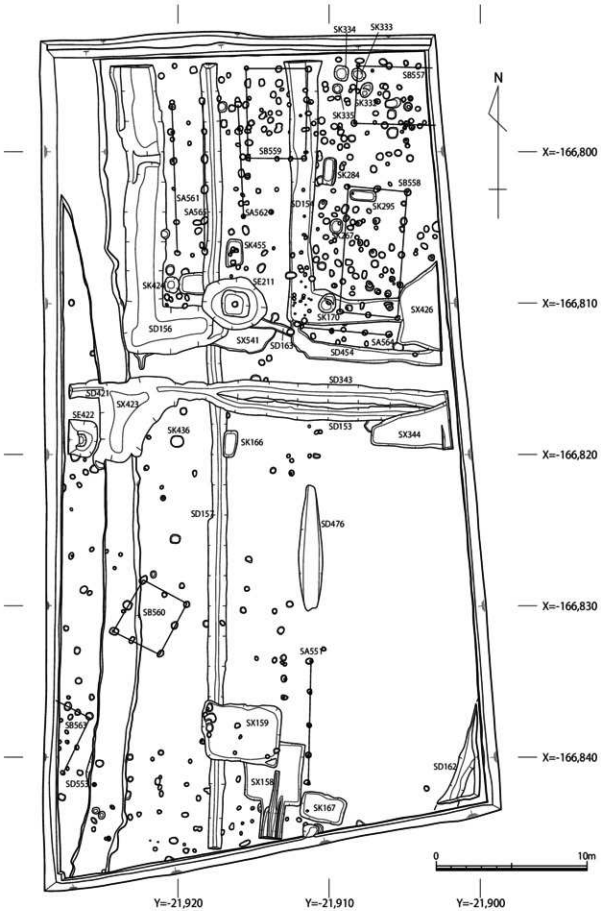


図８　中層遺構平面図（S＝1/250）

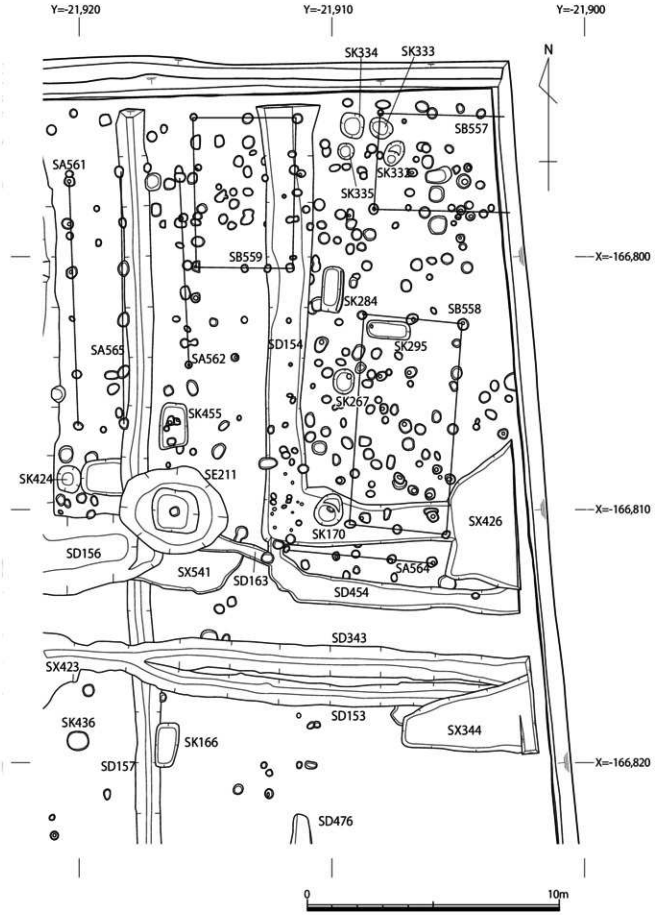
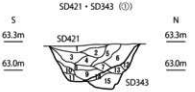
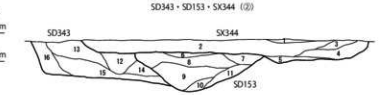


図９　中層遺構北東部（屋敷地）平面図（S＝1/150）

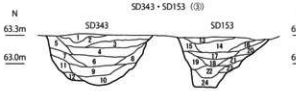


1. 2.5Y6/2　灰黄色粘質土
2. 10YR5/1　褐灰色粘質土
3. 2.5Y6/1　黄灰色砂質土
4. 2.5Y5/1　黄灰色粘質土
5. 2.5Y5/2　暗黄褐色粘質土
6. 7.5YR4/3　褐色粘質土
7. 2.5Y5/1　黄灰色粘質土
8. 10YR5/1　褐灰色粘質土（一部に粗砂を含む）
9. 5Y6/1　灰色粘質土（一部に灰色微砂を含む）
10. 10YR6/1　褐灰色粘質土
11. 7.5YR5/1　褐灰色粘土
12. N6/0　灰色粘質土
13. 2.5Y5/2　暗黄褐色粘質土
14. 10YR6/1　褐灰色粘質土
15. 7.5YR5/1　褐灰色粘土

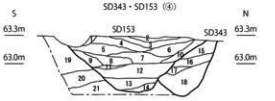
図の位置



1. 2.5Y7/2　灰黄色粘質土
2. 2.5Y5/1　黄灰色粘土
3. 5Y6/1　灰色粘質土
4. 5Y5/1　灰色粘土
5. 2.5Y6/2　灰黄色微砂
6. 2.5Y5/1　黄灰色粘土
7. 10YR5/2　灰黄褐色粘質土
8. 10YR5/1　褐灰色粘土（瓦礫を多く含む）
9. 2.5Y5/1　黄灰色粘土
10. 5Y4/1　灰色粘土
11. 2.5Y4/2　暗灰黄色粘質土
12. 2.5Y5/2　暗灰黄色粘質土（粗砂を含む）
13. 10YR6/4　にぶい黄橙色砂質土
14. 10YR5/1　褐灰色粘質土
15. 5Y5/1　灰色砂質土
16. 2.5Y4/1　黄灰色粘質土（粗砂を含む）



1. 10YR4/2　灰黄褐色粘質土
2. 2.5Y4/1　黄灰色粘質土
3. 10YR4/2　灰黄褐色粘質土
4. 10YR4/1　褐灰色粘質土
5. 10YR4/2　灰黄褐色粘質土
6. 2.5Y4/2　暗灰黄色粘質土（3 ㎜大の礫を多く含む）
7. 2.5Y4/1　黄灰色粘質土
8. 5Y4/1　灰色粘質土
9. 2.5Y4/2　暗灰黄色粘質土
10. 2.5Y4/1　黄灰色微砂混じり粘土
11. 5Y4/2　灰オリーブ色微砂混じり粘土
12. 2.5Y4/2　暗灰黄色土
13. 10YR4/2　灰黄褐色粘質土
14. 2.5Y4/2　暗灰黄色粘質土（2 ㎜大の礫を多く含む）
15. 10YR4/1　褐灰色粘質土
16. 10YR4/2　灰黄褐色粘質土
17. 2.5Y4/1　黄灰色粘質土
18. 5Y4/1　灰色微砂混じり粘土
19. 2.5Y4/2　暗灰黄色微砂混じり粘土
20. 2.5Y4/2　暗灰黄色粘質土
21. 10YR4/1　褐灰色粘土
22. 2.5Y4/1　黄灰色粘土
23. 2.5Y4/2　暗灰黄色微砂混じり粘土（黄褐色粘土ブロックを含む）
24. 5Y4/1　灰色粘土



1. 10YR4/3　にぶい黄褐色粘質土
2. 10YR5/2　灰黄褐色粘質土
3. 10YR4/2　灰黄褐色粘質土
4. 2.5Y5/2　暗灰黄色粘質土
5. 2.5Y5/3　黄褐色微砂混じり粘質土
6. 2.5Y4/2　暗灰黄色粘質土
7. 10YR4/2　灰黄褐色粘質土（遺物多く含む）
8. 2.5Y4/1　黄灰色粘質土
9. 2.5Y5/2　暗灰黄色粘質土
10. 2.5Y4/2　暗灰黄色粘質土
11. 2.5Y4/2　暗灰黄色微砂混じり粘土
12. 10YR4/1　褐灰色粘質土
13. 5Y5/1　灰色粘質土（2 ㎜大の礫を含む）
14. 5Y4/1　灰色粘質土
15. 10YR4/1　褐灰色粘質土
16. 10YR4/2　灰黄褐色粘質土
17. 2.5Y4/1　黄灰色粘土
18. 5Y4/1　灰色粘質土（3 ㎜大の礫を多く含む）
19. 10YR4/2　灰黄褐色粘質土
20. 10YR4/3　にぶい黄褐色粘質土
21. 10YR6/2　灰黄褐色砂

0　1m

図 10　中層遺構　SD 土層断面①（S = 1/40）

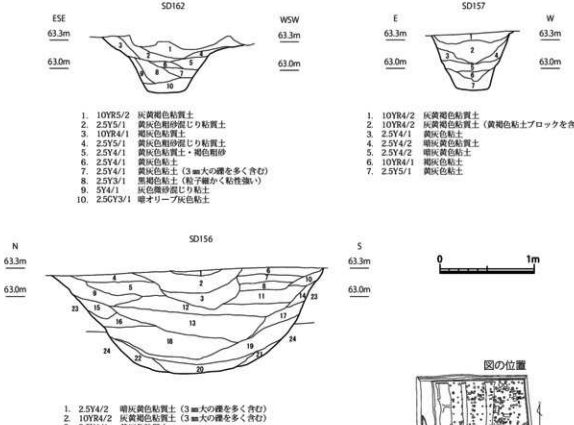


図 11　中層遺構　SD 土層断面②（S = 1/40）

直しを行った溝である可能性がある。SD421 は、SX423 よりも西側において SD153 と SD343 が一体となった状態をひとつの溝として認識したものである（図 10 断面図 ①）。調査時の遺構認識や遺物出土地点の問題から、そのまま SD421 の名称を用いる。SD153 は幅約 1.0～1.6m、深さ約 0.6 mを測る。断面形は逆台形を呈し、底部には幅約 0.3m の平坦面が存在する。SD343 は幅約 1.1～1.4m、深さ約 0.6 mを測る。断面形はU字形を呈するが、西端部（SD421 下層）では台形状となる。SD153・343・421 からは 12 世紀代の土師器、瓦器、須恵器、磁器、石材が出土している。時期の判別できる瓦器は SD153 では 12 世紀後半に限られるが、SD343 からは 12 世紀前半に遡る遺物も出土している。12 世紀後半に SD343 が埋まり、新たに SD153 を掘削した可能性がある。

SX423 は SD343･153 と SD421 との間に位置する、不整楕円形の落ち込みである。規模は長径 6.0 m、短径約 4.5 mを測る。深さは東西溝の延長上にあたる北側がもっとも深くなっており、最大で約

0.9 mを測る。埋土の状況からSD343・153・421とは一体の遺構であると考えられる。東から溝を伝って流れてきた水がSX423に溜まり、一定量を超えた水がさらに西へと排出されるような仕組みが考えられる。SX423底面からは人頭大の石も出土している（図15）。埋土下層の灰色粘土層から遺物が多く出土している。土師器、瓦器、須恵器、磁器のほか、複数の砥石と考えられる石材が出土している点も注目される。出土遺物の時期は12世紀後半が中心で、12世紀前半および13世紀前半の可能性がある遺物を一部含む。

SD157は調査区中央ややや西を縦断する南北溝である。幅約0.8～1.5m、深さ約0.7mを測る。断面の形状は逆台形を呈し、地点によっては上部が外に大きく開く。溝の埋土は下層が黄灰色系粘土の自然堆積層であるが、上層は粘土ブロックが多数混じる粘質土であり最終的に溝は埋め立てられたと考えられる。遺物は大部分が北側の屋敷地内部の地点から出土している。出土遺物は土師器、瓦器、須恵器、製塩土器、瓦がある。土師器の一部と須恵器、製塩土器は下層遺構に由来する遺物である。瓦器や土師器から12世紀中頃には廃絶したと考えられる。

SD156は調査区北西部に位置する、平面形がL字形の溝で、南北方向の溝が南端で東へ直角に折れ曲がる。規模は幅約2.5～3.0 m、深さ約1.1 mを測り、今回確認した溝の中で最も大型である。検出したピットの分布域などから、屋敷の南西隅にあたると考えられる。溝の北半には溝と直行する形で深さが約0.4 mと浅くなる地点が存在し、溝を渡る土橋のような用途に用いられていた可能性がある。溝の南半では幾度かの掘り直しが行われたことが土層断面から窺える。出土遺物は土師器、瓦器、磁器、須恵器などがある。出土遺物の時期は12世紀、とくに後半が多い。溝の屈曲部の下層上部から土師皿、瓦器埦、羽釜などが多く出土している。

SX541はSD156の南東端に接する長さ最大約4.6m、深さ約0.1 mの浅い落ち込みである。その位置関係からSD156と関連をもつ遺構である可能性がある。

SD154は調査区北東部に位置する、平面形がL字形の溝である。SD156よりもわずかに北の位置でL字に屈折する。規模が幅約1.5～2.0 m、深さ約0.25 mを測る。SD156と比較してやや小規模な溝であるが全体の形状はより整然としている。土師器および瓦器の皿を中心とする遺物が出土している。

SD154の南東端はSX426と接続している。SX426は深さ約0.3 mの不整形な落ち込みである。周辺に浅く広がっており、調査区東壁断面の検討から南に位置するSX344も一連の遺構である可能性がある。周囲に存在する他の中層遺構よりも新しい遺構であるが、出土遺物の時期は12世紀後半頃である。

SD454は北端がSD154の屈折部に接続するL字形の溝である。幅約1.0 m、深さ約0.2 mを測る。東西方向の部分は東でやや南に振れる。遺構の重複関係からSD154よりも先に埋没したと考えられるが、同時に機能していた時期もあった可能性がある。その場合、SD154とSD454の間には南北幅約1～2 mの空閑地ができることとなる。

SD163はSD454屈折部のやや北西に接続する東西溝である。規模は幅約0.6m、深さ約0.1mを測る。SD454同様、東がやや南に振れる。SD163の西端はSD156に接続していた可能性もあるが、SE211の存在によって両者の関係性は不明である。SD163とSD454からは12世紀後半の土師器と瓦器が出土している。

SD162・476・553は調査区南半に位置する溝である。いずれも12世紀の瓦器が出土している。

SD162 は調査区南東隅に位置する溝で、北東－南西方向に伸びると考えられる。幅約 1.0～1.5m、深さ約 0.6m を測り、断面の形状は上部が大きく広がる逆台形を呈する。SD476 は長さ約 8.5m、幅約 1.0～1.7m の南北溝であるが深さは約 0.1 m未満と非常に浅い。SD553 は調査区南西隅に位置する溝状の遺構であるが、大部分が攪乱によって破壊されており遺構の全体像は不明である。SD553 からは小片ながら磁器も出土している。

中層遺構には 2 基の井戸が存在する（SE211・422）。SE211 は調査区北半中央、屋敷地内の南西隅付近に位置する井戸である。掘方の直径約 3.5～4.3m、深さ約 2.4m を測る。井戸枠は曲物を利用しており、最下部二段分のみを残して上部は抜き取られていた。抜き取り後は埋め戻されており、埋め戻し土の中からは廃棄された木材や土器が多く出土している。掘方埋土と埋戻土の双方から 12 世紀後半の瓦器や土師器が出土している。出土した瓦器椀は掘方埋土のほうがわずかに古い様相を呈し、12 世紀後半のうちに構築・廃棄された井戸であると考えられる。遺構の重複関係から SD156・163・SX541 よりも新しい遺構であると判断できるが、SE211 の構築後も SD156 が機能していた可能性はある。

SE422 は調査区西壁沿い中央、屋敷地南限と思われる区画溝の外側に接する位置にある井戸である。規模は直径約 2.0 m、深さ約 2.2 m を測る。井戸枠は全て抜き取られ、埋められている。掘方は二段にわたって落ち窪んでおり、最下段に曲物が据え付けられていたと考えられる。土師器、瓦器、須恵器、磁器が出土しているが小片が多く、図化できる資料は下層遺構に由来する遺物が主である。遺構の時期は 12 世紀と考えられる。

中層遺構に属すピットは調査区全体で約 350 基存在し、その中に柱穴を多数含むと考えられる。前述のとおり調査期間等の制約から、とくに個々のピットについては詳細な調査や記録、検討を行えておらず、平面図（図 8・9）のみでの報告となる。ピットの分布は、屋敷地内にあたる調査区北東部（図 9）と、屋敷地外西寄りにあたる調査区南西部に多い。とくに前者が多く、屋敷地内に複数時期にわたる多数の構造物が存在していたことがうかがえる。以下に、調査時および整理時に認識できた掘立柱建物・塀について述べる。なお、掘立柱建物・塀については遺構番号の整理に伴い、既往の調査報告から遺構番号の変更を行っている（SA551 は除く）ので注意されたい。

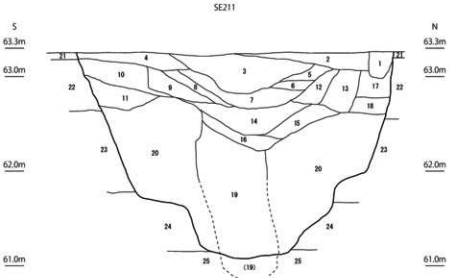
SB557・558・559 は調査区北東部、屋敷地内に位置する掘立柱建物である。SB559 はほぼ正方位に沿う建物だが、SB557・558 は軸が北でやや東に振れる。

SB557 は調査区北東隅に位置する、桁行 3 間以上（4.2m 以上）×梁行 2 間（3.8m）の東西棟掘立柱建物である。柱穴掘方は平面形が一辺約 0.4～0.6m の隅丸方形である。

SB558 は調査区北東部に位置する、桁行 4 間（8.4 m）×梁行 2 間（3.8m）の南北棟建物である。総柱建物である可能性もある。方位からの振れ幅や建物配置から、SB557 と SB558 はセット関係にある可能性が指摘できる。SB558 南辺の柱穴は SD154 埋土上から掘り込まれている。

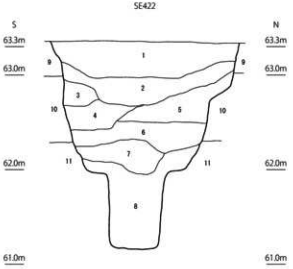
SB559 は調査区北辺沿い中央付近に位置する、桁行 3 間（5.7 m）×梁行 2 間（3.8m）の南北棟掘立柱建物である。調査時に建物としての認識が無く、SD154 との時期的前後関係は不明である。

SA561・562・565 は調査区北半中央に位置する南北方向の塀（もしくは柵。以下では便宜上、塀として扱う）である。いずれも正方位から北でやや西に振れる。この振れは SD156 の南北部分の振れに近く、SD156 に沿って建てられた可能性がある。SA565 は SD157 よりも新しい遺構である。また、SA561・562・565 のいずれか同士が組み合わさって一体の構造物となる可能性もある。



1. 10YR4/1　褐灰色粘質土（黒褐色粘土ブロック含む）
2. 10YR5/1　褐灰色粘質土
3. 2.5Y5/1　黄灰色粘質土
4. 10YR5/2　灰黄褐色粘質土
5. 10YR5/3　にぶい黄褐色粘質土
6. 2.5Y5/1　黄灰色粘質土
7. 5Y4/1　灰色粘質土
8. 2.5Y6/2　灰黄色砂
9. 2.5Y5/2　暗灰黄色砂（灰色粘土ブロック含む）
10. 10YR4/2　灰黄褐色粘質土
11. N5/0　灰色粘土（同色砂・黄褐色粘土混じり）
12. 5Y5/1　灰色砂質土（黄褐色粘土ブロック含む）
13. 10YR4/1　褐灰色粘質土（黄橙色粘土ブロックを含む）
14. 2.5Y3/1　黒褐色砂質土（遺物を多く含む）
15. N4/0　灰色細砂混じり砂質土
16. 5GY3/1　暗緑灰色粘質土
17. 10YR3/3　暗褐色粘質土
18. 10YR4/3　にぶい黄褐色粘質土
19. 5GY3/1　暗オリーブ灰色粘土
20. 7.5GY3/1　暗緑灰色粘土
21. 10YR4/1　褐灰色粘質土
22. 2.5Y5/3　黄褐色粘土
23. 5GY3/1　暗オリーブ灰色粘土
24. 2.5GY2/1　黒色粘土（2㎝大の白色礫を含む）
25. 10Y4/1　灰色粘土

21～25層：地山



1. 10YR4/2　灰黄褐色粘質土（暗褐色粘土・灰色砂をブロック状に多く含む）
2. 10YR4/1　褐灰色粘質土（褐色・灰色砂をブロック状に含む）
3. 2.5Y4/1　黄灰色粘質土（2㎝大の礫を多く含む）
4. 2.5Y4/2　暗灰黄色砂質土（黄褐色粘土ブロック状を含む）
5. 10YR4/2　灰黄褐色砂質土（2㎝大の礫を多く含む）
6. 2.5Y4/2　暗灰黄色粘質土（黄褐色粘土ブロック含む）
7. 5Y4/1　灰色粘土（井戸枠材と考えられる木片を多く含む）
8. 10YR5/2　灰黄褐色砂
9. 10YR3/3　暗褐色粘質土
10. 10YR5/4　にぶい黄褐色粘土
11. 2.5Y3/1　黒褐色粘土

9～11層：地山

0　1m

図12　中層遺構　SE　土層断面（S＝1/40）

屋敷地内（調査区北半部）には上記の他にさらに多数のピットが存在し、認識できていない建物・塀や小規模な構造物が複数時期にわたって存在していたと考えられる。

SB560・563 は調査区南西部に位置する建物で、正方位から 30° 程度振れている。SB560 は桁行 2 間（3.6 m）×梁行 2 間（3.2m）の掘立柱建物であり、SB563 も西半が調査区外にあるものの同程度の構造であると推測される。SB563 北東隅の柱穴から瓦器の細片が出土しており、中層遺構として扱っている。調査区北半の遺構群との時期的な関係は不明である。

SA551 は調査区南部に位置する南北方向の塀である。柱間 1.9～2.1 m で 4 間分の柱が正方位から北でわずかに東に振れる形で並ぶ。西隣に存在する SX159・158 との関係で築かれた構造物である可能性もある。

土坑のうち SK166・284・295・455 は土坑墓であると考えられる。SK284 と SK295 は調査区北東部、屋敷地内に 2 基近接して構築されている（図 13）。SK284 は平面形が南北約 1.7m、東西約 0.9m の長方形で、深さは約 0.4m を測る。東辺側の中程に段が存在し、段を境に上層と下層に分かれる。上層と下層の間には厚さ 1 cm程度の炭層が遺構全体に広がっており、その上面から人頭大の石が 1 点出土している。下層に木棺が存在していたと考えられるが遺存していない。土師器と瓦器が出土している。SK295 は SK284 から約 1m 南東に位置する。南北約 0.7m、東西約 1.7m

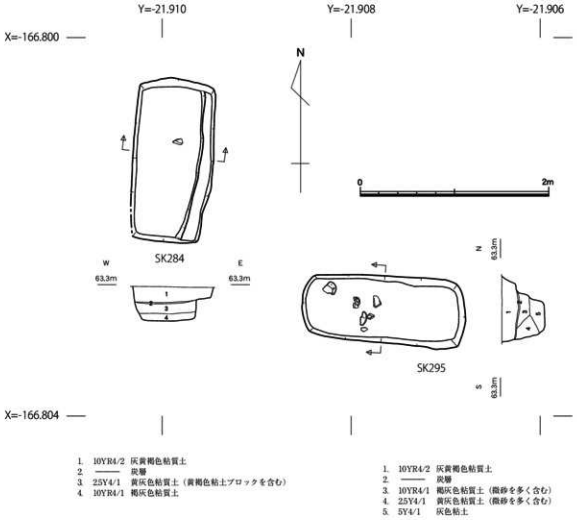


図 13　中層遺構　土坑墓 SK284・295　平面・断面（S＝1/40）

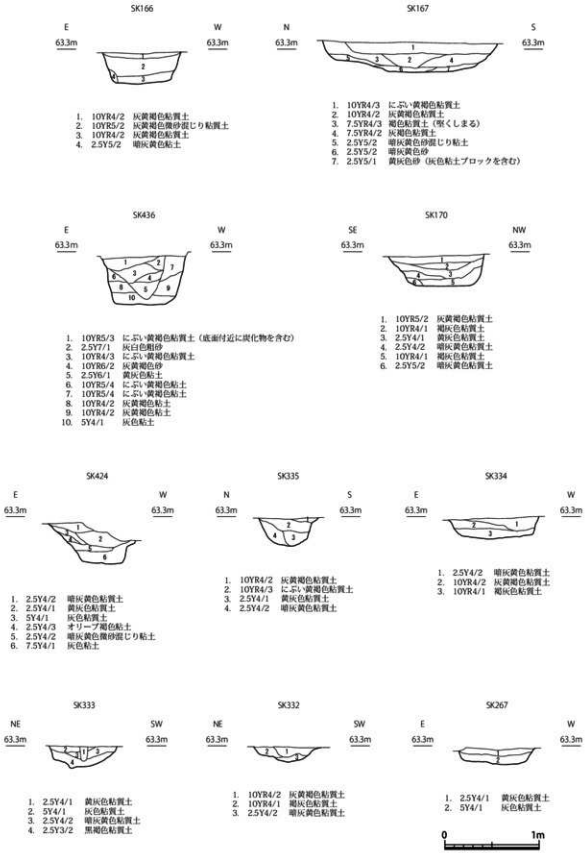


図 14　中層遺構　SK 土層断面（S = 1/40）

と、東西に長い平面長方形である。深さは約 0.45m を測り、検出面から約 0.2m の深さで北辺側に段が存在し、ここに SK284 と同様の炭層が存在する。炭層上面から土師皿（図 34－285 ～ 288）

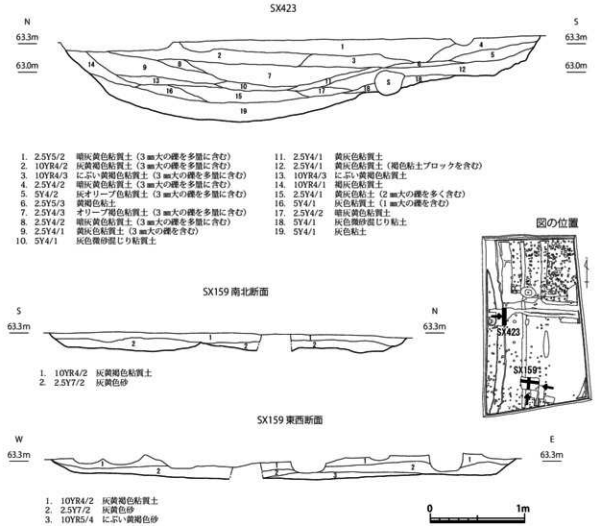


図 15　中層遺構　SX 土層断面（S = 1/40）

と長さ 10 ㎝前後の石が 3 点出土している。棺は遺存していない。

SK166 は調査区中央部、屋敷地南限の東西区画溝のやや南に位置する土坑墓である。南北約 1.7m、東西約 0.7 ～ 0.9m の平面長方形で深さは約 0.3m を測る。炭層は存在しないが他の埋土の共通性や遺構の形状などから、SK284・295 と同様の土坑墓であると判断している。出土遺物は土師器と須恵器の小片のみである。

SK455 は調査区北半中央、屋敷地の南西隅寄りの地点に位置する、SK166 と同様に土坑墓と判断できる遺構である。南北約 1.8m、東西約 1.1m の平面長方形で深さは約 0.3m を測る。土師器と瓦器、須恵器が出土している。

土坑は、この他に調査区北半の屋敷地内に SK170・267・332～335・424 がある。

SK170 は直径約 1.0～1.3m、深さ約 0.3 m を測る円形土坑である。底面は平坦で、北側が一段高い。SD154 よりも新しい遺構である。12 世紀後半の瓦器と土師器が出土している。

SK267 は直径約 0.8m、深さ約 0.2m の円形土坑である。土師器と須恵器の小片が出土している。

SK332・333・334・335 は調査区北東隅に近接して存在する 4 基の円形土坑である。直径約 0.6 ～0.9m、深さ約 0.2～0.3 m と概ね共通する規模の土坑である。ただし SK333 のみ中心部分に柱痕

と思しき粘土層を確認できる。4 基とも土師器と瓦器が出土している。SK334 から出土した瓦器埦は 12 世紀後半でもやや古い様相を呈する。

SK424 は屋敷地南西隅、SD156 屈折部分の内側に接する円形土坑である。直径約 0.8m、深さ約 0.4m を測り、断面の形状は逆台形状である。土師器と瓦器が出土している。

調査区の中央部、屋敷地区画溝のすぐ南に SK436 がある。SK436 は直径約 0.9m、深さ約 0.5m を測る円形土坑である。一度埋没した後、やや浅く再掘削が行われている。遺物は土師器と須恵器の小片が出土しているのみである。

調査区南端部には SK167・SX158・SX159 が存在する。SK167 は長辺 3.0 m、短辺 1.7m の平面長方形の土坑である。深さは約 0.3m を測り、断面形はゆるやかなU字形である。12 世紀と考えられる瓦器、磁器の他、下層遺構に由来すると考えられる須恵器と鉄滓が出土している。

SX158 は一辺約 4.0m、深さ約 0.15m を測る方形土坑である。南から伸びる数条の浅い溝と接続する。12 世紀後半の土師器、瓦器、瓦質土器、瓦が出土する他、下層遺構に由来する須恵器や製塩土器も出土している。これらの遺物は土坑内に散らばる形で出土している。また、底面付近からは約 10～20 ㎝大の石材も複数出土している。

SX159 は SX158 の北西に重複して存在する長方形土坑である。SX159 のほうが SX158 よりも新しい遺構である。規模は東西約 4.8m、南北約 3.7m、深さ約 0.2m を測る。下層には砂層が薄く堆積しており、この点は SK167 と共通する。12 世紀末～13 世紀前半の土師器、瓦器、須恵器、磁器が出土しており、瓦器埦は今回出土した中で最も新しい時期の様相を示す。

下層遺構（図 16）

下層遺構は古墳時代以前の遺構群である。遺構の時期は古墳時代中期後半が中心で、その前後の時期の遺構や弥生時代に遡る可能性がある遺構も存在する。上層・中層遺構と同様にⅣ層上面が遺構面であるが、SD552 のみⅤ層上面で検出した遺構であり、その詳細は後述する。先に述べた調査期間等の制限により、下層遺構の調査は調査区南半に位置する土坑・落ち込み群を中心に進めており、他の溝や河道については部分的な調査に留まっている。

SX523 と SX524 は調査区南半に 2 基並んで存在する大型の土坑である。どちらも遺構の東端は河道 SR525 に接するような位置にあり、遺構上面の形状は SR525 に対して直交する方向に長軸をもつ不整形である。また、底面の一部が方形に一段落ち窪む点も共通する。SX523・524 および SR525 の調査に際しては、これらの遺構を通しての共通土層畦を設定し、土層断面の把握を行っている（図 17・18）。なお、SX523 と SX524 の上端ラインは、遺構理土最上層と遺構ベース層であるⅣ層の土質が近いため、遺構検出面での正確な把握ができておらず、遺構周辺の面的な掘り下げを行って下層の状況を確認した後に復元を行ったものである。

SX524 は平面規模が東西約 13.2m、南北約 9.4m、深さ最大で約 1.1m を測る。土坑中央付近が南北約 6.5m、東西約 4.8 mの平面隅丸長方形の範囲で深さ 0.6m 程度落ち窪む。落ち窪みの北西辺には 1.5 × 1.0 m程度の張り出し部が見られる。上層の理土は炭化物を含む黒褐色粘質土が主であり、土器を中心とする遺物が多量に出土する。下層の理土は黄褐色・灰色粘土が主で、上層と同様の遺物が出土するが量は少ない。土師器、須恵器、韓式系土器、陶質土器、製塩土器、鞴羽口、砥石、鉄滓が出土している。とくに製塩土器は数量が多い。陶質土器は、韓国慶尚南道咸安地方を故地とすると

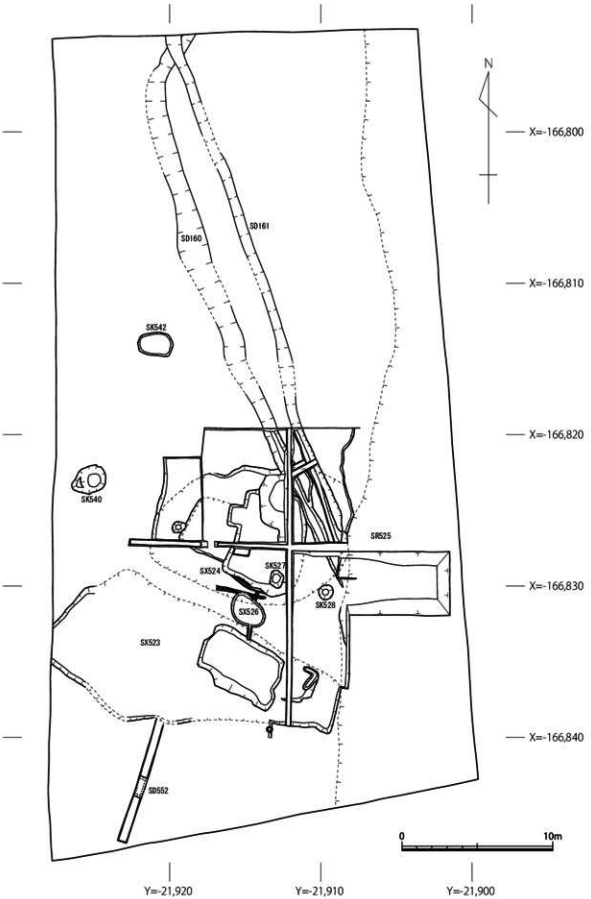


図 16　下層遺構平面図（S = 1/250）

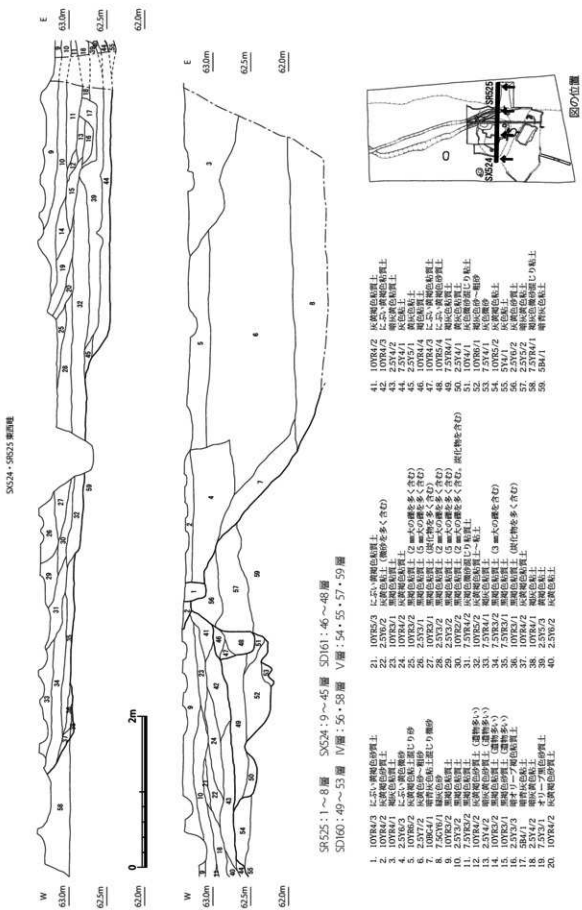
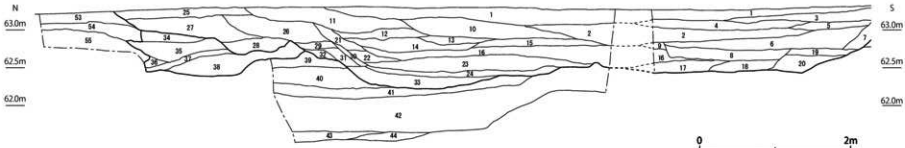
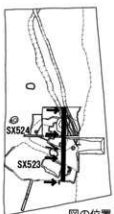


図 17　下層遺構　SX524・SR525 東西畦断面（S＝1/50）

SX523・SX524 南北畦



SX524：1～33 層　SD160：34～38 層　SX523：45・46 層
Ⅳ層：47・53 層　Ⅴ層：39～44、48～52、54・55 層



図の位置

1. 10YR3/2　黒褐色粘質土（3 ㎜大の礫を多く含む）
2. 7.5YR3/2　黒褐色粘質土（遺物多い）
3. 2.5Y4/2　暗灰黄色粘質土
4. 2.5Y3/2　黒褐色粘質土（2 ㎜大の礫を多く含む）
5. 5Y3/2　オリーブ黒色粘質土
6. 2.5Y3/3　暗オリーブ褐色粘土
7. 2.5Y4/3　オリーブ褐色粘質土
8. N4/0　灰色粘土
9. 2.5Y4/2　暗灰黄色粘土
10. 10YR3/1　黒褐色粘質土（炭化物を多く含む）
11. 10YR4/2　黒褐色粘質土
12. 2.5Y6/2　灰黄色微砂混じり粘質土
13. 2.5Y5/3　黄褐色粘質土
14. 2.5Y6/3　にぶい黄色微砂
15. 2.5Y5/1　黄灰色粘土
16. 2.5Y5/3　黄褐色粘土
17. 7.5Y4/1　灰色粘土
18. 7.5Y5/1　灰色粘土
19. 5Y5/1　灰色粘土
20. 2.5Y6/4　にぶい黄色粘土
21. 2.5Y6/2　灰黄色微砂
22. 10YR5/2　灰黄褐色粘土
23. 10G5/1　緑灰色微砂
24. 2.5Y4/1　黄灰色粘土（粘性強い）
25. 7.5YR4/3　褐色粘質土
26. 7.5YR4/2　灰褐色粘質土（2 ㎜大の礫を少量含む）
27. 10YR3/4　暗褐色粘質土（2 ㎜大の礫を含む）
28. 7.5Y4/1　灰色粘質土
29. 10YR4/2　灰黄褐色粘質土
30. 7.5Y4/1　灰色粘質土
31. 10YR4/1　褐灰色粘質土
32. 10YR4/2　灰黄褐色微砂混じり粘質土
33. 7.5Y4/1　灰色粘質土（2 ㎜大の礫を少量含む）
34. 10YR7/1　灰白色粗砂
35. 7.5YR7/1　明褐灰色砂
36. 10YR5/3　にぶい黄褐色細砂
37. 5Y5/2　灰オリーブ色微砂
38. 2.5Y6/1　黄灰色砂
39. 10YR5/3　にぶい黄褐色粘土
40. 5BG4/1　暗青灰色粘土
41. 7.5Y5/1　灰色粘土
42. 7.5Y4/1　灰色粘土
43. 10BG4/1　暗青灰色粘土
44. 2.5GY3/1　暗オリーブ灰色粘土混じり砂
45. 7.5YR3/2　黒褐色粘質土
46. 2.5Y3/1　黒褐色粘質土
47. 10YR4/3　にぶい黄褐色粘質土
48. 10YR4/2　灰黄褐色粘質土
49. 10YR4/1　褐灰色粘土
50. 10YR3/3　暗褐色粘土
51. 10YR4/2　灰黄褐色粘質土
52. 2.5Y4/2　暗灰黄色粘質土
53. 7.5YR4/2　灰褐色粘質土
54. 7.5Y4/2　灰オリーブ色粘質土
55. 7.5Y4/3　暗オリーブ色粘質土

図 18　下層遺構　SX523・SX524 南北畦断面図（S ＝ 1/50）

考えられる脚部に火焔形透かしをもつ無蓋高坏が 2 点ある。出土遺物の時期から、古墳時代中期後半の遺構であると考えられるが、一部の遺物は中期前半に遡る可能性がある。

SX523 は平面形が東西約 19.0m、南北 3.5～10.0 m を測り、東側の幅が狭い。深さ最大約 0.9m を測る大型土坑である。東半部に長辺 5.4 m、短辺 4.0 m、深さ約 0.4m の落ち窪みが存在する。堆積している土層の状況や出土遺物量の傾向は SX524 と同様である。出土遺物には土師器、須恵器、韓式系土器、陶質土器、製塩土器、土製支脚、鉄滓、鞴羽口、砥石、玉類などがある。土坑西半中央付近の上層からは滑石製臼玉 141 点と有孔円盤 1 点、ガラス小玉 1 点が土師器の小型壺に納められた状態で出土している(図版 26)。出土遺物の時期から、古墳時代中期後半の遺構であると考えられる。

SK527 は SX524 の落ち窪み南東隅付近に位置する土坑である。直径 1.0～1.2 m の不整円形土坑で、深さ約 0.5m を測る。土師器の小形丸底壺が出土している。SX524 底面の窪みとすべきか、より古い遺構であるかは判別が付かない。SX523 と SX524 の底面には、同様の小規模な土坑あるいは溝状の落ち窪みが複数存在している。SK527 は図化可能な遺物が出土しているため、ここで単独の遺構として扱うこととする。

SX526 は SX523 と SX524 の間に存在する直径 1.6～2.4m の不整円形土坑である。深さは約 0.2 m を測る。同程度の深さの溝が南・北に接続し、それらが SX523 と SX524 に向かって伸びる。SX523 と SX524 を繋ぐ遺構であった可能性がある。ただし最終的な埋没は SX526 のほうが早い時期である。出土している土師器の器台は SX523・524 の土師器よりもやや古い様相を示す。

SK528 は SX524 と SR525 の間に位置する直径約 0.8m の円形土坑である。土師器の小片が出土している。

SK542 は調査区北半に位置する東西約 2.3 m、南北約 1.6m の隅丸長方形土坑である。深さ約 0.4m を測り、断面の形状は底面が平坦に近いU字形である。土師器、須恵器、製塩土器が出土している。時期は古墳時代中期末である。

SK540 は調査区西辺沿い中央付近に位置する直径約 1.7～2.3m の円形土坑であり、用途は井戸であった可能性が考えられる。南西側に小さな段が付き、平面形も南西側が突出する。深さ約 1.5m を測り、断面の形状は緩やかなV字状を呈する。古墳時代中期の土師器と須恵器が出土している。

SD160 と SD161 は南南東－北北西方向に伸びる溝で調査区を縦断する。どちらも SX524 より古い遺構である。遺構埋土の掘削を伴う調査は SX524 一帯において部分的に実施している。溝の南端は SR525 に接続していた可能性がある。ただし埋没の時期は SR525 が後である。SD160 と SD161 では SD160 が古い溝である。

SD160 は幅約 1.0～2.0 m、南端付近での深さは約 1.1 m を測る。断面の形状はやや底部が広いV字状であるが、南端付近では逆台形を呈する。調査区の北端付近で北東方向に向きを変える。埋土の上層は褐灰色粘質土、下層は灰白色砂層であり流水のあったことがうかがえる。出土遺物は少ないが、古墳時代前期後半に遡る可能性がある土師器が出土している。

SD161 は幅約 0.6～1.1 m、南端付近での深さは約 0.9 m を測る。断面の形状は下半部がU字状で上半部が外に開く。土師器、須恵器、陶質土器が出土している。遺構の時期は中期でも前半に遡る可能性がある。

SR525 は調査区東辺沿いに位置する自然河道である。河道の西岸を検出した状態であり、調査区のさらに東側へと広がっている。河幅約 10m 以上、深さ約 2.5m 以上を測る。周辺の地形や土層の

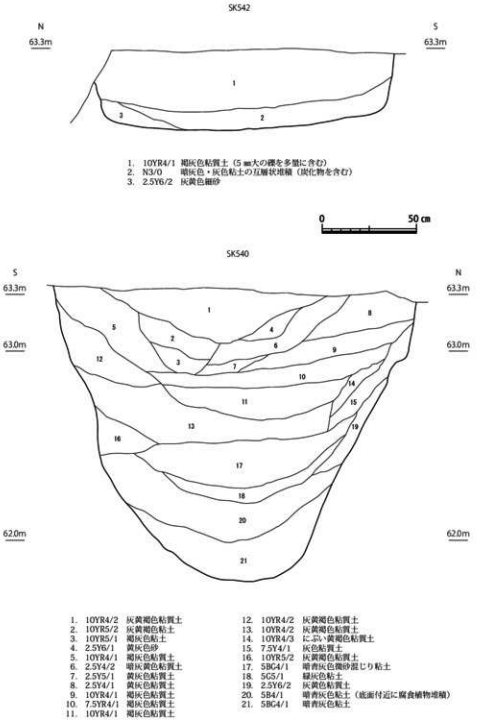


図 19　下層遺構　SK　土層断面（S＝1/20）

堆積状況より、南から北に向かって流れていたことが窺える。調査期間等の制限から SX524 の東側部分のみ掘削を行っている（図 16・17）。この地点では左岸裾付近（上面から約 2.0 m の深さ）に直径 0.1m 未満の杭が数本打ち込まれていることを確認している。出土遺物には土師器、須恵器、韓式系土器、砥石などがある。出土遺物の時期は、周辺の遺構と同様の古墳時代中期後半が中心であるが、中期前半以前に遡るものや後期に下るものも含まれている。河道はおそらく古墳時代を通じて機能し、最終的に古墳時代後期後半に埋没したと考えられる。SR525 は周辺の発掘調査においても確

認されている古墳時代河道と同一の河道であると考えられ、周辺の状況と合わせての評価については第Ⅳ章で述べる。

SD552は調査区の南西隅に位置する溝である。唯一、Ⅴ層上面で検出された遺構である。幅約1.3m、深さ約0.1 mを測る。遺物は出土していないが、周辺のⅣ層を面的に掘り下げた際に弥生時代中期の土器片が出土しており、SD552もそれと近い時期の遺構である可能性がある。なお、SD552周辺ではこのようにⅣ層中に弥生時代の遺物が少量ながら含まれているが、これが調査区全体に及ぶような状況であるのか、あるいは調査区南端部付近に限られるのか、調査時に明確な認識は得られていない。

第４節　遺物

出土した遺物には、土器（弥生土器・土師器・須恵器・韓式系土器・陶質土器・瓦器・陶器・磁器・製塩土器）、瓦、土製品、石器、鉄器、鍛冶関連遺物などがある。

出土遺物の量はコンテナ約 250 箱分である。縄文時代以後の各時期の遺物が出土しているが、量的には平安時代後期～鎌倉時代初頭と古墳時代中期後半の遺物が大部分を占める。これは中層遺構と下層遺構の時期に対応する。この時期の出土遺物には完形品およびそれに準じる資料も多い。次いで多いのは古墳時代中期前半や後期、弥生時代の遺物であるが、破片資料が大部分を占める。

以下に各遺構、層序ごとに出土遺物について述べる。

上層遺構（図 20）

上層遺構は中世以降の耕作溝である。耕作溝および基本層序Ⅰ～Ⅲ層からは 13 世紀以降の土器片などの遺物が出土するが、いずれも細片であり量も非常に少ない。耕作溝からの出土遺物は大部分が中層遺構や下層遺構に由来すると考えられる遺物の破片であり、耕作活動によって巻き込まれたものと考えられる。

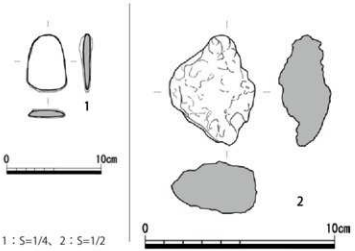


図 20　上層遺構出土　鉄器・鉄滓（S ＝ 1/4・1/2）

1 は調査区南西部の南北耕作溝から出土した鉄斧である。出土地点が下層遺構 SX523 の付近であり、古墳時代に遡る可能性がある。長さ 5.9 ㎝、幅 4.1 ㎝を測る撥形で、厚さ 4.5 ㎜と全体の大きさからすると厚手である。2 は調査区南端部、中層遺構 SX158 付近の南北耕作溝から出土した鉄滓である。重量 101.4g を測る。表面全体に厚く土を被っており、気孔や木炭痕は確認できない。

中層遺構（図 21～45）

中層遺構は平安時代後期～鎌倉時代初頭、とくに 12 世紀代を中心とする時期の遺構であり、屋敷地およびその周辺に展開する遺構群からなる。出土遺物は土師器の皿や羽釜、瓦器の皿と椀が多く、その他に須恵器や陶器、磁器、瓦、石器が少量存在する。また、下層遺構に由来する古墳時代の土師器や須恵器、製塩土器なども一定量出土しており、主だったものを報告する。

SD153（図 21・22）

土師器、瓦器、磁器、石器が出土している。溝の上層ないし出土地点が不明瞭な資料（図 21）が中心だが、一部、溝の底面付近から出土した土器がある（図 22）。

3～13 は土師器皿である。3～9 は手づくね成形の小皿で、口径 8.1～9.4 ㎝、器高 1.4～1.7 ㎝を測る。

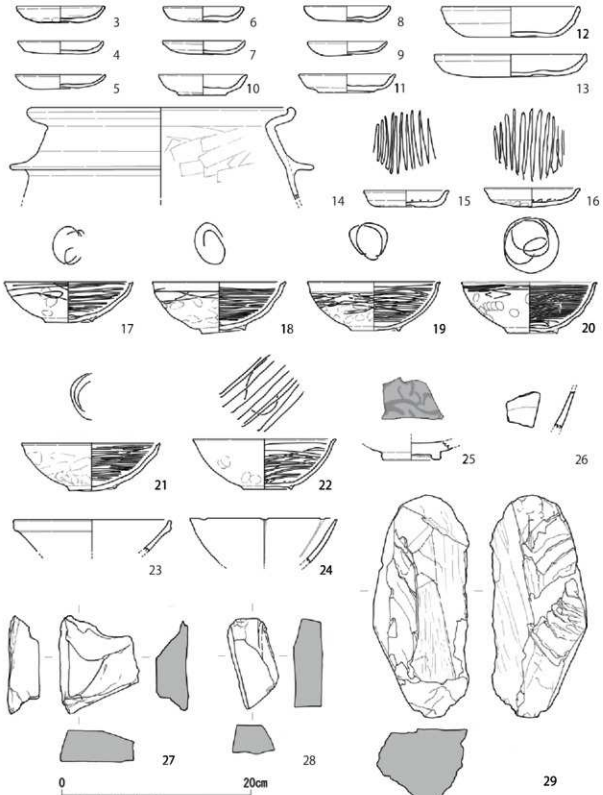


図 21　SD153 上層・一括出土　土器・石器（S = 1/4）

口縁部はナデ調整を施し、端部は丸くおさめる。内面は上半にヨコナデ、底部にナデ調整を施す。外面底部は未調整で、成形時の指頭圧痕が残る。色調は黄灰色を呈する。

10･11 はロクロ成形の小皿で、右回転の底部糸切りである。体部との境に段がある。10 は口径 9.2 ㎝、器高 2.2 ㎝を測り、口縁端部は丸くおさめる。11 は口径 10.2 ㎝、器高 1.9 ㎝を測り、口縁端部

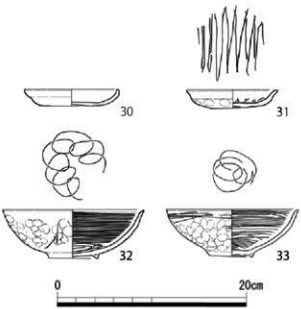


図 22　SD153 下層出土　土器（S = 1/4）

のみ外反する。色調は赤褐色で、胎土は白色・赤色の砂粒を多量に含む。

12・13 は手づくね成形の大皿である。12 は口径 14.4 ㎝、器高 3.3 ㎝を測るやや深手の皿で、口縁部は二段のナデ調整後、端部を上方に引き上げる。13 は口径 15.8 ㎝、器高 2.4 ㎝を測り、口縁部は一段のナデ調整後、端部を垂直に引き上げる。どちらも外面底部は未調整で、成形時の指頭圧痕が残る。色調は黄灰色を呈し、胎土は密である。

14 は土師器羽釜である。鍔が体部の最大径より上に付く。口縁部はくの字状に折り曲げ、端部は内側に丸く折り返す。鍔より下には煤が付着している。

15・16 は瓦器皿で、見込みにはジグザグ状暗文が施される。16 は暗文を一度消して描き直しを行った痕が見られる。

17～22 は瓦器埦である。17～21 は外反気味の口縁端部内面に沈線が巡る大和型瓦器埦、22 は口縁端部を丸くおさめる和泉型瓦器埦である。時期は 12 世紀後半である。17～21 の見込みには粗めの同心円状暗文が施される。17 は口径 13.4 ㎝、器高 4.1 ㎝を測り、内面の圏線文状のミガキは隙間が広い。高台は断面三角形で底面より高い位置に貼り付けられる。18～21 は口径 14.0～14.5 ㎝、器高 5.0～5.4 ㎝を測る。内面の圏線文状のミガキは 20 がやや密である。18 はミガキ後に見込みの暗文を施していることが確認できる。21 は高台が底面より高い位置に貼り付けられており安定しない。22 は口径 14.9 ㎝、器高 5.3 ㎝を測る。見込みには弧状の暗文の上から平行線状の暗文を施す。内面のミガキはやや太く隙間は広い。高台の断面形状は台形だが厚みは薄い。

23 は復元口径 16.4 ㎝の白磁碗である。全面にわずかに緑がかった灰白色の釉が施される。24 は復元口径 15.5 ㎝・残存高 4.7 ㎝の青磁の輪花碗である。口縁端部の一部を軽く押さえ、そこから下方に半肉彫を付け全体を花弁の様に見立てる仕立てである。残部の内外面全てに施釉されており、内外面ともに細かい貫乳が認められる。25 は底径 6.0 ㎝の青磁である。やや大型の碗ないし皿である可能性がある。底部内面に肉彫による唐草の文様が施されている。釉は高台外面までの範囲に施されている。26 は青磁碗の破片である。内面全体と外面上半に釉が施されている。これらはいわゆる輪入磁器であると考えられる。中層遺構からは同様の破片が複数出土している。

27～29 は灰白色系の砂岩である。いずれも表面に擦痕のある平滑な面が存在し、砥石として利用されていた可能性が考えられる。平滑な面は 27・29 では一部に限られるが、28 は半数以上の面を使用していたようで全体が角柱状を呈する。

30～33 は SD153 の底面付近から出土した土器である。30 は土師器皿の完形品で全体がナデ調整で丁寧に整形されている。31 は瓦器皿である。見込みには端々が尖り気味のジグザグ状暗文を施す。32・33 は瓦器埦で、どちらも口縁の一部を欠くだけの準完形品である。内面の圏線ミガキは細かく施されるが外面はほぼ省略されている。SD153 上層の瓦器埦と比較すると 12 世紀後半でもやや古い

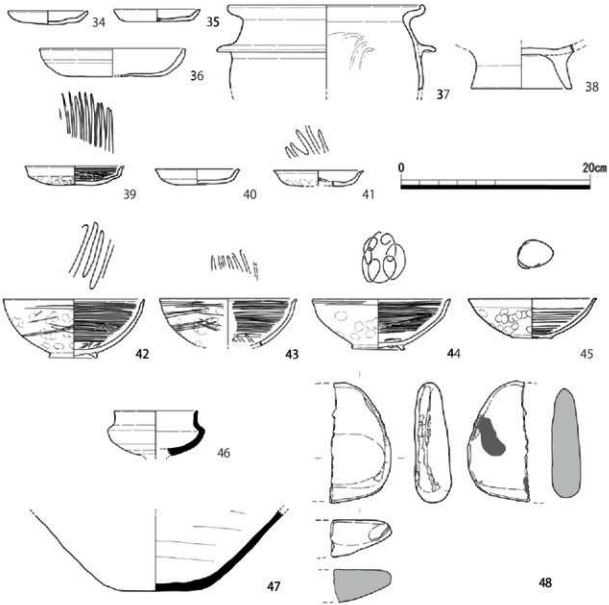


図 23　SD343・421 出土　土器・石器（S = 1/4）

様相を示す資料である。

SD343・421（図 23）

SD343 と SD421 は調査区西半において一体となる東西溝であり新旧関係をもつが、調査時の遺構の認識から出土遺物が分けられていない。図 23 のうち 38・42・43・46 については出土区域から SD343 に属すと考えられる。土師器、瓦器、須恵器、石器が出土している。

34～36 は土師器皿で、いずれもナデ調整により仕上げられている。36 は外面上半に強めのヨコナデを施すことで下半部との境に小さな段が生まれている。37 は土師器羽釜である。口縁端部を内側上方に折り返す。鍔は外側への突出が小さく薄手の作りである。体部に煤が付着する。38 は土師器の甕ないし大型皿の台である。底径 10.4 ㎝を測る。

39～41 は瓦器皿である。39 は口径 10.3 ㎝、器高 2.0 ㎝を測る。口縁端部を外反気味につまみ出し、内面の立ち上がり部分には密に圏線文状のミガキを、見込みにはジグザグ状暗文を施す。外面底

部は未調整で、成形時の指・掌の圧痕が多く残る。40 は口径 8.6 ㎝、器高 1.6 ㎝を測る小型である。表面の摩耗のため細かな調整は不明である。焼き斑のため一部がにぶい橙色を呈する。41 は口径 9.4 ㎝、器高 1.7 ㎝を測る。口縁端部は外方へつまみ出し上側に面を作る。見込みには丸みのあるジグザグ状暗文を施す。焼成は不良で、色調は灰白色を呈する。

42～45 は瓦器埦である。42・43 は口径 14.5～14.8 ㎝、器高 6.2 ㎝を測り、体部は半球体に近い丸みをもって立ち上がる。見込みにジグザグ状暗文を施した後、底部から口縁にかけて密に圏線文状のミガキを施す。外面は上部 2/3 程度の範囲に粗めのミガキを施す。44 は口径 14.4 ㎝、器高 5.3 ㎝を測る。内面には密にミガキを、見込みには連結輪状暗文を施す。外面のミガキは摩耗のため範囲は不明である。42・44 は断面台形状の高台を貼り付ける。42～44 の時期は 11 世紀末～12 世紀前半であると考えられる。45 は口径 13.4 ㎝、器高 4.1 ㎝を測り、浅く直線的に立ち上がる器形である。見込みには同心円状暗文を施す。高台は低く断面三角形である。時期は 12 世紀後半以降である。

46 は須恵器脚付短頸壺である。底面付近に脚部の剥離痕が存在する。47 は須恵器鉢である。全体を横方向のケズリ・ナデで仕上げ、底部はやや丸みを帯びる。胎土には 0.2～1.0 ㎝大の礫が多く含まれる。

48 は亜円礫を利用した磨石である。長さ 12.7 ㎝、残存幅 6.5 ㎝、厚さ 3.0 ㎝を測る。縦縁辺に敲打痕と長い擦痕が確認できる。また、表面に磨り痕と見られる窪みもあり、皿状の利用も行われたと考えられる。一部に被熱による変色が見られる。

SD157（図 24）

SD157 は調査区を南北に縦断する溝であり、12 世紀中頃には廃絶したと考えられる。出土遺物の多い下層遺構 SX523・524 上を通るため、古墳時代の遺物も多く含む。

49～55 は土師器皿である。49･50 は、ての字状口縁の小皿である。49 は口径 9.4 ㎝、器高 1.5 ㎝、50 は口径 10.4 ㎝、器高 1.5 ㎝を測る。49 の外面底部には粘土が剥れた痕や粘土塊が付着した痕が存在する。51･52 は口径 9.9 ㎝、器高 1.7 ㎝を測り、口縁が開きぎみに立ち上がり、端部に面をもつ。53 は口径 8.9 ㎝、器高 1.4 ㎝を測るロクロ成形の小皿である。糸切後の底部に軽くナデを施す。口縁は肥厚させる。54・55 は口径約 15 ㎝、器高約 3 ㎝を測る手づくね成形の大皿である。外面二段ナデの後、口縁端部を丸く収める。外面底部にもナデ調整を施すが、55 の底部には粘土紐痕が残る。これらの土師器皿の時期は 11 世紀～12 世紀初頭であると考えられる。

56 は土師器甕である。古墳時代の遺物であると考えられる。口縁部はやや厚く、中ほどが膨らむ。体部は上半部に最大径をもつと考えられる。内外面とも弱めのハケ調整が施される。57 は土師器高坏の脚部である。表面が摩耗しており細かな調整等は不明である。頸部下端付近に円形透かしを 2 方向に穿つ。

58・59 は製塩土器である。58 は裁頭卵形で外面にタタキを施す。59 は平底のコップ形でわずかにタタキの痕が確認できる。

60 は瓦器皿である。高さ約 2.2 ㎝以上と皿としてはやや深めで、底部中央は丸く突出する。61～67 は瓦器埦である。いずれも体部は全体に内湾して丸みを帯びる深い形状で、口径は 14.6 ㎝～15.5 ㎝を測る。口縁部は外反し端部内面に沈線が巡る。61・63 の沈線は非常に浅い。61～65 は外面体部下半にまで、66 は上半に、それぞれミガキを施す。67 は遺存状態が悪く不明である。66・67 は

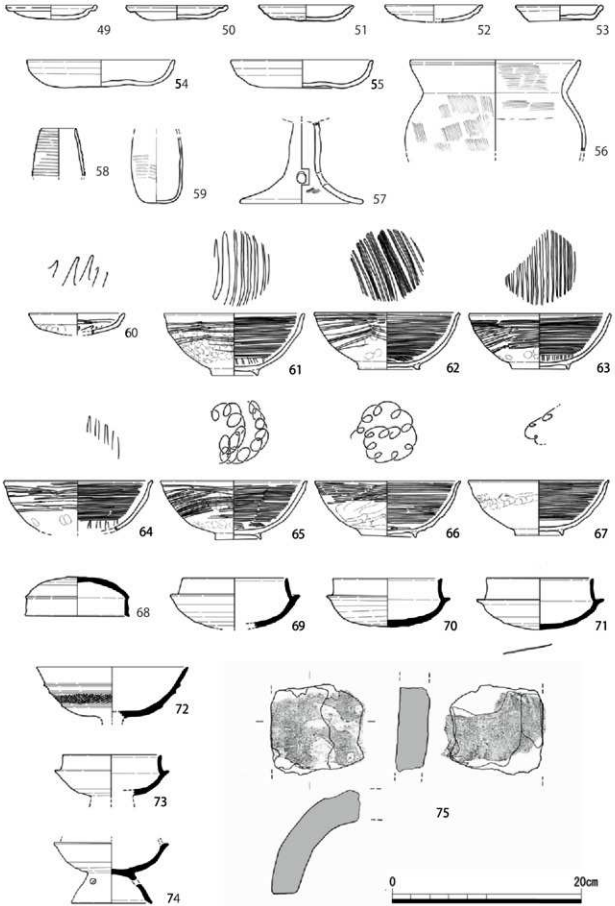


図24　SD157出土　土器・瓦（S＝1/4）

外面下半を指でナデ下ろしており、特に 66 には痕が明瞭に残る。高台の形態はいずれも据え置くことの出来る形であり、断面形は台形である。61～64 は見込みのジグザグ状暗文の後に、体部に圏線ミガキを施す。65・66・67 は見込みに連結輪状暗文を施している。体部のミガキと見込みの暗文は独立しており、作業上の前後関係は不明である。これらの瓦器埦の時期は 11 世紀後半～12 世紀前半であると考えられる。

68～74 は古墳時代の須恵器である。68 は坏蓋で口径 10.8 ㎝、器高 4.2 ㎝を測る。69～71 は坏身である。69 は受部から端部にかけての範囲が全体に丸みを帯びた作りである。70 は口縁が外反気味に立ち上がり、端部はわずかに内側に傾斜する。71 は受部がやや広く、体部にはヘラケズリが強めに施される。底部外面中央には直線のヘラ記号が存在する。72 は高坏坏部の破片である。外面には 3 条の稜が巡り、下・中段の間には細かな格子目文様が刻まれる。色調は暗紫灰色を呈する。73 は高坏の坏部で、やや外に開く脚が存在していたと考えられる。74 は高坏で、脚部の上半に円形透かしを 3 方向に穿つ。坏部下半外面のヘラケズリ部分以外は全体に回転ナデ調整が施されている。

75 は丸瓦の破片である。内面には布目痕が残り、外面はナデ調整を施していると考えられるが表面の摩耗によって確かではない。色調は、にぶい橙色を呈している。

SD156（図 25～27）

SD156 は調査区北西部に位置し、屋敷地の南西隅を画す大型の溝である。出土遺物は大きく上層（図 25･26）と下層（図 27）に分けて取り上げられている。瓦器埦を中心に時期を見ると 12 世紀代、とくに後半が中心で、下層には 12 世紀前半に遡る資料も存在する。ただし下層出土遺物にも 12 世紀末に近いと考えられる資料が含まれており、下層と上層の差に遺構・遺物の時期変遷が明確に表れる状況ではないと言えるが、一定の時期幅が存在することを反映するものとして、出土層位別に提示することとする。

76～106 は土師器皿である。76～89 が手づくね成形の小皿、90～97 がロクロ成形の小皿、98～104 が手づくね成形の大皿、105・106 がロクロ成形の大皿である。

76～89 は口径 8.3～10.0 ㎝、器高 1.3～1.8 ㎝を測る。77・79 は開き気味に立ち上がる形状で、底部は平底である。口縁部にナデ調整を施す。胎土は赤褐色で 1～2 ㎜大の赤色粒を多量に含む。80～82・85・88 は口縁部に一段ナデの後、口縁端部を丸くおさめる。81・82 は右回りのナデ上げが残る。76・78・84・86・87 は口縁部にナデ調整の後、口縁端部をつまみ上げる。83 は口縁部に強めのナデ調整を二段に施した後、口縁端部を上方に引き上げる。89 は口縁部が開き気味に立ち上がり、内外面に強いヨコナデを施し稜を作り出す。これらはいずれも内面底部にナデ調整を施し、外面底部は未調整のまま成形時の指頭圧痕が残る。色調は黄灰色で、胎土は雲母を含み密だが、砂粒を多く含むもの（76・85）や褐色粒を含むもの（81・84）がある。80 は幅 1.5 ㎝の粘土紐の積み上げ痕が確認できる。

90～97 は口径 8.9～9.9 ㎝、器高 1.7～2.0 ㎝を測る平底皿である。91～96 は口縁端部を上方に引き上げて仕上げ、うち 94 はやや内湾する形状である。底部糸切り（右回り）で、体部と底部の境に段が認められる。胎土は赤褐色で赤色の粒を少量含む。90・97 はナデ調整により全体を丸く仕上げる。底部は同じく糸切り（右回り）である。色調は黄灰色で、胎土は比較的密である。

98～104 は口径 13.9～15.2 ㎝、器高 2.6～3.3 ㎝を測る。98 は外面中段に強いナデを施すことで

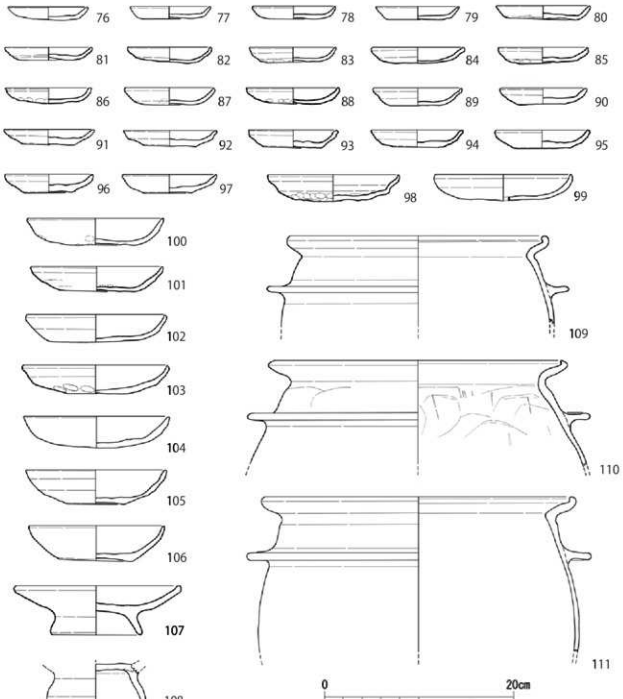


図 25　SD156 上層出土　土器①（S = 1/4）

凹面を作り出し、底部との境に稜が存在する。内外面とも底部は未調整である。色調は灰白色で、大きめの砂粒を含む。99 は口縁部にナデ調整を二段に施した後、口縁端部を丸くおさめる。100 はナデ調整の後、口縁端部を丸くおさめる。101～104 は口縁部に一段ないし二段ナデ調整の後、口縁端部を上方に引き上げる。　99～104 は内面底部にナデ調整を施し、外面底部は未調整のまま指頭圧痕が残る。色調は黄灰色で、胎土に雲母を含む。

105 は口径 14.6 ㎝、器高 3.6 ㎝、106 は口径 14.1 ㎝、器高 3.8 ㎝を測る平底大皿である。口縁端部を丸くおさめ、外面に強いヨコナデによって生じた稜が存在する。106 はナデ調整により全体を丸みを帯びる形に仕上げる。色調は赤褐色を呈し、赤色粒を少量含む。

107 は土師器台付皿である。台部内面も含めて全体をナデ調整で平滑に仕上げる。108 は土師器の台部であり、皿などの器種である可能性が考えられる。平坦な底部に台を貼り付けて製作していることが断面で確認できる。109～111 は土師器羽釜である。いずれも上半部の破片で、外面に煤が付着する点で共通する。111 は体部内面にも煤が多く付着する。

112～120 は瓦器皿である。112・113・115～120 は口径 9.1～9.8 ㎝、器高 1.6～2.1 ㎝を測る。114 は口径 8.7 ㎝、器高 1.9 ㎝とやや小ぶりである。112・113・115・117 ～ 120 は口縁部を外反気味に立ち上げ、120 以外は端部に面をもつ。見込みにやや粗いジグザグ状暗文を施す。外面底部は未調整で成形時の指や掌の圧痕が残る。113 は全体の形状が歪んでおり、とくに中央部が押し上げられている。118・119 は見込みに密なジグザグ状暗文を施した後に、体部内面に 1～3 条の圏線文を描く。119 は平底気味である。114 は口縁端部を外反気味につまみ出す。見込みは粗いジグザグ状暗文を施す。116 は口縁部を外反気味に立ち上げ、全体に他よりやや厚みがある。内面は太く丸みを持ったジグザグ状暗文であり、いわゆる和泉型である可能性がある。

121～130 は大和型の瓦器椀である。うち古相を示す 121～124 は口径 14.2～14.6 ㎝、器高 5.2～5.5 ㎝を測り、体部が丸く立ち上がる深い形状である。内面には比較的密な圏線ミガキ、見込みには連結輪状暗文を施す。高台の断面形は台形であるが、121・122 と比べて 123・124 は小ぶりである。125～130 は口径 13.7～14.2 ㎝、器高 4.6～5.0 ㎝を測る。やや直線的に立ち上がる形状である。見込みの暗文は 129・130 が連結輪状暗文、125～128 が同心円状暗文に分けられるが、127 のように両者の差が不明瞭なものも見られる。高台の断面形は三角形である。125・127 は底面より高い位置に高台が貼り付けられており、底部中央が下方に突出する。

131～134 は磁器である。131 は白磁碗の小片である。口縁の外面部側には釉薬の垂れが確認できる。胎土は緻密である。132 は白磁碗である。玉縁口縁で、色調はわずかに緑色掛かった灰白色である。133 は白磁碗の底部で、底径 5.3 ㎝を測る。坏部の立ち上がり方から、やや大型の碗である可能性が考えられる。全体に粗めの仕上がりである。高台は削り出しており、高台の内面には削り出した際の切り込み痕が明瞭に残る。高台は部分的に施釉されており、その境界付近の処理も粗雑である。134 は白磁碗の底部で、底径 6.2 ㎝を測る。高台を含む底部付近は厚く作られている。見込みには重ね焼きによる釉の円形の剝がれが見られる。

135 は陶器で、大型の鉢ないし甕であると考えられる。外面には粗いタタキが施されるが、底面は未調整のままである。内面には自然釉が付着する。

136 は砂岩で、重量約 700g を測る。必ずしも平滑ではないが作り出された複数の面をもち、台や砥石として用いられた可能性が考えられる。

137～170 は SD156 下層からの出土である。137～146 は土師器皿である。口径 9.4～10.1 ㎝を測り、143 のみ口径 8.7 ㎝とやや小さい。色調は黄灰色であるが、137 のみにぶい橙色を呈する。137～144 が手づくね成形、145・146 がロクロ成形である。

137～144 はいずれも内面はナデ調整、外面はヨコナデを施し、底部は未調整で残される。外面はヨコナデによって作り出された稜が残るものと上からナデ消すものとがある。138・141・142 は口縁部を二段ナデ調整で仕上げる。141 は底面中央が大きく上方に突出する。144 は内面に煤が多く付着しており、灯明皿として使用された可能性が指摘できる。

145・146 はロクロ成形の平底皿で右回転の糸切痕がある。手づくね成形の小皿と比較して器全体

が厚く作られる。146 は外面底部に黒斑が存在する。

147 は土師器台付皿である。全体をナデ調整で丁寧に仕上げる。台はほぼ垂直に立ち、端部はやや丸くおさめる。

148～150 は瓦器皿で、いずれも完形品である。口径 9.6～9.8 ㎝、器高 1.8～2.1 ㎝を測る。見込みにはジクザク状暗文を施す。口縁端部は外側に小さく折り返し、149 は上部に面をもたせる。149 は全体が内側にやや折れ曲がる形で歪んでいる。

151～167 は瓦器埦で、いずれもいわゆる大和型である。時期は 12 世紀中頃～後半と幅がある。151～157 は口径 14.3～15.5 ㎝、器高 4.8～6.0 ㎝を測り、全体に丸みを帯びた深い器形である。内面には比較的密にミガキが施される。高台は断面台形を基本とするが、155 のように三角形に近いものや、152・156 のように下端が潰れて折れ曲がるものも存在する。見込みには連結輪状暗文を施す。

158～167 は口径 13.6～14.6 ㎝、器高 4.4～5.0 ㎝を測り、底部から直線的に開く、やや浅い形状である。先述の一群と比べて内面のミガキの密度は疎であるが、158～167 の中でも疎密が見られる。外面のミガキは基本的に体部上半のみに施される。見込みの暗文は同心円状暗文であるが、159 は連結輪状暗文に近い。163 の同心円状暗文は位置が底部中心から大きく外れている。

168 は瓦質鉢の破片で復元口径 26.9 ㎝を測る。全体をろくろ成形した後、部分的にナデ調整を施す。破片状態になった後に被熱している。

169 は白磁碗の底部片である。高台の断面形は台形で、内側が強めに削り取られている。

170 はサヌカイトの剥片である。重量 112.3 g を測る。原石部分を多く残し、一次剥離時点の剥片であると考えられる。

SD154（図 28）

171～196 は土師器皿である。口径 15.3 ㎝を測る大型の 196 を除くと、口径は 8.5～10.0 ㎝の間に分散している。色調は 171～185・187～189 が黄灰色、186・190～196 が橙色である。

171～189 は手づくね成形で、内面および外面上半にナデ調整を施す。外面底部は未調整で指頭圧痕が残る。口縁端部を丸くおさめるものと、わずかに上方に引き上げて仕上げるものがある。182 は内面に煤が付着する。187 外面底部には工具によると思われる直線的な窪みが存在する。

190～195 はロクロ成形で、右回転の糸切痕が残る。口径は 9.1～9.5 ㎝を測り、手づくねの一群と比べて差が少なく、器全体が厚く仕上げられている。194 は底部と体部の境が特に明瞭で、あたかも低い高台を付けたかのような形である。

196 は手づくね成形の大皿である。外面に強いヨコナデを施し、端部は上方に引き上げている。外面の体部下半から底部は未調整で、指頭圧痕が明瞭に残る。内外面とも被熱によるものか一部が淡灰色に変色している。

197～200 は瓦器皿である。いずれもほぼ完形である。口径は 9.2～10.0 ㎝、器高 1.8～2.0 ㎝を測る。見込みにはジグザグ状暗文を施す。197 は口縁部内面に細い圏線ミガキを施す。

201～203 は瓦器埦である。復元口径 14.2～15.2 ㎝、器高 5.1～5.4 ㎝を測る。いずれも表面が摩耗しており色調も灰白色化している。そのため、特に外面の細かな調整の観察が難しい。201 は内面の圏線ミガキが乱雑で、見込みには個々の径が大きい連結輪状暗文を施す。202 は見込みに同心円状暗文を施す。やや高い位置に断面三角形の小さな高台を貼り付けており、高台よりも底面中央部

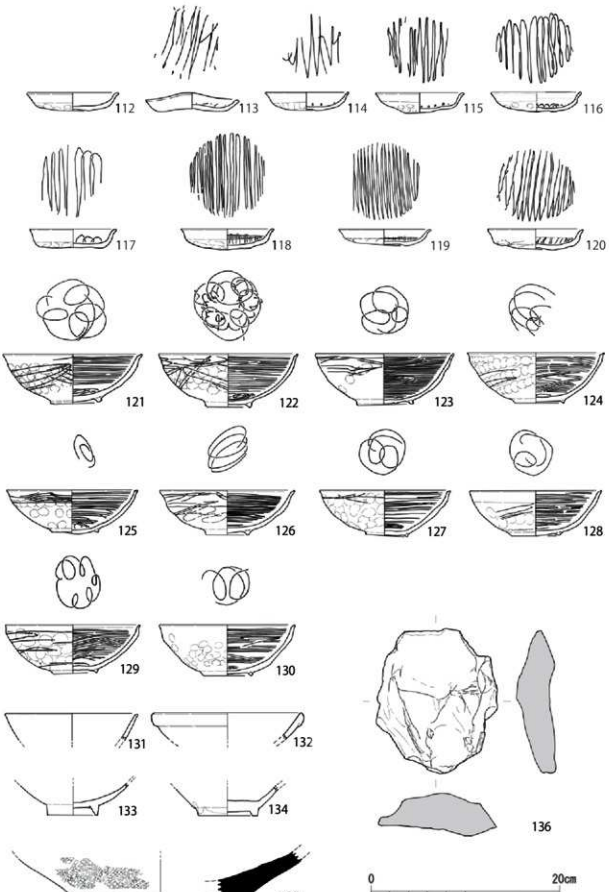


図26　SD156上層出土　土器②・石器（S＝1/4）

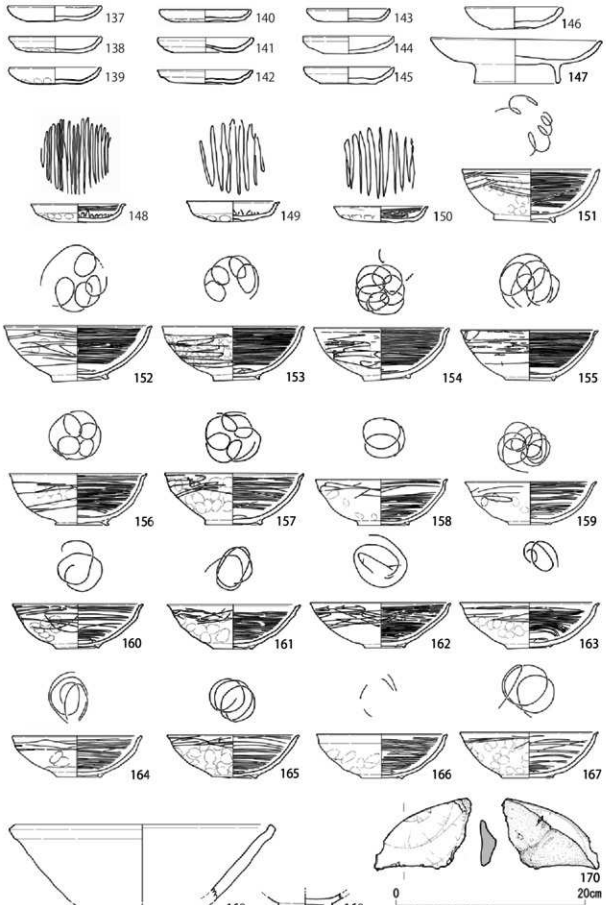


図 27　SD156 下層出土　土器・石器（S = 1/4）

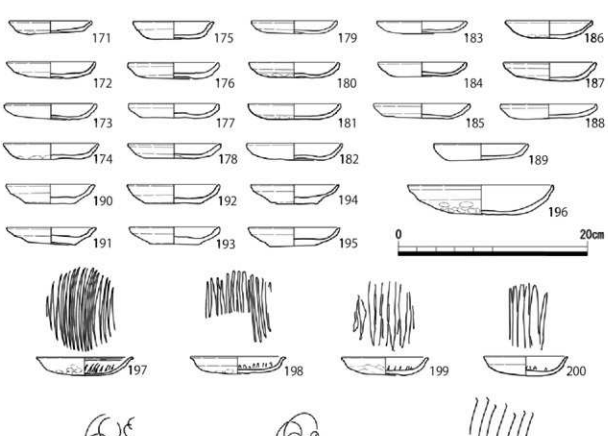


図28　SD154出土　土器（S＝1/4）

のほうが下に突出する。203は和泉型の瓦器埦で、見込みには平行線状暗文を施す。暗文は各線の端が深く押し付けられており、明瞭な窪みが器壁に残っている。

SD163・454（図29）

204～206・215・220・224がSD163からの出土である。他は調査時の遺構認識の問題からSD163とSD454両方の可能性があるものである。

204～216は土師器皿である。204～211は手づくね成形の小皿で、口径8.6～9.9㎝、器高1.3～1.8㎝を測る。主としてナデ調整によって成形されており、口縁端部を丸くおさめるものや上方に引き上げるものがある。外面底部は未調整で指・掌圧痕が残る。色調は黄灰色で、胎土は密で雲母を含む。208のみ砂粒を多く含む粗めの胎土で、赤褐色を呈する。

212・213はロクロ成形の小皿で、右回りの糸切痕が残る。口径9.6～10.0㎝、器高1.8～2.1㎝を測る。色調は赤褐色で、胎土には赤色砂粒を多く含む。

214～216は手づくね成形の大皿で、口径14.0～14.2㎝、器高2.2～2.6㎝を測る。214は外面上半に二段ナデ調整を施した後、口縁端部を上方に引き上げる。215は一段ナデ調整を施した後、口縁端部を丸くおさめる。216はやや開き気味の口縁部で、外面には強いナデによる稜が見られる。

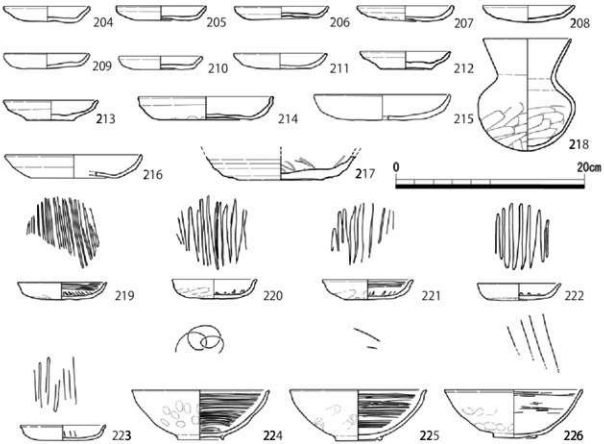


図 29　SD163・454 出土　土器（S＝1/4）

色調は黄灰色で、胎土に白色砂粒と雲母を含む。

217 は土師器の椀であると考えられる。外面は強いヨコナデで成形された段が認められる。内面はナデ調整で仕上げるがヘラ状工具の静止痕が複数残る。218 は土師器広口壺である。古墳時代の遺物である。肩の張った球形の体部に、直線的に外傾する口縁部をもつ。体部中央部に黒斑が存在する。

219～223 は瓦器皿である。220・222・223 は口径 8.7～8.9 ㎝、器高 1.6～2.0 ㎝とやや小ぶりで、口縁部は外反気味に立ち上がる。見込みには端々が丸味をもったジグザグ状暗文を施す。219・221 は口径 9.4～9.5 ㎝、器高 1.8 ㎝を測る。口縁端部をわずかに外側につまみ出す。内面体部に圏線ミガキ、見込みにジグザグ状暗文を施す。いずれの瓦器皿も外面底部は未調整で、成形時の指・掌圧痕が残る。

224・225 は大和型瓦器椀で、口径 14.3～14.4 ㎝、器高 5.2～5.3 ㎝を測る。外面上半にミガキを施していると考えられるが、表面の摩耗により細かな観察が困難である。224 は見込みに連結輪状暗文を施す。

226 は口縁端部を丸くおさめる和泉型瓦器椀で、口径 14.4 ㎝、器高 5.2 ㎝を測る。内面はやや隙間の広い細い圏線ミガキで、見込みに平行線状暗文を施す。高台は断面三角形であるが、その一部は完全に潰れた形である。

SD476・553・162（図 30）

いずれも調査区南半に位置する溝で、12 世紀後半以降の瓦器が出土している。

227・228 は SD476 からの出土である。227 は瓦器椀の完形品である。内湾気味に立ち上がり、

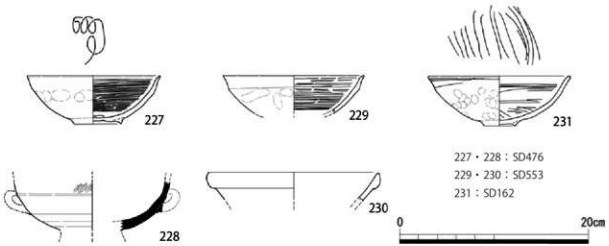


図 30　SD476・553・162 出土　土器（S = 1/4）

上部は外反する。端部は段と凹線をもつ。内面は密にヘラミガキが施され、見込には螺旋状の暗文が施される。外面は指頭圧痕が残る。断面三角形の高台を貼り付ける。内外面に斑点状の焼むらが存在する。228 は須恵器の把手付高坏である。把手は根元のみが遺存する。把手上部は波状文の上に貼り付けられている。坏部内面には全体に薄く自然釉が付着する。

229・230 は SD553 からの出土である。229 は瓦器埦の破片である。230 は白磁碗の破片である。玉縁口縁で、下端の溝状部分には釉が厚く乗る。色調は黄緑色掛かった灰白色である。

231 は SD162 から出土した瓦器埦である。口縁端部は小さな段をもつが凹線は無い。内面は粗いヘラミガキが施される。見込みにはジグザグ状の折り返し部分が省略された、平行線状暗文が施される。外面は口縁直下に数条のヘラミガキが施されるが、胴部は指で底に向かうようにナデ下ろしている。高台は断面が三角形で、直径 3.7 ㎝と小型である。

SE211（図 31・32）

SE211 からの出土遺物は層序で埋戻土・井戸枠内堆積土（図 31）と、井戸枠掘方埋土（図 32）に大きく分けられる。出土量は前者が多く、井戸廃絶時に多くの遺物が投棄されたものと考えられる。出土遺物の時期は 12 世紀後半である。掘方内出土の瓦器埦はその中でも古い様相を示しており、井戸の利用に一定の時期幅があったと考えられる。

232～247 は土師器皿である。232～241 は口径 8.7～9.8 ㎝、器高 1.2～1.6 ㎝を測る手づくね成形の小皿である。外面をナデ成形後、口縁端部を丸く収めるものや上方ないし開き気味に立ち上げるものがある。236 は内面底部を放射状の指ナデで丁寧に仕上げている。いずれも色調は黄灰色を呈する。233・235・238・241 は胎土に砂粒を含まず緻密である。233 の内外面および 235 の内面には黒斑が存在する。

242～247 は口径 13.8～18.0 ㎝、器高 2.2～3.7 ㎝を測る大皿である。247 はロクロ成形で、他は手づくね成形である。246・247 は他より深い、坏に近い形状である。247 は橙色の色調で、同遺構出土の土師皿の中で異彩を放つ。

248～254 は瓦器皿である。口径 8.3～9.8 ㎝、器高 1.4～2.1 ㎝を測る。いずれも見込みにジグザグ状暗文を施し、252 のように端々が尖り気味のものや 253 のように丸みを帯びるものがある。

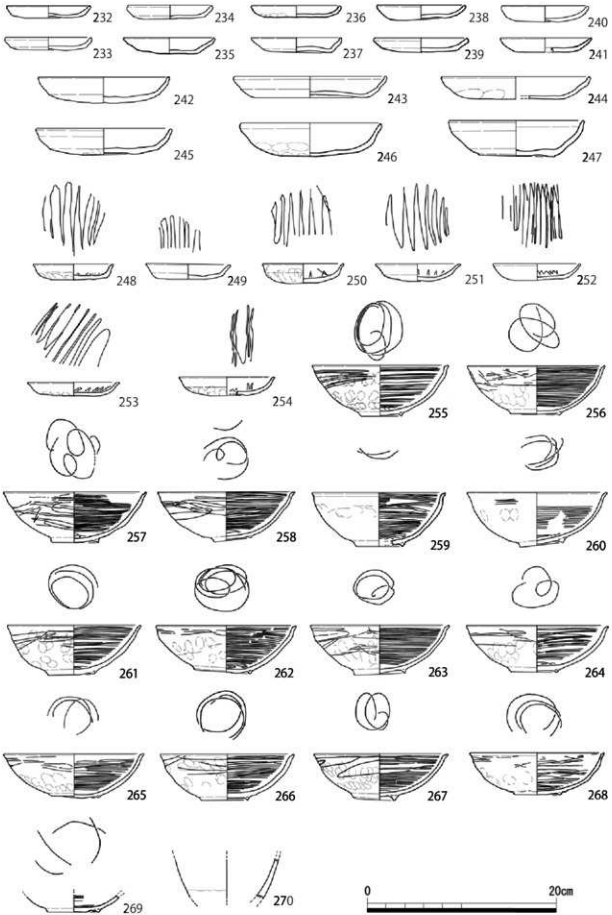


図 31　SE211 埋戻土・井戸枠内出土　土器（S = 1/4）

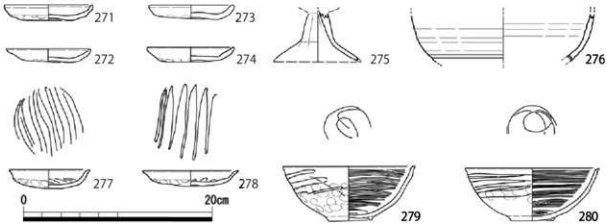


図 32　SE211 掘方埋土出土　土器（S＝1/4）

248～251 は外面底部に削り取るような強いナデ調整を施す。253・254 の外面底部は未調整である。

255～269 は瓦器埦である。口径 14.0～15.0 ㎝、器高 4.3～5.6 ㎝を測る。器高に若干の幅が認められる。内面には隙間のある圏線ミガキ、外面には乱雑なミガキを施す。259 は口縁端部の外側への折り返しが強く、外面に稜が形成される。見込みの暗文は 257 が連結輪状暗文であると考えられる。他は同心円状暗文である。乱雑な暗文では両者の境が不明瞭なものもある。高台は小ぶりで断面三角形のものを底面付近に貼り付ける。265 は底部中央が高台より下に突出している。

270 は緩やかに内湾する白磁の破片である。小片の為、器種は不明である。上部は厚さ約 0.3 ㎝と薄手である。内面は全体に釉が施されるが、外面下半は無釉である。

271～280 は SE211 の井戸枠掘方埋土からの出土遺物である。

271～274 は土師器皿である。口径 8.6 ㎝～9.2 ㎝、器高 1.5～1.6 ㎝を測る。いずれも手づくね成形で、色調はにぶい黄橙色を呈する。内面と外面上半はナデ調整を施すが、底部外面は未調整のまま指頭圧痕が多く残る。

275 は土師器高坏の脚部である。外面には縦方向のケズリが面取り状に施されている。

276 は白磁の破片で、壺などの可能性が考えられる。胴部の破片。外面下方には 2 条の沈線が巡る。残存部のうち外面は全体が、内面は上半部のみが施釉されている。

277・278 は瓦器皿である。277 は底部を含め全体が丸みを帯びた形状である。見込みにはジグザグ状暗文が施される。278 は平底気味の底部に、外に大きく開く口縁をもつ。外面の指頭圧痕は指紋が明瞭に残る。見込みの暗文はジグザク状で間隔はやや広いが丁寧に施されている。

279・280 は瓦器埦である。279 は復元口径 13.7 ㎝、器高 5.8 ㎝を測る。内面には密に圏線ミガキが施され、その後に見込みに螺旋状の暗文を施す。高台の断面形は端部にわずかに面をもつ三角形であり、底部にナデ付けた痕が明瞭に残る。280 は復元口径 14.0 ㎝、器高 5.5 ㎝を測る。内面の調整等は概ね 279 と同様であるが、外面の仕上げは 280 のほうが全体に丁寧である。

SE422（図 33）

281 は土師器坏である。内面はナデ調整、外面は強いケズリを施す。282 は土師器甕である。口縁部は直線的に上方に立ち上がり端部は丸くおさめる。頸部のくびれは少ない。外面はハケ調整を施し、一部に煤が付着する。283 は須恵器坏蓋である。口縁端部外面側に細かな刻み目を施す。胎土

には炭粒を多く含む。284 は須恵器壺の体部である。

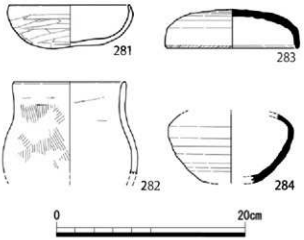


図33　SE422 出土　土器（S＝1/4）

SK284（図 34）

291 は SK284 の炭層上から出土した土師器皿で、全体の約半分が残る。全体に丁寧なナデ調整を施し、歪みもほぼ無い。

SK295（図 34）

285～288 は SK295 の炭層上から出土した土師器皿である。全体の 5～8 割が遺存しており、完形品は無い。いずれも手づくね成形である。285～287 は口径 9.8 ㎝、器高 1.4～1.5 ㎝を測る小皿である。いずれも色調は黄灰色を呈し、胎土は密で雲母を含む。287 は外面のナデにより端部下にわずかな平坦面を作り出す。

288 は大皿で口径 14.9 ㎝、器高 3.1 ㎝を測る。口縁端部を上方に引き上げる。内面と外面上半は全体にナデ調整を施す。外面下半は未調整で成形時の指頭圧痕が残る。胎土や色調は小皿と同様である。外面底部に黒斑が存在する。

SK455（図 34）

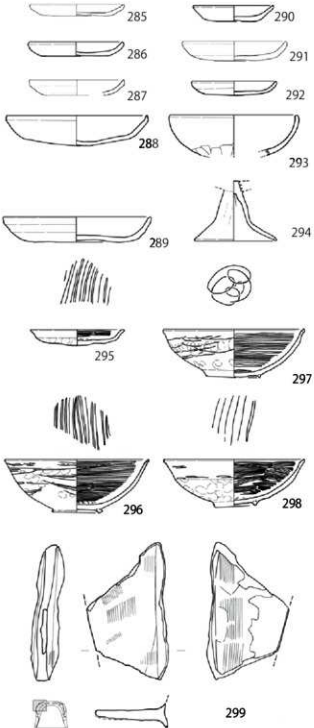
292 は土師器皿である。他の土坑墓から出土した皿と同様、全体の半分程度が遺存する。内面と外面上半にナデ調整を施し、外面下半は無調整で残す。293 は土師器坏もしくは高坏の坏部である。下層遺構に由来する遺物である可能性がある。色調は明橙色を呈し、口縁部に黒斑が存在する。外面下半はケズリの後、ナデ調整を施しているがケズリの痕が残る。

SK170（図 34）

297・298 は瓦器椀である。297 は口縁端部が外反する。内面は密にヘラミガキを施し、見込みには中央に凝縮するような連結輪状暗文をもつ。断面三角形の低い貼り付け高台である。298 は口縁が外反し、端部は丸く収める。内面の圏線ミガキは方向が乱雑だが密である。見込みにはジグザグ状暗文を施す。外面上半を強くナデて成形することで稜が作られており、その上からヘラミガキを施す。高台は断面三角形で、底径 4.4 ㎝とやや小型である。

SK333（図 34）

289 は土師器皿である。口径 15.5 ㎝、器高 2.5 ㎝を測る。外面にはヨコナデによる小さな段が見られる。内面には灯明皿として使用したためと考えられる焼けや染みが存在する。295 は瓦器皿である。底部外面には指頭圧痕が明瞭に残る。見込みのジグザグ状暗文は折り返しの回数が多く、線同士の間隔が狭い。



285 ～ 288：SK295、289・295：SK333

290・299：SK424、291：SK284

292・293：SK455、294：SX541

297・298：SK170、296：SK334

図 34　中層遺構 SK・SX 出土　土器（S ＝ 1/4）

SK334（図 34）

296 は瓦器埦である。口縁端部には浅い凹線が巡るが段は形成しない。内面は密に圏線ミガキを施す。見込みのジグザグ状暗文は圏線ミガキの前に施されている。高台の断面形は台形で、底面の一部は外側に折れ曲がる。

SK424（図 34）

290 は土師器皿である。口縁は直線的に開き、内外面とも強めのナデ調整を施す。底部外面は細かな調整を施さず、起伏が多く残る。299 は古墳時代の土師器竈で、本体から剥落した付け庇の破片であると考えられる。残存長 14.5 ㎝、残存幅 8.2 ㎝、厚さ 1.1 ㎝を測る。内面側には煤の付着が若干見られる。

SX541（図 34）

294 は土師器高坏の脚部である。嵌め込み式の坏部があったと考えらえる。内外面とも全体にナデ調整で仕上げるが、筒部内面には絞りの痕が残る。

SK167（図 35）

300 は瓦器埦である。内面には圏線ミガキが密に施される。外面は摩耗のため、細かな調整が確認できない。301 は白磁碗の破片である。復元口径 16.6 ㎝を測る。いわゆる玉縁口縁で、外面の口縁直下には釉の垂れが見られる。

302 は須恵器高坏の坏部である。外面下半に波状文が施される。303 は重さ 114g の鉄滓である。細かい気孔がほぼ全面に存在する。302・303 は下層の古墳時代遺構に由来する遺物であると考えられる。

SX423（図 36・37）

土師器、瓦器、磁器、須恵器、陶器、石器

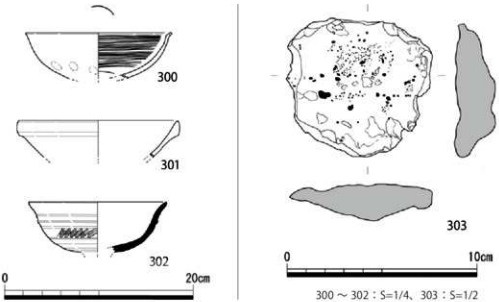


図 35　SK167 出土　土器・鉄滓（S ＝ 1/4・1/2）

が出土している。

304～310 は土師器皿である。304～308 は口径 8.2～9.0 ㎝、器高 1.5～1.7 ㎝を測る手づくね成形の小皿である。色調は黄灰色が基本であるが、305 のみ橙色を呈する。308 は強めのナデ調整を施し、口縁端部を上方に引き上げる。また、底部外面をヘラナデで丁寧に調整している。304・306・308 は胎土に砂粒を含まず緻密である。

309 は口径 13.0 ㎝、器高 2.6 ㎝、310 は口径 13.1 ㎝、残存器高 2.2 ㎝を測る手づくね成形の大皿である。309 は内外面に数ヶ所の黒斑が存在する。310 は胎土が粗く赤色砂粒を多く含む。

311 は土師質の脚付鉢である。復元口径 27.9 ㎝、器高 9.3 ㎝を測る。外面には粘土紐痕が明瞭に残り、内面はナデ消されている。脚は粘土塊を貼り付ける。一脚が残るのみで当初の数量は不明である。

312・313 は土師器羽釜である。312 は球形の体部をもつと考えられる。口縁は内側に傾斜し、端部は平坦だが、わずかに丸みを帯びる。内外面、とくに外面には煤が多く付着する。313 は砲弾形の羽釜の上部である。鍔より上を強くナデているが一部に粘土紐痕が残る。内外面に多量の煤が付着している。

314～318 は瓦器皿である。314～317 は口径 8.0～8.9 ㎝、器高 1.5～2.0 ㎝を測る。一方、318 は口径 9.6 ㎝、器高 2.0 ㎝と、これらより一回り大きい。314～317 は口縁部が開きぎみに立ち上がる。318 は口縁端部に小さな面を作り出す。315・317 は平底である。いずれも見込みにはジグザグ状暗文を施す。318 の暗文は他と比較して線が細い。316 は内面全体に焼成後に付着した暗灰色の付着物が存在する。

319～332 は大和型の瓦器椀である。口径 12.3～14.6 ㎝、器高 3.9～5.1 ㎝を測る。全体として歪みが大きい器が多い。この中で 319 は口径 14.6 ㎝、器高 5.1 ㎝と大型で、全体の形状や調整が古い様相を示す。いずれも内面は圏線ミガキが施されており、ミガキの間隔は差異が見られる。外面のミガキの範囲は上半部に収まるものが多く、全体に乱雑である。見込みの暗文は 319・322 が連結輪状暗文で、他は同心円状暗文である。高台は、319 以外は断面三角形の小ぶりなものを貼り付けており、全周せず途中が欠けるものや貼付位置が底部中央からずれるものもある。323・327・328 の外面に

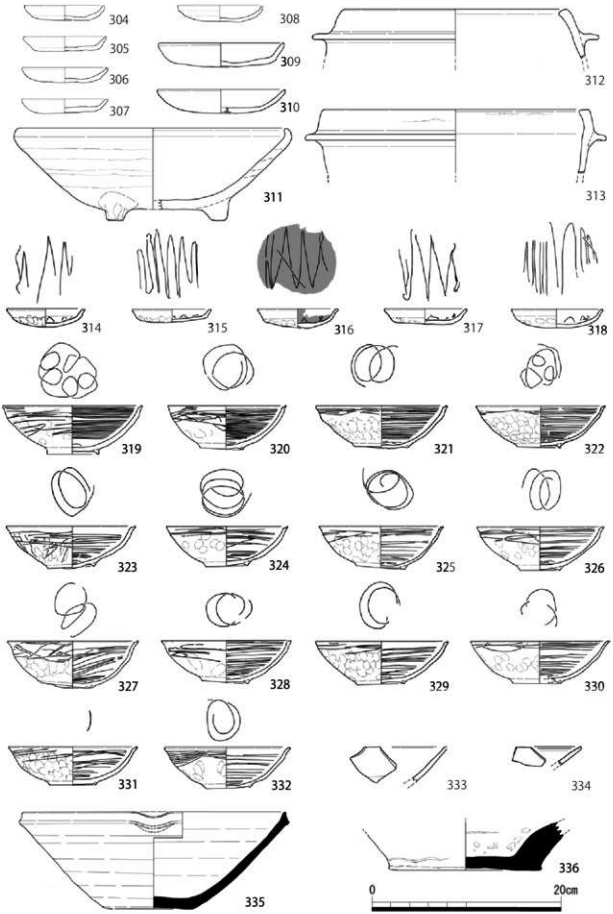


図36　SX423出土　土器（S＝1/4）

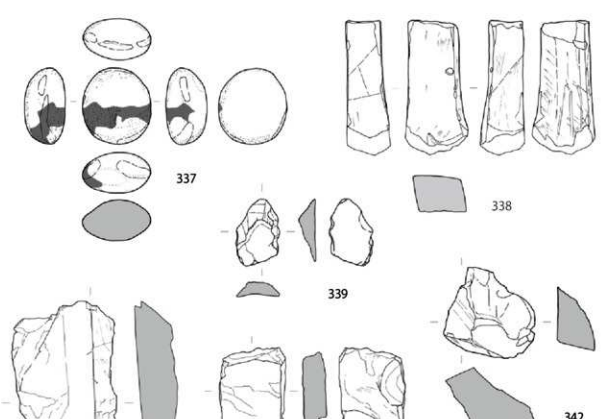


図 37　SX423 出土　石器（S = 1/4）

は粘土紐痕が斜め方向に走ることが確認できる。瓦器埦の時期は 12 世紀～13 世紀前半であると考えられる。

333・334 は磁器の小片で、いわゆる輸入品であると考えられる。333 はやや緑色掛かった白磁で、外面下端は無釉である。334 は青磁で、碗あるいは皿であると考えられる。色調は緑色が強い。内面の口縁直下の位置には 2 条の沈線を巡らせている。

335 は須恵器片口鉢である。底部を除く全体を回転ナデで仕上げる。内外面ともに煤が付着し、内面には炭化物も多く見られる。336 は陶器の鉢ないし甕の底部である。内面には釉や多量の付着物が見られる。破片状態となった後に被熱している。

337 は磨石と考えられる円礫である。直径 7.2～8.0 ㎝、厚さ 4.3 ㎝、重量 379.0 g を測る。全体に擦痕があり、一部に敲打痕も存在する。幅 1～3 ㎝大の帯状の被熱痕も見られる。

338 は上下に若干の欠損はあるがほぼ完形の砥石である。白色系砂岩である。4 面に使用痕が認められ、うち最も幅広の 1 面は平坦になっており、この面を接地させて使用することもあったと想定される。なお、この面の下半には筋掘り状の浅い溝が 3 条存在する。339 は灰色系砂岩の破片で、砥石の一部である可能性がある。340～342 は灰白色系砂岩で、一部に平滑に加工された面があり砥石や台に用いられた可能性のある石材である。340・341 は板状である。342 は角材あるいは厚めの板材の一部であると考えられる。全体が被熱し灰色～黒褐色に変色している。

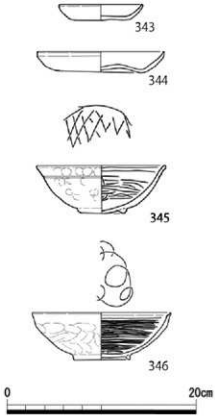


図 38　SX426・344 出土　土器（S = 1/4）

SX426（図 38）

343・344 は土師器皿である。どちらも底部以外にナデ調整を施す。344 は口径 13.2 ㎝、器高 1.9 ㎝を測り、底面は起伏が大きい。

345 は瓦器埦である。器壁は全体に厚く、口縁端部は丸くおさめる。内面のヘラミガキは粗く、見込みの暗文は格子状であると考えられる。外面の口縁部下はヨコナデで成形し、その下端に浅い溝が巡る形となっている。高台も厚ぼったく、断面形は三角や台形が潰れた形である。

SX344（図 38）

346 は瓦器埦である。表面が全体に摩耗しており細部の確認が難しいが、内面の圏線ミガキや見込みの連結輪状暗文は比較的丁寧に施されていることは窺える。高台の断面形は台形である。

SX158（図 39・40）

347～350 は土師器皿である。347～349 は口径 8.6～8.9 ㎝、器高 1.3～1.6 ㎝を測る手づくね成形の小皿である。348 は内面中央部をナデにより凹ませる。350 は口径 14.0 ㎝、残存器高 2.8 ㎝を測る大皿である。手づくね成形で、全体にナデ調整を施して仕上げる。

351・352 は土師器羽釜である。351 は口縁部を外側にくの字形に折り曲げ、端部は軽くつまみ上げ、外側には面をもたせる。全体に煤が薄く付着する。352 も全体の形状は 351 と近い。口縁端面の処理や体部内面のケズリの有無、全体の色調などに差異が認められる。352 は外面鍔下に煤が付着する。

353 は瓦器皿である。表面全体が灰白色化してしまっており、ジグザグ状暗文のみ確認できる。

354～356 は瓦器埦である。底部から直線的に開いて立ち上がり、口縁端部に沈線が巡る大和型である。口径 13.3～14.0 ㎝、器高 4.1 ㎝～4.5 ㎝を測る。354 は全体の形状に歪みが大きい。354・355 は断面三角形の小ぶりの高台よりも底部中央が下に突出している。見込みの暗文は 354 は同心円状暗文、355・356 は破片のため不明である。

357 は瓦質土器鉢である。復元口径約 46.0 ㎝を測る。口縁部は肥厚させ端部は緩やかなカーブを描く。表面は全体に剥落が多く細かな調整は不明であるが、ナデ調整で丁寧に仕上げていることが部分的にうかがえる。

358 は須恵器の猪口状の坏である。体部に巡る稜は明瞭で、間に波状文が施される。小片であり復元口径 5.5 ㎝を測るが、器に歪みも認められるため径はこれより大きくなる可能性もある。把手等が存在していたか否かは不明である。

359～368 は製塩土器である。359～362 は半球形の形状である。口径 4.8～7.7 ㎝を測る。色調は全て灰白色を呈し、焼成は良好である。内面は丁寧に貝殻条痕を施し、外面はナデを施す。363 は平底の円筒形である。内面に絞りこんだような縦線が走る。外面はナデ調整。胎土は密であるが、

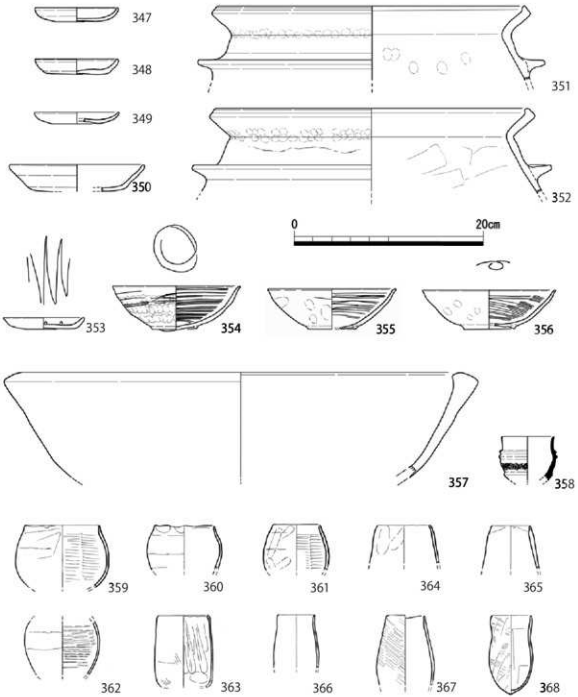


図 39　SX158 出土　土器（S = 1/4）

焼成はやや甘い。364～366 は裁頭卵形である。口径 3.9～5.4 ㎝を測る。厚さ 0.1～0.2 ㎝の薄く焼き締った土器である。内外面ともにナデで調整を施し、胎土は密である。366 は塩分の浸透したような白変が一部に見られる。367 は口縁部がやや歪む裁頭卵形である。外面にタタキあるいは貝殻腹縁によるケズリを施す。胎土は粗いが焼成は良好で堅牢である。368 は体部にくびれがある砲弾形である。内面は貝殻条痕、外面はナデを施す。胎土は密で、焼成も極めて良好である。

369・370 は瓦である。369 は平瓦で、凹面には細かな布目、凸面には縄目タタキが明瞭に残る。色調は灰白色を呈する。370 は丸瓦である。凹面は細かな布目が残り、布の継ぎ目も確認できる。

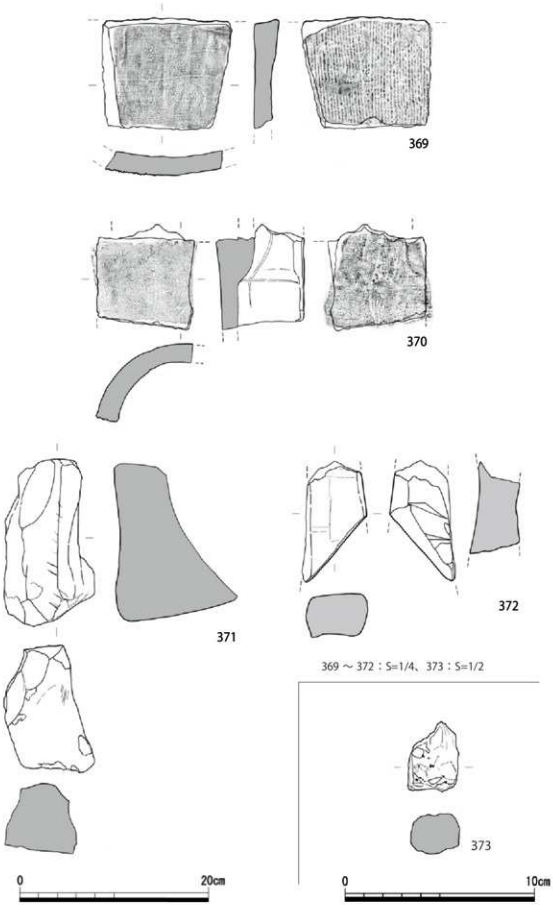


図 40　SX158 出土　瓦・石器・鉄滓（S ＝ 1/4・1/2）

外面はナデ調整で仕上げる。胎土は密で焼成は良好、色調は灰色を呈する。

371は砥石や台として用いられたと考えられる灰白色の砂岩である。重量1,599gを測る。全体としては自然面のまま残る範囲が多いが、砥石として用いられたと考えられる平滑で擦痕をもつ面が一部に存在する。372は灰色砂岩の砥石片である。本来は両側もしくは片側が太くなる柱状であったと考えられる。残存する外面は全体に使用されていたようで平滑である。下端部は斜め方向に切断された可能性がある。

373は残存長3.6㎝の鉄滓である。気孔は少ない。木炭痕は無く、鉄の含有率は低いと思われる。

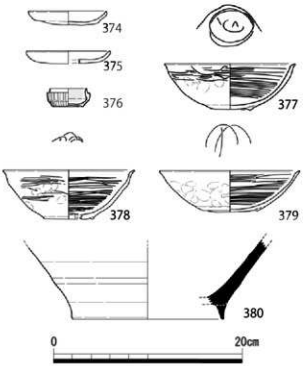


図41　SX159出土　土器（S＝1/4）

SX159（図41）

374・375は土師器皿の破片である。どちらも内外面上半をヨコナデ、内面下半をナデ調整で仕上げ、底部外面は無調整である。

376は青磁合子の身である。体部を2段に分け、約0.5㎝幅の窪みを連ねる。蓋の受け口は平行に切られ、口縁は真っ直ぐ立ち上がる。薄い水色の釉薬をかけ、外面の窪みで色の濃淡を作り出している。釉薬は底面には及ばない。

377～379は瓦器埦である。377は内面に隙間の大きい幅広の圏線ミガキを施す。見込みの暗文は同心円状である。高台はかろうじて断面三角形を呈し、埦底面とほぼ平坦である。378は外面2/3と内面にヘラミガキを施すが全体に粗い。見込みの暗文は連結輪状暗文であると考えられる。379は外へ大きく開く浅い埦であるが、破片であるため全体が同様であるのか歪みであるのかは不明である。内面に粗いヘラミガキを施す。高台は断面三角形の頂点をかろうじて作り出しているが、底面中央のほうが下に突出しており、高台としての機能はほぼ果たしていない。

380は須恵質の台付鉢ないし甕である。外面は粗いケズリで成形する。内面に自然釉が付着する。台はナデで貼り付けられている。

中層遺構SP出土（図42）

中層遺構のピット群から出土した遺物である。先述のようにピットについては調査が十分に行えておらず出土位置・状況に不明瞭な点も多いことから、ここに一括で報告することとする。なお、下層遺構に由来する土器も含まれる。

381～384は手づくね成形の土師器皿である。口径は9.0㎝～10.6㎝、器高1.4㎝～1.9㎝を測る。色調は381・382・384が黄灰白色、383は橙色を呈する。

385は土師器羽釜である。口縁部は外側にくの字に折り曲げ、端部は内側に折り返す。煤は全体

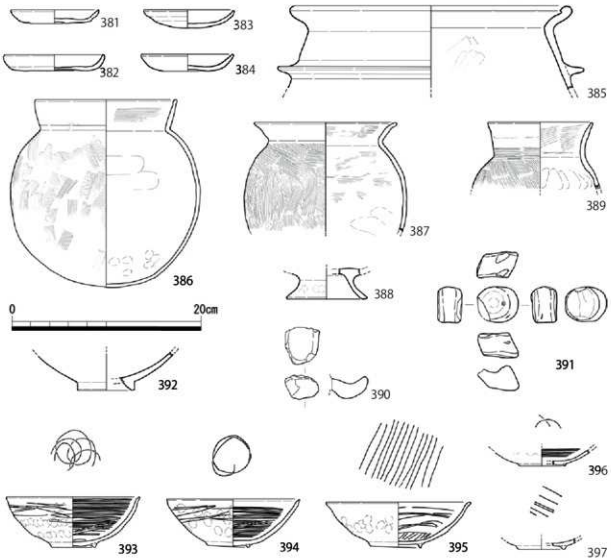


図 42　中層遺構 SP 出土　土器・土製品（S ＝ 1/4）

に薄く付着する。

386・387 は土師器甕である。386 は破片状態であるが全体の約 7 割が遺存する。球形の体部に、わずかに外傾する直線的な口縁部をもつ。外面全体にハケ調整を施す。387 は外反する口縁をもち、端部は丸く収める。全体にハケ調整を施した後、口縁部にナデ調整を施す。388 は土師器台付壺・甕ないし皿の台部である。389 は土師器壺である。体部から口縁部にかけては内外面ともに、なだらかに接続する。390 は小型の把手であると考えられる。

391 は斜めに歪む短い円柱状の土製品である。上端もしくは下端と思しき面に直径 2.0 ㎝、深さ 0.6 ㎝の円形の窪みがある。その逆面には擦痕が認められる。

392 は白磁碗の底部である。高台の周辺には回転ケズリの痕が強く残る。色調は黄緑色掛かった暗めの灰色である。内外面とも貫乳が見られる。

393～397 は瓦器埦である。393 は口径 13.8 ㎝、器高 5.2 ㎝、394 は口径 14.0 ㎝、器高 5.0 ㎝を測る大和型である。393 は内湾気味に立ち上がり、394 はそれと比較して直線的に立ち上がる。見込みには同心円状暗文を施す。395 は口径 15.2 ㎝、器高 4.8 ㎝を測り、口縁端部はわずかに比厚さ

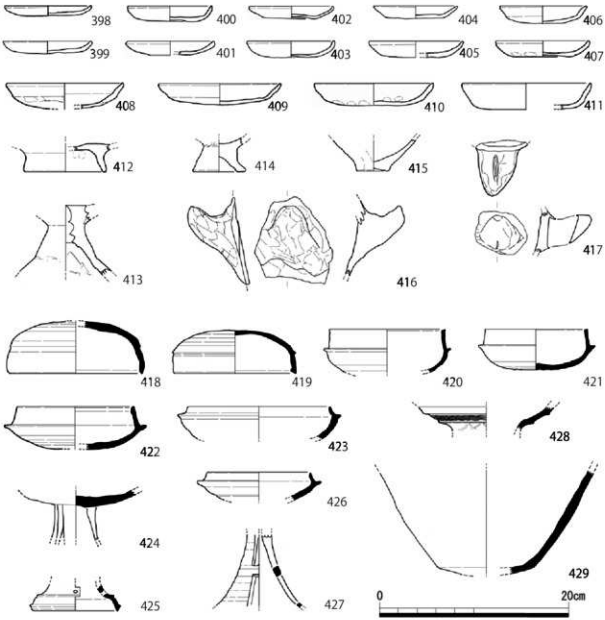


図 43　中層遺構面出土　土器①（S = 1/4）

せた上で丸くおさめる。見込みには細い線で平行線状暗文を描く。395 は和泉型であると考えられる。396・397 は底部の破片で、396 は同心円状暗文、397 はジグザグ状暗文を施す。397 は断面台形の比較的しっかりした高台が付く。

中層遺構面出土（図 43～45）

中層・下層遺構面には多数の遺構・遺物が存在しており、遺構面の鋤取り作業や清掃時など調査の過程においても一定量の遺物が採取されている。そのうち出土遺構といった帰属が不明確な遺物について、ここで報告する。なお、時期的には下層遺構に由来すると考えられる遺物も含む。

398～411 は土師器皿である。いずれも手づくね成形である。398～407 が口径 8.6～10.0 ㎝を測る小皿、408～411 は復元口径 12.4～13.4 ㎝を測るやや大型の皿である。398 は器高 1.0 ㎝と他より明らかに薄い皿である。

412は土師器皿の台部であると考えられる。内面に貼り付け時の指頭圧痕が一部残るが、他は全体にヨコナデが施されている。413は土師器高坏の脚部である。脚部にケズリ痕が認められるほかは全体に摩耗が激しく細かな調整は不明である。

414は弥生土器の甕などの台部であると考えられる。形状は全体に斜め方向に歪んでいる。415は弥生土器甕の底部である。底面中央は抉られるような形でわずかに窪む。

416・417は土師器ないし韓式系土器の把手である。416は体部の屈曲状況から鍋であると考えられる。基部と先端の幅に大きな差は無く、全体に厚手の作りの把手である。把手下半から体部にかけての範囲に大きな黒斑が存在する。417は上方から鋭利な刃物で細く穿孔されている。

418～429は須恵器である。418・419は蓋坏の蓋である。418は復元口径13.9㎝、器高5.5㎝を測り、全体に丸みを帯びた形状である。419は肩部の稜が明瞭で、端部は内傾する平坦面をもつ。天井部には降着灰が多く付着する。420～423は蓋坏の身であると考えられるが、高坏を含む可能性がある。420は口縁部が垂直気味に立ち上がる。口縁端面は内傾し、ごくわずかに溝が巡る。421は復元口径10.8㎝、器高4.4㎝を測る。422は薄手の受部が外方に突出する形状である。高坏である可能性もある。423は小片であるため詳細は不明であるが、復元口径約15㎝に迫る大型の坏である。焼成が不良で色調は灰白色を呈する。今回の調査で多く出土している古墳時代須恵器の一群よりも新しい時期の資料であると考えられる。424～427は高坏である。424は脚部上半の破片で、台形の透かしを3方向に穿つ。425は脚部裾である。直径0.4㎝の小孔が穿たれているが、小片のため何方向に存在するかは不明である。426は全体に偏平な坏部である。427は方形二段の透かしを3方向に穿つ脚部である。全体の形状は裾に向かって大きく開く。428は細頸壺の小片である。波状文の下に×字状文がヘラ描きされている。内面上半には降着灰が付着する。429は甕の底部である。全体にナデ調整を施しているが器壁はやや粗い。

430～432は瓦器皿である。いずれも見込みにジグザグ状暗文を施す。430は暗文が密で、内面上部にも圏線ミガキを施す。431・432は復元口径8.0～8.5㎝を測る小型である。

433～452は瓦器埦である。全体像の復元できるものは復元口径13.8㎝～15.1㎝、器高4.5㎝～5.3㎝を測る。見込みの暗文は連結輪状暗文（434・436～438・449）、ジグザグ状暗文（443～446）、同心円状暗文（439～442・450～452）がある。時期は12世紀後半を中心とするが、一部に11世紀に遡ると考えられるものを含む。

453・454は青磁碗の破片である。453は口縁部内側に薄く肉彫状の溝が巡る。454は内面に2連の溝からなる肉彫の文様が見られる。色調はオリーブ灰色を呈する。

455は灰色系砂岩の砥石である。端部が肥大化する角柱形の一部であると考えられる。各面とも平滑になっており、その一方で各部に敲打痕も認められる。456は砂岩の小片である。部分的に平坦、あるいは鋭利に加工されており石製品の一部である可能性がある。片面が被熱している。457は頁岩の砥石である。厚さ0.8～1.5㎝を測る板材である。全体に擦痕が見られる。その形状から石斧の二次利用品である可能性も考えられる。458は灰白色の砂岩の板材である。板状に加工した後に使用した明瞭な痕跡が確認できず、具体的な利用方法は不明である。

459～461は鉄滓である。459は重量154.8gを測る。0.2～0.3㎜大の気孔がまばらに見られ、木炭も一部に付着する。鉄の含有率は出土した鉄滓の中で比較的高めであると考えられる。460は重量36.1gを測る。小礫が融着している。気孔は殆ど存在しない。461は重量26.4gを測る。一部は

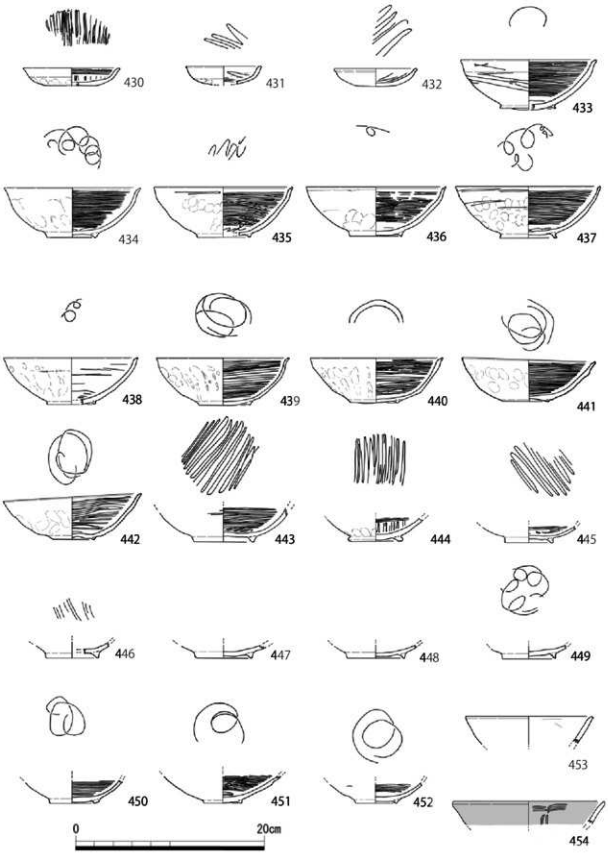


図 44　中層遺構面出土　土器②（S = 1/4）

黒色に変色している。片面には 1 ㎜未満の気孔が多く存在する。鉄の含有率は低めである。

462 はサヌカイトの石器である。二辺の片側に刃を作り出している。より大きい石器からの剥落

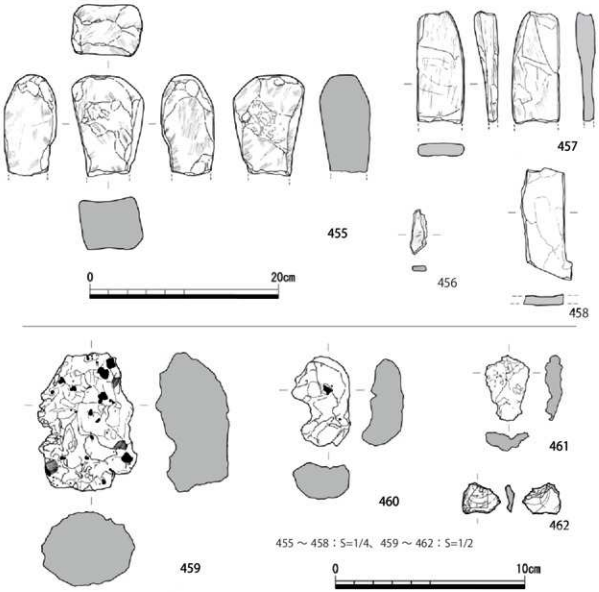


図 45　中層遺構面出土　石器・鉄滓（S＝1/4・1/2）

片である可能性も考えられる。

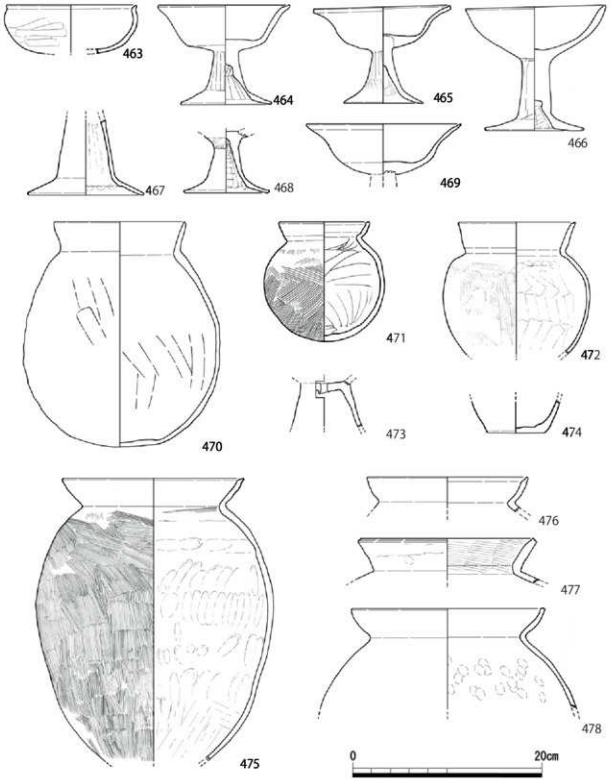


図 46　SX523 上層出土　土器①（S = 1/4）

下層遺構（図 46～89）

下層遺構は古墳時代の遺構群である。遺構の時期は古墳時代中期後半が中心で、出土遺物もこの時期の資料が大半を占める。一部に古墳時代前期～中期前半および後期の遺構や、弥生時代に遡る可能性のある遺構も存在している。そのため中期後半の遺構からも、それ以前の時期の遺物がしばしば出土する。

下層遺構の出土遺物には、土師器、須恵器、韓式系土器、陶質土器、製塩土器、弥生土器、土製品、鞴羽口、鉄器、鉄滓、石製品、石器、玉類がある。なお、中層遺構のうち SX523 と SX524 は遺物の出土量が非常に多く、とくに土器については全体像の分かる資料を中心に報告しているが、今回図化まで行えていない破片資料も一定量存在する。

SX523（上層：図 46～49、下層：50～55、一括：56～61）

SX523 の遺物は出土した層序から大きく上層と下層に分けられる。層序が不明なものは SX523 一括の遺物として報告する。上層と下層の出土遺物を比較した場合、時期的に大きな差異は見られないが、下層の須恵器蓋坏や高坏には SX523 出土須恵器のうちでも古相を示すものが含まれる。その一方で、遺構の中でも新相（中期末頃）にあたる遺物も下層から出土しており、下層→上層という時期的変遷が明確に存在するというわけではないが、遺構に一定の時期幅が認められることを示すものとして、ここに層序ごとに報告を行うこととする。

SX523 上層（図 46～49）

463～478 は土師器である。

463 は坏である。口縁端部は内傾する面をもつ。ナデ調整で仕上げるが、外面にはケズリ痕が残る。

464～469 は高坏である。464 は坏部全体の摩耗が激しく細かな調整は不明であるが、強めに施されている脚部外面のミガキと脚部内面のケズリは確認することができる。脚部内面に絞り痕が残り、上半部は中実である。色調は全体に濃明橙色を呈する。465 は坏部上半が大きく開く形状で、口縁端部に小さな面をもつ。脚と坏の接続方法が断面で確認できる。466 は上半が中実の筒状脚部に椀形の坏部をもつ。摩耗のため細かな調整は不明であるが、脚部に面取り状のケズリ痕が認められる。467 は大型高坏の脚部である。内面には絞り痕や指頭圧痕が明瞭に残る。468 は小型高坏の脚部である。外面上端には坏部接続後のハケが見られる。469 は外反する口縁をもつ坏部である。端部は内外面にヨコナデを施して尖り気味に仕上げる。差し込み式の脚部上端が折れて残る。

470 は体部最大径が中央より下に位置する下膨れの甕である。底部は丸みを帯びるもののわずかに平坦面をもち自立する。外面はケズリによって一部を平滑にしているが、全体に細かな凹凸が多数残る。471 は小型甕の完形品である。球形の体部、明瞭な頸部、内湾気味に立ち上がる口縁部をもつ。ケズリ、ハケ、ナデといった各部の調整は明瞭に確認できる。472 は直線的に外傾する口縁部をもつ甕である。頸部には強めのナデを溝状に巡らせる。473 は台付甕の台部である。甕底部には棒状工具によって直径 0.6 ㎝の円形孔が上方から穿たれている。474 は平底甕ないし鉢の底部片である。475 は長胴甕である。底部を欠くが体部中央よりやや上に最大径が位置する。体部外面は細かなハケ調整、内面は強めの指ナデ、口縁部はヨコナデを施す。

476～478 は甕の口縁部である。476 は端部に強く内傾する面をもつ。477 は端部が外側に面をもつ。口縁部内面には全体にハケ調整を施す。478 は体部の復元最大径 28 ㎝以上を測る大型の甕である。表面の摩耗のため細かな調整は不明である。体部に黒斑が存在する。

479 は甑である。復元口径 30.5 ㎝、器高 29.1 ㎝以上を測る。底面中央を欠くが、底面の形状は丸底気味であると考えられる。底面縁辺には楕円形の蒸気孔が配される。体部中央よりやや上の位置に中実の把手が付く。

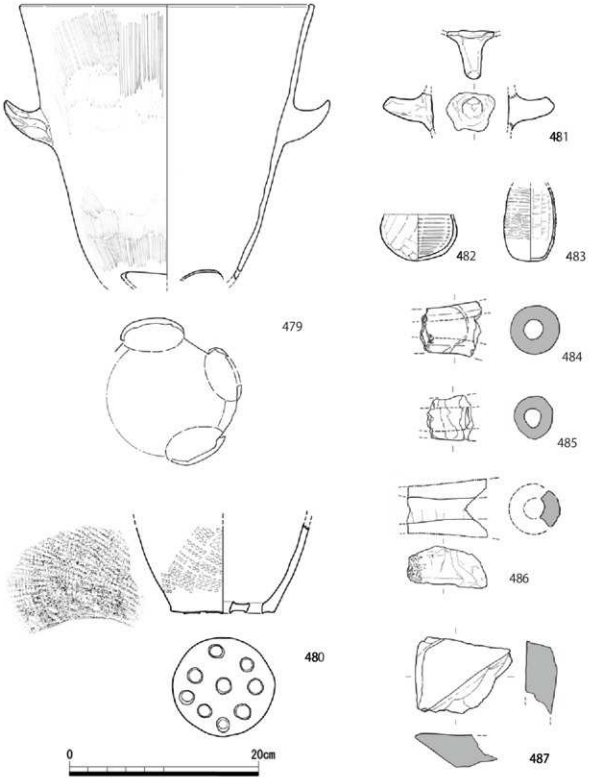


図 47　SX523 上層出土　土器②・土製品・石器（S ＝ 1/4）

480 は韓式系土器の甑であると考えられる。平底の底部は完存し、直径 1.2～1.5 ㎝大の円形蒸気孔が九つ配される。外面には格子状タタキが施される。

481 は小型の把手である。断面の形状は円形である。今回出土した把手で同様の形状のものは少ない。

482・483 は製塩土器である。482 は埦形の完形品で、わずかに尖り気味の丸底である。内面には

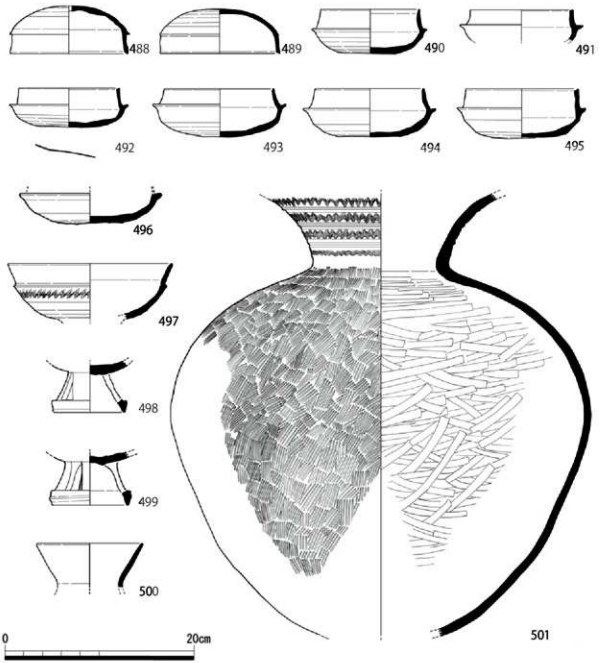


図 48　SX523 上層出土　土器③（S = 1/4）

横方向の貝殻条痕が巡る。483 は細長いコップ状に近い裁頭卵形である。底部は平坦で、自立する。体部下半に最大径があり、上方に向かってゆるやかに細くなる形状である。器壁が薄いため、外面に施した貝殻条痕の凹凸が内面にも表れている。

484～486 は鞴羽口である。図は送風口であると考えられる側を右として作図している。484 は排気口側に被熱による発泡や褐色・橙色の変色が見られる。送風孔の直径は、送風側から排気側に向かって次第に狭くなる。485 も 484 とほぼ同様の鞴羽口である。ただし送風孔の直径については両側で大きな差異は無い。486 は胎土に 0.2～0.5 ㎝大の砂礫を多く含む。外面の排気口側には鉄分やガラス質が多く融着し、表面には気泡が多く存在する。

487 は灰白色の砂岩で、平滑な面が複数あることから台や砥石として利用された石材の一部と考

えられる。

488～501 は須恵器である。488・489 は蓋坏の蓋である。488 は肩部の稜の張り出しが強く、口縁部は裾がやや広がる形である。端部は内傾する面をもつ。489 は全体の形状が丸みを帯びる。

490～496 は蓋坏の身である。490 は底面が平底で、口縁部は外反気味に立ち上がり端部は尖る。底部外面のヘラケズリの範囲は広い。491 は口縁部の破片で、端部はやや内傾する平坦面をもつ。残存部の全体に回転ナデ調整を施す。492 は口縁部の高さに比して体部が薄い形状である。胎土には 0.2～0.7 ㎝大の礫を多く含む。外面底部中央には直線のヘラ記号が存在する。493 はヘラケズリ、ナデ調整ともにロクロによる回転痕跡が観察しやすい。口縁端部は丸くおさめる。494 は口縁部が直線的に立ち上がり、端部はわずかに段を設ける。底部外面の中心の直径約 4 ㎝の範囲はヘラケズリが施されておらず、平底気味に仕上がっている。495 は体部上半から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。底部外面には火襷のように暗灰色に変色している部分が見られる。496 は受部外縁の一部に、蓋と重ね焼きをした際に融着した蓋端部が残る。

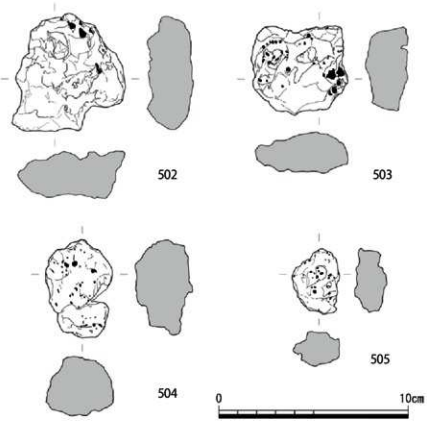


図 49　SX523 上層出土　鉄滓（S ＝ 1/2）

497 は大型の無蓋高坏の坏部である。498・499 は高坏の脚部である。498 は 3 方向に透かしを穿つ。透かしの形状は外面では台形であるが、内面では三角形となる。499 は 3 方向の台形透かしである。透かしは断面が綺麗で、鋭利な刃物で切り抜かれたことがうかがえる。

500 は壺の口縁部である。内外面に自然釉が薄く付着する。501 は大甕である。全体の約 4 割の破片が遺存し、口縁端部と底部を欠く。体部は上半に最大径が位置する形状で、尖り気味の丸底であると考えられる。外面の平行タタキは概ね右肩上がりで施され、回転台を使用していたと推測される。口縁部は外反する形状で、回転ナデによって稜と文様帯を作り出した後に四段の波状文を施している。

502～505 は鉄滓である。502 は重量 90.1 g を測り、鉄の含有率は高いと考えられる。鉄塊が露出している部分には直径 0.5 ㎝前後のやや大きめの気孔が複数存在する。503 も鉄の含有率が高いと考えられる。全体に大小の気孔があり、最大のものでは長さ 2.0 ㎝にも及ぶ。504 は全体の約半分に硬化した土が付着し、残る範囲に気孔が存在する。505 は小片であるがほぼ全面が鉄分であり重量感がある。直径 0.1 ㎝未満の小気孔が全体に見られる。

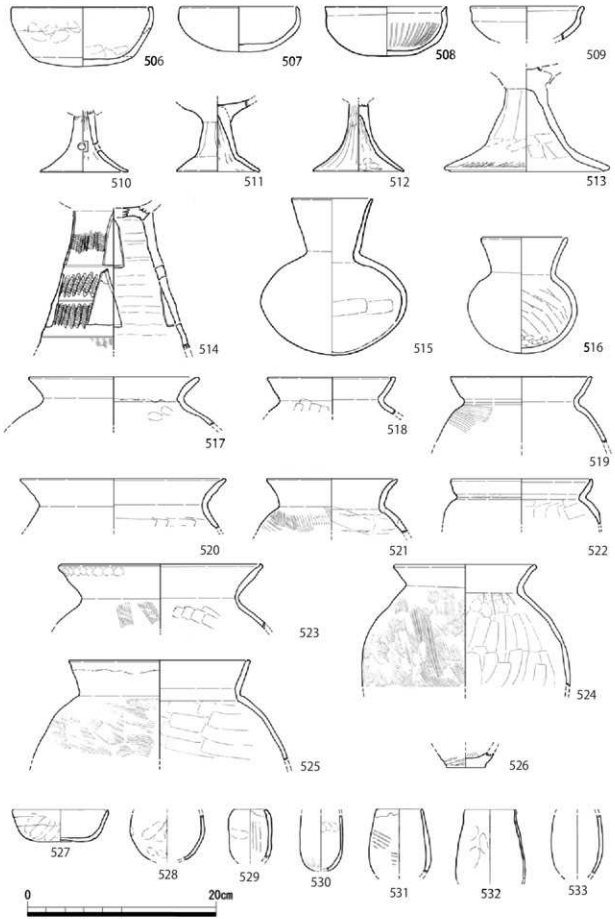


図 50　SX523 下層出土　土器①（S = 1/4）

SX523 下層（図 50～55）

506～525 は土師器である。

506～508 は坏である。506 は口径 14.8 ㎝、器高 6.2 ㎝を測る大型の坏である。口縁部はわずかに内湾させ、端部は丸く仕上げる。全体をナデ調整で仕上げるが、部分的に指頭圧痕や粘土紐痕が残る。507 は表面が摩耗しており細かな調整が不明である。胎土には濃橙色の粒を非常に多く含む。508 は口縁部が直立し、端部は内傾する面をもつ形状である。内面下半に放射状のミガキを施す。509 は坏もしくは高坏の坏部の破片である。

510～513 は高坏の脚部である。510 は裾がラッパ状に開き、円形透かしが一ヶ所にのみ穿たれる。511 は脚部と坏部の接続方法が断面で明瞭に確認できる。脚部外面は縦方向のケズリとナデ調整を施す。外面裾には黒斑が存在する。512 は細頸の脚で、外面にはケズリを施す。内面は絞りや指頭圧痕が残る。513 は大型の脚である。外面裾にはハケ状の痕が巡る。内面、とくに上半には多量の煤や炭化物が付着する。器を倒置し脚部内面を器として利用した可能性もある。

514 は器台の脚部上半である。形状や文様は須恵器の器台によく見られる形であるが、焼成は完全に土師質であるため、ここで報告を行う。4 方向の三角形透かしを二段に配し、波状文は四段分が確認できる。色調は精製の土師器壺や高坏に多く見られるような明橙色をしており、胎土も精良である。

515 は細頸直口壺である。口縁部の一部を欠くが体部は完存する。体部は中程が横に強く張り出す偏球形で、口縁部は直線的に外傾する。外面は丁寧にナデ調整を施す。516 は壺で、球形の体部に、わずかに外反する口縁部をもつ。口縁端部は丸くおさめる。外面には口縁部から体部下半にかけての範囲に黒斑が存在する。

517～525 は甕の口縁部である。517 は直線的に外傾する口縁部である。摩耗のため表面の調整は不明である。518・519 は内湾する口縁部をもつ。518 の端部は内側へ小さく肥厚させる。519 は端部に内傾する面を作り出すが、その稜はやや不明瞭である。頸部の内外の稜も同様になだらかである。520 は直線的に外傾する口縁部で、端部は面を作り出し内側へ小さく肥厚させる。521 は外反するやや長い口縁部をもつ。体部内面の一部では粘土紐が確認できる。522 は短く厚い口縁部で、外側に面を作るような形状である。外面はナデ調整、体部内面はケズリを施す。523 は直線的に外傾する口縁部で、中程に膨らみをもたせる。端部は内側へ折り返すが、その際に付いたと考えられる指頭圧痕が外面に並ぶ。524 は直線的に外傾する口縁部で、端部は外側にわずかに肥厚させた上で丸くおさめる。外面は細かなハケ調整、内面はケズリを施す。525 は直線的に立ち上がる口縁部をもち、端部は丸みを帯びるが外側のみ稜が明瞭である。頸部内面はケズリによって面をもたせる。

526 は弥生土器甕の底部である。平底の縁は潰れ気味である。

527～533 は製塩土器である。527 は平底の埦形である。内外面とも強めのナデ調整を施し、外面には粘土紐痕が残る。528 は半球形を呈すると考えられる破片である。焼成はやや甘く、表面は摩耗しているが指頭圧痕が残る。529・530 は円筒形で、底部は丸底気味である。529 はやや厚手の作りで、口縁部は短く内湾する。530 は外面底部にケズリの痕が線状に残る。531・532 は裁頭卵形である。531 は外面にハケ状のケズリや粘土紐痕が残る。胎土には 0.1 ㎝大の小礫を多く含む。532 は厚さ 0.1 ㎝程度の薄手で硬質な焼き上がりである。外面には指頭圧痕や指紋が明瞭に残る。533 も裁頭卵形であると考えられるが、全体の形状は他よりも上半部が膨らみ気味である。

534～538は土師器ないし韓式系土器の甑である。534はなだらかに立ち上がる形状で、平底だが体部と底部との境の稜は鈍い。蒸気孔は中央の円形孔の周囲四ヶ所に楕円形孔が配されると考えられる。把手が存在していたと考えられるが、当該部分が遺存しておらず把手は図化していない。535も534と同様に把手部分を欠く破片で、底部から口縁部まで直線的に立ち上がる形状であることが確認できる。口縁部内面の上部には横ハケを施し、端部には外向きの平坦面を作って小さく内側に折り返す。外面は全体に縦方向のハケ調整を施す。底部は平底で楕円形の蒸気孔が穿たれるようだが数量や規模は不明である。536～538は底部の破片である。536・537は体部との境が不明瞭な平底である。どちらも蒸気孔は中央の円形孔の周囲四ヶ所に楕円形孔が配される。538は平底で、底部と体部との境の稜が明瞭である。蒸気孔は直径1.5～1.8㎝の小円形孔が複数配される。内外面ともケズリ痕が残り、外面はナデ調整で仕上げる。

539は韓式系土器の甕である。大きく外反する口縁部は体部となめらかに接続する。体部外面には全体に格子タタキが施される。

540～547は甑の把手である。一部、鍋の把手を含む可能性もある。540は口縁から約10㎝下に把手が付けられる。横方向に伸びる把手である。形状は全体に不整形で、一部に粘土の剥落も見られる。541は先端が反り上がり、かつ先端に向かって細くなる。手づくね成形でナデ調整を施す。542も541と同様の形状であるが、反り上がりは少なく全体に厚手である。体部との接続部分にハケ調整を施す。543は把手の基部からすぐ上方へ伸びる形状である。把手上面には溝が刻まれるが貫通はしない。体部との接続部分は丁寧にナデ調整を施してなめらかに仕上げる。544は基部と先端の厚みや幅に大きな差が無く偏平な印象を受ける。先端の反り上がりは控え目である。545は把手上面に細い溝を刻むが貫通はしない。把手外面の先端部下の位置には支棒を指し込んだと考えられる直径0.6㎝大の円形くぼみが存在する。546は基部と先端の幅に差が少ない。全体に指頭圧痕が残るが把手上面は比較的平滑に仕上げている。547は体部の屈曲から鍋である可能性もある。把手上面からの切り込みは貫通する。

548は砂岩の砥石の破片である。一部に明瞭な擦痕を残す面や平滑な面が存在する。

549～582、584～589は須恵器である。

549～556は蓋坏の蓋である。高坏の蓋を含む可能性を残す。549は肩部に鈍い凹線が巡る。頂部はヘラケズリが強く施され、平坦である。550はヘラケズリとナデ調整が丁寧で全体に滑らかな仕上げである。551は厚手の作りで、肩部の稜の張り出しが強い。外面には自然釉が付着する。552は頂部が平坦で、肩部の稜はナデによって鋭く作り出されている。553は口径11.3㎝に対し器高5.1㎝と非常に背が高い蓋である。頂部周辺には長さ約2.5㎝、幅約0.5㎝、深さ約0.3㎝の一文字状の溝が存在する。554はヘラケズリの範囲が狭く、回転ナデによって器面が全体に滑らかに仕上げられている。555は外面に自然釉が付着しており、形状はわずかに歪む。556の口縁端部は内傾する広めの面をもち、両端が内外に突出する。557～559はつまみ付の蓋で、高坏の蓋であると考えられる。557・559は外面に自然釉が付着する。557は中央が大きく凹むつまみを有し、口縁部は内傾する形状である。558・559のつまみは凹みの中央が山形になる。

560～568は蓋坏の身である。560は口径9.4㎝、器高4.2㎝を測り、出土した坏身で最も小型である。ヘラケズリとナデの回転痕跡が強く残る。561は口縁端部に内傾する面をもつ。562は焼成がやや悪く、全体の約8割が淡赤灰色を呈する。563は湾曲する立ち上がりをもち、体部のヘラケ

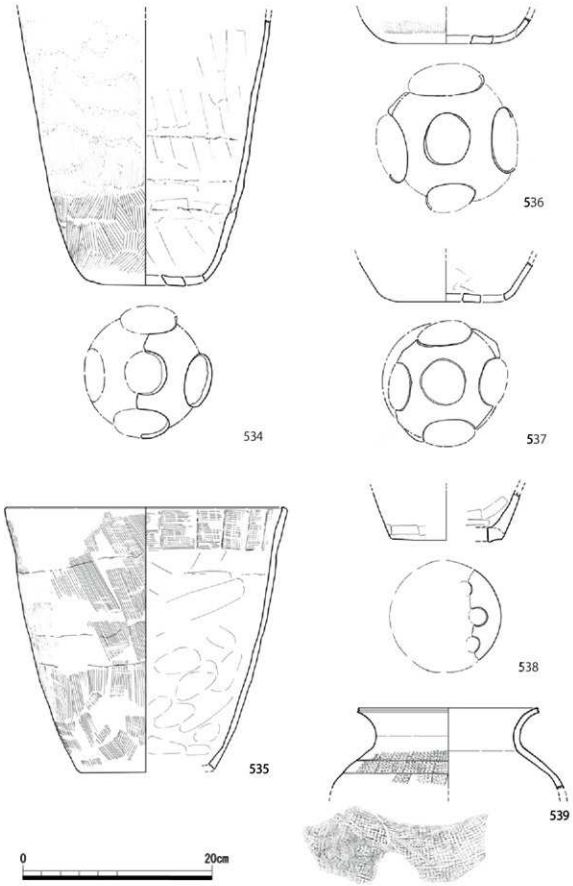


図51　SX523 下層出土　土器②（S = 1/4）

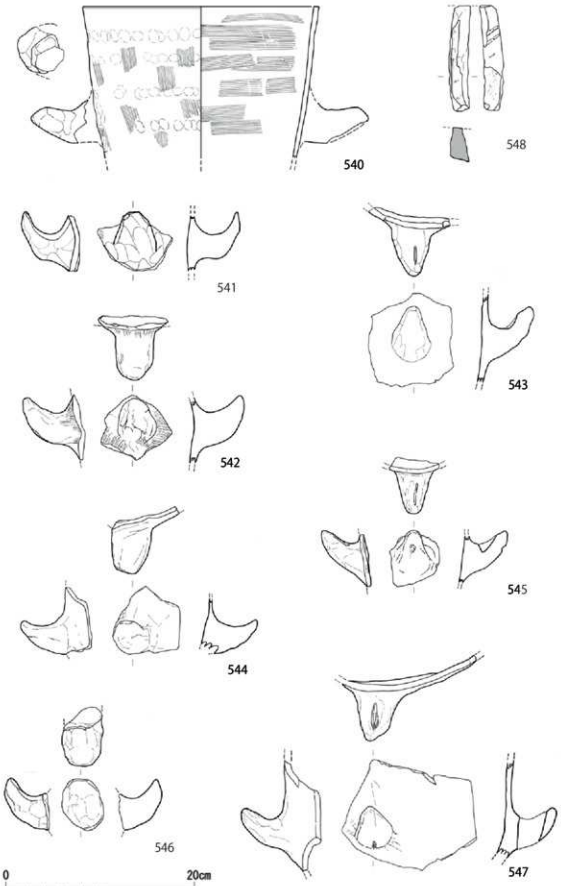


図 52　SX523 下層出土　土器③・石器（S = 1/4）

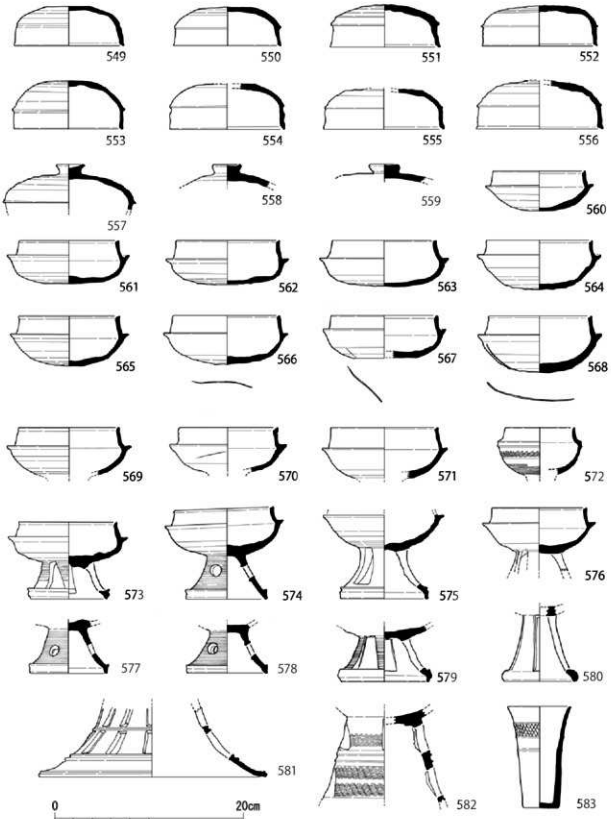


図 53　SX523 下層出土　土器④（S = 1/4）

ズリが強い。粘土を貼り付けて受部を作り出していることが断面で確認できる。564 は半球形の体部に、短めの立ち上がりをもつ。口縁端部や受部上の凹線が深い。565 は口縁上部が外側に屈曲する。口縁端部平坦面と外面上端部に同時に回転ナデ調整を施したと考えられる。566 は底部中央に一文

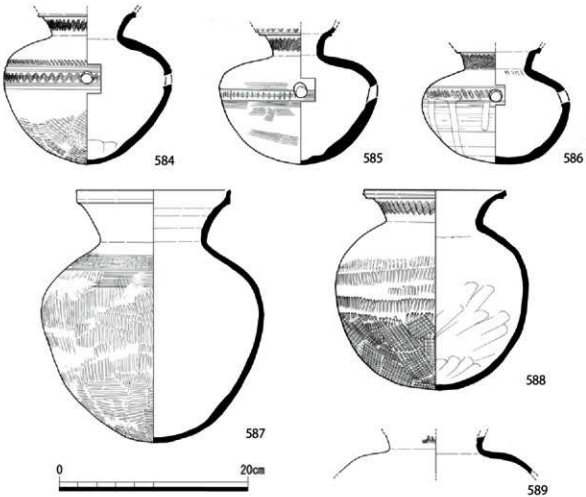


図 54　SX523 下層出土　土器⑤（S = 1/4）

字状のヘラ記号を刻む。焼成が不良で赤灰色・橙色を呈する部分が見られる。567 にも同様のヘラ記号が存在するが、破片であるため正確な形状は不明である。受部には重ね焼きされた蓋の端部が一部に融着した状態である。568 は丸みを帯びた形状で、全体に器壁が厚いどっしりした作りである。底部中央を通る長い一文字状のヘラ記号が刻まれる。

569～580 は高坏である。569 は丸みを帯びた形状で、下端でわずかに脚の痕跡が確認できる。570 は脚との接続部付近に透かしを穿孔する際の切り込みが存在する。受部には蓋の端部の一部が貼り付いている。571 は底部中央と脚が一緒に落剥している。立ち上がりは大きい。572 は小型の坏部片で、570 と同様の透かしの切り込みが複数存在することから高坏と判断している。体部には波状文が巡る。形状及び色調から蓋が存在していたと考えられる。573 は台形透かしを 3 方向に穿つが、上端が狭く三角形に近い透かしもある。574 は完形品で、円形透かしを 3 方向に穿つ。内外面の成形と調整を終えた後に透かしを穿っている。575 は台形透かしを 3 方向に穿つ。坏の立ち上がりは下端部のみが遺存する。脚部内外面に回転ナデ調整が強く施される。576 は台形透かしを 3 方向に穿つ。胎土には炭粒を多く含む。577・578 は 574 とほぼ同様の脚である。外面には弱めのカキ目が巡る。579 はやや大きめの台形透かしを 3 方向に穿つ。580 はやや長脚で、方形透かしを 4 方向に穿っていると考えられる。透かし外側の左右両側に幅約 1～2 ㎜の面を作り出している。坏部内面にも自然釉が付着しており、無蓋高坏である可能性が指摘できる。

581 は器台の脚部裾である。小型の方形透かしが多数配されると考えられる。内外面とも回転ナデを施す。582 は器台の脚上部である。三角形の透かしを穿つが、透かしの各辺に湾曲が見られ整然とした形状ではない。幅約 1.5 ㎝の波状文帯が巡る。

583 は陶質土器であると考えられるコップ形土器である。口縁の一部を欠くが、ほぼ全体が残る。外面上半には三条の稜が巡り、上・中の稜の間に非常に整然とした斜格子目文様を刻む。内外面ともに丁寧な回転ナデで仕上げられており、自然釉が付着する。色調は濃灰色である。上半部はとくに薄手の作りである。

584～586 は甕である。いずれも口縁端部を欠くが他は完存する大型品で、上部全体に自然釉が厚く付着する。584 は体部下半に須恵器甕に見られるような平行タタキを施す。透かしと同じ高さの位置に波状文、そのやや上に列点文を巡らせる。585 は透かしよりやや低い位置に弱めの列点文を巡らせ、頸部および口縁部には波状文を巡らせる。透かしはやや上方から穿たれている。口縁部は大半が欠失しており斜上方に立ち上がる形状であると考えられるが、遺存部分には歪みも認められる。586 は 584・585 と比べて体部最大径が低い位置にある。濃緑色の釉薬が滴状に体部下半にまで垂れ、一部は底部にまで達する。体部の列点文は 585 より大きく密である。

587 はやや長頸の甕である。体部には全体に平行タタキを施す。タタキは体部下半では横方向、上半では縦方向が中心となる。肩部より上ではタタキの後に回転ナデを施すがタタキの痕は残る。内面は全体にナデ調整を施す。588 は甕で自然釉が上部に付着している。体部は外面にタタキを施す。タタキは体部上半は縦方向の平行タタキ、下半は格子タタキと明瞭に使い分けられている。頸部には波状文を巡らせる。内面にはケズリないし強くナデたような痕が確認できるが、自然釉の付着により判別が困難である。589 は大型の壺ないし甕と考えられる破片である。頸部にはわずかに波状文の存在が確認できる。内面は丁寧なナデ調整を施して頸部と体部を接続している。

590～592 は鉄滓である。590 はほぼ全面に土を被り、気孔は裏面に少量あるのみである。重量 42.3 g と大きさに比して軽く、鉄含有率は低いと考えられる。591 は破損しているが直径 6 ㎝前後の滓であったと考えられる。小型の気孔が多く存在する。重量 24.2 g と軽量であり、鉄含有率は低いと考えられる。592 は淡緑色を呈し、非常に細かな気孔が多く確認できる。一部に木炭が付着する。重量 15.6g を測る。

593 は残存長 3.7 ㎝、幅 4.4 ㎝、厚さ 0.4 ㎝を測る板状の鉄製品である。ほぼ平らな形状である。

SX523 一括（図 56～60）

594～615 は土師器である。

594～598 は坏である。594 は口径 11.5 ㎝、器高 3.2 ㎝を測る、やや小型の坏である。口縁部は上方へ引き上げる。外面に明瞭な稜が存在する。口縁部は内外面ともヨコナデ、底部外面は幅広のケズリに近い強めのナデ調整を施す。595・598 は口縁端部を外傾させ内側に面をもつ形状である。口径 12.1～12.8 ㎝、器高 5.4 ㎝を測る。ともに内外面をナデ調整で仕上げており、598 は強いナデ調整を施す。595 は外面に黒斑が存在する。596 は口縁が端部に到るまで内湾する形状である。口径 11.3 ㎝、器高 4.4 ㎝を測る。内外面ともにナデ調整で仕上げるが外面にはケズリ痕が残る。597 は口縁端部がわずかに外傾する。全体に器壁が厚く重量感がある。焼成はやや不良である。598 は全体にやや下膨れの形状である。

599～602 は高坏である。599 は長い円筒形の脚部で、筒部上半は中実である。裾部は低く横に広がる。外面には面取り状にヘラケズリを施す。体部との接合は差し込み式である。600 は外面をナデ調整で仕上げる。内面は裾部にハケ調整、筒部にナデ調整を施す。601・602 は坏部の破片である。601 は直線的に外傾する口縁部をもち、体部と口縁部の接合部の境に明瞭な稜をもつ。差し込み式の脚部との接合面が残る。602 は外反する口縁部をもち、内外面とも明確な稜は無い。外面は縦方向のハケ調整の後、口縁部はナデ調整で仕上げる。

603・604 は小型の平底壺である。603 は口径 7.2 ㎝、器高 6.9 ㎝を測る。全体にやや厚手の作りである。ケズリ・ナデといった調整は全体に粗雑である。底部から胴部外面に黒斑が存在する。604 は口径 6.8 ㎝、器高 8.8 ㎝を測る。わずかに下膨れ気味の体部にはハケ調整を施す。605・606 は小形丸底壺である。605 は扁球形気味の体部に、短い直線的な口縁をもつ。内外面にケズリや粘土紐の痕が残る。606 は短く内湾する口縁をもつ。外面は僅かなハケ調整が残る。内面は強いケズリを施す。

607 は壺の口縁部である。口縁部は上部が大きく外反して、くの字を描く。復元口径は 9.8 ㎝を測る。内外面にハケ調整を施す。

608・609 は甕である。608 は復元口径 21.1 ㎝を測る。口縁部は直線的に外傾し、端部は丸くおさめる。内面の頸部にハケ調整を施した面が存在する。609 は外反する口縁部をもつ。復元口径 12.0 ㎝を測る。

610・611 は甑である。610 は体部下半の破片である。上部があまり開かない円柱状に近い形状であったと考えられる。平底で、体部との境の稜は丸みを帯びる。蒸気孔は円形のものが複数存在するようであるが、配置や大きさは不明である。外面にはハケ調整を施した後にナデ調整で仕上げる。把手が存在していたと考えられるが、該当部分は遺存していない。611 は同一個体と考えられる大型の破片が 7 点出土しており、上半部と下半部は直接接合しないが一連の土器として図示している。復元口径 20.9 ㎝、底径 12.5 ㎝を測る。610 と同じく把手が存在していたと考えられるが該当部分は遺存していない。平底で、体部との境も明瞭である。蒸気孔は直径 3～4 ㎝大の正円形に近い孔が 5～6 個配されていたと考えられる。ナデ調整で仕上げ、部分的にハケ調整が確認できる。底面付近には指頭圧痕が残る。胎土は密で、0.2～0.3 ㎝大の白色砂礫を多く含む。体部下半には煤が付着する。612 も甑であると考えられる。口縁上半部は直線的に開き、端部には面を作り出す。復元口径 27.1 ㎝を測る。内外面に細かなハケ調整が残る。

613～615 は甑ないし鍋の把手である。613 は基部と先端の幅に大きな差が無い扁平な形状で、先端は大きく反り上がる。体部との接合方法は、破断面の形状から貼付技法だと思われる。614 も 613 に近い形状である。いずれも胎土に 0.1～0.3 ㎝大の白色礫を多く含む。615 は先端に向かって細く反り上がる山形を成す。上面からの切り込みは貫通する。体部との接続部分は丁寧にナデ調整を施して滑らかに仕上げる。

616～624 は土師質の竈である。小片が中心で全体像が分かるものは無いが、複数個体が存在していると考えられる。

616～619 は体部の裾であると考えられる破片である。残存高 8.0～14.6 ㎝、器厚 0.9～1.3 ㎝を測る。内外面にハケ調整を施す。617・619 は底部の内側の立ち上がりに幅 1 ㎝前後の面取りを施している。616～618 は内面に煤が付着する。

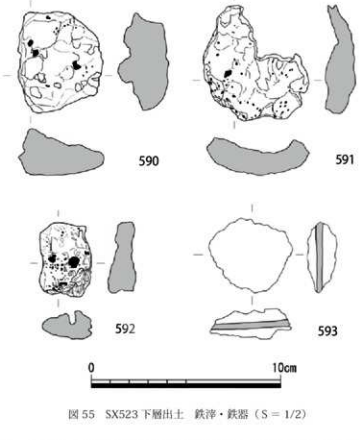


図 55　SX523 下層出土　鉄滓・鉄器（S ＝ 1/2）

620･621 は庇部である。庇の端部はヘラ切りで面を作り出す。内面はナデ調整、外面はハケ調整で仕上げる。内面に煤が薄く付着する。620 は庇天井部にあたると考えられ、平坦な形状である。621 は立体的に湾曲しており、正面から見て右上方の位置にあたると考えられる。620 と 621 は同一個体である可能性もある。

622・623 は煙出し部分の破片である。622 は筒部の復元口径約 18 ㎝を測る。内外面ともナデ調整を施す。煤は付着しない。筒端部は面を作る。623 は筒部が長径 18.0 ㎝、短径 16.5 ㎝を測る楕円状である。内外面ともハケ調整を施す。内面には煤が付着する。体部は一部が残存するだけであるが、竈背面にあたる位置だと考えられる。

624 は付け庇で、正面から見て左半側にあたる。残存高 27.9 ㎝を測る。体部への貼付け部分には強い指ナデ痕が残る。庇長は最大 11.5 ㎝を測る。右半が失われているが、庇の天井部は平坦である。庇部は上面にハケ目が残り、下面は煤の付着により細かな調整が確認できないがナデ調整で仕上げていると考えられる。体部は内外面ともハケ調整で仕上げており、内面には煤が付着する。全体に焼成は良好で、堅牢な作りである。

625・626 は土師器羽釜の口縁部である。どちらも鍔を口縁部直下から斜めに垂下する。625 は口縁端部に明瞭な面をもつ。各部をナデ調整で仕上げているが、鍔下面にはハケ目が残る。胎土には 0.1～0.5 ㎝大の礫をやや多く含む。色調は明橙色を呈する。626 は口縁端部から外に折り返すような形で鍔が付く。鍔上面にはハケ目を施す。色調は淡黄灰色を呈しており、620～624 の竈片に近い。

627～666 は須恵器である。

627～635 は蓋坏の蓋である。627 は頂部がやや平坦な形状である。肩部の稜は突出が弱い。628 は下半の破片であるが形状は丸みを帯びると考えられる。残存範囲は全体を内外面とも強い回転ナデ調整で仕上げる。629 は比較的背が低く、肩部の稜は上下に回転ナデを施して目立たせる。630 は外面全体に自然釉が多く付着し、頂部は丸みを帯びる。631 は厚手の作りで、口縁部がわずかに内傾する。頂部にはヘラケズリの開始に伴う溝状の抉れが存在する。632 は頂部が平坦な形状で、全体を回転ナデで丁寧に仕上げる。633 は肩部の稜の張り出しが弱く、頂部は平坦である。634 は肩部に明瞭な凹線が巡る。棒状工具を用いて線を引いた可能性が考えられる。635 は肩部に上下二段の鈍い凹線が巡る。胎土には炭粒を多く含む。

636～646 は蓋坏の身である。636 は小型の坏で、底部外面中央付近にM字状のヘラ記号が刻まれ

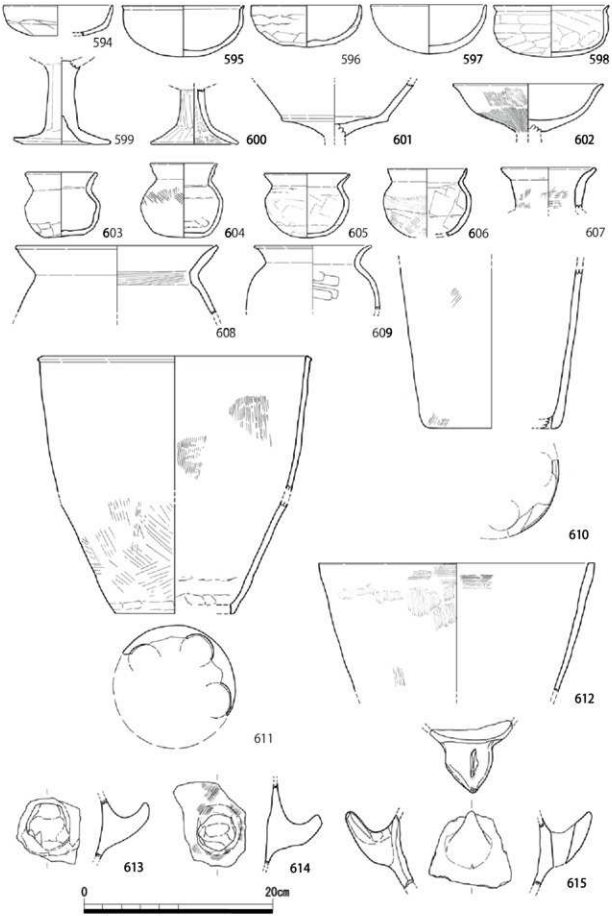


図 56　SX523 一括出土　土器①（S = 1/4）

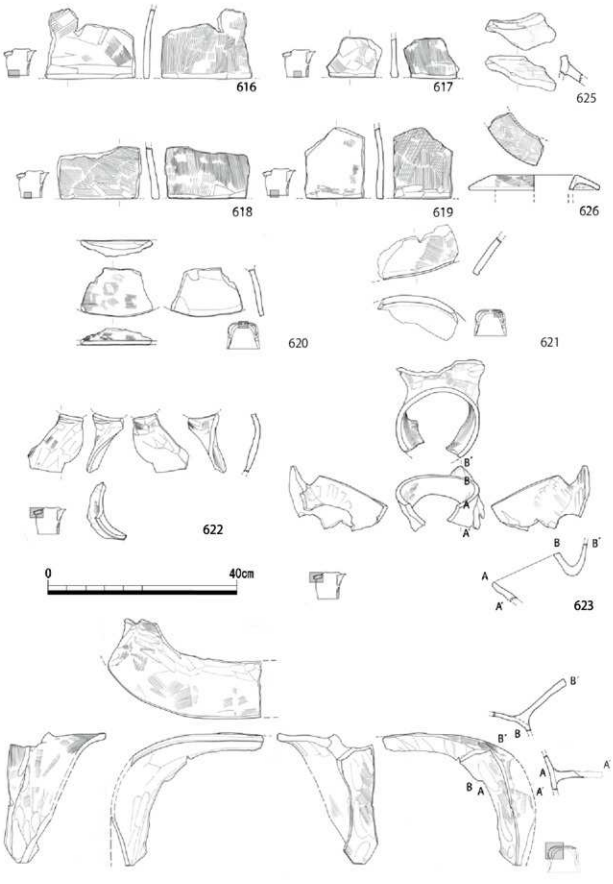


図 57　SX523 一括出土　土器②（S = 1/8）

る。口縁端部は強く内傾する。637 は底部外面に二本の直線ヘラ記号が刻まれる。本来は一本の線であった可能性もある。638 も底部外面に直線のヘラ記号が存在し、全体に丸みを帯びる形状である。639 は直線的に立ち上がる短い口縁部をもつ。底部中央に×字状のヘラ記号が刻まれる。胎土には炭粒が多く含まれ、特に直径 0.3 ㎝前後の大粒が含まれている点が特徴的である。640 は全体に丸みを帯びる形状で、内傾する口縁端部には凹線が巡る。641 はヘラケズリが強く施されている。焼成がやや不良で色調は赤みを帯びる。642 は口縁部が短く内傾して立ち上がる。高坏である可能性もある。焼成が悪く全体が灰白色を呈する。643 は口縁部が垂直気味に立ち上がる。受部は外側が上方を向き、内側に深い凹線が巡る。644 は口縁部が直線的に内傾し、端部には浅い凹線が巡る。受部には焼成時の蓋の端部が融着している。645 は口縁部が湾曲して立ち上がり、端部は丸くおさめる。646 は口縁部がわずかに内湾気味に立ち上がる。体部は比較的歪みが大きくヘラケズリは粗い。

647～653 は高坏である。647 は脚部を欠くが台形透かしを 3 方向に穿っていたと推測される。648 は無蓋高坏である。口縁上部が外側に開く。外面には波状文が巡る。649 も無蓋高坏で、外面下半に波状文が巡る。650 は上端の径が比較的小さな脚部が付くと考えられ、台形ないし三角形透かしの切り込みが確認できる。651 は 3 方向に台形透かしを穿つ。胎土には細かな炭粒を含む。脚部外面にカキ目を施す。652 はやや長脚気味の脚部に 3 方向の三角形透かしを穿つ。坏部にはわずかながら波状文が確認できる。653 は高坏坏部下半と考えられる破片で、下端でわずかに脚部へ繋がる膨らみが確認できる。粘土紐と粘土玉を貼りつけた把手状の装飾が存在する。

654 は広口短頸壺である。底部は平底気味である。体部外面上半にはカキ目の後に列点文を綾杉状に配する。焼成はやや不良で部分的に赤灰色を呈する。体部外面下半はケズリの痕がわずかに残る。655 は短頸壺である。体部外面にはカキ目を施す。肩部外面には自然釉が付着しており、その範囲から焼成時には蓋が存在していた可能性が考えられる。

656 は鼎である。体部と頸部に波状文を巡らせる。体部外面下半にはタタキを施す。657 は提瓶である。肩部には半円形の把手が付いていたと考えられるが欠失している。体部の直径は約 18 ㎝であると考えられる。

658 は器台の上部の破片で、鉢部外面には波状文が確認できる。

659 は高坏の脚部で、菱形の透かしを 4 方向に穿つ。色調は焼成の不具合もあり、やや赤み掛かった淡灰色を呈し、形状と合わせて他の高坏と様相が異なる。

660 は高坏の脚部裾の破片である。底が弧状をなす形状の透かしが穿たれており、裾と透かしの間に二条の稜線が巡る。色調は暗灰色を呈する。内外面に自然釉が付着しており、内面裾には藁灰も付着する。小片であるため判断が難しいが、これらの要素から、陶質土器である可能性も指摘でき、871・872 と同様に火焔形透かしの高坏である可能性もある。

661 は壺ないし鼎の口縁部である。歪みが大きいため口径の復元値には疑問が残る。内面を中心に緑灰色の自然釉が付着する。外面の二条の稜線の下に波状文が巡る。

662 はやや大型の高坏である。台形透かしを 4 方向に穿つ。外面にはカキ目を施す。

663・664 は甕である。663 は口縁部を回転ナデで仕上げているが、外面にはその前段階のナナメハケの痕が残る。口縁端部は外側に折り返して作られていることが確認できる。664 は内面体部上端部分にケズリを施している。口縁部の回転ナデは強めに施されており、一部は削り取るような形になっている。

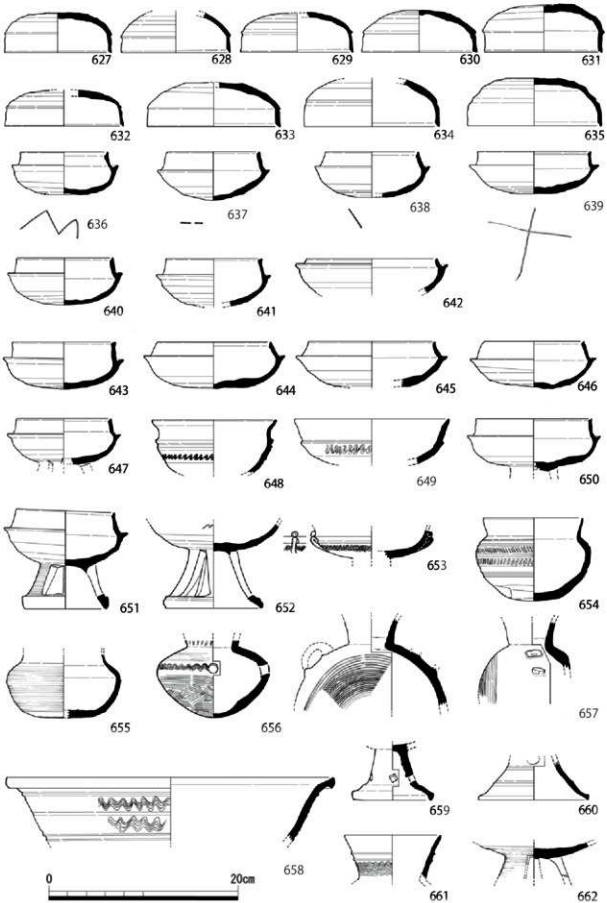


図 58　SX523 一括出土　土器③（S = 1/4）

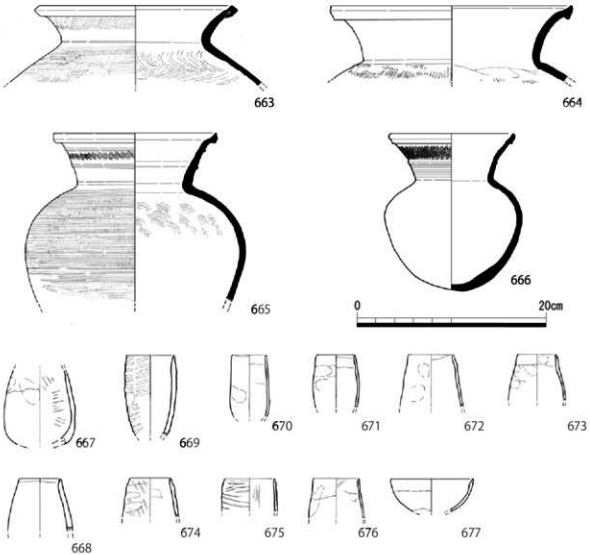


図 59　SX523 一括出土　土器④（S = 1/4）

665 は長頸壺である。上部には自然釉が付着する。外面体部は縦方向のタタキを整然と施した後、これも整然とした横方向のカキ目に近いナデ調整で仕上げる。666 は壺である。口縁部上半には細かな波状文を施す。自然釉の付着範囲から、斜めに置かれた状態で焼成されたものと考えられる。胎土には 0.1～0.3 ㎝大の白礫を多く含む。

667～677 は製塩土器である。667～676 は裁頭卵形である。口径 3.5～5.2 ㎝を測る。下膨れ形が多いが、669・670 のように砲弾形や円筒形に近い形状もある。667～669 は厚さ約 0.5 ㎝と厚手である。胎土は粗く小礫を含む。焼成は良好である。667・668 は内外面ともナデ調整で仕上げる。669 は外面に右肩上がりのタタキを施す。670～676 は厚さ 0.1～0.2 ㎝と薄く、内外面ともナデ調整で仕上げる。出土した製塩土器の半数以上が同様の破片である。673 の口縁部下には粘土紐痕が明瞭に残る。674 は外面を貝殻条痕で調整する。675 は外面にタタキを施す。677 は埦形である。胎土中に土師器の細片と思しき粘土塊が混ざる。焼成はやや不良である。SX523 からは、この他に図化できない細片は約 400 点、重量 831g 分が出土している。

678 は土製支脚である。残存長 13.3 ㎝、最大復元径 9.0 ㎝を測る。接合はしないものの図化分と同一個体と思われる破片が他に 7 点存在し、本来はさらに大きな個体であったと考えられる。粘土

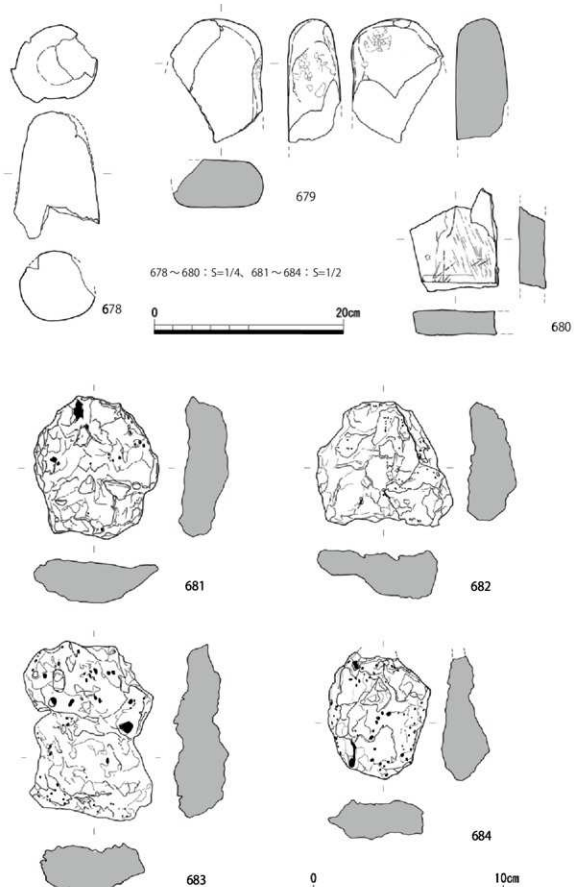


図60　SX523一括出土　石器・鉄滓（S＝1/4・1/2）

を太い棒状に固めた後に外面をナデで整えている。砂礫を含まない密な胎土である。

679 は磨石ないし敲石であると考えられる。残存長 12.8 ㎝、幅 9.6 ㎝、厚さ 5.0 ㎝、重量 933.3g を測る。平坦な面と屈曲する面をもち、それぞれに細かな擦痕や敲打痕が認められる。

680 は厚さ約 2.6 ㎝を測る板状の砂岩で、砥石であると考えられる。一部に漆が付着する。

681～684 は鉄滓である。681 は塊形に近い形状で、長さ 7.6 ㎝、幅 6.5 ㎝、重量 100.5g を測る。上面は緑色であるが、下面はほぼ全面が黒灰色を呈する。682 は長さ 6.5 ㎝、幅 7.2 ㎝、重量 119.0g を測るアーム状の鉄滓である。全面に砂が付着している。683 は長さ 9.5 ㎝、幅 6.8 ㎝、重量 192.2g を測る。全面に細かな気孔が存在する。木炭が付着する面が存在する。684 は長さ 6.7 ㎝、幅 5.4 ㎝、重量 83.9g を測る。一部が破損している。681～684 は今回出土した鉄滓の中で最も鉄含有率が高い一群であると考えられる。

SX523 出土玉類（図 61・表 1）

図 61 には SX523 西半中央付近の上層から出土した玉類（T1～T143）をまとめている。これらの玉類は 685 の土師器小形壺に収められた状態で出土している(図版 26)。臼玉 141 点、有孔円盤 1 点、ガラス小玉 1 点の合計 143 点がある。これらについては、他の遺物番号から独立した番号（頭に T を付ける）を付与している。

685 は土師器小形壺である。平底の体部に、直線的に立ち上がる口縁部をもつ。口縁端部は内側へ小さくつまみ上げる。口縁部と外面体部にハケ調整を施す。

T1～T141 は臼玉である。一部、破損している可能性のあるものも含むが概ね完形品である。石材はすべて滑石である。緑灰色を呈する良質の材が 26 点、他は灰黄～灰白色ないし白～灰褐色である。臼玉の法量は、直径 3.1～7.0 ㎜、厚さ 1.4～6.0 ㎜を測る。径と厚さは概ね比例する。直径は 5 ㎜前後、厚さ 4 ㎜前後のものが多い。断面形状は、算盤玉状に稜線があるもの、明確な稜は無いが中段に膨らみのあるもの、円柱状のものに分けられるが、それぞれの差は明瞭ではない。研磨痕は、側面に縦方向のものと上面片側に確認できる。孔径は 1.0～3.0 ㎜を測る。確認できるものでは片面穿孔が主である。内面の擦痕の状況から錐等による回転穿孔であると考えられる。なお、141 点の臼玉を円形に数珠繋ぎすると直径約 15 ㎝程度の大きさになる。

T142 は滑石製の有孔円盤である。色調は灰白色を呈する。表面は風化が進んでいるため研磨痕の確認が難しく、現在の菱形に近い不整六角形が当初からの形状であるのか判断が難しい。元は双孔円盤であった可能性も残る。残存する法量は長辺 19.0 ㎜、短辺 10.0 ㎜、厚さ 2.8～4.1 ㎜、重量 0.87 g を測る。孔径 0.6 ㎜の片面穿孔である。

T143 はガラス小玉（丸玉）である。にぶい黄緑色を呈する。直径 3.2 ㎜、厚さ 1.8 ㎜、重量 0.02 g を測る。孔径 0.6 ㎜の片面穿孔であるが、対面が潰れており孔は貫通していない。

SX524（上層：図 62・63、一括・下層：図 64～74）

SX524 も SX523 と同様に層序は大きく上層と下層に分けられる。遺構の掘り下げ時に上層・下層の差異を明瞭に認識できていないため、明確に上層と判断できる出土状況の資料を図 62・63 に上層出土遺物として提示し、他の資料を一括・下層として図 64～74 にまとめている。遺物の出土量は上層のほうが多いという認識は調査時から存在しており、一括・下層としている中に多くの上層遺物が

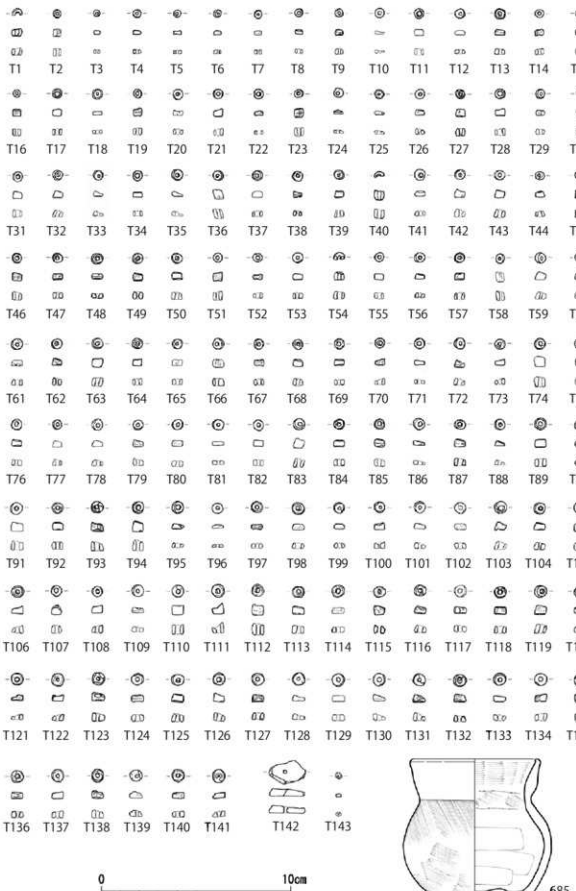


図61　SX523出土　玉類・土器（S＝1/2）

表 1　SX523 出土　玉類計測表

報告番号	遺物種	直径(mm)	厚さ(mm)	孔径(mm)	重量(g)	色調	
T1	滑石製臼玉	3.1	3.6	2.0	0.05	5Y7/1	灰白色
T2	滑石製臼玉	3.6	3.8	2.0	0.12	7.5Y6/1	灰色
T3	滑石製臼玉	3.8	2.1	1.0	0.05	10Y6/1	灰色
T4	滑石製臼玉	3.8	2.0	1.2	0.05	N7/0	灰白色
T5	滑石製臼玉	3.9	1.9	1.5	0.05	2.5Y5/3	黄褐色
T6	滑石製臼玉	4.0	3.2	1.0	0.06	2.5Y7/1	灰白色
T7	滑石製臼玉	4.0	2.4	1.2	0.07	7.5Y5/1	灰色
T8	滑石製臼玉	4.2	2.6	2.0	0.07	5Y4/1	灰色
T9	滑石製臼玉	4.3	3.0	1.5	0.08	2.5Y7/1	灰白色
T10	滑石製臼玉	4.4	1.4	1.6	0.04	2.5Y7/2	灰黄色
T11	滑石製臼玉	4.5	3.4	2.4	0.06	2.5Y7/2	灰黄色
T12	滑石製臼玉	4.5	3.4	1.7	0.06	5Y6/1	灰色
T13	滑石製臼玉	4.5	3.0	1.0	0.12	10GY5/1	緑灰色
T14	滑石製臼玉	4.6	3.7	1.8	0.12	N7/0	灰白色
T15	滑石製臼玉	4.6	2.7	1.4	0.11	5Y5/1	灰色
T16	滑石製臼玉	4.6	4.0	1.5	0.13	10YR4/2	灰黄褐色
T17	滑石製臼玉	4.6	3.9	2.3	0.07	N7/0	灰白色
T18	滑石製臼玉	4.6	1.8	1.0	0.07	N6/0	灰色
T19	滑石製臼玉	4.7	4.1	1.9	0.12	7.5Y7/1	灰白色
T20	滑石製臼玉	4.7	3.2	2.0	0.09	2.5Y7/2	灰黄色
T21	滑石製臼玉	4.7	3.9	2.3	0.08	5Y7/1	灰白色
T22	滑石製臼玉	4.8	2.1	2.2	0.08	5Y7/1	灰白色
T23	滑石製臼玉	4.8	4.5	2.1	0.18	5Y7/1	灰白色
T24	滑石製臼玉	4.8	2.1	1.7	0.05	2.5Y6/1	黄灰色
T25	滑石製臼玉	4.8	2.5	1.3	0.08	2.5Y3/2	黒褐色
T26	滑石製臼玉	4.8	2.9	1.6	0.11	5Y6/1	灰色
T27	滑石製臼玉	4.8	3.5	2.5	0.12	7.5Y6/1	灰色
T28	滑石製臼玉	4.9	3.4	1.9	0.10	2.5Y6/1	黄灰色
T29	滑石製臼玉	4.8	4.0	1.5	0.13	10Y6/1	灰色
T30	滑石製臼玉	4.9	4.2	2.0	0.07	2.5Y7/2	灰黄色
T31	滑石製臼玉	4.9	3.7	2.2	0.08	2.5Y7/2	灰黄色
T32	滑石製臼玉	4.9	4.0	1.2	0.07	2.5Y7/2	灰黄色
T33	滑石製臼玉	4.9	2.4	1.8	0.06	7.5Y5/1	灰色
T34	滑石製臼玉	4.9	2.7	2.3	0.07	5Y7/1	灰白色
T35	滑石製臼玉	5.0	3.1	1.6	0.09	2.5Y6/1	黄灰色
T36	滑石製臼玉	5.0	5.0	2.0	0.19	2.5Y6/1	黄灰色
T37	滑石製臼玉	5.0	3.2	1.8	0.07	10YR6/2	灰黄褐色
T38	滑石製臼玉	5.0	3.0	2.0	0.11	5GY6/1	オリーブ灰色
T39	滑石製臼玉	5.0	4.0	1.5	0.08	7.5Y6/1	灰色
T40	滑石製臼玉	5.0	4.8	2.0	0.08	2.5Y8/2	灰白色
T41	滑石製臼玉	5.0	2.8	1.8	0.08	2.5Y7/2	灰黄色
T42	滑石製臼玉	5.0	4.5	1.4	0.10	2.5Y7/2	灰黄色
T43	滑石製臼玉	5.0	4.3	1.8	0.09	2.5Y7/3	浅黄色
T44	滑石製臼玉	5.0	3.4	2.0	0.06	2.5Y8/1	灰白色
T45	滑石製臼玉	5.0	3.8	2.0	0.08	10Y6/1	灰色
T46	滑石製臼玉	5.0	3.5	2.0	0.13	10GY5/1	緑灰色
T47	滑石製臼玉	5.0	2.8	1.0	0.14	10G6/1	緑灰色
T48	滑石製臼玉	5.0	2.5	1.5	0.13	10GY5/1	緑灰色
T49	滑石製臼玉	5.0	4.0	1.0	0.13	7.5GY6/1	緑灰色
T50	滑石製臼玉	5.0	4.2	1.0	0.11	10Y6/1	灰色
T51	滑石製臼玉	5.1	4.9	1.8	0.26	5Y6/1	灰色
T52	滑石製臼玉	5.1	4.1	2.1	0.12	5Y6/1	灰色
T53	滑石製臼玉	5.1	3.6	2.0	0.08	2.5Y6/1	黄灰色
T54	滑石製臼玉	5.1	3.9	1.8	0.05	5Y7/2	灰白色
T55	滑石製臼玉	5.1	3.6	2.1	0.10	2.5Y7/2	灰黄色
T56	滑石製臼玉	5.1	2.5	1.0	0.07	10Y6/1	灰色
T57	滑石製臼玉	5.1	2.5	2.0	0.07	10Y6/1	灰色
T58	滑石製臼玉	5.2	4.8	1.8	0.21	2.5Y6/1	黄灰色
T59	滑石製臼玉	5.2	4.2	1.7	0.10	2.5Y7/2	灰黄色
T60	滑石製臼玉	5.2	3.6	2.0	0.13	2.5Y5/3	黄褐色
T61	滑石製臼玉	5.2	3.0	1.8	0.14	2.5Y7/2	灰黄色
T62	滑石製臼玉	5.2	3.8	1.0	0.10	10Y6/1	灰色
T63	滑石製臼玉	5.2	4.3	2.0	0.12	7.5Y7/1	灰白色
T64	滑石製臼玉	5.2	3.5	2.2	0.14	N5/0	灰色
T65	滑石製臼玉	5.3	4.2	1.5	0.17	2.5Y6/1	黄灰色
T66	滑石製臼玉	5.3	4.5	1.8	0.21	5Y6/1	灰色
T67	滑石製臼玉	5.3	3.9	2.2	0.17	2.5Y7/1	灰白色
T68	滑石製臼玉	5.3	4.0	2.0	0.13	2.5Y8/1	灰白色
T69	滑石製臼玉	5.3	3.0	2.1	0.07	7.5Y7/1	灰白色
T70	滑石製臼玉	5.3	3.1	2.2	0.11	N3/0	暗灰色
T71	滑石製臼玉	5.4	2.4	2.5	0.08	2.5Y6/2	灰黄色
T72	滑石製臼玉	5.4	3.6	1.4	0.13	7.5Y5/1	灰色
T73	滑石製臼玉	5.4	2.7	2.0	0.10	N4/0	灰色
T74	滑石製臼玉	5.5	5.5	1.2	0.31	2.5Y6/1	黄灰色
T75	滑石製臼玉	5.5	4.0	2.0	0.12	7.5Y6/1	灰色
T76	滑石製臼玉	5.5	3.0	2.0	0.13	10BG5/1	青灰色
T77	滑石製臼玉	5.5	3.6	2.0	0.09	2.5Y7/2	灰黄色
T78	滑石製臼玉	5.5	3.7	1.4	0.08	2.5Y7/2	灰黄色
T79	滑石製臼玉	5.5	3.6	2.0	0.18	5Y5/1	灰色
T80	滑石製臼玉	5.5	3.0	1.7	0.15	7.5Y5/1	灰色
T81	滑石製臼玉	5.5	2.3	1.8	0.11	2.5Y7/2	灰黄色
T82	滑石製臼玉	5.5	3.2	1.8	0.10	2.5Y7/2	灰黄色
T83	滑石製臼玉	5.5	4.9	2.0	0.15	2.5Y7/2	灰黄色
T84	滑石製臼玉	5.5	3.1	2.1	0.10	2.5Y7/2	灰黄色
T85	滑石製臼玉	5.5	3.6	2.0	0.18	5Y8/1	灰白色
T86	滑石製臼玉	5.5	2.5	1.8	0.07	2.5Y7/2	灰黄色
T87	滑石製臼玉	5.5	4.0	2.0	0.18	10Y6/1	灰色
T88	滑石製臼玉	5.5	2.3	1.5	0.11	10GY5/1	緑灰色
T89	滑石製臼玉	5.5	4.6	2.2	0.15	N7/0	灰白色
T90	滑石製臼玉	5.6	3.0	2.2	0.09	2.5Y6/1	黄灰色
T91	滑石製臼玉	5.6	4.2	2.2	0.13	2.5Y7/2	灰黄色
T92	滑石製臼玉	5.6	4.2	2.0	0.16	2.5Y7/2	灰黄色
T93	滑石製臼玉	5.6	4.9	2.0	0.22	10Y6/1	灰色
T94	滑石製臼玉	5.7	5.4	1.8	0.27	2.5Y6/1	黄灰色
T95	滑石製臼玉	5.7	3.0	2.5	0.07	2.5Y7/2	灰黄色
T96	滑石製臼玉	5.7	1.5	2.0	0.07	10Y6/1	灰色
T97	滑石製臼玉	5.8	2.9	1.5	0.16	2.5Y7/1	灰白色
T98	滑石製臼玉	5.8	2.3	2.0	0.17	7.5Y6/1	灰色
T99	滑石製臼玉	5.8	2.9	1.8	0.14	2.5GY5/1	オリーブ灰色
T100	滑石製臼玉	5.8	3.6	1.8	0.11	2.5Y7/2	灰黄色
T101	滑石製臼玉	5.8	3.2	1.4	0.09	2.5Y7/2	灰黄色
T102	滑石製臼玉	5.8	2.8	2.0	0.14	5G4/1	暗緑灰色
T103	滑石製臼玉	5.8	4.5	2.8	0.20	5G4/1	暗緑灰色
T104	滑石製臼玉	5.8	4.3	1.5	0.16	10Y6/1	灰色
T105	滑石製臼玉	5.8	5.0	2.0	0.16	N7/0	灰白色
T106	滑石製臼玉	5.8	3.9	2.0	0.16	N3/0	暗灰色
T107	滑石製臼玉	5.9	4.6	2.0	0.23	2.5Y5/2	暗灰黄色
T108	滑石製臼玉	5.9	3.7	2.0	0.19	2.5Y6/1	黄灰色
T109	滑石製臼玉	5.9	3.3	1.8	0.15	5Y6/1	灰色
T110	滑石製臼玉	5.9	5.2	1.9	0.18	5Y6/2	灰オリーブ色
T111	滑石製臼玉	5.9	5.1	3.0	0.22	N6/0	灰色
T112	滑石製臼玉	6.0	6.0	2.0	0.32	7.5Y6/1	灰色
T113	滑石製臼玉	6.0	4.0	2.0	0.13	7.5Y6/1	灰色
T114	滑石製臼玉	6.0	3.0	2.0	0.19	7.5Y6/1	灰色
T115	滑石製臼玉	6.0	4.0	2.0	0.21	5GY6/1	オリーブ灰色
T116	滑石製臼玉	6.0	3.8	2.0	0.21	5G5/1	緑灰色
T117	滑石製臼玉	6.0	3.9	2.4	0.13	5Y6/2	灰オリーブ色
T118	滑石製臼玉	6.0	3.5	1.5	0.19	10Y6/1	灰色
T119	滑石製臼玉	6.0	4.0	1.0	0.26	10Y6/1	灰色
T120	滑石製臼玉	6.0	3.5	2.2	0.17	N3/0	暗灰色
T121	滑石製臼玉	6.0	3.2	2.0	0.16	N6/0	灰色
T122	滑石製臼玉	3.7	3.7	2.0	0.20	5B5/1	青灰色
T123	滑石製臼玉	6.1	3.8	2.0	0.23	10GY5/1	緑灰色
T124	滑石製臼玉	6.2	3.3	2.2	0.23	2.5Y6/1	黄灰色
T125	滑石製臼玉	6.2	4.2	2.0	0.18	10Y6/1	灰色
T126	滑石製臼玉	6.2	4.6	2.0	0.15	10Y6/1	灰色
T127	滑石製臼玉	6.3	3.8	2.0	0.19	7.5Y6/1	灰色
T128	滑石製臼玉	6.3	3.0	1.8	0.16	2.5Y7/1	灰白色
T129	滑石製臼玉	6.3	2.9	2.9	0.10	2.5Y7/2	灰黄色
T130	滑石製臼玉	6.5	3.6	1.8	0.19	5Y6/2	灰オリーブ色
T131	滑石製臼玉	6.5	4.0	1.0	0.23	10Y6/1	灰色
T132	滑石製臼玉	6.5	3.6	2.0	0.21	10Y6/1	灰色
T133	滑石製臼玉	6.6	3.8	1.6	0.20	10YR5/2	灰黄褐色
T134	滑石製臼玉	6.7	4.0	2.0	0.23	2.5Y5/1	黄灰色
T135	滑石製臼玉	7.0	5.0	2.0	0.23	2.5Y6/1	黄灰色
T136	滑石製臼玉	6.3	3.0	1.0	0.20	10Y6/1	灰色
T137	滑石製臼玉	6.3	3.7	2.2	0.21	2.5Y7/1	灰白色
T138	滑石製臼玉	6.4	3.7	2.0	0.20	7.5Y6/1	灰色
T139	滑石製臼玉	6.4	3.0	2.1	0.17	2.5Y7/1	灰白色
T140	滑石製臼玉	6.4	3.2	2.1	0.20	2.5Y7/1	灰白色
T141	滑石製臼玉	6.4	3.4	2.5	0.21	N3/0	暗灰色
T142	有孔円盤	19.0	4.1	1.7	0.87	5Y7/1	灰白色
T143	ガラス小玉	3.2	0.6	1.8	0.02		にぶい黄緑色

含まれていると考えられる。

SX524 上層（図 62・63）

686～702 は土師器である。

686 は坏である。口縁端部に内傾する面をもつ。口径 11.8 ㎝、器高 4.5 ㎝を測る。内外面とも上半部はヨコナデ、底部はナデ調整で仕上げる。内面に黒斑が存在する。0.2 ㎝大の小礫を多く含む。

687～692 は高坏である。いずれも坏部外面に稜は無い。687･688･690 は浅い椀形の坏部をもつ。口縁端部は丸みを帯びるが、688 はわずかに尖る。筒状の脚部先端を差し込んだ後に接続部周辺をナデ上げ、さらに丁寧なハケ調整で仕上げる。690 は短めの筒部に大きく開いた裾部をもつ。円形透かしを 2 方向に穿つが、配置は対面ではなく偏りがある。689 は直線的に立ち上がり上半部がわずかに内湾する形状の坏部である。全体に器壁が厚く重量感がある。外面にはケズリ、内面にはナデ調整を施す。

691 は胎土や焼成は完全に土師質であるが、形状は須恵器の無蓋高坏によく見られるものである。外面に二条のやや鈍い稜と波状文が巡る。口径 19.0 ㎝を測る大型である。692 は高坏の脚部である。外面にミガキを施し、上部には坏部との接続後に施されたと考えられるハケの存在も認められる。内面は裾部に細かいハケ調整を施し、筒部には絞り痕がある。

693 は壺である。口縁部はわずかに外反気味に立ち上がり、端部は丸くおさめる。体部にハケ調整を施す。694 は甕である。復元口径 14.7 ㎝を測る。口縁端部はやや丸みを帯びた内傾する面をもつ。695 は緩やかに外反する短い口縁部をもつ甕である。端部は丸くおさめる。

696 は弥生土器の広口壺である。復元口径 13.0 ㎝を測る。口縁部上半は大きく開き、端部を肥厚させた上で面を作り出して刻み目を施す。

697 は接地面をもつ板状の土師器の破片で、竈枠の基部である可能性が考えられる。ただし内面に明瞭な被熱痕などは無い。内外面をナデ調整で仕上げる。胎土には 0.5 ㎝大の礫を含む。

698 は韓式系土器で、鍋ないし鉢であると考えられる破片である。復元口径 37.6 ㎝、残存高 19.3 ㎝を測る。把手が付くか否かは不明である。半球形を呈する体部に、短い口縁部は直線的に外傾する。口縁端部には面をもつ。外面中位に浅い凹線が巡る。外面は全体に格子タタキ、内面はハケ調整を施す。699 は甑ないし甕であると考えられる。復元口径 26.5 ㎝、残存高 26.0 ㎝を測る。砲弾形の体部から、わずかに窄まる頸部を経て外傾する口縁部に到る。外面全体に縦方向のハケ調整を施す。内面はナデ調整で仕上げ、底部付近には粘土紐痕や指頭圧痕が残る。700 は韓式系土器の鍋であると考えられるが把手や片口部分を欠く。あるいは広口の甕である可能性もある。復元口径 26.2 ㎝、残存高 17.5 ㎝を測る。底部を欠くが丸底であると考えられる。短く外に折り返した口縁の端部は面をもち、中央がわずかに窪む。外面は格子タタキを端部直下までの広い範囲に施す。698 と同様に体部中位に凹線が巡る。

701・702 は把手である。701 は接続している体部上半が直線的に立ち上がることから、甑であると考えられる。把手は先端に向かって細くなる。把手断面の形状は円形である。今回出土した中に同様の形状は少ない。端部には幅約 0.3 ㎝の溝が存在する。先端部分に直径 0.3 ㎝程度の穿孔がある。体部にはハケ調整が施されている。体部に把手を貼り付けた後は周辺をナデており、指頭圧痕も残る。702 は先端に向かって山形に細くなる。先端は反り上がる。上面からの切り込みは貫通する。体部

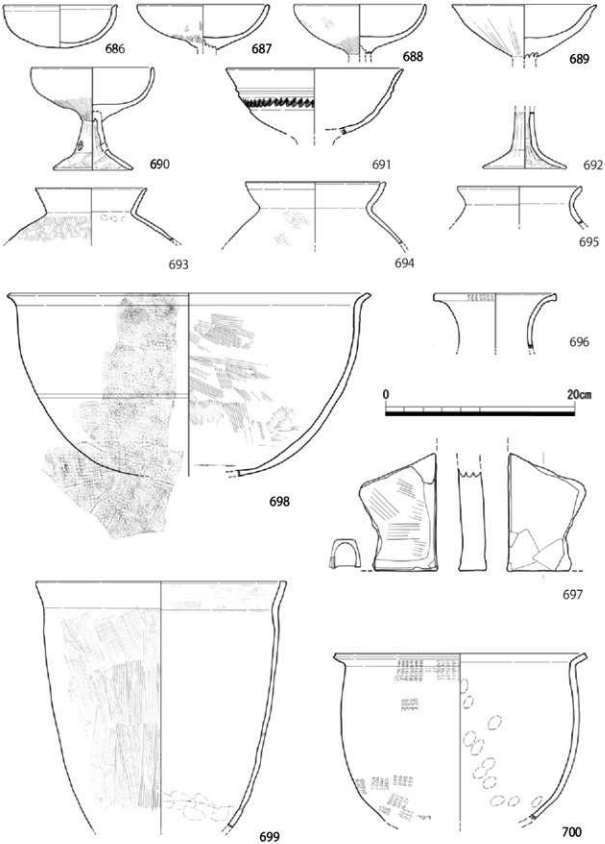


図 62　SX524 上層出土　土器①（S = 1/4）

内面に黒斑が存在する。

703～708 は須恵器である。703・704 は蓋坏の蓋である。703 はやや裾広がりの形状で、肩部の

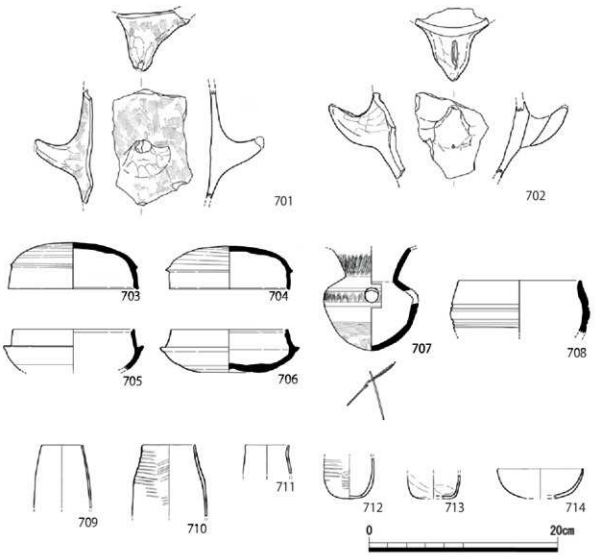


図 63　SX524 上層出土　土器②（S = 1/4）

稜は上下を強くナデて作り出している。704 は肩部の張り出しが強く、口縁部はわずかに内湾する形状で、一見すると身と見紛うような雰囲気がある。705・706 は蓋坏の身である。705 は口縁端部が内傾し、小さな段をもつ。706 は底部の回転ケズリが粗く、平底気味である。707 は壺である。頸部および体部上半に波状文を巡らせるが、体部上半は自然釉の付着により文様の大部分が消えかけた状態である。底面中央には×字状のヘラ記号を刻む。708 は鉢である。復元口径 13.2 ㎝を測る。

709～714 は製塩土器である。709～712 は裁頭卵形である。口径 4.4～5.4 ㎝を測り、厚さは最大でも 0.3 ㎝と薄い。709・711 は内外面ともにナデ調整で仕上げ、被熱による表面劣化が一部に見られる。710 は外面にタタキ、内面にナデ調整を施す。体部中央は歪みが大きい。712 はタタキが底部近くにまで施されている。713 も裁頭卵形の可能性があるが、他の個体よりも幅広の平底である。外面は摩耗している。714 は薄手の埦形で、一般の土師器に近い明橙色を呈する。

SX524 一括・下層（図 64～74）

715～787 は土師器である。

715～730 は坏である。形状面では、口縁が端部やや下の位置で短く屈曲して内面に稜をもつもの

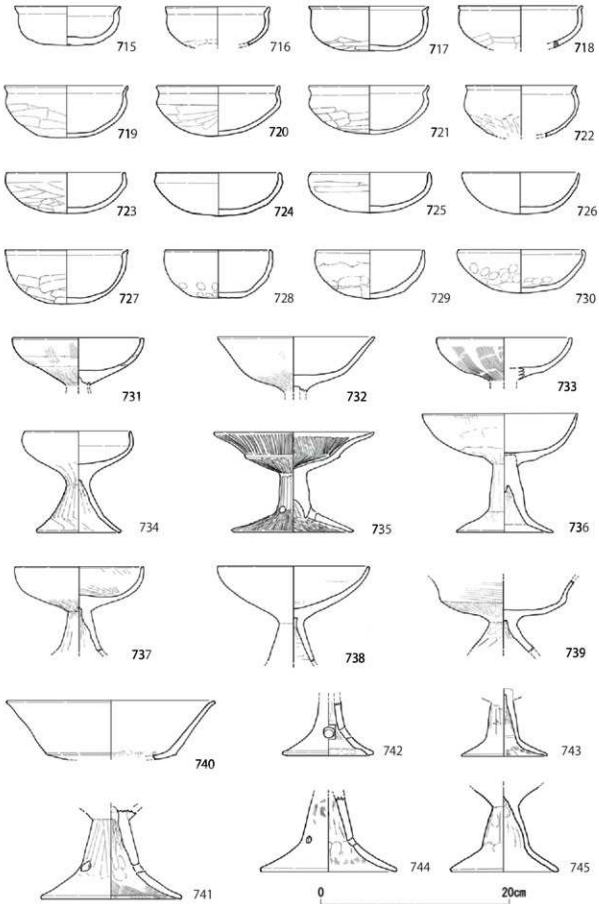


図 64　SX524 一括・下層出土　土器①（S = 1/4）

（715～722・727）と、内湾して立ち上がり端部は丸くおさめるもの（723～726・728～730）とに大きく分かれる。

屈曲する一群は、肩部が張り出すもの（715・719～721）となだらかなもの（716～718・722・727）に分かれる。717・722・727 は内傾する面をもつ。

屈曲する一群の口径は 10.9～13.1 ㎝を測る。うち 715・716 が 10.9～11.0 ㎝と小型で、それらを除くと口径 11.6～13.0 ㎝、器高 4.7～5.5 ㎝となる。内湾する一群は口径 11.0～13.1 ㎝、器高 4.2～5.6 ㎝を測る。内面の調整は口縁部にヨコナデ、底部付近にナデ調整を施す。716 は内面全体にヨコナデを施す。外面は体部にケズリを施し、口縁部付近にヨコナデを施す。ケズリの範囲にはそれぞれ差が認められる。729・730 には成形時の指頭圧痕が残る。

731～745 は高坏である。731・733・734・736・737 は内湾する埦形の坏部である。734 の脚部外面にミガキを施し、透かしは存在しない。737 は口縁部内面に幅広のハケを放射状に施す。736 は脚部上半が中実である。

732 は直線的に開く口縁部をもつ坏部である。内外面とも丸みを帯び、稜線は不明瞭である。外面には縦方向にハケを施した後に、口縁部をヨコ方向のナデ調整を施して仕上げる。735 は精製品で、口縁部が大きく外反する形状である。体部と口縁部の境は内外面とも稜が明瞭である。坏部は中央部が窪む形状である。脚部の上半は中実で、下半には円形透かしが 3 方向に穿たれる。738 は坏部の底面中央から直線的に開く形状である。脚部内面上端には坏部との接続部分に脚部側から刺突を加えている。

739 は幅広の体部から口縁部が外反気味に立ち上がる。体部との境には明瞭な稜をもつ。口縁部は内外面とも細かなヨコ方向のミガキを施し、外面の体部から脚部上半にかけての範囲にはタテ方向のミガキを施す。胎土は粗く、焼成もやや不良である。740 は口縁部が直線的に開く大型高坏である。口縁端部を強くナデ、端部に小さな面を作り出す。外面に明瞭な稜をもつ。体部内面には放射状のミガキを施す。

741～745 は脚部である。いずれも裾へ向かって緩やかに広がる形状である。741・744 は 3 方向に円形透かしを穿つ。742 は裾端部の内外に強いヨコナデ調整を施して沈線を巡らせる。2 方向に円形透かしを穿つ。

746 は平底のコップ形の坏である。復元口径 9.7 ㎝、器高 5.5 ㎝を測る。平底から口縁部が直線的に立ち上がる。内外面ともナデ調整を施す。

747～749 は小形丸底壺である。747 は口径 8.7 ㎝、器高 6.5 ㎝を測る。扁球形の体部に、外傾する短い口縁部をもつ。底部に十字状のヘラ記号を刻む。748 は口径 8.3 ㎝、器高 7.7 ㎝を測る。扁球形の体部に、わずかに内湾する口縁をもつ。頸部に細かなタテハケを施す。外面には口縁から体部中央にかけての範囲に黒斑が存在する。749 は口径 9.3 ㎝、残高 9.1 ㎝を測る。底部は尖り底気味である。口縁部はやや外反し、端部に面をもつ。内面には指頭圧痕が残る。

750 は直口壺である。口径 9.8 ㎝、器高 14.2 ㎝を測る。中央部が張り出す扁球形の体部に、直線的に外傾する長い口縁部をもつ。全体にナデ調整を施す。内面には成形時の圧痕が残る。

751～757 は壺である。751 は口径 9.9 ㎝、器高 13.7 ㎝を測る。最大径が中央より上に位置する肩の張った体部に、口縁部は垂直気味に立ち上がる。端部は内側に肥厚した上で丸くおさめる。体部外面はハケ調整を施し、黒斑が存在する。752 は口径 10.7 ㎝、器高 13.1 ㎝を測る。751 と同様の

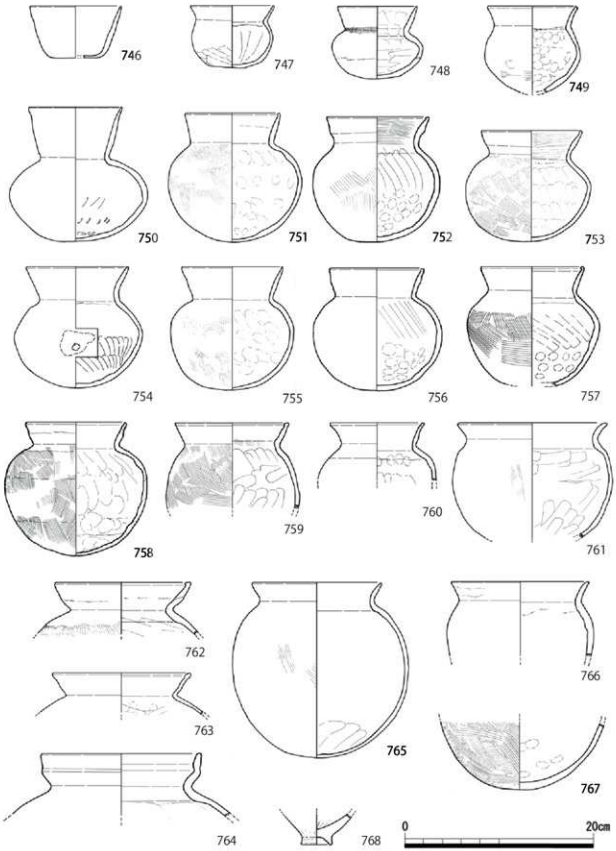


図65　SX524一括・下層出土　土器②（S＝1/4）

体部に、外反気味の口縁部がつく。外面の口縁部下半に強いヨコナデを施すことで凹線が巡り、二重口縁に近い外観となっている。

753は口径10.4㎝、器高11.7㎝を測る。体部は最大径が中央付近に位置するが、上半部は一部に歪みが認められる。口縁部は直線的に外傾し、端部を上方に軽くつまみ上げる。二ヶ所に黒斑を有する。754は口径10.7㎝、器高12.7㎝を測る。体部には焼成後に外側から穿たれた孔がひとつ存在する。周辺を薄く削り取った後に穿孔を行っている。

755は口径10.5㎝、器高13.0㎝を測る。最大径が中央やや上に位置する肩の張った体部に、口縁部は直線的に立ち上がる。口縁部には強めのヨコナデによって生じた細かな凹凸が存在する。756は口径9.8㎝、器高12.9㎝を測る。口縁端部は内側に肥厚して丸くおさめる。底部内面には指頭圧痕が多く残る。外面に黒斑が存在する。757は口径10.6㎝、残存高12.5㎝を測る。体部は最大径が中央やや上に位置し、肩部は直線的である。口縁端部は内側に折り返す。体部外面はハケ調整の後、肩部にヨコナデを施す。内面はケズリ痕がよく残る。

758～763は甕である。758は口径10.5㎝、器高14.2㎝を測る。中央よりやや上に最大径が位置する体部で、わずかに尖り底気味である。口縁部は直線的に外傾し、端部を丸くおさめる。粘土紐痕が複数残る。759は口径11.8㎝、残存高9.1㎝を測る。口縁部は直線的に外傾し、端部は内外面に肥厚させた上で丸くおさめる。内側にはヨコナデによる緩やかな稜が存在する。頸部内外面および体部外面にハケ調整を施す。760は口径9.7㎝、残存高6.0㎝を測る。肩が張った体部に、外反して立ち上がる口縁部をもつ。761は復元口径15.2㎝、残存高12.2㎝を測る広口の甕である。球形の体部であるが幅広のため底部はやや平底気味になる可能性がある。口縁部は外反し、端部は丸くおさめる。表面は摩耗しているが体部外面にハケ調整、内面にナデ調整を施しているようである。

762は口径14.3㎝を測る口縁部である。内湾気味に立ち上がり、端部は内側に肥厚させて上面に平坦面を作り出す。全体に厚手の作りである。外面の頸部に小黒斑が存在する。763は復元口径14.4㎝を測る口縁部である。直線的に立ち上がる口縁の端部は肥厚させて内側に小さな面を作り出す。口縁部のヨコナデ調整はやや強い。

764は二重口縁の口縁部である。復元口径16.8㎝を測り、体部は大型であると考えられる。表面は摩耗しており、内面のケズリ以外の細かな調整は不明である。色調は他の土師器と異なる淡橙灰白色を呈する。

765～767は甕である。765は復元口径13.4㎝、器高18.4㎝を測る。球形の体部に、やや外反する口縁部をもつ。口縁端部は尖り気味である。体部は外面にハケ調整、内面にケズリ後ナデ調整で仕上げる。外面に薄く大きい黒斑が存在する。766は復元口径14.4㎝を測る。口縁部は直線的に外傾し端部は外側に尖る。体部に黒斑が存在する。767は丸底の底部である。外面は底部を中心として放射状に丁寧なハケ調整を施す。内面には若干の指頭圧痕が残るが全体に滑らかである。

768は弥生土器の甕ないし鉢の底部である。直径3.3㎝、高さ1.0㎝の小さな台が付く。内面には中央から放射状にヘラ圧痕が残る。

769～774は大型の土師器甕である。769は口径19.6㎝、残存高12.8㎝を測る。口縁部は内湾して立ち上がり、端部は肥厚させた上で内傾する面を作り出す。体部は長胴気味で肩部の張り出しは控え目である。内外面ともにハケ調整を施す。770は口径21.5㎝を測る。口縁部は直線的に外傾する。上半部と頸部付近に強いヨコナデを施すため、口縁部中段が膨らんで見える。外面には黒斑、内面には粘土紐痕が存在する。771は口径17.9㎝を測る。口縁部は直線的に外傾し、端部は外側に肥厚させて丸くおさめる。外面にも成形時の凹凸が多く残る。内面にはハケ目状のケズリ痕が残る。

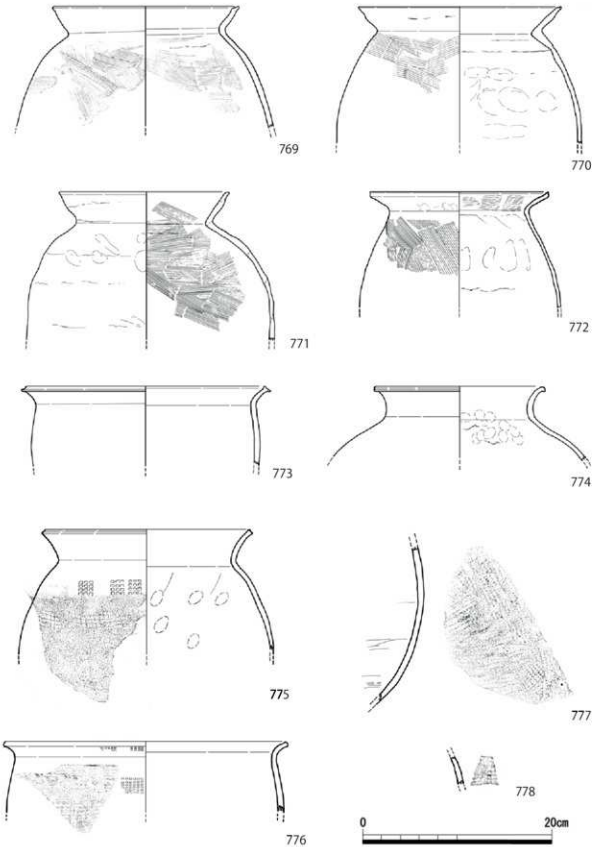


図 66　SX524 一括・下層出土　土器③（S = 1/4）

772 は復元口径 18.8 ㎝を測る。体部はなで肩気味である。口縁部は外側に大きく開き、端部に面をもたせる。外面に黒斑が存在する。773 は広口の甕である。長胴甕である可能性がある。復元口径

25.2 ㎝を測る。口縁部は短く外反し、端部は上下に肥厚させて湾曲する面を作り出す。外面はナデ調整で仕上げており、わずかにタタキ痕が残る。胎土に細かな赤橙色粒を多く含む。774 は復元口径 17.7 ㎝を測る。口縁部は外反し、端部は外側に折り返して垂下する面をもつ。外面にハケ調整の痕が見られるが表面の摩耗により不明瞭である。内面には頸部から体部にかけての範囲に指頭圧痕が多く残る。

775～778 は韓式系土器である。775 は甕の上半部である。長胴甕の可能性もある。体部から口縁部には、なだらかに繋がる。口縁部は外反して立ち上がり、端部に面を作る。体部外面に格子タタキを施した後にナデ調整で仕上げており、タタキ痕は部分的に残る。776 は長胴甕ないし鍋の口縁部である。外面には口縁部にも格子タタキが残る。777 は甕の体部下半の破片である。外面には格子タタキが残るが、それをナデ消している範囲が多い。内面は丁寧なケズリで滑らかに仕上げている。778 は外面に格子タタキが施された小片である。

779～785 は甑である。779 は全体の約 7 割が遺存する。底部は平底で、口縁部は外側に短く折り返す。蒸気孔は直径約 4 ㎝の円形孔の周囲に約 2 ㎝大の小孔が 7 つ配される。孔は全体に小さめで底面は例り抜かれずに残る部分が比較的広い。把手は断面形が円形である。上面から細い線状の切り込みが入るが下面まで貫通はしない。体部には把手と同じ高さの位置に凹線が巡る。凹線は一条の場所と二条の場所に分かれる。内外面ともに丁寧なナデ調整で滑らかに仕上げる。780 は下半部の破片で底部は完存する。平底だが縁辺は 779 よりも丸みを帯びる。蒸気孔は中央の円形孔の周囲に楕円形孔を 5 つ配する。中央の孔は周囲の孔よりやや小さい。把手は断面円形で、先端は粘土を接いだためか、欠失している。把手上面から細い線状の切り込みを入れる。また、把手下面にも支え棒の可能性がある刺突痕があり、把手内部で上面からの切り込みと繋がっている。体部外面下半にはケズリ痕や粘土紐痕が残る。外面には黒斑も存在する。781 は底部の破片である。中央部分を欠くが底面の状況は 780 と同様であると考えられる。782 も蒸気孔は中央の円形孔の周囲に 5 つの円形孔を配する。底面は内側上部に薄い板状の粘土剥離が認められる。底部と体部を接合した際に貼り付けた部分が剥がれたものと考えられる。外面には左肩上がりのヨコハケ調整を施す。783 は口縁部の破片である。復元口径 29.0 ㎝を測る。表面は摩耗しており細かな調整は不明であるが、一部にケズリ痕が残る。外面には黒斑が存在する。784 は同一個体と考えられる口縁部付近の破片と底部の破片を一連で図化している。底部は平底で、縁辺に正円形に近い円形孔を配する形であると考えられる。

785 は甑の下半部である。底部中央を欠くが、底部縁辺は他の甑よりも丸みを帯びる。確認できる蒸気孔は楕円であると考えられる。把手は中実で、先端はやや上方に反り上がる。把手下面には支え棒痕の可能性がある小さな円形の窪みが存在する。体部外面には縦方向のハケ調整を施す。

786 は把手付の体部の破片で、体部の湾曲具合から鍋である可能性がある。把手は細く山形に反り上がる形状である。上面から細い線状の切り込みを入れる。体部内面にはケズリ痕が明瞭に残る。

787 は土師質の竈である。正面から見て右下端部の庇および体部の破片である。残存高は 12.3 ㎝を測る。庇と体部の前面端部および接地部は面をもつ。焚口部分はヘラケズリ後未調整で、庇は貼り付け後にナデ調整を施す。外面体部はハケ調整を施す。煤は付着していない。

788～890 は須恵器である。ただし一部に陶質土器の可能性があるものを含む。

788～793 は、つまみ付の蓋である。有蓋高坏の蓋であると考えられる。788 はつまみの中央部が深く広く窪む。別作りのつまみを頂部に押し込んで貼りつけた様子がうかがえる。頂部は低く平ら

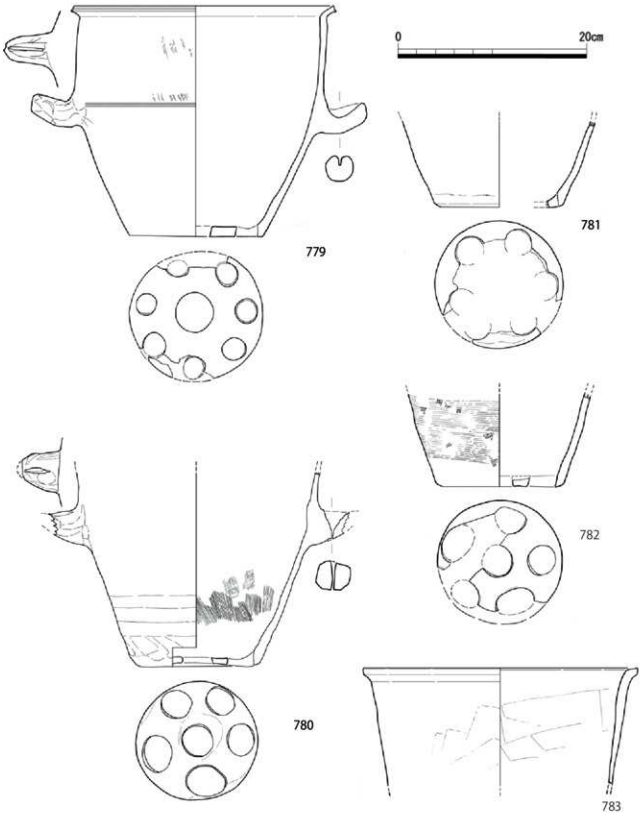


図 67　SX524 一括・下層出土　土器④（S = 1/4）

である。789 は広く薄い作りのつまみをもつ。全体の形状は丸みを帯びる。790 は倒置した状態で焼成されたと考えられ、上面に焼き台ないし重ね焼きの痕が鮮明に残る。791 は端部が外に広がり、肩部の稜の下には細い凹線が巡る。つまみの接合部にひび割れが確認できる。792 はつまみが細く

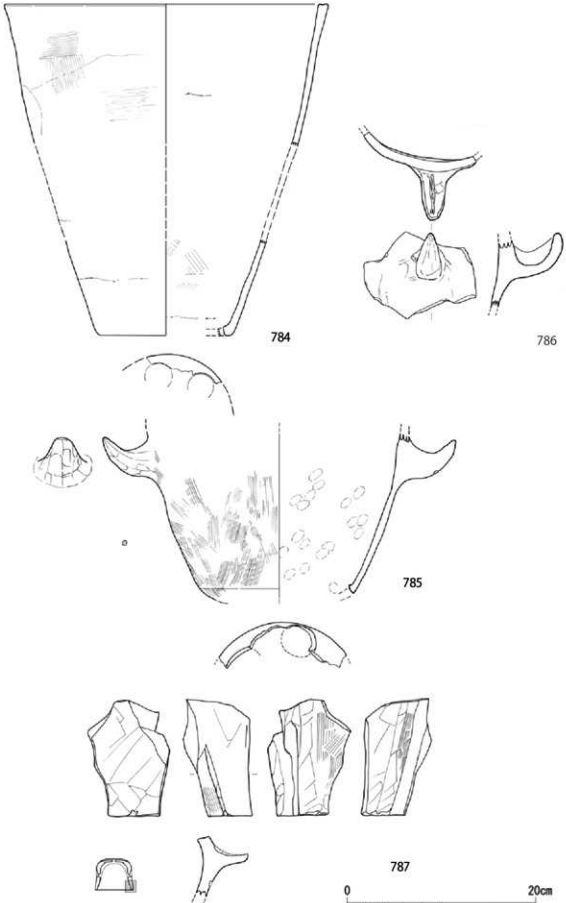


図 68　SX524 一括・下層出土　土器⑤（S = 1/4）

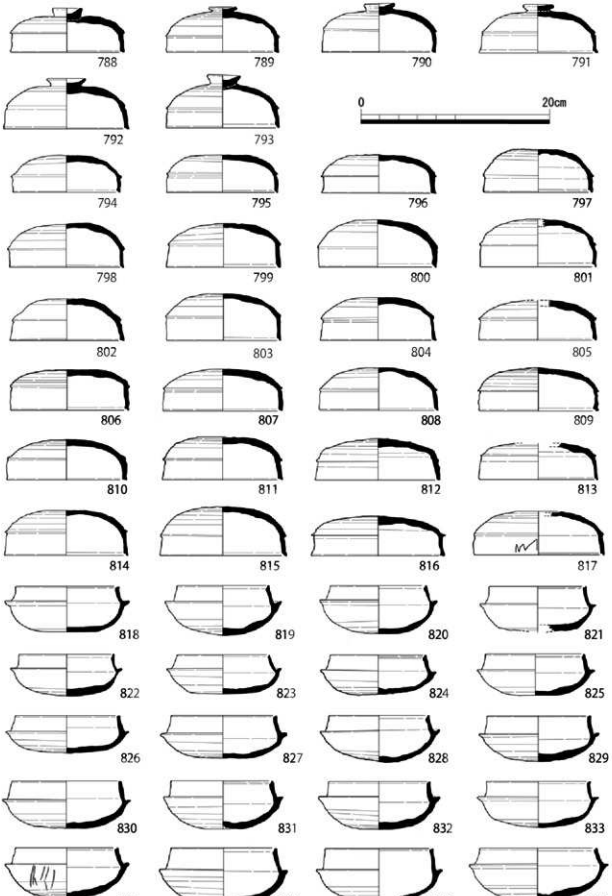


図69　SX524一括・下層出土　土器⑥（S＝1/4）

湾曲して立ちあがる形状であり、中央のくぼみは広い。793はやや厚手のつまみで、くぼみの中央部はわずかに上方に突出する。本体の頂部は丸みを帯びる。

794～817は蓋坏の蓋である。794は口径11.1㎝、器高3.9㎝を測り、出土した中では最も小型の蓋である。胎土には非常に細かな炭粒を多く含む。795は肩部の稜の下に深く鋭い凹線が巡る。頂部は比較的平らである。796は頂部が平坦な形状で、口縁部は外反気味に開き、わずかに内傾する端部は平坦である。797は口径11.4㎝、器高4.5㎝と、背の高い蓋である。上面には自然釉が付着する。798は胎土に直径0.5㎝を超えるような礫が複数含まれている。799は全体に丸みを帯びた形状である。色調は灰白色を呈し、他の須恵器と様相が異なる。800は回転ケズリが全体に粗く、肩部の稜は鈍い。直径0.2㎝大の礫を多く含む。801は肩部の稜の上下に約0.5㎝幅で回転ナデを施して成形している。802はやや裾広がりの形状である。肩部の上は強い回転ナデにより全体にくぼむ。803は口縁部が高く、内傾する端部には小さな段が付く。804は回転ケズリが粗く、頂部付近は削り残しが目立つ。805の稜は比較的鋭いが突出度は低い。806は頂部の平坦面が広い。口縁端部は段を設ける。807は肩部下にやや幅広の凹線が巡る。胎土には細かな炭粒を含む。808は肩部の稜が鈍く、口縁端部はわずかに凹む。809は全体が内湾気味の形状である。799と同様に灰白色を呈し、細かな炭粒を含む。810は表面が全体に滑らかに仕上げられており、肩部付近も全体に丸みを帯びる。811は焼成が不良で、特に内面は橙灰色を呈する。胎土には炭粒を非常に多く含み、直径0.5㎝に迫る粒も存在する。812は肩部周辺の形状が特徴的で、稜の少し上に屈曲点が存在する。頂部には自然釉が厚く付着する。813の稜は鋭いが突出度は低い。頂部は平坦であると考えられる。814はヘラケズリの単位が非常に明瞭である。胎土に炭粒を含む。815は全体に丸みを帯びた形状である。口縁端部は平坦で内傾する面をもつ。816は全体に広く平坦な形状である。頂部には0.1㎝大の礫や粘土粒などが多数付着している。口縁部は外反し、端部には深い沈線が巡る。817は口縁部にジグザク状のヘラ記号が刻まれている。

818～841は蓋坏の身である。818は平底であるが体部上半は丸みを帯びる形状である。819は焼成が不良で、色調は灰白色、一部は橙灰色を呈する。受部は斜め上方に立ち上がり、受部内側の溝は深い。820は丸底で、口縁端部には明瞭な段が存在する。821は口縁部が外反気味に立ち上がり、端部には浅い溝が巡る。822は底部外面に自然釉が厚く付着しており、倒置した状態で焼成されたと考えられる。823は広めの平底で、822と同様に底部外面に自然釉が付着する。824は全体の形状がやや歪んでおり、底部には火襷が認められる。825は胎土に礫をやや多く含み、外面底部にはヘラケズリ後の礫の落剝が認められる。826は器高が低く、口縁部は直線的に立ち上がり、端部は平坦である。827は体部上半から受部にかけての一部に粘土の落剝が存在する。828は口縁端部に深めの溝が巡る。829は口縁部が直線的に立ち上がり、端部は面を持ちわずかに内傾する。830は口縁部が直線的に立ち上がり、端部は丸みを帯びる。831は外面のヘラケズリが全体に粗く、とくに底部中央付近には窪みも存在する。口縁端部の溝は他よりも太い。832の口縁端部は幅は狭いが面をもつ。胎土には炭粒を多く含む。833は口縁部が外反気味に立ち上る。上半部は他の個体よりも器壁が薄い。834は体部上半に長さ3㎝前後の並行線からなるヘラ記号が存在する。胎土には0.1～0.5㎝大の礫を多く含む。835は全体に厚手の作りで重量感がある。口縁端部に巡る溝も幅広である。836は受部に重ね焼きした蓋の端部が剥離して残る。口縁端部は平坦で、内外にわずかに肥厚させる。837は口径12.2㎝と出土した中で最も大きい。口縁部は内傾して立ち上がり、端部にはわ

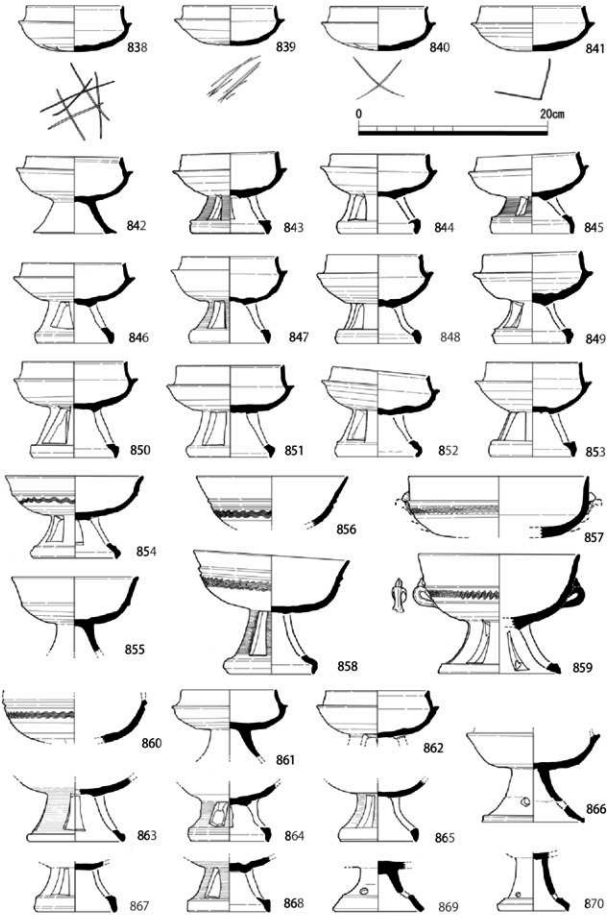


図70　SX524一括・下層出土　土器⑦（S＝1/4）

ずかに線が巡る。ヘラケズリは粗く、始点の位置が底部中心からずれている。838 は底部に複数の直線ヘラ記号が格子目状に配される。839 は直線のヘラ記号を並行に刻む。840 は×字状のヘラ記号を刻んでおり、その交点は回転ヘラケズリの始点と一致する。841 はL字状のヘラ記号であるが、破片であるため 840 と同様の×字状になる可能性もある。

842～870 は須恵器高坏である。842～853・861・862・866 は有蓋高坏、854～859 は無蓋高坏である。

842 は完形品で、脚部に透かしは存在しない。脚部は裾広がりの形状で、下端は内側がやや突出し、外側は接地しない。843 は 3 方向に台形透かしを穿つ。坏部底部中央には直径 1.1 ㎝の円形の窪みが存在し、棒状の支えを用いて製作した可能性が考えられる。844 は体部上半から受部にかけての範囲で粘土が薄く剥がれている。受部を作り出す際に貼り付けた部分が落剥したものと考えられる。845 は細めの方形透かしを 3 方向に穿つが、配置が大きく偏っており、本来は 4 方向に配するつもりであったかのような位置となっている。846 は 3 方向に台形透かしを穿ち、うち一つは三角形に近い形状である。843 と同様の窪みが坏部底部中央に存在する。847 は脚部の内面や坏部外面に自然釉が広く付着しており、倒置した状態で焼成された可能性がある。848 は受部がやや厚い作りで斜め上方に立ち上がって丸みを帯びる。849 は 3 方向に台形透かしを穿つ。胎土に直径 0.5 ㎝超の礫が複数存在する点が特徴的である。850 は 3 方向に台形透かしを穿つ。透かしは他の個体より大きめである。851 は 850 と同様に大きめの透かしを穿つ。脚裾部の形状は丸みが強い。852 は 3 方向に台形透かしを穿つ。他の高坏よりも坏部の傾きが大きい。853 は 3 方向に台形透かしを穿つ。843 と同様の円形窪みが存在するが深さはやや浅く、周囲の粘土が盛り上がる形となっている。854 は体部下半に波状文を巡らせるが、自然釉の付着によって大部分が隠れている。855 はやや厚手の作りで、色調は灰白色を呈する。脚部の透かしは存在しない、あるいは下半部にのみ存在するものと考えられる。口縁端部には鈍い凹線が巡る。856 は外側に大きく開く形状である。体部中央に鋭い稜が巡り、その下に波状文を施す。脚部は失われているが、体部底面付近に透かしを穿つ際の切り込みが残されている。857 は体部中段に粘土玉・紐を貼り付ける把手が存在していたが、欠失している。上面には緑色の自然釉が付着する。858 はやや長脚で 3 方向に台形透かしを穿つ。上半部は傾きが大きい。859 は細い台形の透かしを穿つ。脚部は約 4 割が遺存しているだけだが、透かしは 6 方向に穿たれていると推測される。体部中央よりやや下の位置に把手を貼り付ける。把手は涙滴状の穴が空く。淡緑色の自然釉が外面全体に薄く付着している。脚部裾、透かしの下端付近には 0.1～0.3 ㎝大の礫が複数まとまって付着している。860 は椀形の坏部で、下端に透かしの切り込み痕が残る。861 は脚部に透かしが無く、受部は狭い。862 は口縁部が内傾し、端部は幅の広い面をもつ。863 は 4 方向に台形透かしを穿つ。胎土には細かい炭粒を含む。864 は 3 方向に方形透かしを穿つが、切り込みが粗く形状も全体に歪んでいる。ナデやケズリの回転痕跡が明瞭に残る。865 は 3 方向に台形透かしを穿つ。866 は 3 方向に円形透かしを斜め上方から穿っている。口縁部は失われているが内傾気味に立ち上がると考えらえる。867 は小型の脚で、3 方向に台形透かしを穿つ。脚部に一ヶ所、縦方向のヘラ記号状の線が存在するが、あるいは透かしの切り込みを入れるつもりで取り止めた痕であるかもしれない。868 は 3 方向に三角形透かしを穿つ。869 は脚部下半に 3 方向の円形透かしを穿つ。透かしの配置は均等ではなく偏りが見られる。透かしの直下の位置には稜が巡る。870 は 3 方向に小型の円形透かしを穿つ。脚部下半の稜は上方に突出し、内側に溝が存在する。

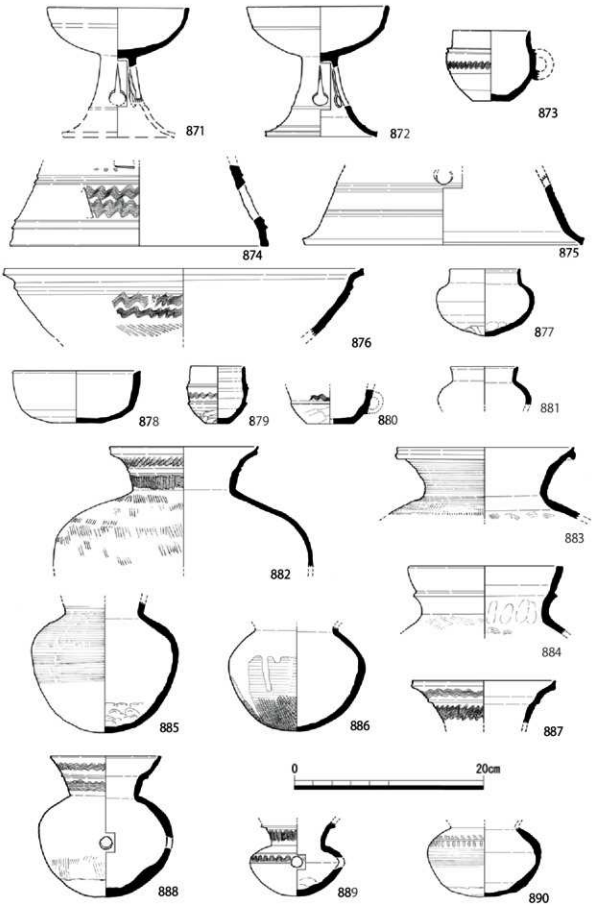


図71　SX524一括・下層出土　土器⑧（S＝1/4）

871・872 は陶質土器であると考えられる火焔形透かしをもつ無蓋高坏である。火焔形透かしは大韓民国慶尚南道咸安郡周辺で製作される土器の特徴とされる。日本列島での出土例は高坏や器台を含めて 10 例程度である。871 と 872 は、ほぼ同形の高坏である。872 は口縁と脚部の一部を欠くが全体像を把握することができる。871 は脚部下半と口縁の一部を欠く。871・872 はともに 3 方向に火焔形透かしを穿つ。透かしの形状は下部が正円形に近く、上部は細く尖る。色調は濃灰色を呈し、上面には自然釉が付着する。器面は全体に回転ナデで丁寧に仕上げるが、脚部下半は釉の付着により細かな観察が難しい。外面坏部下半にはわずかにケズリの痕が残る。坏部の形状は 871 のほうが丸みを帯び、稜の位置もやや高いが、全体の構成は同じである。872 は透かし下に二条の稜が巡るが、付着した釉により半ば潰れている。

873 はカップ形の坏である。中段に把手が一つ付く。底部は平底で、強めのナデ調整で仕上げられている。肩部に稜が二段存在し、いずれも鋭い。

874～876 は器台である。874 は器台の脚部片で最下段には三角形、その上段には方形の透かしを穿つ。875 は脚部の破片で、陶質土器である可能性も考えられる。下半が弧状を描く透かしが存在するが、上部が失われているため、円形の他に火焔形となる可能性もある。色調は 871・872 の陶質土器に近い暗灰色を呈する。内面裾には焼成時に藁灰が付着している。876 は口縁部の小片で、歪みの影響で復元径は小さくなる可能性がある。外面の二段に施された波状文は、施文後の作業等によって途切れている部分が多く見られる。波状文下には格子タタキが認められる。

877 は短頸壺である。底部外面はケズリによって尖底に仕上げられており、座りが悪い。口縁端部には、ごく小さな段が付く。878 は坏ないし鉢である。形状的には蓋である可能性も考えられるが、焼成具合や自然釉の付着状況から、このように扱っている。焼成はやや悪く、一部が赤灰色を呈する。

879 は小型のカップ形の坏である。約 5 割が遺存した状態であり、把手が一つ付く可能性もある。外面下半は底面も含めてケズリで成形しており、平底に仕上げられている。880 はカップ形の坏の底部である。片側に把手の剥離痕が存在する。

881 は小型壺である。口縁部は外反気味に立ち上がる。882・883 は細頸気味の甕である。882 は口縁部が外反する形状で、端部は上方に折り返す。体部外面は縦方向の平行タタキを施した後に回転ナデで仕上げる。体部内面は丁寧にナデ調整が施されており、確認できる範囲に当具痕は見られない。883 は外面の頸部から体部にかけての範囲を回転ハケで仕上げている。

884 は二重口縁壺である。外面の稜は明瞭であるが、内面の段はなだらかである。885 は壺である。上半部に最大径が位置する。口縁部は直線的に立ち上がると考えられる。内面底部付近には青海波文の当具痕が存在する。886 は壺で、濃緑色の自然釉が内外面に付着し、滴状に垂れる部分も多い。外面の底部は平行タタキ、中程には強いハケ調整を施す。887 は壺ないし甕の口縁部で、外面には細かな波状文を施す。888・889 は甕である。888 は体部が球形で、その中央付近に円形孔が穿たれる。体部外面は一部にタタキや粘土紐痕が残るが、全体にナデ調整を施している。889 は扁球形の体部で、底部は尖り底気味である。890 は壺ないし甕の体部片である。自然釉の付着によって消えかかってはいるが体部上半に列点文が綾杉状に施されている。

891～1024 は製塩土器である。図化した 134 個体の他に小片が約 2000 点、重量約 3000g 分が出土している。完形品はほぼ無く、全体像を把握できるもの及びそれに準ずるものを図化している。

出土した製塩土器は、まず全体の形状によって裁頭卵形（891～993）と半球形（996～1021）に

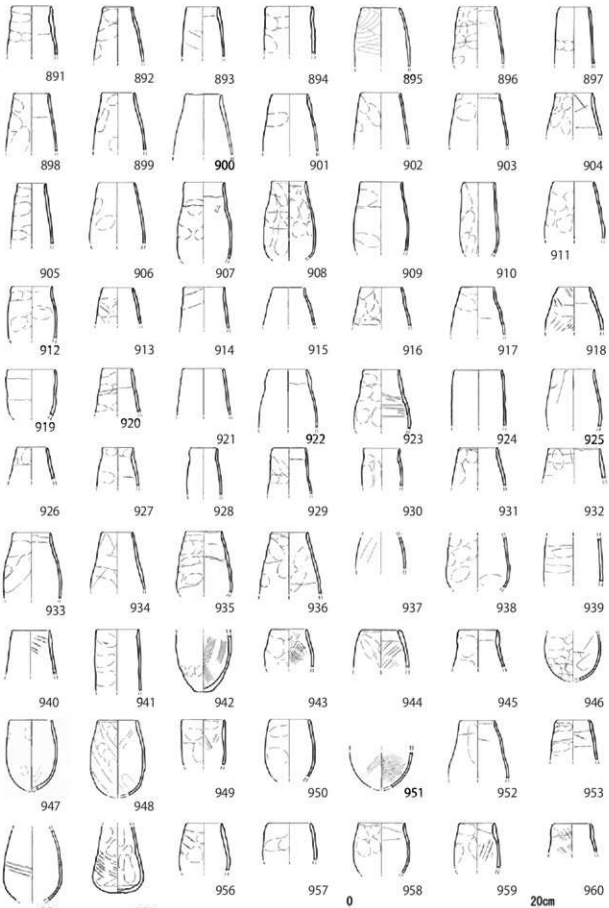


図72　SX524一括・下層出土　土器⑨（S＝1/4）

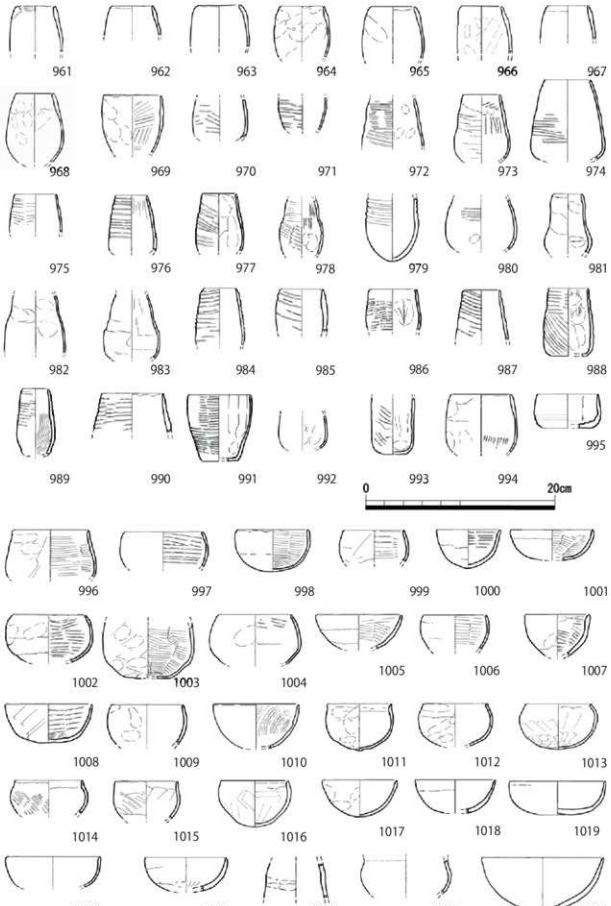


図 73　SX524 一括・下層出土　土器⑩（S = 1/4）

大きく分けられる。これらの中でも形状に細かな差異は存在し、後者には浅く広い埦形の土器も含んでいる。さらに成形・調整技法や細部の形態、胎土の状況等によって細かく分けられ、以下にその枠組みを基にして詳細を述べる。

891～942 は裁頭卵形のうち、厚さ 0.1 ㎝前後の薄手のものである。胎土は緻密で砂粒をほとんど含まず、硬質に焼き上がる。破片状態では、いわゆるポテトチップ状の様相を呈する資料である。同様の製塩土器は図化資料内では半数弱であるが、図化対象外資料の約八割がこの種の破片に属す。下膨れの形状が多いが、910 や 941 のように上半と下半の差が少ない円柱状の個体も一部に存在する。復元口径は 2.8～5.5 ㎝とばらつきが見られるが、4 ㎝前後のものが特に多い。内外面をナデ調整で仕上げるものが大半で、器壁の薄さもあって指頭圧痕や指紋が残るものも多い。また、粘土の繋ぎ目が確認できる場合も多い。942 は内面に貝殻条痕が明瞭に残る。色調は淡桃色や白色が大部分を占め、被熱によって部分的に赤変する資料も多い。891～895 は特に堅牢な焼き上がりで、色調は暗灰色を呈す。

943～969 は裁頭卵形のうち、厚さ 0.2～0.3 ㎝程度の厚手かつ胎土が粗い一群である。0.1～0.2 ㎝大の礫を含む。一部に礫の数が他より多い個体を含む。焼成は全体に良好である。復元口径 3.4～5.9 ㎝を測る。全体像の分かる資料は限られるが薄手の一群よりも器高の低いものが多く、砲弾形に近い形状のものも多い。色調は褐色・灰色系が多く、通常の土器色に近いイメージとなる。一部には内面が黒斑状に焼けているものも含む。口縁端部がやや内側に入り込む形状のものが多く、944 は口縁端部に小さな面をもつ。ナデ調整で仕上げるものが多いが、一部に異なるものも存在する。961 は外面口縁部にヘラ状工具痕が多数残る。946・948 は内面底部付近に指押さえの痕が明瞭に残る。951 は 0.8 ㎝幅の貝殻条痕が内面に存在する。944 にも貝殻条痕が認められる。

970～977 は裁頭卵形で、外面にタタキを施し内面をナデ調整で仕上げる一群である。底部付近の屈曲が平底気味である点も特徴である。厚さはいずれも約 0.2 ㎝を測る。色調は灰色系、橙色系、赤褐色系と多様である。胎土は、密な 971～973・976 と、礫を一定量含む他とに分かれる。972・973・976・977 は内面に絞り痕の縦線が残る。

978～983 は瓢箪状に体部中位がくびれる形状の一群である。厚さ 0.2 ㎝前後を測る。基本的な法量は他と大きな差異は無い。外面にタタキを施すものとナデ調整を施すものがある。タタキは体部上半に施す場合が多い。981 も表面が摩耗しているがタタキを施している可能性がある。

984～993 は裁頭卵形で、底部が平底の可能性があるものである。より厳密には裁頭卵形の括りから除外すべき一群であるかもしれない。全体が残る資料は無いが、988・991・993 は自立可能な形状であると推測される。外面にタタキを施し、タタキを施す範囲も広い傾向にある。989 は内面に貝殻条痕が存在する。988・993 には絞り痕が残る。992 は表面が大幅に摩耗しており細かな調整が確認できない。厚さは 0.2 ㎝程度のものが多いが、985・990 のようにさらに厚手の個体もある。

994 は口径 6.1 ㎝、厚さ 0.3 ㎝を測るやや大型の製塩土器で、形状は裁頭卵型と半球形の間に位置する。胎土には小礫を多く含むが、硬く焼き締っており色調は灰白色である。内外面ともナデ調整で仕上げる。995 は平底のカップ形である。全体の約 4 割が遺存する。口径 7.1 ㎝、器高 3.6 ㎝、厚さ 0.2～0.7 ㎝を測る。胎土は密で、色調は明橙色を呈する。ヨコナデで仕上げを行っており、内面にはナデの静止痕が縦に残る。

996～1010 は半球形状で、内面に貝殻条痕が存在する一群である。条痕は幅広で、底面まで丁寧

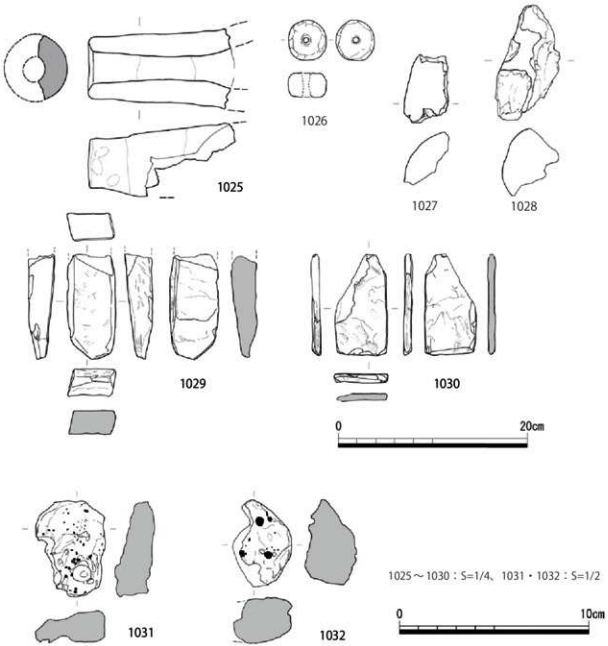


図 74　SX524 一括・下層出土　土製品・石器・鉄滓（S＝1/4・1/2）

に施す。外面はナデ調整を施すが、仕上がりには差が見られる。上部が内湾する、半球形と呼ぶべき深めの個体が中心である。口径 6.5～8.8 ㎝を測る。厚さは 0.2 ㎝程度が中心であるが、1007 のように 0.5 ㎝を超えるものもある。胎土は密で、色調は薄紅色、灰白色を呈する。

1011～1021 は半球形で、内外面をナデ調整で仕上げる一群である。ただしナデは強めで、ケズリに近い仕上がりであるものも含まれる。ナデは指によるものとヘラ状工具によるものとが存在する。口径 6.5～9.8 ㎝、器高 3.5～4.9 ㎝を測る。内面貝殻条痕の一群よりも全体に器高が浅く、埦形に近い形状が多い。胎土はやや粗めで、0.2～0.5 ㎝大の砂礫を含む。焼成もやや甘めである。1011・1014・1015 は口縁端部をわずかに外傾させる。1013 はほぼ全体が遺存しており、外面下半は指頭圧痕、内面にはヘラナデの痕が明瞭に残る。

1022 は胴部の破片である。形状や胎土は裁頭卵形に近いが、厚さ 0.4 ㎝とかなり分厚い。外面には粘土紐痕が残る。1023 は埦形で、大きく外傾する口縁をもつ。0.2 ㎝大の砂礫を含む。表面は摩耗しており細かな調整は不明である。1024 は復元口径 13.0 ㎝を測る埦形の破片である。内外面ともナデ調整で仕上げる。他の製塩土器よりも一回り大型であるが、色調や胎土は他と共通する。

1025 は鞴の羽口である。排気孔側の端部が遺存している。内径は吸気孔側から排気孔側に向かう過程で一旦狭くなる。

1026 は紡錘車であると考えられる土製円盤である。重量 51.9g を測る。全体の形状は円柱状であるが、稜はナデによって丸みを付ける。焼成は良好で、色調は、にぶい橙色を呈する。

1027・1028 は土製支脚である。1027 は残存長 7.5 ㎝を測る。複数の粘土塊を集めて棒状に固めており、粘土単位で剥がれ落ちた状態である。表面は軽くナデ調整で仕上げる。1028 は残存長 12.3 ㎝を測る。胎土が共通しており 1027 と同一個体である可能性もある。

1029 は頁岩の角柱状製品である。砥石であると考えられるが、その形状から石斧状の製品を再利用した可能性も考えられる。残存長 11.1 ㎝、幅 5.1 ㎝、厚さ 2.9 ㎝、重量 230.0g を測る。1030 は頁岩の薄板状製品である。砥石であると考えられ、手持ちで使用する場合もあったと考えられる。長さ 10.6 ㎝、幅 5.5 ㎝、厚さ 0.7 ㎝、重量 62.5g を測る。全体に細かな擦痕が存在する。

1031・1032 は鉄滓である。1031 は板状で、全体に鉄部分が露出している。重量 50.8g を測る。1032 は塊状の滓で、一部を土に覆われているが大部分は鉄部分が露出している。重量 30.1g を測る。大きめの気孔が複数存在する。1031 と 1032 はともに鉄分含有率が高いと考えられる。

SX526（図 75）

1033 は土師器器台の脚部である。直線的にハの字状に開く形状である。内外面ともナデ調整で仕上げるが、内面上半には絞りや粘土紐の痕が残る。

図 75　SX526 出土　土器（S = 1/4）

図 76　SK527 出土　土器（S = 1/4）

SK527（図 76）

1034 は土師器小形丸底壺である。体部内外面の大半をケズリで仕上げ、底部はわずかに尖り気味である。

SK542（図 77）

1035 は土師器坏である。口縁端部は外側に折れ内傾する面をもたせる。1036 は土師器甕である。表面が摩耗しており細かな調整は不明であるが、内面のケズリ痕は明瞭に残る。

1037・1038 は須恵器蓋坏の蓋である。1037 は口縁の中段に回転ナデによって生じたわずかな稜が存在する。1038 は全体に丸みを帯びた形状で、稜は小さく突出するのみである。

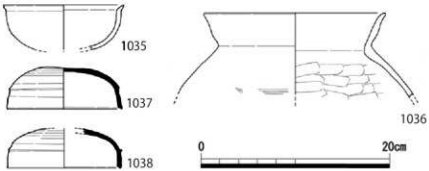


図 77　SK542 出土　土器（S = 1/4）

SK540（図 78）

1039～1044 は土師器である。1039 は高坏の脚部である。ラッパ状に広がる形状で、透かしは無い。外面には縦方向の細かなミガキを施す。1040 は壺である。復元口径 15.8 ㎝を測る。口縁部は長く直線的に外傾し、端部は丸くおさめる。内面には粘土紐痕が明瞭に残る。外面の調整は摩耗が激しく不明である。

1041・1042 は甕である。1041 は破片状態であるが全体の約 7 割が遺存する。口径 16.0 ㎝、器高 26.9 ㎝を測る。体部は全体に歪みが見られる。口縁部はやや厚手で、内湾気味に立ち上がる。端部は丸み帯びた面をもつ。外面のハケ調整は乱雑に施される。全体に煤が付着する。1042 は復元口径 17.8 ㎝、残存高 26.2 ㎝を測る。体部は最大径が中央付近に位置するが下半は細くなり、尖り底気味の形状であると考えられる。口縁部は直線的に外傾し、端部は面をもつ。外面には煤が付着する。

1043 は鍋である。体部下半は球形を描く。把手は断面円形で、先端がわずかに反り上がる。切り込みは小さく、貫通しない。ハケ調整やケズリを施して器壁を滑らかに仕上げる。下半には粘土紐痕が残る。外面には黒斑が存在する。1044 は把手である。断面円形であるが、上面に部分的に面取りが施され、外観は角柱状にも見える。体部内側から挿入されたと考えられる。

1045 は須恵器壺である。復元口径 12.8 ㎝を測る。内外面とも回転ナデで仕上げる。

SD160（図 79）

1046 は土師器高坏の坏部である。平坦な底部から口縁が外反気味に立ち上る。外面に稜は存在するが比較的なだらかである。1047 は小形丸底壺である。偏球形の体部の中央に 0.3 ㎝大の小孔がある。孔は内面側から器壁を広く削り取る形で穿たれている。

SD161（図 80）

1048 は土師器小形丸底壺の完形品である。体部下半内外面にケズリを施す。胎土には細かな赤色粒を含む。1049 は土師器広口壺である。体部下半外面にケズリ痕が残るが、全体としてはヨコナデで丁寧に仕上げている。1050 は土師器壺である。表面が摩耗しており細かな調整等は確認できないが、明橙色の精良な胎土である。

1051 は陶質土器であると考えられる大型の甕である。外反する短い口縁部をもつ。外面上半には自然釉が付着し、一部には藁灰も含まれる。外面はやや強めの回転ナデで仕上げる。内面も回転ナデで仕上げており、下半には大きめの指押さえの痕が残る。頸部には口縁部を貼り付けた粘土紐痕が確認できる。

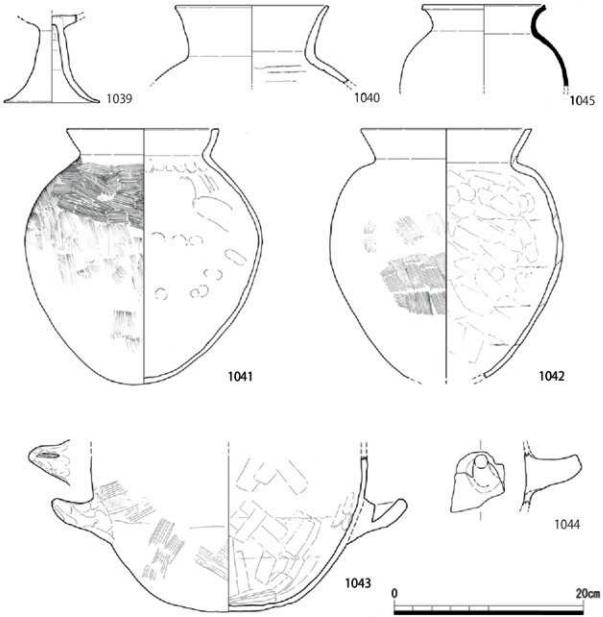


図 78　SK540 出土　土器（S＝1/4）

SR525（上層：図 81～図 85、下層：図 86～図 88）

SR525 の出土遺物は上層と下層に分けて取り上げが行われている。調査範囲が河道の一部に限られ、また埋土が明確な分別の難しい砂層を中心とすることから、上層・下層の差異が河道埋没の過程を正確に反映しているわけではないが、ある程度の時期的な前後関係を確認することはできるため、ここに上層・下層を分けて報告を行う。遺物の時期は、上層は周辺の遺構と同様、古墳時代中期後半を中心とするが一部に古墳時代後期のものを含む。下層も中期後半の遺物を含むが、中期前半以前に遡る時期の資料を一定量含む点は注目される。

SR525 上層（図 81～85）

1052～1054 は土師器坏である。1052 は口径 13.6 ㎝、残存高 3.5 ㎝を測る。口縁部はヨコナデを施して上方に立ち上がり、外面には明瞭な稜をもつ。体部内外面には成形時の指頭圧痕が多く残る。

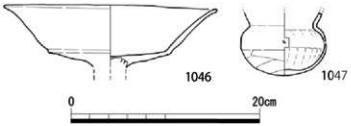


図 79　SD160 出土　土器（S = 1/4）

1053 は口径 11.8 ㎝、器高 4.7 ㎝を測る。内湾して立ち上がる、全体に丸みを帯びた形状である。全体にナデ調整を施す。1054 は口径 11.8 ㎝、器高 4.3 ㎝を測る。口縁部は外側に屈曲させ、端部は薄く尖らせる。口縁内面に稜をもつ。口縁部は内外面ともヨコナデを施す。

1055～1067 は土師器高坏である。1055～1060 は坏部の形態が分かるものである。1055・1056 は浅く内湾する椀形である。どちらも摩耗が激しいが接続部外面にハケ調整を施す。1055 は接続部内面に円形の刺突を加える。1057・1058 は大型の坏部である。口縁部は直線的に外方へ伸び、口縁部と体部の境には明瞭な稜が見られる。1057 は内外面にナデ調整を施す。1058 の口縁端部は強いナデで小さな面を作り出し、内面には沈線状の窪みが巡る。内外面にハケ調整を施し、外面は一部それをナデ消す。焼成は非常に良好である。1059 は浅い椀形の坏部で、口縁部は直線的に開く。脚部は裾が低く大きく広がる。脚部上半から坏部にかけての外面は縦方向のハケ調整を施す。脚部には円形透かしを 2 方向に穿つ。1060 は口縁部が外反気味に開く。口縁部と体部との境には緩やかな段が存在する。

1061～1067 は脚部である。1061・1064～1067 は裾部がラッパ状に大きく開く。1061 は端部に小さく明瞭な面をもつ。外面はタテ方向のミガキ、内面下半はナデ調整で仕上げる。1064 は他の脚よりも上部の中実部分が広い。1065 は外面にタテ方向のミガキの後、ハケ調整を施す。裾部内面もハケで仕上げる。1066 は中空の脚部から坏部を立ち上げ、中央部に上から粘土を充填する方法で製作されたと考えられる。1067 は小型の高坏で、表面が摩耗しており細かな調整は不明である。円形透かしを二方向に穿つ。1062・1063 は裾部が屈曲し低く大きく開く形状である。1062 は裾端部に強いナデを施し、垂直につまみ出す。1063 は裾端部に小さな面をもつ。

1068 は土師器の甑である。ハケ調整を施す。色調は精製の土師器によく見られる明橙色を呈する。体部の孔の周辺に黒斑が存在する。

1069・1070 は小形丸底壺である。1069 は口径 8.1 ㎝、器高 8.0 ㎝を測る。外面は口縁部にヨコナデ、体部上半に縦方向のハケ、下半にケズリを施す。1070 は口径 8.6 ㎝、器高 7.4 ㎝を測る。肩部外面付近には歪みが見られ、指頭圧痕が多く残る。体部下半外面のケズリは粗い。

1071・1072 はミニチュア土器である。1071 は小型の器台形土器である。手づくね成形で、表面は丁寧なナデ調整を施しているが、上下の末端部にひび割れや歪みが見られる。底部に棒を挿した状態で成形した可能性がある。1072 は平底の鉢形である。口径 5.5 ㎝、器高 3.8 ㎝を測る。手づくね成形で、口縁の形状は波打つ。

1073 は土師器鉢である。復元口径 22.5 ㎝を測る。口縁部は外側に短く折り返し、外側に作り出した面に凹線が巡る。内面にはケズリ痕や指頭圧痕が残る。

1074・1075 は平底鉢である。1074 は口径 10.7 ㎝、器高 12.6 ㎝を測る。体部中央よりやや上に最大径が位置する。表面の摩耗によって細かな調整は不明である。1075 は平底の体部下半で、やや下膨れ気味の形状である可能性がある。底部付近に黒斑が存在する。外面上半にはハケ調整を施す。

1076・1077 は土師器小型壺である。1076 は復元口径 8.9 ㎝を測る。口縁部は直線的に外傾し、

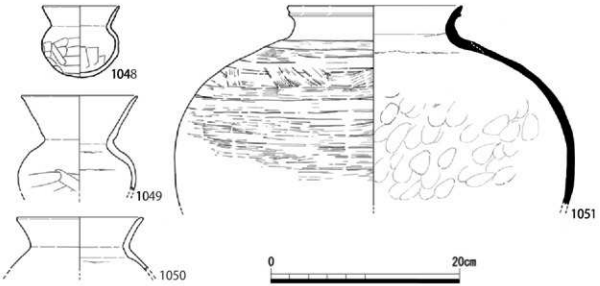


図80　SD161 出土　土器（S＝1/4）

端部は丸くおさめる。頸部内面に指頭圧痕が見られる。1077 は復元口径 10.0 ㎝を測る。全体に厚手の作りで、内面に粘土紐痕が明瞭に残る。

1078 は弥生土器の短頸壺である。口径 14.0 ㎝を測る。肩部外面には直径 0.7 ㎝大の竹管文を並べる。外面は縦方向のハケ調整の後に口縁部にヨコナデを施す。体部内面にはケズリを施す。

1079～1084 は土師器甕である。1079～1082 は口縁部の破片である。1079 は復元口径 14.7 ㎝を測る。口縁部は内湾して立ち上がり、端部は肥厚させて内傾する面を作り出す。内外面とも強いヨコナデを施す。1080 は復元口径 15.2 ㎝を測る。やや厚く短い口縁部である。内外面とも強いヨコナデを施し、一部はハケ状の見た目となる。1081 は直線的に立ち上がる口縁部で、復元口径 16.8 ㎝を測る。口縁端部は内面に肥厚させて上に面を作り出し、凹線を巡らせる。1082 は復元口径 27.9 ㎝を測る。口縁部はわずかに外傾して直線的に立ち上がる。内外面ともハケ調整を施す。1083 は復元口径 13.3 ㎝を測る。球形の体部に、直線的に外傾する口縁部をもつ。口縁端部は小さく外傾させた上で丸くおさめる。口縁部には強めのヨコナデを施しており、外面に凹線が残る。体部外面には粗いハケ調整を施す。ハケの方向のまとまりは上半と下半で異なる。1084 は口径 15.3 ㎝を測る。肩の張った体部に、直線的に外傾する口縁部をもつ。全体に摩耗が激しいが、外面の一部でハケ調整が確認できる。内面には指頭圧痕が多数残る。

1085～1087 は土師器二重口縁壺である。1085 は復元口径 16.9 ㎝を測る口縁部である。口縁下段はやや内湾気味、上段は外反する形状である。口縁端部は幅広の面をもつ。1086 は口径 15.0 ㎝、器高 33.1 ㎝を測る。体部はやや長胴で、中程の位置に最大径が位置する。口縁部は、下段がやや内湾気味に立ち上がり、上段が外反する。体部は内外面ともハケ調整を施す。口縁部はヨコナデを施す。外面には黒斑が存在する。1087 は口径 19.8 ㎝、器高 42.2 ㎝を測る大型である。体部は中央より上に最大径が位置する。口縁部外面の段は曲線的で、内面も緩やかである。口縁端部はつまみ上げる。体部には幅広のハケ調整を施す。内面はケズリを施す。

1088～1093 は土師器甕である。1088 は復元口径 13.9 ㎝、残存高 22.6 ㎝を測る。やや肩の張った球形の体部に、直線的に外傾する口縁部をもつ。口縁端部は内側に肥厚させる。口縁部はヨコナ

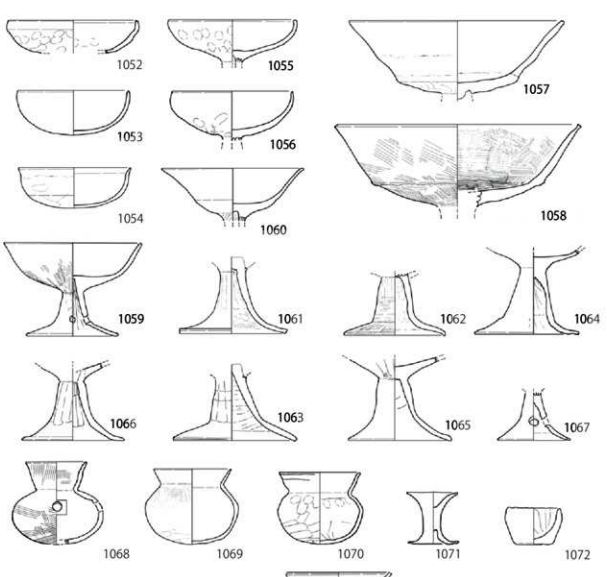


図 81　SR525 上層出土　土器①（S = 1/4）

デで仕上げており、内側には鈍い稜が見られる。外面の肩部以下には煤、内面の下半には炭化物が付着する。1089 は口径 14.4 ㎝、残存高 23.5 ㎝を測る。口縁部は直線的に外傾し、端部はやや尖り気味におさめる。体部外面には異なる方向の粗いハケ調整を全体に施す。下半外面には煤が付着する。1090 は口径 18.5 ㎝、器高 29.0 ㎝を測る。ほぼ完形である。底部がやや平底気味の体部に、内湾して立ち上る口縁部をもつ。口縁端部は内傾する面を作り出す。体部外面はハケ調整の後、上半部には斜め方向にナデ調整を施す。1091 は口径 17.8 ㎝、器高 30.1 ㎝を測る。口縁部は直線的に外傾し、端部は小さく外側に折る。外面は体部全体にハケ調整を施し、頸部より上はナデ調整を施す。外面には黒斑が存在する。内面は指頭圧痕が多数残る。1092 は口径 20.0 ㎝、器高 34.9 ㎝を測る長胴甕である。ほぼ完形である。口縁部は外反気味に開き、端部は外側に面をもつ。体部には個々の単位が長

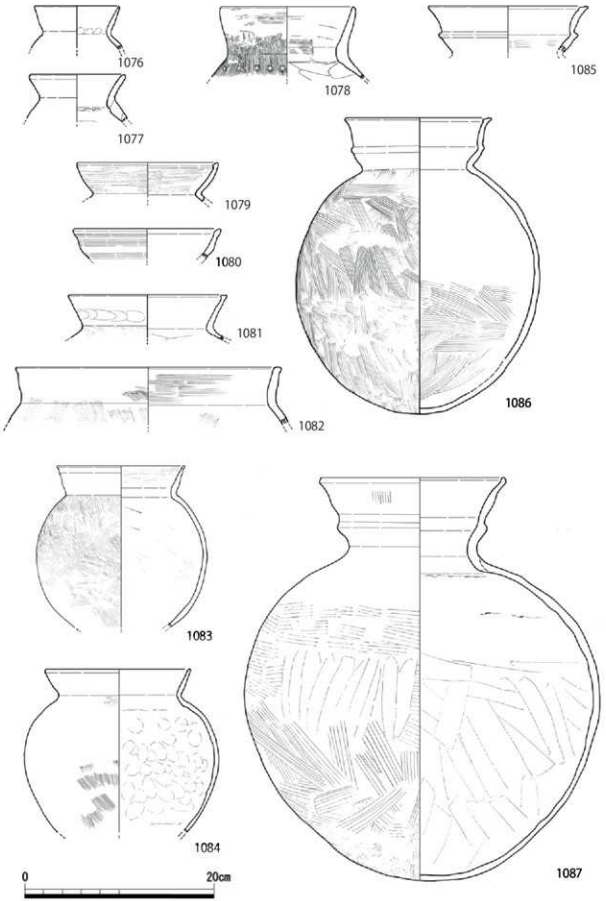


図 82　SR525 上層出土　土器②（S = 1/4）

いハケ調整を施す。二ヶ所に黒斑が存在する。内面の口縁部にも幅広のハケ調整を施す。1093は口径19.0㎝、器高30.8㎝を測る。長胴気味の体部に、直線的に開く短い口縁部をもつ。形状は全体に丸みを帯びる。外面は全体に大きなヘラ状工具によるケズリを施す。内面はケズリに近い指ナデを施す。

1094～1097は韓式系土器の可能性がある土器である。1094は甕の底部である。形状は平底気味で、外面には全体に格子目タタキを密に施す。内面には指頭圧痕が残る。1095は平底鉢の底部である。外面は丁寧なケズリで整える。1096は把手である。幅広で薄く、中実の把手である。1097は甑の把手である。把手の先端部は欠失しているが、上方に反り上がる形状である。把手上面には線状の切り込みがあるが、深さは0.1㎝にも満たない。

1098は竈を正面から見て庇の右下端部の破片である。わずかに体部も遺存する。残存高26.5㎝を測る。庇の幅は最大7.2㎝を測る。各端部には面取りを行う。内面下部には煤が付着する。1099も竈の一部である可能性がある板状の土器剥片である。

1100～1116は須恵器である。古墳時代中期後半の他、後期に属すと考えられる資料も含む。

1100～1102は蓋坏の蓋である。1100は口径が大きく、扁平な形状である。外面のヘラケズリは粗い。1101は口縁部中段外面に二条の凹線が巡る。内面にも高い位置に段が付く。1102は裾広がりの形状で、端部は平坦である。

1103～1108は蓋坏の身である。1103は丸みを帯びた形状で、外面には底面中央を通る直線のヘラ記号を刻む。1104は復元口径12.6㎝、器高3.3㎝を測る。口縁は直線的に内傾する。1105は口径12.4㎝、器高4.2㎝を測る。1104・1105の色調は淡灰色である。1106は底部から直線的に開く体部に、短く内傾する立ち上がりをもつ。内面は非常になだらかである。1107は受部が斜め上方に突出し、内側の溝が深い。1108は小型の身で、底部外面には細かな指頭圧痕が残る。

1109・1110は高坏である。1109は長脚で、下半部に方形透かしを穿つ。破片であるため不確かだが、方向は4方向であると考えられる。内面には絞り痕が残る。1110は円形透かしを3方向に穿つ。裾よりやや上に丸みのある段を貼り付けており、透かしの下端は段に掛かる。

1111は壺の口縁部片である。1112は二重口縁壺である。外面は口縁部から体部上半にかけて回転ナデで仕上げ、体部下半にはケズリ痕が残る。内面は体部から頸部にかけての範囲にケズリ痕が残る。

1113は甕である。口縁部は二重口縁状であるが、全体に歪みが大きいこともあり、外観は一重のようにも見える。上段外面には波状文を巡らせる。外面体部は底部を除き右肩上がりのタタキを施す。底面付近のタタキは乱雑である。内面には薄く青海波文の当具痕が存在する。

1114は短頸壺である。蓋と重ね焼きしていたようで、緑色の自然釉が肩部にのみ付着している。平底であるが、全体に歪みが大きく、据え置くと口縁部が斜めになる。1115は甑である。尖底で頸部は細い。外面は頸部から体部上半にかけての範囲にカキ目状の強い回転調整を施す。底面から肩部の一部に火襷状の変色が存在する。1116は器台脚部の中段付近の破片である。波状文の上から直径1.3㎝のコンパス文が押される。コンパス文は横に約4.5㎝間隔で並ぶ。

1117は灰白色の砂岩製の磨石・石皿である。残存長8.8㎝、残存幅6.0㎝、厚さ4.9㎝、重量377.4ｇを測る。原形ははっきりしないが、厚みのある平材状であったと推測される。擦痕や敲打痕が存在する。天井面や側面は残部全てに約1㎝幅の窪みがある。1118はサヌカイト製の石錐である。

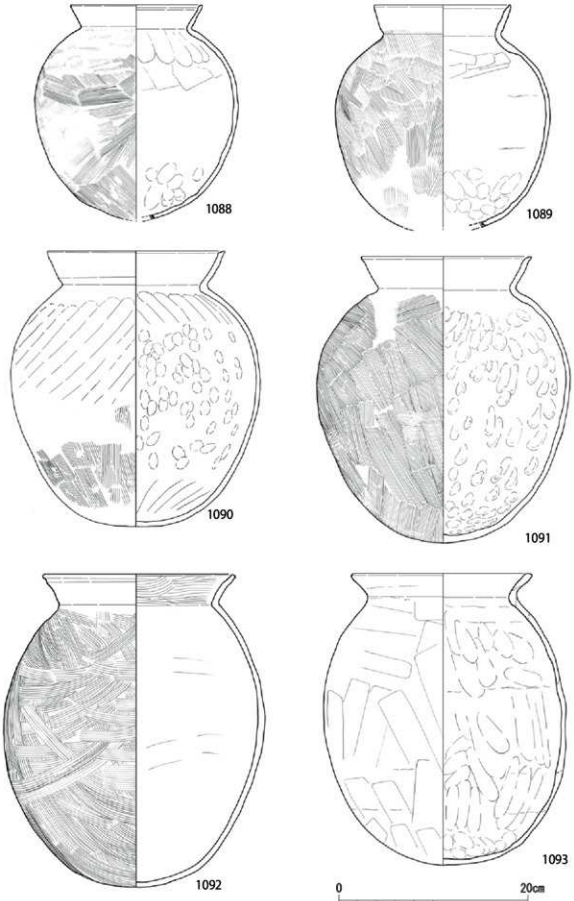


図83　SR525 上層出土　土器③（S = 1/4）

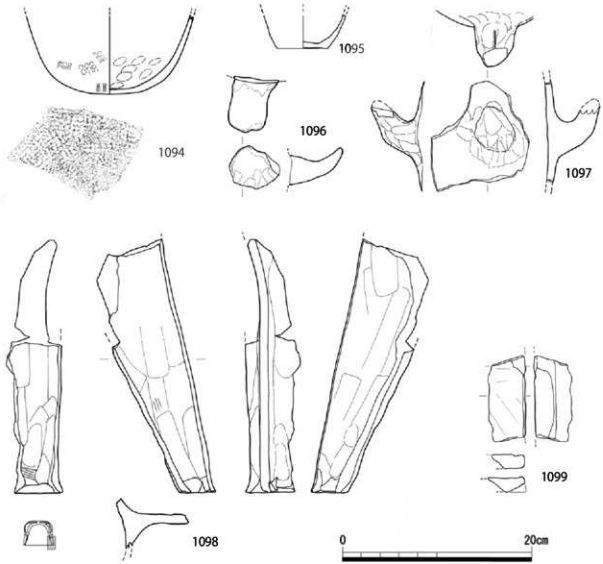


図 84　SR525 上層出土　土器④（S = 1/4）

三角形の剥片を利用しており、上部には原石部分を残している。裏面には一次剥離面を多く残す。錐先の一辺は丁寧に二次調整されているが、対面側は殆ど加工されていない。

SR525 下層（図 86～88）

1119～1145 は土師器である。

1119～1124 は高坏である。1119 は底部から直線的に開く、ごく浅い坏部である。脚との接合部には粘土の継ぎ目や指頭圧痕が多く残る。外面に大きな黒斑が存在する。1120 は大型の高坏で、大きく外反して開く深い口縁部をもつ。外面には、やや鈍いが稜が存在する。内面体部には放射状のミガキを施す。下方から脚部を坏部底に差し込む形で接続した際に、体部中央が上方に膨らんでいる。1121 は裾部が低い位置で大きく広がる脚部である。外面はハケ調整で仕上げる。脚部内面に棒状工具を挿入して坏部との接続を行っている。1122 はラッパ状に広がる脚部である。外面は縦方向のケズリで成形した後に、ハケ調整とナデ調整で仕上げる。1123 は丸みのある椀形の坏部である。坏部は内外面ともヨコナデ調整で仕上げる。脚部は円形透かしを 3 方向に穿つ。脚部裾端部は下方に小

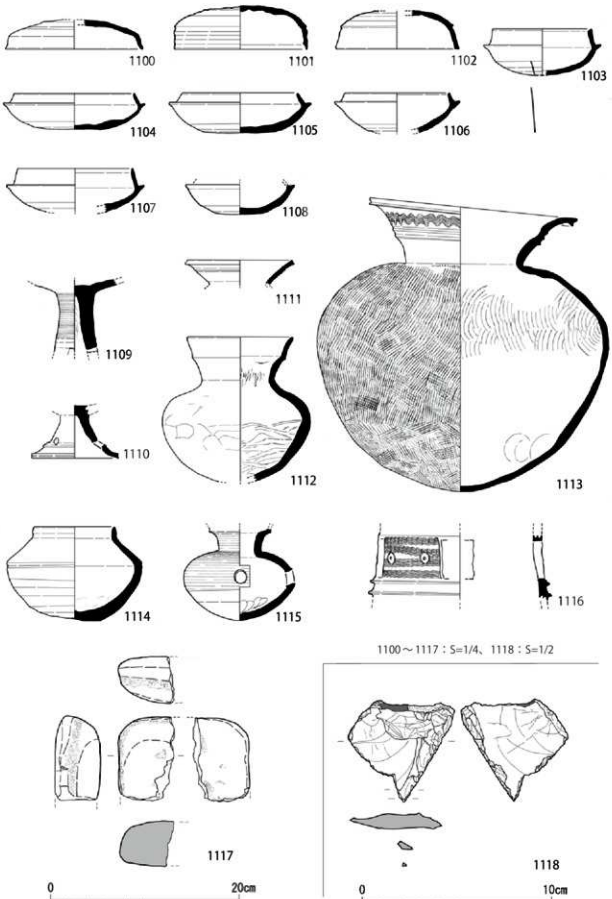


図 85　SR525 上層出土　土器⑤・石器（S = 1/4・1/2）

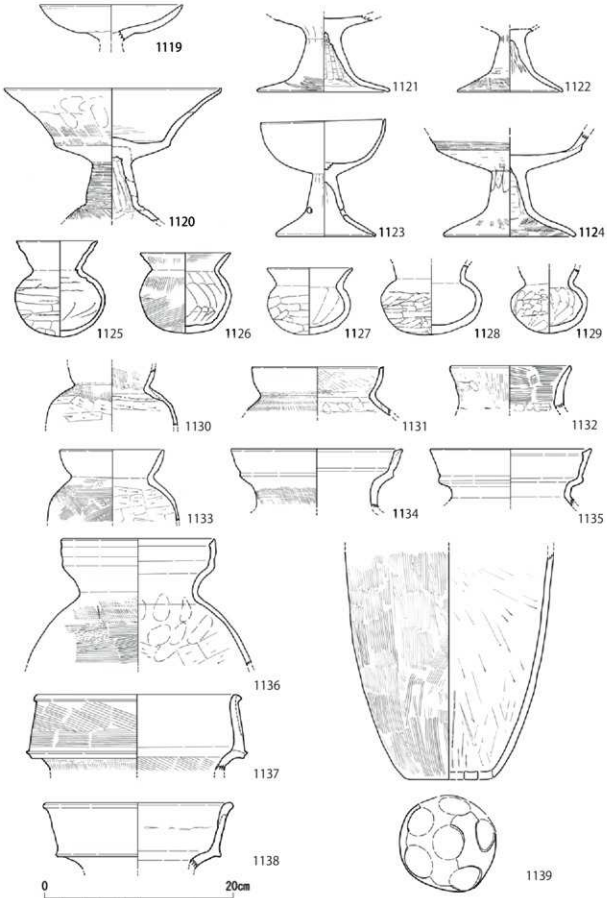


図86　SR525 下層出土　土器①（S = 1/4）

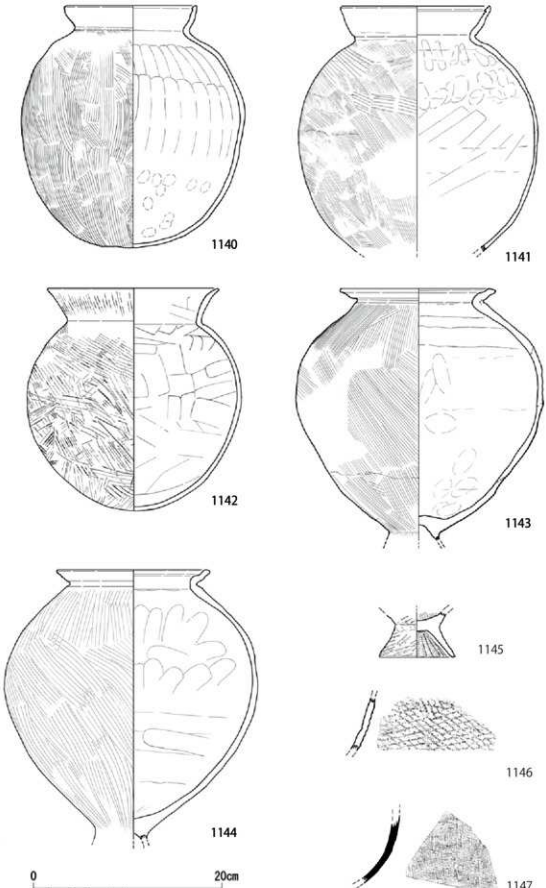


図87　SR525 下層出土　土器②（S = 1/4）

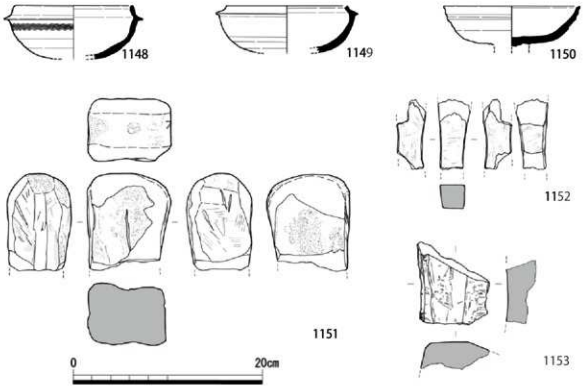


図 88　SR525 下層出土　土器③・石器（S = 1/4）

さく折り返す。1124 は坏部外面に稜がある高坏である。外面は体部から筒部にかけての範囲に強いケズリを施す。筒部下半はケズリ痕をナデ調整で丁寧に消しているが、上半部は未処理のまま残る。

1125～1129 は小形丸底壺である。1125 は口径 8.4 ㎝、器高 10.1 ㎝を測る。頸部が細く口縁部が大きく開く、壺に近い形状である。体部は内外面をケズリで仕上げており、粘土紐痕が多く残る。内面の頸部には体部と口縁部の接合痕が明瞭に残る。1126 は復元口径 9.3 ㎝、器高 8.5 ㎝を測る。やや平底の扁球形の体部に、直線的に開く口縁部をもつ。外面には粗いハケ調整を施す。1127 は他より小型であるが大きさに比して厚手の作りで、重量感がある。体部は外面にケズリ痕、内面にヘラケズリ痕が明瞭に残る。1128 は幅広の体部に、外反気味に立ち上がる口縁部をもつ。外面は他の土師器と同様の淡橙色を呈するが、内面は全体に炭が吸着しており黒色化している。体部は外面の大部分に粗いケズリ痕が残る。1129 は内外面とも強いナデ調整で仕上げており、一部はケズリ状に痕が残る。底部に黒斑が存在する。

1130～1133 は壺である。1130 は頸部付近の破片で、内面には体部と口縁部の接合痕が厚く明確に残る。肩部外面には縦方向のハケ調整を施す。1131 は口径 13.9 ㎝を測る。外面には全体に煤が付着する。1132 は口径 12.8 ㎝を測る。外面には縦方向の、内面には横方向のハケ調整を施す。1133 は強くヨコナデを施して明瞭な頸部を作り出している。内外面ともに広範囲に煤が付着する。

1134～1138 は二重口縁壺である。1134 は口縁部で、下段は垂直に立ち上がって上部が外側に開く。外面はヨコナデで仕上げるが、頸部には縦方向のハケ調整が多く残る。1135 も口縁部のみで、復元口径 17.0 ㎝を測る。下段は短いが大きく外反し、上段は直線的に外傾する。口縁端部は内側に肥厚させて内傾する面を作り出す。稜は内外面とも明瞭である。1136 の口縁部は下段と上段で明瞭に分かれるが、稜は丸く不明瞭である。体部は長胴であると考えられる。口縁端部は内側に肥厚し内傾する面を作り出す。

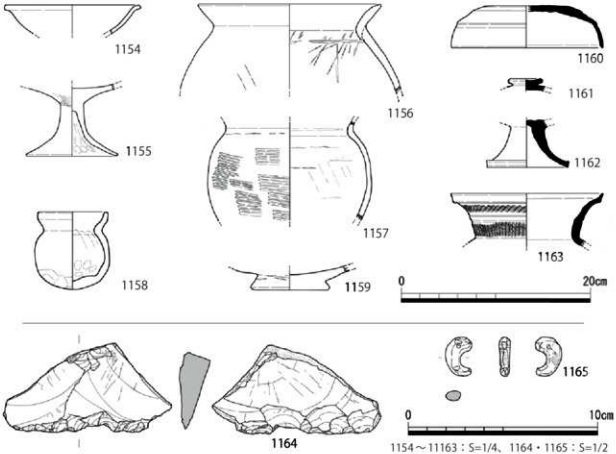


図 89　下層遺構面出土　土器・石器・石製品（S ＝ 1/4・1/2）

1137 は口径 21.9 ㎝を測る大型の二重口縁壺である。山陰系土器である。口縁端部は外側を肥厚させた上で丸くおさめる。外面はハケ調整の後、ヨコナデで仕上げる。外面には黒斑が存在する。1138 も同様の二重口縁壺である。1137 と異なって上部が開く形状である。復元口径 19.4 ㎝を測る。口縁部上段の中程に明瞭な粘土接合痕が残る。

1139 は甑である。破片であるため把手の位置と形状は不明である。平底だが縁辺の稜は丸みを帯びる。蒸気孔は中央の円形孔の周囲に楕円形孔を 5 つ配すると考えられる。外面には縦方向のハケ調整を施す。内面にはケズリ痕が明瞭に残る。

1140～1145 は甕である。1140 は口径 13.8 ㎝、器高 25.6 ㎝を測る。口縁部の一部を除きほぼ完形である。やや長胴の体部に、内湾して立ち上がる口縁部をもつ。口縁端部は内側に肥厚させて内傾する面を作り出す。外面のハケ調整は縦方向が基本である。外面には煤が付着する。1141 は口径 15.8 ㎝、残高 25.8 ㎝を測る。口縁部は直線的に外傾し、端部は内側に肥厚させて内傾する面を作り出す。外面には広範囲に煤が付着し、一部には炭化物も存在する。1142 は口径 18.0 ㎝、器高 23.5 ㎝を測る。尖り底気味の体部に、外反するやや長い口縁部をもつ。外面のハケ調整は粗い。全体に煤が付着する。

1143・1144 は東海系の台付甕である。1143 は口径 16.5 ㎝、残存高 26.6 ㎝を測る。口縁部は厚く短く、わずかに S 字状のラインを描く。頸部の凹線は浅い。体部は肩部が張り出し、下半は台部に向かってすぼまる。1144 は復元口径 16.0 ㎝、残存高 28.4 ㎝を測る。口縁部は断面ではわずかに S 字状を成すが、外見上は直線に近い形状である。頸部の凹線は 1143 よりも幅広で深い。1145 は台部

である。底部径 7.8 ㎝を測る。裾は直線的に開く。台部内面にはハケ調整を施す。

1146 は韓式系土器の甕の破片である。外面に斜格子タタキが明瞭に残り、一部に黒斑が認められる。内面はナデ調整で、薄く煤が付着する。

1147 は外面に縄席文タタキを施す甕の破片である。色調は外面が須恵質の淡灰色、断面が淡橙色を呈し、須恵器の焼成不良品であるか、硬質に焼き上げられた韓式系土器であるのか判断が難しい。内面は薄くケズリを施す。

1148～1150 は須恵器である。1148 は蓋坏の身であると考えられる。ただし内面や受部に広く緑色の自然釉が付着しており、焼成時には単独で焼かれている。受部上面は下がり気味である。1149 も 1148 と同様な状態で自然釉が付着している。立ち上がりは短く内傾する。1148・1149 は古墳時代中期前半に遡ると考えられる。1150 は無蓋高坏で、脚部が貼付面で剝がれ落ちている。外面に回転ナデで幅広の凹線を巡らせる。

1151 は川原石を使用した砥石である。全面に使用痕が存在し、うち三面には面の中央に棒状具を研磨したと考えられる幅 1 ㎝前後の溝が存在する。また、より細い溝状の擦痕も一部の面に認められる。ごく一部であるが煤が付着する部分も存在する。1152 は両端が厚くなる形の棒状砥石の一部である。全面に使用痕が存在し、稜は明瞭である。1153 は白色系砂岩の砥石である。残存部だけで四面が存在し、多角形の角柱状砥石であったと考えられる。一部の面には直径 1 ㎜大の刺突痕のような窪みも複数存在する。

下層遺構面（図 89）

下層遺構面の清掃時や SX523・524 の全体像把握のために面的掘り下げを行った際に採取した遺物である。下層遺構や基本層序Ⅳ層中に由来すると考えられる遺物である。

1154～1156 は土師器である。1154 は鉢ないし高坏坏部の破片である。復元口径 14 ㎝を測る。器壁は 0.4 ㎝と薄い。1155 は高坏の脚部である。坏部との接続部分にはハケ調整を施す。1156 は甕である。復元口径 19.2 ㎝を測る。口縁部は厚く短い。内面には口縁部と体部との接合部分が段として存在する。

1157 は弥生土器甕である。外面には左肩上がりのタタキを施す。全体に粘土紐痕が多く残る。外面には黒斑が存在する。1158 は土師器壺である。球形の体部に、内湾して立ち上る口縁部をもつ。口縁部は二重口縁状である。全体に厚手の作りである。胎土に 0.1～0.3 ㎝大の暗赤褐色粒を非常に多く含む。1159 は弥生土器鉢の底部である。底部径 8.2 ㎝を測る。底面には種子等の圧痕と思しき窪みが存在する。

1160～1163 は須恵器である。1160 は蓋坏の蓋である。天井部は平坦である。内面中央には同心円状の当て具痕が残る。1161 は蓋のつまみである。扁平なボタン状のつまみで、くぼみの中央部がわずかに上方に膨らむ。上面には薄く自然釉が付着する。1162 は高坏の脚部である。透かしは無く、内外面とも回転ナデで仕上げる。1163 は壺の口縁部である。口縁端部は屈曲させて上方に短く立ち上げる。外面には二段に分かれて波状文を施す。

1164 はサヌカイトの削器である。全体の形状は三角形を呈する。上辺に自然面を残す。上方に剥片を打ち出した打点が確認できる。下辺には両面から二次調整を行って刃部を作っている。側辺に二次調整は行っていない。

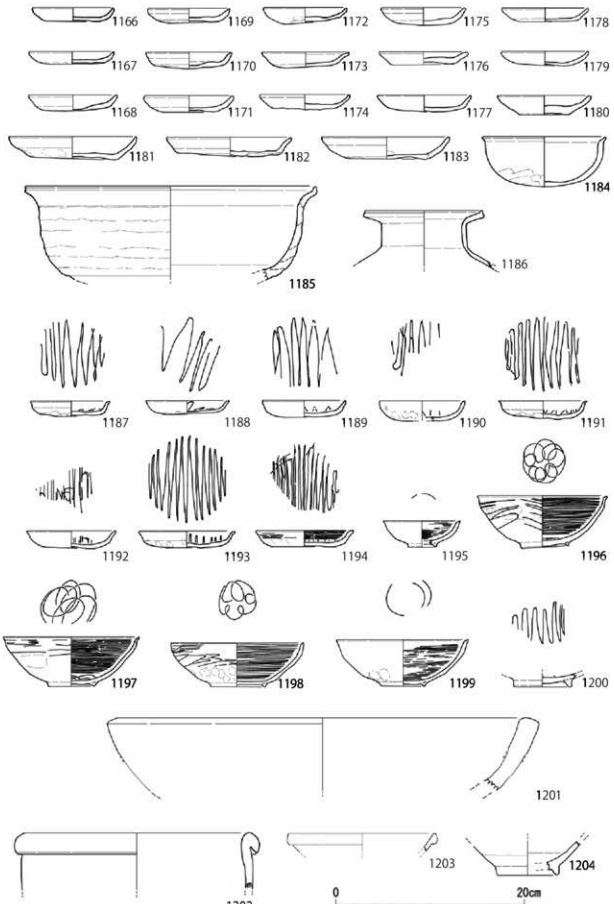


図 90　重機掘削時・排水溝掘削時出土　土器①（S = 1/4）

1165 は滑石製の勾玉である。長さ 22 ㎜、厚さ 4.9～5.4 ㎜、重量 1.82g を測る。片側穿孔で孔径 1.5 ㎜である。全体に研磨痕が観察でき、滑らかな仕上がりである。

重機掘削・排水溝掘削時（図 90・91）

基本層序Ⅰ～Ⅲ層を重機で除去した際と遺構面下に調査区排水溝を人力掘削した際に採取された遺物である。出土遺物の全体像と同じく、12 世紀前後や古墳時代および、それ以前の遺物が中心である。

1166～1186 は土師器である。

1166～1183 は皿である。1166～1179 は手づくね成形の小皿で、口径 8.4～9.7 ㎝、器高 1.3～1.9 ㎝を測る。1166・1167 は口縁部にヨコナデを施し、端部を上方に小さく引き上げる。1179 も同様の調整が施され、端部はわずかに開く。

1168～1178 は口縁部にヨコナデを施し、底部との境に稜が存在する。口縁端部を開き気味に立ち上げるもの（1168～1170・1173・1175・1176・1178）、口縁端部を丸くおさめるもの（1171）、口縁端部を上方に引き上げるもの（1172・1174・1177）がある。底部は内外面ともナデ調整を施す。1168～1170 は底部内面に指頭圧痕が残る。

1180 はロクロ成形の小皿で、底部は糸切りである。手づくね成形の皿よりも厚手である。

1181～1183 は手づくね成形の大皿である。1181・1183 は口縁部上半に強いヨコナデを施し、端部は上方に引き上げる。色調はにぶい黄灰色を呈する。1182 は口縁部全体にヨコナデを施し、開き気味に立ち上げる。底部内面には指頭圧痕が残る。底部外面に薄く貼り付けた粘土板の剥落痕が存在する。色調は明黄橙色を呈する。

1184 は坏である。口径 12.8 ㎝、器高 5.3 ㎝を測る。口縁端部は内傾する面をもつが稜は鈍い。内外面とも口縁部はヨコナデ調整、底部は不定方向のナデ調整で仕上げる。1185 は大型の鉢である。復元口径 30.9 ㎝を測る。全体に厚手の作りで重量感がある。下端部に凹線を巡らせる段差があり、台や脚のようなものが存在してしていた可能性もある。内面全体と頸部外面より上はナデ調整を施すが、他の部分は細かな調整は施されず粘土紐痕が非常に明瞭に残る。1186 は壺である。頸部は垂直に立ち上がり、口縁部は外側に開く。表面の摩耗により細かな調整は不明である。

1187～1200 は瓦器である。1187～1194 は瓦器皿である。1187～1189 は口径 8.3～8.7 ㎝を測る小型である。いずれも完形品である。1187・1188 は口縁端部を外側につまみ出す。1189 は口縁部が開き気味に立ち上がる。1190 は復元口径 8.9 ㎝を測る破片で、全体の歪みが非常に大きい。1187～1190 は見込みに間隔が広めのジグザグ状暗文を施す。

1191～1194 は口径 9.3～10.2 ㎝を測り、口縁端部は外側につまみ出す。見込みには端々が尖り気味で間隔の狭いジグザク状暗文を施す。

1195 は小型の瓦器埦である。全体の約 4 割が遺存し、復元口径 8.0 ㎝、器高 2.8 ㎝を測る。内面には圏線状のミガキを施す。

1196～1200 はいわゆる大和型の瓦器埦である。口径 13.6～14.2 ㎝を測る。1196 は内面の圏線ミガキが密で、見込みには整然とした連結輪状暗文が施される。外面は体部上位 2/3 までの範囲を 3 分割でミガキを施す。高台は断面三角形状である。1197～1199 は内面の圏線ミガキの隙間が大きい。見込みには連結輪状暗文を施すが、1196 よりも崩れた形である。1199 は同心円状暗文である可能性がある。高台は断面三角形である。1200 は底部の破片で、丸みのあるジグザグ状暗文を施す。

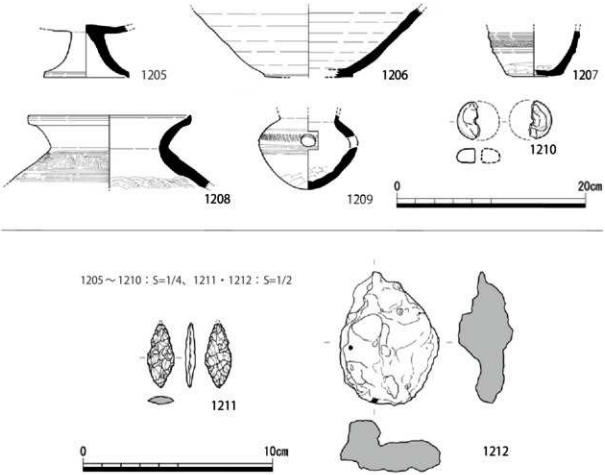


図 91　重機掘削時・排水溝掘削時出土　土器②・石器・鉄滓（S＝1/4・1/2）

高台は断面台形の頑丈な作りである。

1201 は瓦質土器の鉢である。復元口径 43.2 ㎝を測る。口縁端部で厚さ 2.1 ㎝を測る厚手である。内外面とも表面に剥落部分が多い。

1202 は陶器の甕である。復元口径 23.5 ㎝を測る。口縁部は外側に折り返し、折り返した内側をヘラ状工具で削っている。残存する全体に灰黄色の釉を施すが、内面は釉にむらが見られる。

1203・1204 は白磁碗である。1203 は玉縁状の口縁部である。全面にわずかに緑色がかった灰白色の釉が付着する。1204 は底部片である。外面の上端部と内面の一部に釉が付着する。全体に淡黄緑色を呈する。

1205～1209 は須恵器である。1205 は低脚高坏の脚部である。内外面とも回転ナデで仕上げる。透かしは無い。1206 は鉢の底部である。内外面とも回転ナデで仕上げ、内面には凹凸が多く残る。底部は未調整である。1207 はカップ形の坏である。把手が存在した可能性もあるが遺存していない。体部下端から底部にかけての外面は粗いケズリを施す。断面三角形の凸帯を二条巡らせ、その間に波状文を施す。1208 は壺である。口縁部は外反して立ち上がる。外面の体部はタタキの後、横方向のカキ目を施す。1209 は鼎である。体部は最大径が上半に位置し、尖り底である。

1210 は土錘である。直径約 4.5 ㎝、厚さ 1.5 ㎝、重量 13.8g を測る円盤形で、中央に直径 0.8 ㎝の円形孔が存在する。一般的な土師器と同様の胎土である。

1211 はサヌカイトの有茎石鏃である。長さ 3.4 ㎝、幅 1.4 ㎝、厚さ 0.4 ㎝、重量 1.9 g を測る柳

葉形である。各面ともに素材面を残さず、全面に調整が施されている。断面はやや膨れた菱形である。

1212 は鉄滓である。気孔は少なく木炭痕も無い。重量 101.4g を測る。表面の広範囲に黒色の鉄分が露出している。

第Ⅳ章　総括

第１節　調査成果のまとめ

今回の発掘調査で確認された遺構は、時代別では古墳時代、平安時代後期～鎌倉時代初頭、それ以降の時期に大別される。それぞれ下層遺構、中層遺構、上層遺構に対応する。出土遺物の時期も古墳時代と中世が大部分を占める。以下に上層から順に、調査の成果をまとめる。なお、その他の時期に属す遺構・遺物も少量ながら存在しており、上記の時代との関係の中で述べる。

上層遺構は、いわゆる素掘り耕作溝群である。時期は中層遺構との関係から 13 世紀以降であると考えられるが、上層遺構に属す出土遺物が非常に少なく、細かな時期は不明である。耕作溝は、調査区南東部に分布する斜方向の一群と、調査区全域に分布する正方位を志向する一群とが存在する。前者の方が古い遺構である。斜方向の耕作溝群は、調査地より南東に存在する旧河道との関係する土地利用の在り方であると考えられる。旧河道は条里施行以後の中世前半のうちに埋没したようであり、少なくとも斜方向の一群は、中層遺構の形成からそれほど時期を経ない段階に形成された可能性が指摘できる。13 世紀以降は基本的に耕作地としての利用が主であったようである。

中層遺構は平安時代後期～鎌倉時代初頭、特に 12 世紀代を中心とする時期の遺構群である。調査区北半には区画溝・建物・塀・井戸・屋敷墓（土坑墓）などで構成される屋敷地と考えられる遺構群が存在する。調査区中央を横断する東西溝 SD153・343・421 を境に南北で土地利用の在り方が大きく変化するようで、北側が屋敷地となる。SD156 や SD154 が屋敷地の南西隅にあたると考えられるＬ字形の溝で、その内側（北～東側）に柱穴を含む多数のピットや土坑が存在する。構造や規模を把握しえた建物は少ないが、存在する遺構の量や重複関係から、建物・塀の建て替えや溝の掘り直しや追加といった整備が行われたことがうかがえ、屋敷地の利用が一定期間以上続いたと考えられる。屋敷地内の遺構、特に溝からは土師器皿と瓦器椀・皿を中心とする多数の遺物が出土している。輸入品と考えられる磁器も破片が中心であるが一定量出土している点も特徴的である。出土遺物の時期は 12 世紀中頃～末が多く、この時期に最盛期があったと推測される。ただし 11 世紀～12 世紀前半の遺物も存在し、屋敷地を含む周辺一帯の土地利用は、この時期に開始されたと考えられる。また、遺構埋土上層には 13 世紀前半の遺物も一部に含まれており、屋敷地の廃絶時期は 13 世紀に入ると考えられる。

屋敷地より南側にも量は限られるが同時期の遺構が展開している。上層遺構の斜方向溝群と同様、調査地から南東に存在する河道と並行ないし直交する向きに構築された遺構も存在する。

土坑墓であると考えられる遺構が、屋敷地内で３基（SK284・295・455）、屋敷地外で１基（SK166）を検出している。前者については、いわゆる「屋敷墓」と理解できるものであるが、敷地外にも土坑墓が構築されている点も注意が必要である。

下層遺構は古墳時代を中心とする遺構群である。調査区東辺沿いを南北流する河道と、その西岸に

位置する土坑・溝が主な遺構である。遺構の時期は古墳時代中期後半が中心で、遺物もこの時期のものが大量に出土している。その他、古墳時代前期後半～中期前半の遺構も存在する。これらの遺構からは弥生時代の遺物も少量出土しており、周辺には弥生時代に遡る可能性のある溝も存在するが、明確ではない。河道 SR525 は、周辺の発掘調査においても確認されている古墳時代河道と同一であると考えられる（図 92）。弥生時代から古墳時代にかけての遺物が出土しており、最終的に古墳時代後期に埋没したと考えられる。河道 SR525 からの出土遺物も古墳時代中期後半が最も多い。

下層遺構で注目すべき遺構として SX523 と SX524 が挙げられる。どちらも最大長 10m を超える大型の不整形土坑で、河岸に並んで存在する。中央部付近は方形に落ち窪む。古墳時代中期後半の遺構で、非常に多くの遺物が出土している。大量の土器の中に陶質土器・韓式系土器が含まれる他、多数の製塩土器、玉類、鍛冶関連遺物など、特徴的な遺物も多い。この 2 基の土坑が果たしていた具体的な役割については明確にしえないが、廃棄土坑や何らかの作業空間のような場所であった可能性が考えられる。

第 2 節　遺構・遺物・遺跡の評価

今回の調査で確認した遺構・遺物および遺跡全体に関わる評価について、周辺および他の調査例と合わせて述べる。

中世の屋敷地として

12 世紀代の屋敷地の一角であると考えられる遺構群を確認している。おそらくは周囲に区画溝を巡らせる方形の敷地をもつ屋敷地であったと推測される。調査地点は屋敷地の南西隅にあたると考えられる。その範囲に存在する構成要素として複数の区画溝、多数の建物・塀、井戸、屋敷墓が挙げられる。また、区画溝と接続する広い落ち込み状の遺構も見られ、小さな池状になっていたと考えられる部分も存在する。

屋敷墓は区画内に 3 基存在する。棺蓋の上に炭を敷き詰めたと考えられる埋葬方法を採っていた点は共通する。一方、埋葬方位には差異が見られる。屋敷墓と見られる遺構は、調査地から北東約 700m に位置する曲川遺跡馬場地区の調査（橿教委 2001－8 次）でも 1 基発見されている。これは 11 世紀中頃の建物の傍に構築されている。

出土遺物の面では、土師皿や瓦器埦・皿といった食器が多数出土している。そこに羽釜や鉢などの調理具が加わる。また、白磁碗を中心とする輸入陶磁器が複数出土する点も注目に値する。いずれも破片状態であり正確な数量は把握が難しいが、少なくとも 10～20 個体は存在していたことは確かである。高級品と言える輸入陶磁器が他の土器と混ざって多数破棄されている点は、屋敷地の居住者の地位や性格を示す要素である。

調査地の周辺では、古代末～中世の屋敷地遺構が他にも曲川遺跡（橿教委 2001－4 次、2002－12 次など）や新堂遺跡寺地垣内地区（橿教委 2004－7 次）で発見されている。いずれも今回の調査地よりも北方に位置する。これらの共通点として、現在は埋没している旧河川の近くに立地すること

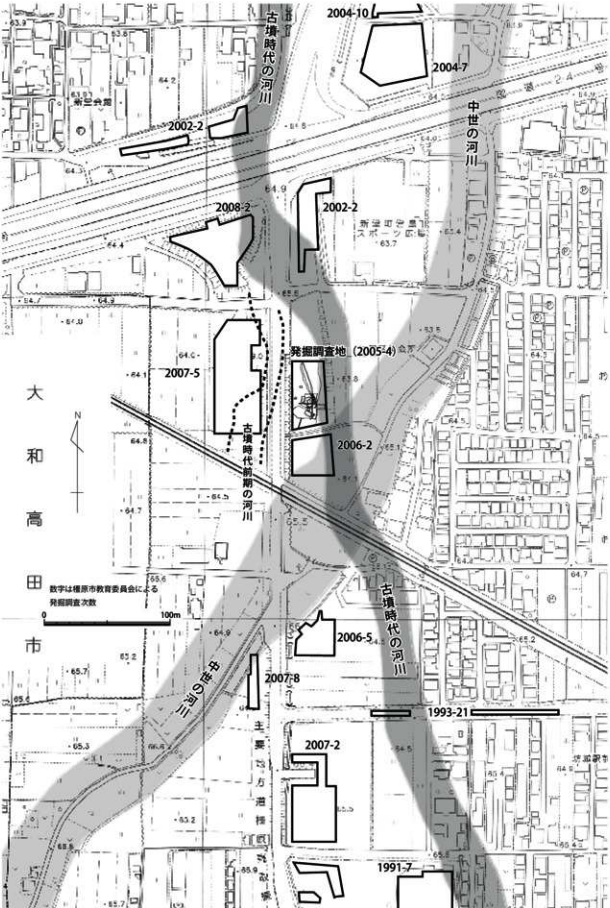


図 92　新堂遺跡・東坊城遺跡周辺の調査地と河道復元図（S=1/3,000）

が挙げられる。また、全体の平面形が方形であると推測される区画溝を伴う点も共通する。区画溝は屋敷内の雑排水と境界を明示する程度の小規模なものが中心で、後に奈良盆地で多く見られるようになる環濠集落の濠とは一線を画す。これらの屋敷地の在り方は、環濠集落成立以前の屋敷・集落の在り方の一様相、また調査地周辺地域の特色を示す要素として重要と言える。

SX523・524の出土遺物から

大型土坑SX523とSX524からは古墳時代中期後半の遺物が大量に出土している。この時期・地域に通有の土師器や須恵器に加え、陶質土器、韓式系土器、製塩土器、鍛冶関連遺物といった非常に特徴的な遺物が含まれている。これらの遺物は今回の調査地点、さらに新堂遺跡の古墳時代集落の性格を特徴付ける資料として扱われることが多い。以下に、その内容をまとめる。

陶質土器は、可能性があるものを含めて複数が出土している。871・872は火焔形透かしの無蓋高坏である。660（高坏脚部）と875（器台裾部）も火焔形透かしである可能性のある破片資料である。どちらも焼成具合や色調が陶質土器に近い。火焔形透かしは大韓民国慶尚南道咸安郡周辺の土器の特徴とされる。火焔形透かし土器の日本列島での出土は10例程度が知られるのみで、近隣では布留遺跡（奈良県天理市）や久宝寺遺跡（大阪府八尾市）の出土例がある。その中において同一地点から複数の火焔形透かし土器が出土したことは注目される要素と言える。陶質土器は他に583のコップ形土器が出土している。また、他の遺構にも目を向けると中期前半に遡ると考えられるSD161からも陶質土器1051（甕）が出土している。

渡来要素を含む軟質土器として韓式系土器が一定量出土している。器種は甑が最も多く、甕や鍋、鉢も存在する。また、移動式の竈が複数出土している点も注目される。時期的背景もあり韓式系土器と土師器の差が不明瞭な部分が多く、個体によって韓式要素の強弱に差が見られる。少なくとも竈や甑を用いる新来の調理様式を積極的に取り入れていることが窺える。

製塩土器は通常の生活における使用量を遥かに上回ると考えられる量が出土している。出土した製塩土器は基本的に破片状態で全体が残るものは稀であり、流通段階の集積ではなく消費後の姿であると考えられる。塩(及び製塩土器)の消費地での在り方の一様相を示すものとして興味深い事例である。多量の塩の用途については、日常生活での利用の他、馬の飼育や各種工房での作業との関連も想定可能であるが、検出遺構などの面から直接的に結び付けることのできる状況は確認されていない。出土した製塩土器の形態には、ある程度の偏りはあるものの複数のバリエーションが見られる。生産地については紀伊を含む大阪湾沿岸の広い範囲、複数の場所に求められる可能性がある。

鉄滓や羽口といった鍛冶関連遺物が出土している。周辺からも多く出土している砥石もこれに関係する可能性がある遺物である。新堂遺跡の別の地点や東坊城遺跡など周辺の調査においても同様の遺物が出土することが多く、この地域の特徴を示す遺物として挙げられることが多い。その一方で、工房など製作空間に直接的に結び付くような遺構は発見されていない。新堂遺跡の集落本体部分と同様、周辺における今後の調査の課題と言える。

以上のように、渡来系文物の取り入れや手工業生産の存在など注目すべき要素が多く見られ、今後の古墳時代集落研究においても重要な資料となると言える。

報 告 書 抄 録

ふ り が な	しんどういせき２ ―けいなわじどうしゃどう「ごせくかん」けんせつにともなうはっくつちょうさほうこくしょ―
書　　名	新堂遺跡Ⅱ　―京奈和自動車道「御所区間」建設に伴う発掘調査報告書―
シリーズ名	橿原市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第 14 冊
編 著 者 名	橿原市教育委員会　石坂泰士
編 集 機 関	橿原市教育委員会事務局　文化財課
所　在　地	〒643-0826　奈良県橿原市川西町 858-1　TEL 0744-22-4001　FAX 0744-26-1114
発行年月日	西暦 2018 年 3 月 9 日

所収遺跡	所在地	コード		北　緯	東　経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
新堂遺跡（しんどう）	奈良県（ならけん）橿原市（かしはらし）新堂町（しんどうちょう）	29205	14C545A	34°29′45″	135°45′41″	2005/9/14 ～ 2005/12/20	1,600 ㎡	京奈和自動車道建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
新堂遺跡	集落	弥生時代 古墳時代前期 古墳時代中期 平安時代後期～鎌倉時代初頭 中世以降	溝 溝 大型土坑・溝・河道 区画溝・井戸・掘立柱建物・塀・土坑墓 耕作溝	弥生土器・石器 土師器 土師器・須恵器・陶質土器・韓式系土器・製塩土器・鉄滓・玉 土師器・瓦器・磁器	橿教委 2005-4 次調査

要　約

古墳時代と平安時代後期～鎌倉時代初頭を中心とする時期の遺構を確認している。

古墳時代の遺構は中期後半が中心で、河道沿いに２基の大型土坑や溝などが存在する。出土遺物の時期も中期後半が主である。河道は周辺の発掘調査においても確認されている古墳時代河道と同一のもので、最終的に古墳時代後期に埋没している。大型土坑からは土師器、須恵器、陶質土器、韓式系土器、製塩土器、鍛冶関連遺物、玉類、石製品など多数の遺物が出土している。陶質土器には火焔形透かしをもつ無蓋高坏２点やコップ形土器を含む。韓式系土器には甑、鍋、竈などがあり、いわゆる渡来系要素が多く確認できる。製塩土器も多量に出土している。これらの出土遺物は、新堂遺跡及び周辺地域一帯の特徴を示すものとして扱われることが多い資料である。

平安時代後期～鎌倉時代初頭の屋敷地であると考えられる遺構群の存在を確認している。屋敷地は 12 世紀から 13 世紀前半にかけて存続し、12 世紀後半に最盛期があったと考えられる。区画溝に囲われた方形の屋敷地であると考えられ、その南西隅部分を検出している。屋敷地内には掘立柱建物・塀、井戸が構築されている。その他、屋敷墓と考えられる土坑墓も３基検出している。主として区画溝から、土師皿や瓦器皿・埴が多数出土している。その他、輸入陶磁器も存在する。屋敷地の廃絶以降は、耕作地としての利用が継続する。

調査地遠景　航空写真（西から。中央やや下が調査地。中央やや上は畝傍山）

調査地遠景　航空写真（南西から。中央に調査地）

図版 2

調査地遠景　航空写真（東から。右奥は二上山）

調査地遠景　航空写真（南から）

調査地全景　航空写真（南から。中層遺構完掘時）

調査区全景　航空写真（俯瞰。上が東。中層遺構完掘時）

図版 4

調査区全景　上層遺構完掘状況、中層遺構検出状況（北から）

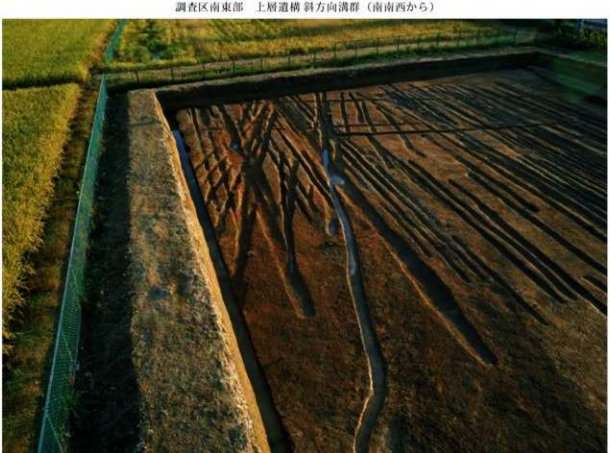
調査区全景　上層遺構完掘状況、中層遺構検出状況（北東から）

調査区全景　上層遺構完掘状況、中層遺構検出状況（南西から）

調査区全景　上層遺構完掘状況、中層遺構検出状況（北西から）

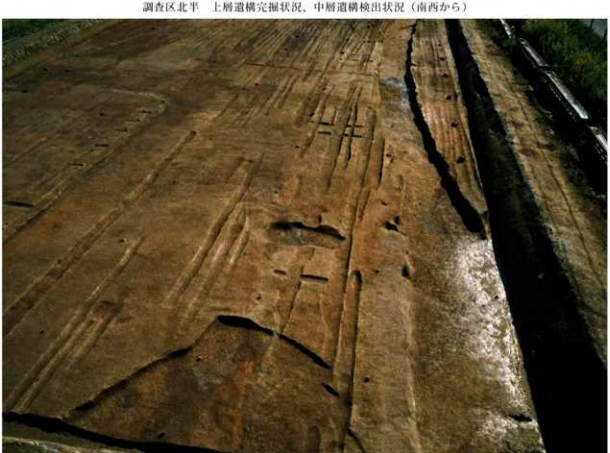
図版 6

調査区南東部　上層遺構 斜方向溝群（南南西から）



調査区南東部　上層遺構 斜方向溝群（北北東から）

調査区北半　上層遺構完掘状況、中層遺構検出状況（南西から）



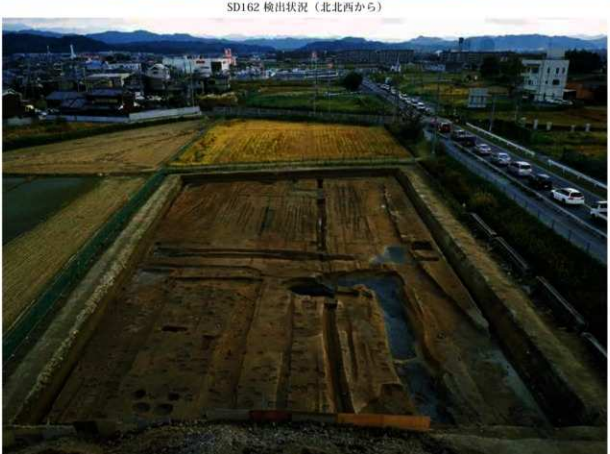
調査区北西部　上層遺構完掘状況、中層遺構検出状況（北北西から）

図版 8

調査区中央部　上層遺構完掘状況、中層遺構検出状況（西から）

調査区北東部　上層遺構完掘状況、中・下層遺構検出状況（南西から）

SD162 検出状況（北北西から）



調査区全景　中層遺構完掘状況、下層遺構検出状況（北から）

図版 10

調査区全景　中層遺構完掘状況、下層遺構検出状況（北西から）

調査区全景　中層遺構完掘状況、下層遺構検出状況（北から）

調査区全景　中層遺構完掘状況、下層遺構検出状況（北北西から）

調査区全景　中層遺構完掘状況、下層遺構検出状況（北北東から）

図版 12

調査区全景　中層遺構完掘状況、下層遺構検出状況（南西から）

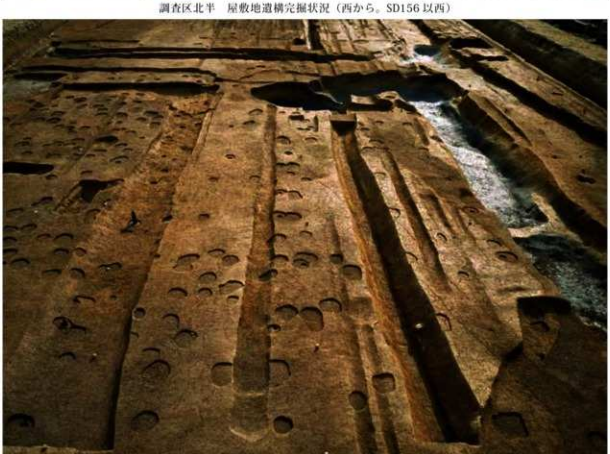
調査区全景　中層遺構完掘状況、下層遺構検出状況（南から）

調査区北半　屋敷地遺構完掘状況（南東から）

調査区北東部　屋敷地遺構完掘状況（南西から）

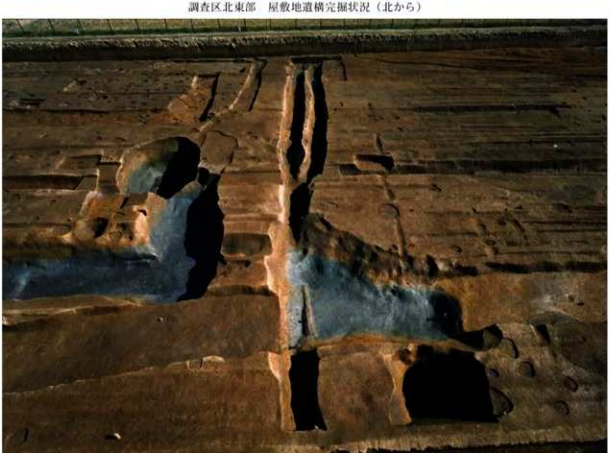
図版 14

調査区北半　屋敷地遺構完掘状況（西から。SD156 以西）



調査区北半中央　屋敷地遺構完掘状況（北から）

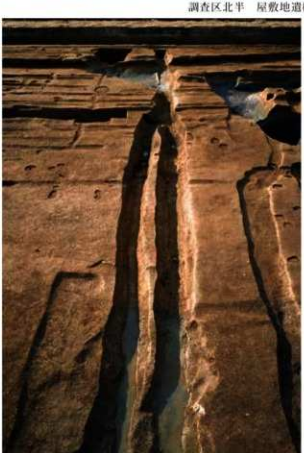
調査区北東部　屋敷地遺構完掘状況（北から）



調査区中央部　中層遺構完掘状況（西から）

図版 16

調査区北半　屋敷地遺構完掘状況（南西から）



SD153・343 完掘状況（西から）

SD157 土層断面（北から。調査区南壁壁面）

SD153・343 土層断面（東から。中央が SD153）

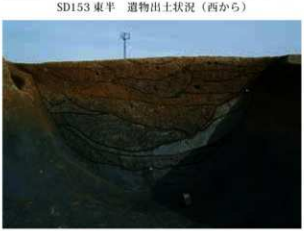
SD153 土層断面（西から）

SD343 土層断面（西から）

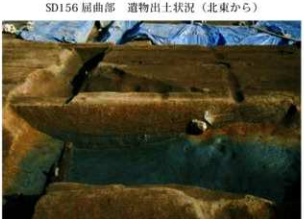
SD153 東半　遺物出土状況（南東から）

SD153 東半　遺物出土状況（西から）

SD156 屈曲部　遺物出土状況（北東から）



SD156 南東部　土層断面（西から）



SX423　土層断面（西から）

SD162 南端　土層断面（北北東から）

図版 18

SE211　検出状況（北から）

SE211　土層断面（西から）

SE211 底面　曲物出土状況　（北から）

SE422　土層断面（東から）

SK166　検出状況（西から）

SK167　検出状況（北から）

SK166　土層断面（北から）

SK167　完掘状況（北から）

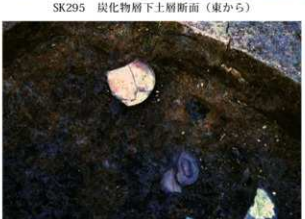
SK284　炭化物層検出状況（北から。土坑墓）

SK295　炭化物層検出状況（東から。土坑墓）

SK284　炭化物層下土層断面（南から）

SK295　炭化物層下土層断面（東から）

SK424　土層断面（北から）



SK295　炭化物層上面遺物出土状況（南東から）

図版 20

SK267　土層断面（北から）

SK332　土層断面（北東から）

SK333　土層断面（北西から）

SK335　土層断面（西から）

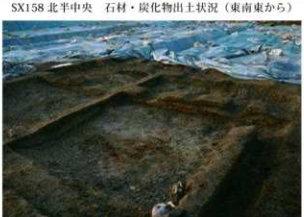
SX158・159　検出状況（北から。左上がSX158。最終的な遺構の新旧関係の認識とは異なる）

SX159 完掘状況、SD157・SX523 検出状況（北から。左手前が下層遺構 SX523 南肩）

SX158 底面　石材出土状況（北から）

SX158 北半中央　石材・炭化物出土状況（東南東から）

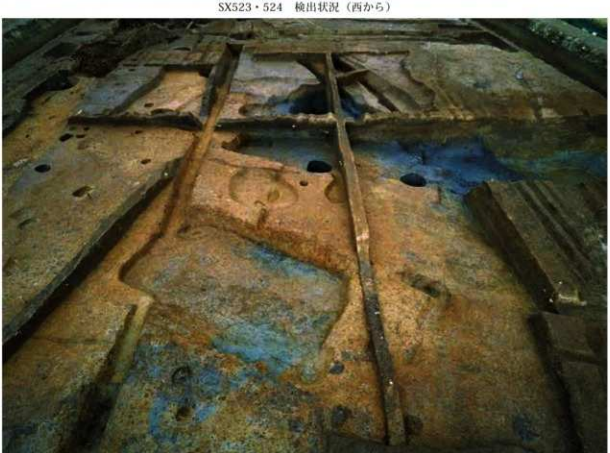
SX159　検出状況（北から）



SX159　土層断面（南東から）

図版 22

SX523・524　検出状況（西から）



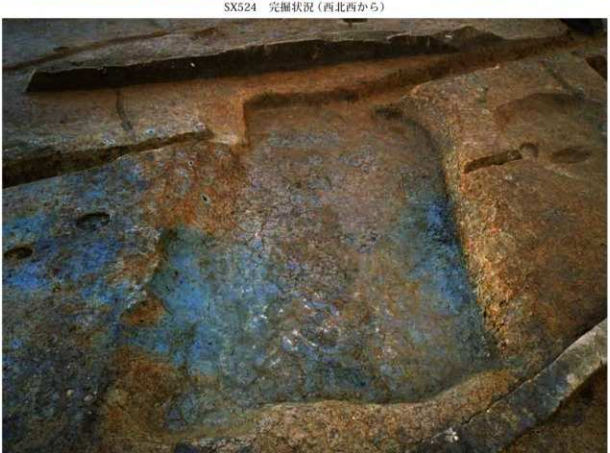
調査区南半　下層遺構完掘状況（南から）

SX523・524　完掘状況（南西から）

SX523・524　完掘状況（西から）

図版 24

SX524　完掘状況（西北西から）



SX523 東半底面落ち窪み　完掘状況（南東から）

SX524　完掘状況（南南東から）

SD160・161 完掘状況（南東から。調査区北半は検出のみ）

図版 26

SX524　東西畦土層断面（南から）

SX524　南北畦土層断面（北西から。SX524 北肩）

SX524　南北畦土層断面（西南西から。SX524 南肩）

SX523 中央部　遺物出土状況（北から）

SX523 西半中央部　遺物出土状況（南から）

SX523　玉出土状況（北から。左写真上の壺の中）

SR525　土層断面（南西から）

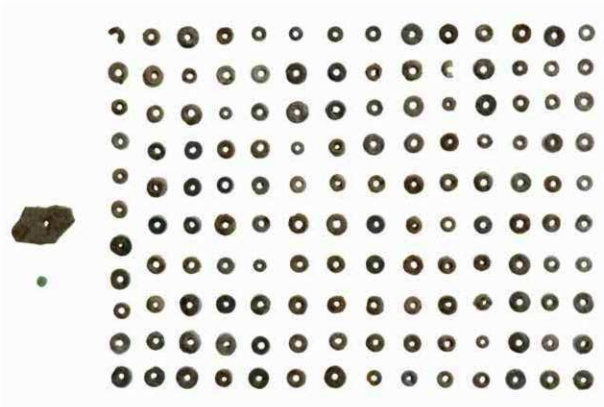
SK540　土層断面（東から）

SX524 出土　陶質土器・火焔形透かし高坏（左：872　右：871）

SD161 出土　陶質土器・甕（1051）

SX524 出土　陶質土器・器台（875）

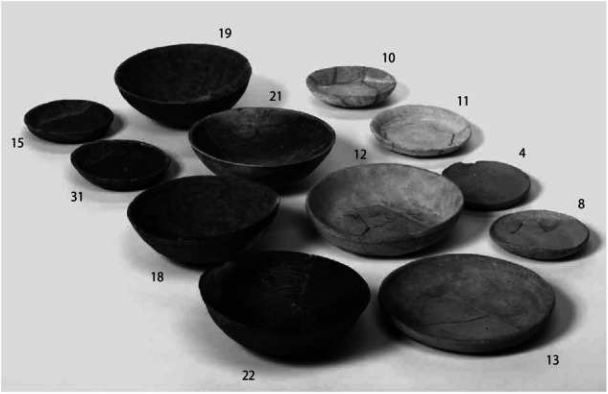
SX523 出土　陶質土器・コップ形土器（583）



SX523 出土　玉（T1 ～T143）

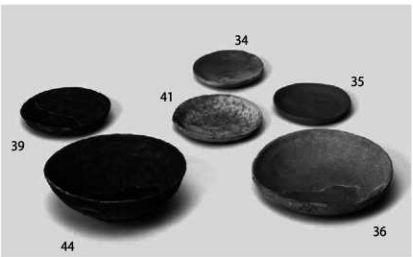
SX524 出土　製塩土器

上層遺構耕作溝出土鉄器、中層遺構SD153出土土器



図版 30

SD153・343・421出土遺物



SD343・421・157出土土器

40

42

45

46

47

50

51

53

55

66

67

図版 32

SD157出土土器・瓦

SD156出土土器

82

93

83

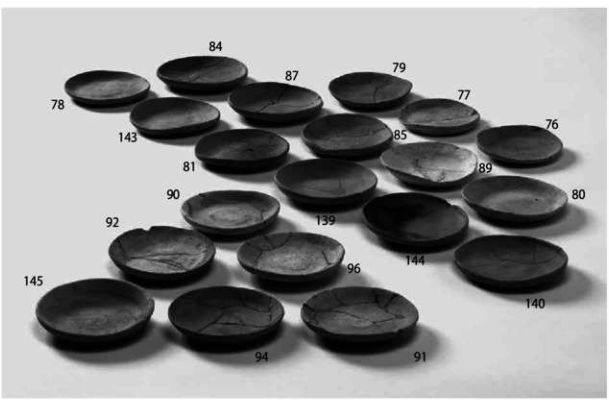
95

86

97

88

98


84
87
79
78
77
143
76
85
81
89
90
80
92
139
144
96
145
140
94
91

図版 34

SD156出土土器

99

100

101

102

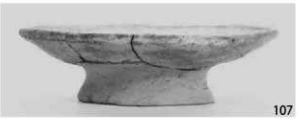
103

104

108

105

106


107

109

116

120

SD156出土器

122

127

125

129

126

133

134

135

113
114
130
115
124
117
112
118
123
119
128
121

図版 36

SD156下層出土土器

137

138

141

142

146

147

148

149

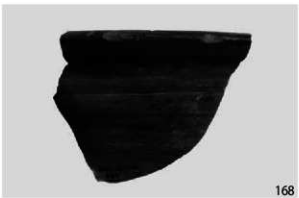
150

152

153

156

157


168

171

160

161

162

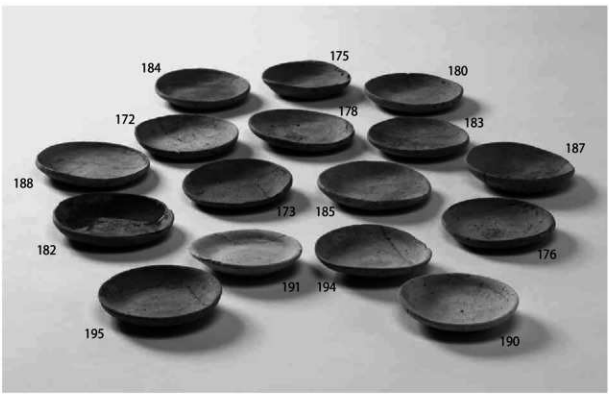
165

170

174

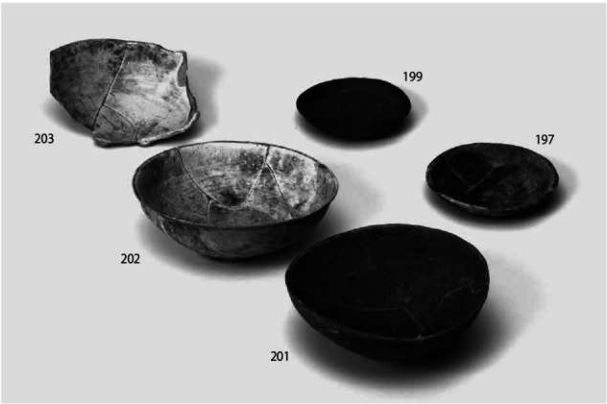
図版 38

SD154出土土器



200

198


199
203
197
202
201

208
213
211
219
223
217
207
221
222
216
225
226

図版 40

SD163・454・476・553・162出土土器

SE211埋戻土・井戸枠内出土土器

240

247

246

248

253

255

257

258

260

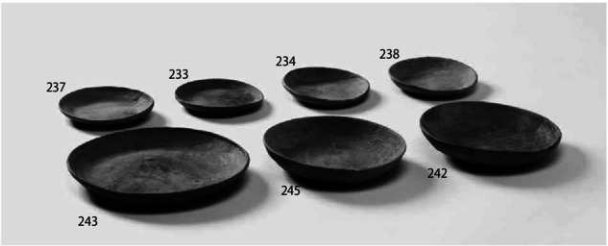
262

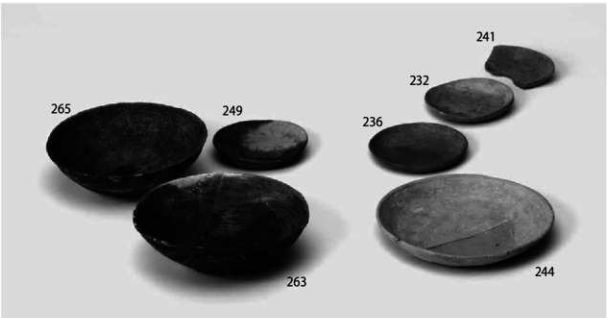
264

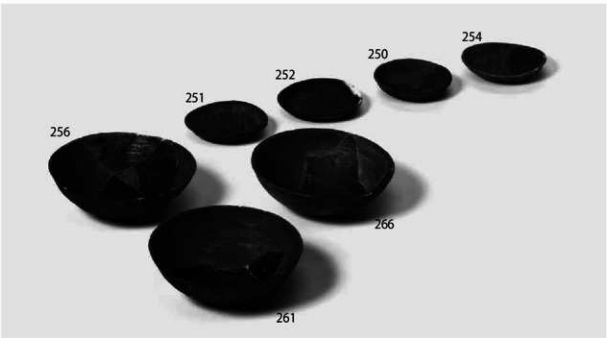
267

図版 42

SE211埋戻土・井戸枠内出土土器



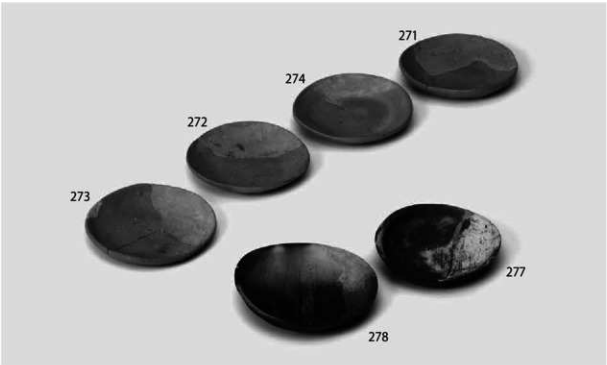




SE211掘方埋土・SE422・SK295出土土器

279

280



281

284

283

285

286

288

図版 44

SK333・424・284・455・170・SX423出土器

289

290

291

292

293

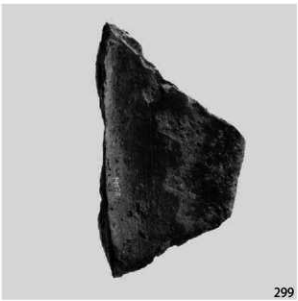
306

309

316

297

298


299

311

318

SX423出土器

319

328

320

329

321

330

324

331

325

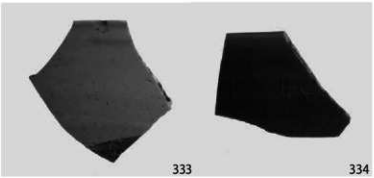
332

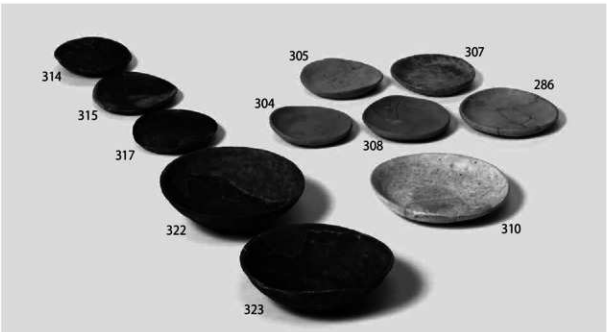
327

336

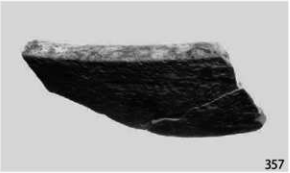
図版 46

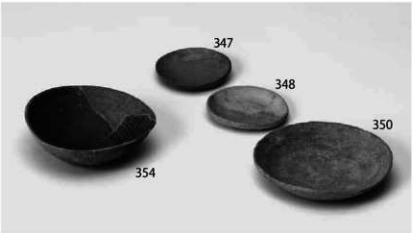
SX423・426・344出土遺物

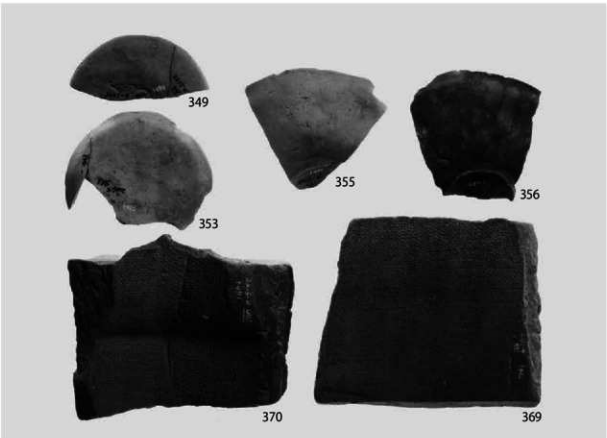




SX158出土遺物







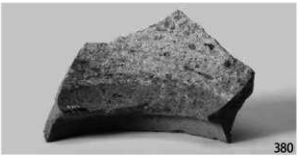
図版 48

SX159・中層遺構SP出土土器

374

376

377

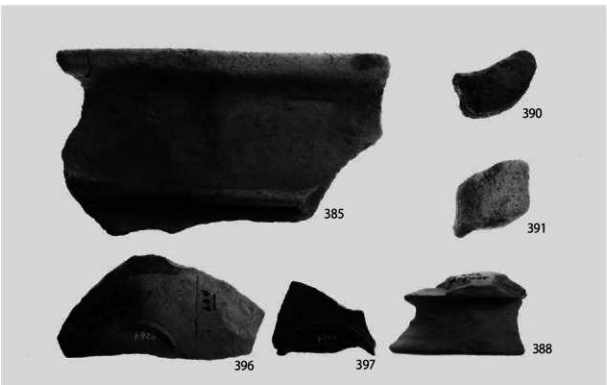

380

381

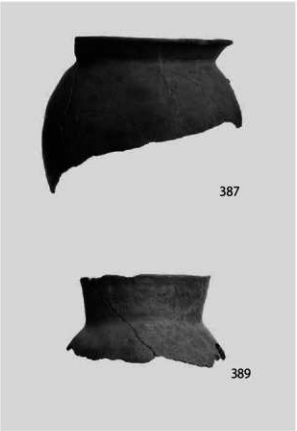
382

383

384



386


387

389

393

394

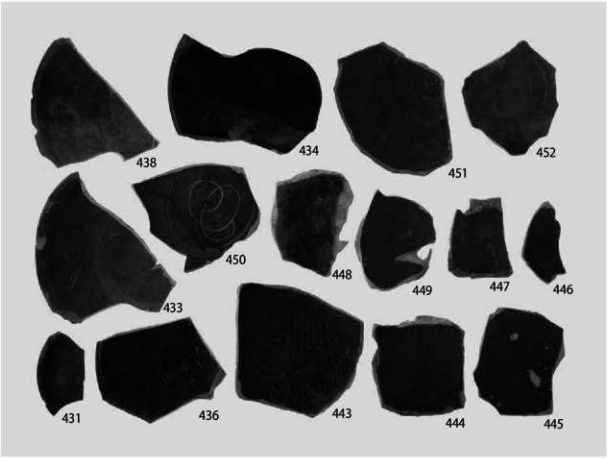
395

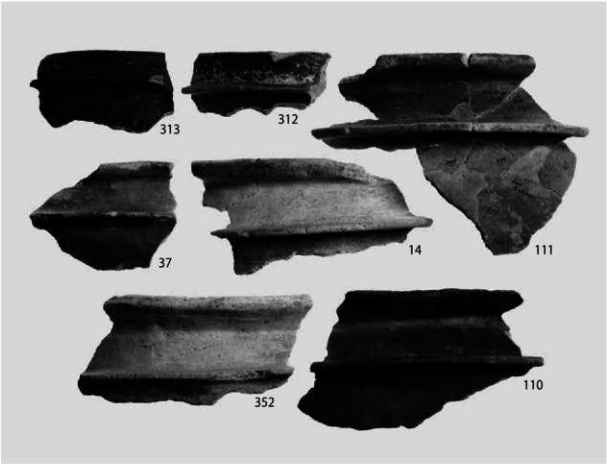
399

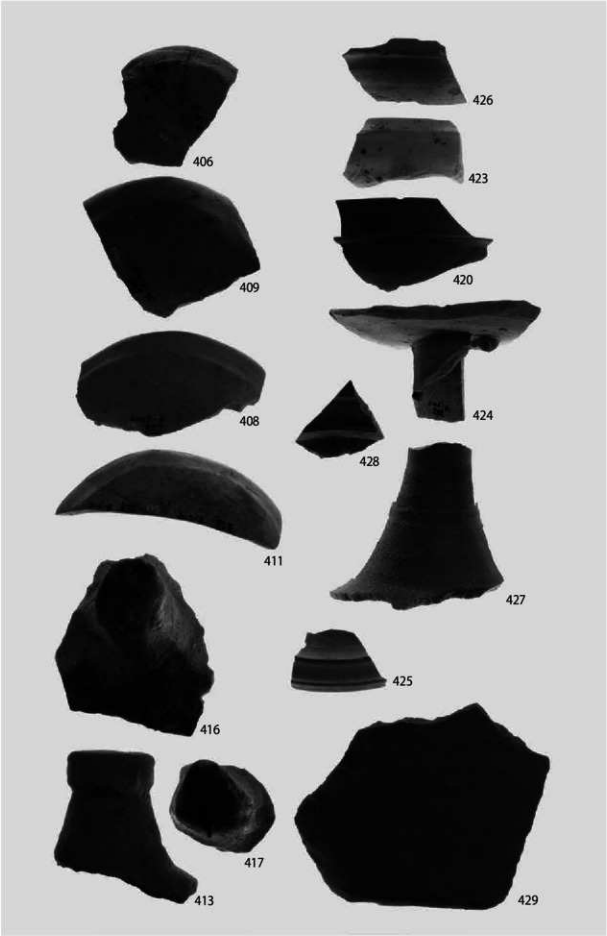
400

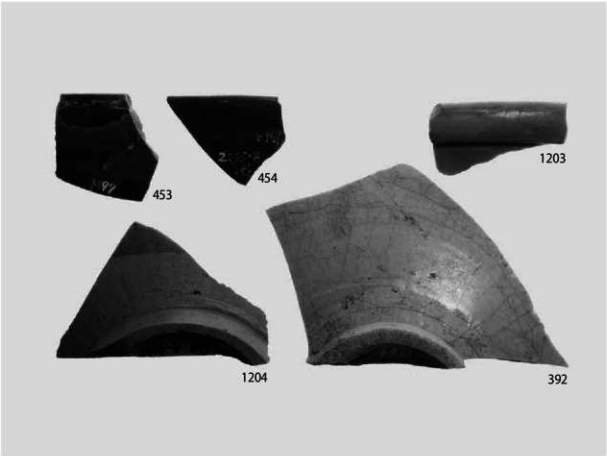
412

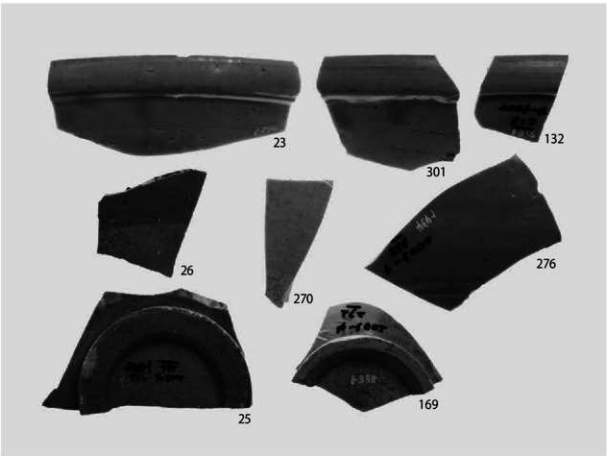
419

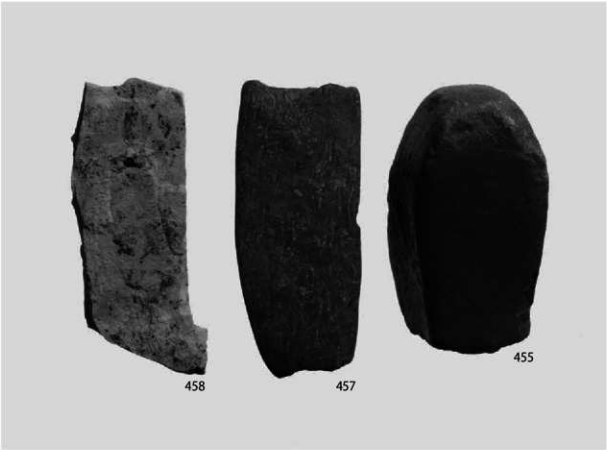

438
434
451
452
450
448
449
447
446
433
431
436
443
444
445

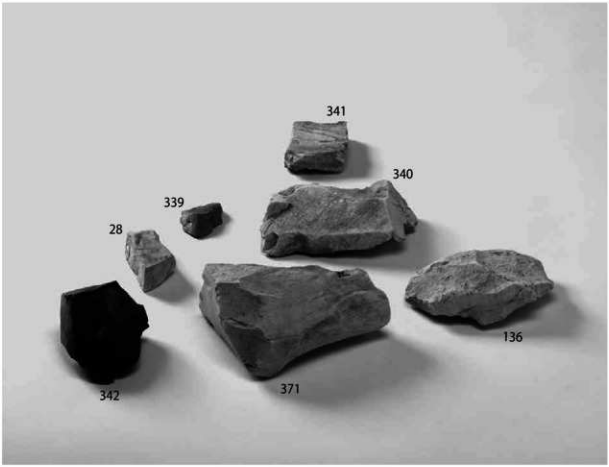

313
312
37
14
111
352
110


406
426
423
409
420
424
408
428
411
427
425
416
417
413
429


453
454
1203
1204
392

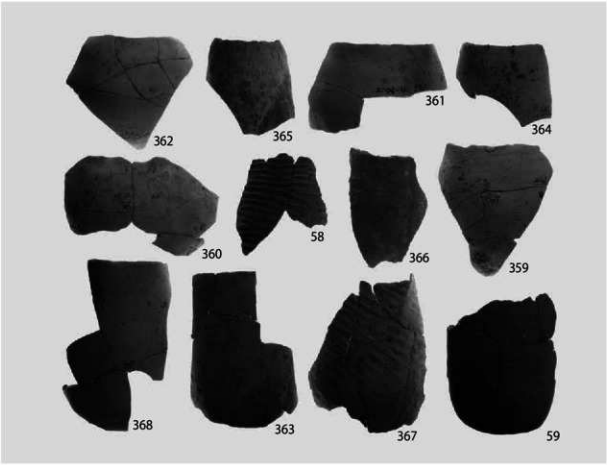

23
301
132
26
270
276
25
169

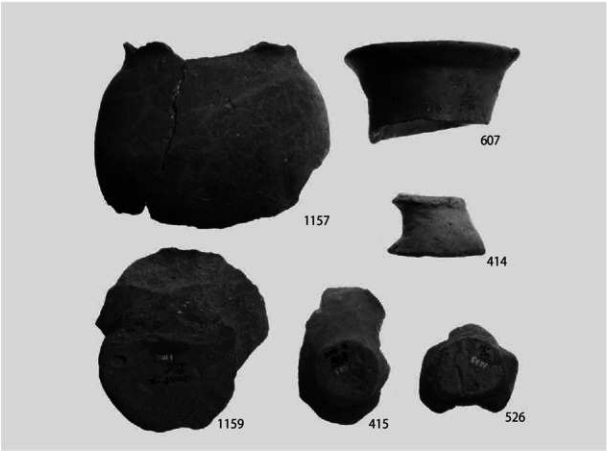

458
457
455


341
340
339
28
136
342
371

図版 54

中層遺構出土製塩土器、中層・下層遺構出土弥生土器





SX523上層出土土器

464

466

469

471

470

図版 56

SX523上層出土土器

478

472

479

490

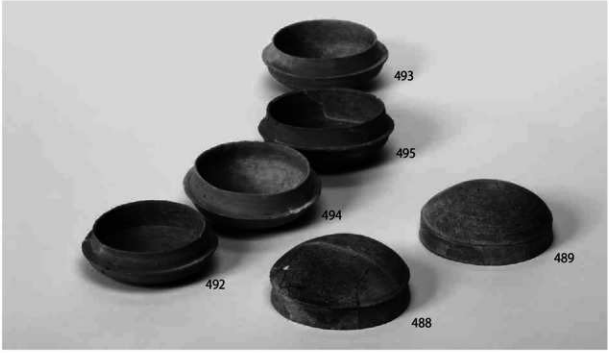
497

477

475

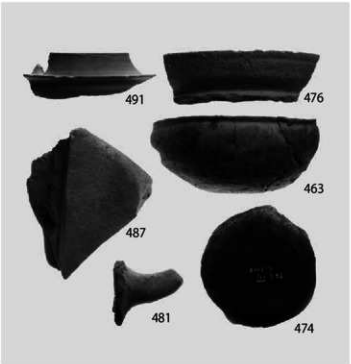
480

SX523上層出土土器



図版 58

SX523 出土遺物



SX523下層出土土器

515

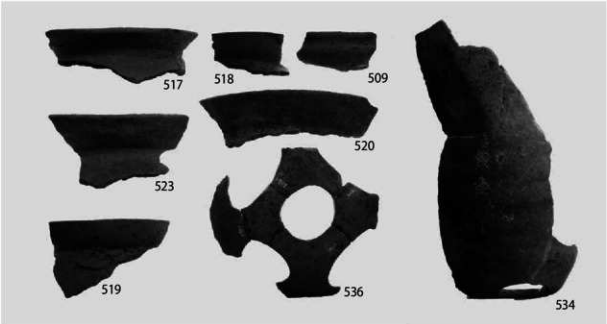
516

521

522

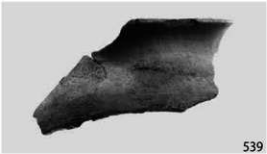
524

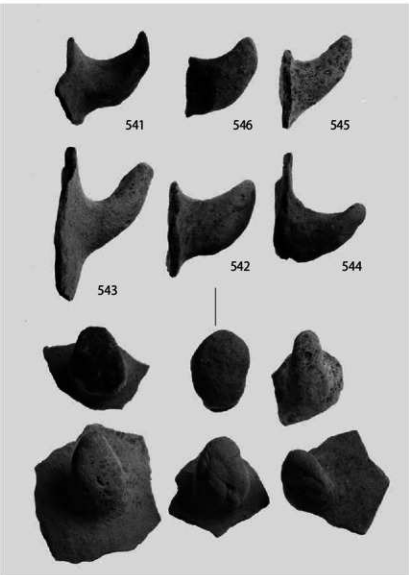
525



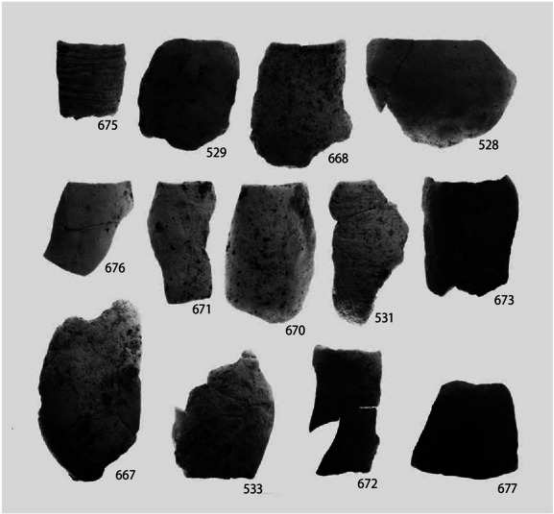
図版 60

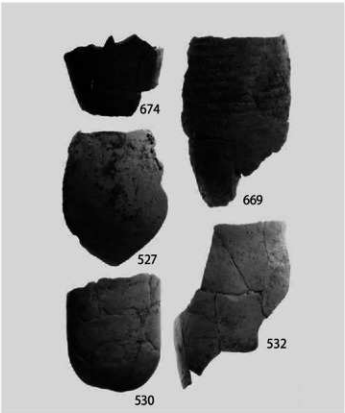
SX523下層出土遺物





SX523出土製塩土器





図版 62

SX523下層出土土器

550

551

552

553

555

556

557

560

562

563

566

568

SX523下層出土土器

572

573

575

574

577

579

図版 64

SX523下層出土土器

580

586

584

585

582

SX523出土遺物

587

588

594

598

595

599

597

596

600

図版 66

SX523 出土遺構

603

604

606

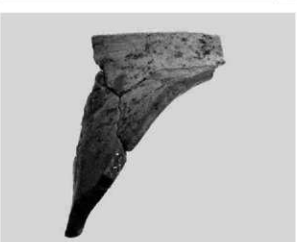
610

611

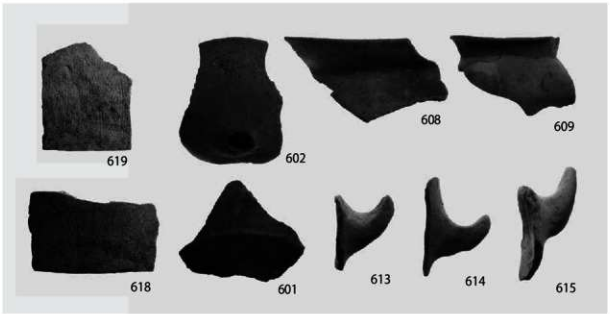
616

617

621


622

SX523出土器



図版 68

SX523 出土遺構

627

630

631

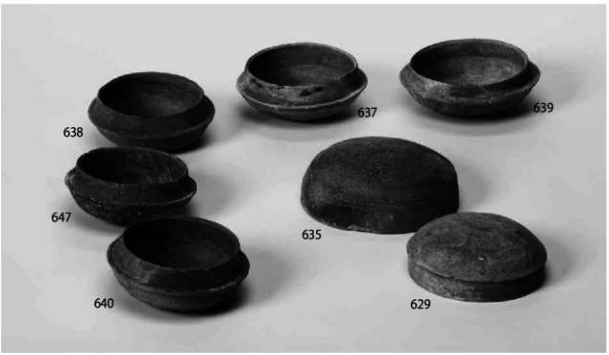
633

636

643

644

646



SX523出土遺構

651

652

654

656

666

659

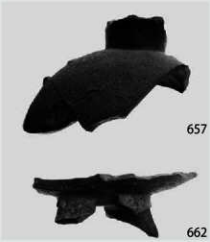
663

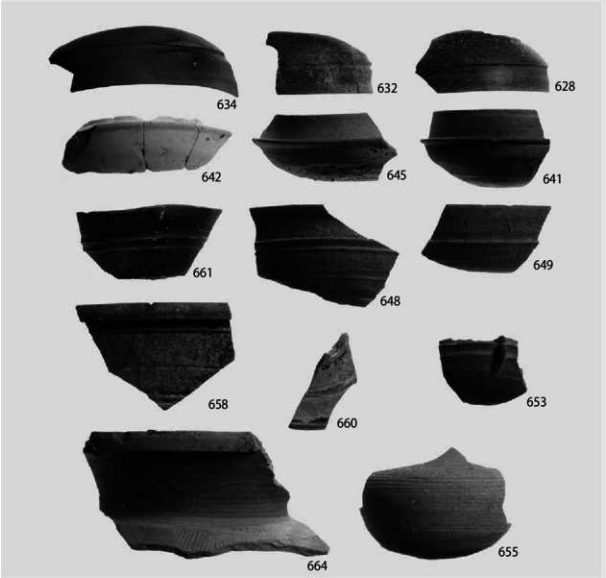
665

685

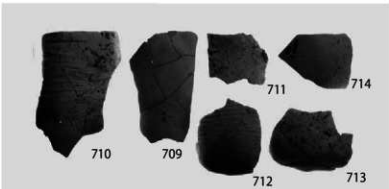
図版 70

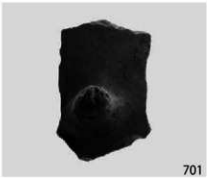
SX523出土遺物

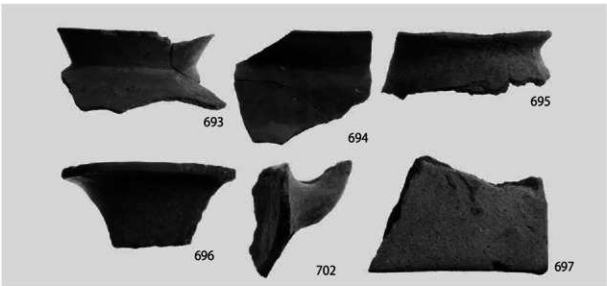




SX524上層出土土器







図版 72

SX524出土土器

SX524出土遺物

724

726

727

728

730

740

734

735

図版 74

SX524出土器

SX524出土土器

748

749

750

751

752

753

754

755

図版 76

SX524出土遺物

756

757

758

759

760

762

765

769

767

SX524出土器

771

770

774

775

779

780

図版 78

SX524出土器

781

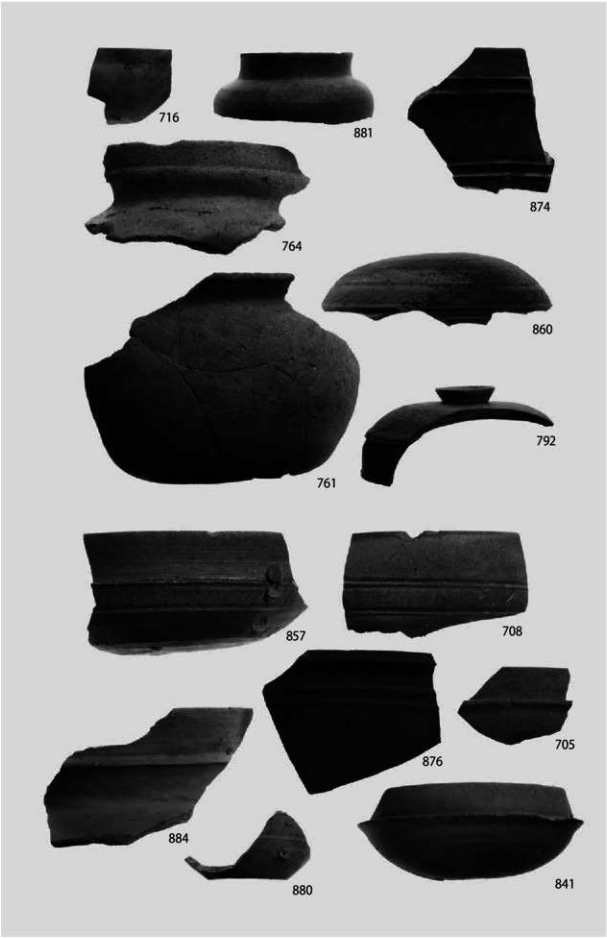
782

784

786

787

SX524出土遺物



器 土 土 生 SX524

790

791

793

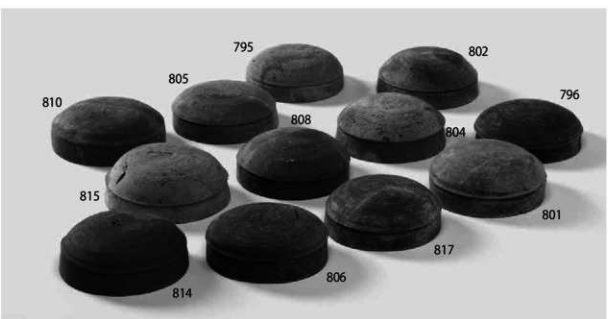
794

797

798

799

800



SX524出土遺物

803

807

809

811

812

813

816

819

822

824

826

827

図版 82

器台 SX524

838

839

840

842

843

844

845

846

848

849

図版 84

SX524出土遺物

858

859

864

866

869

870

871

872

図版 86

SX524出土土器

873

875

877

878

883

887

879

885

SX524出土遺物

886

890

888

889

1013

947

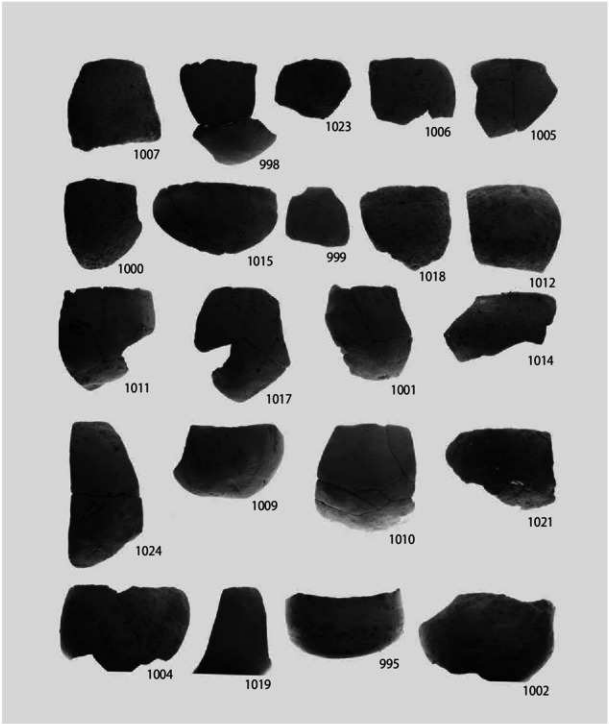
1016

1026

図版 88

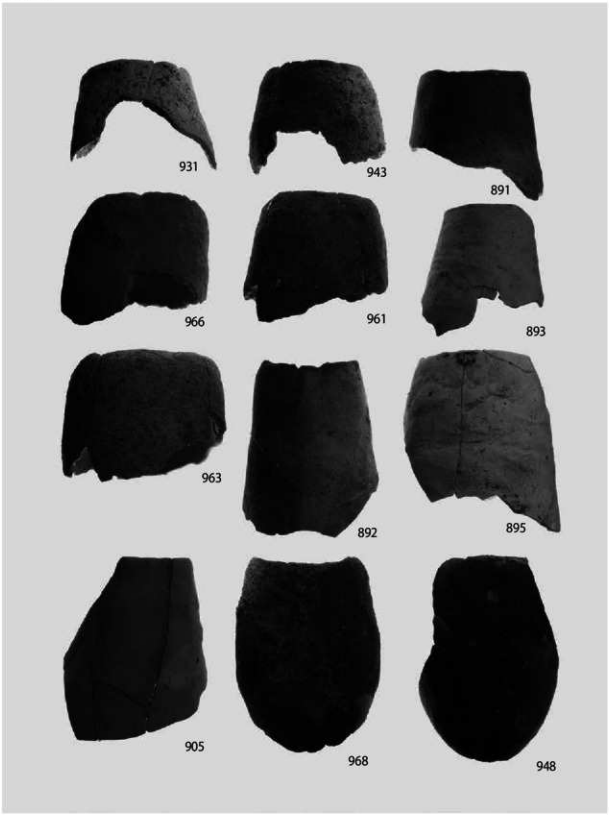
SX524出土製塩土器

SX524出土製塩土器

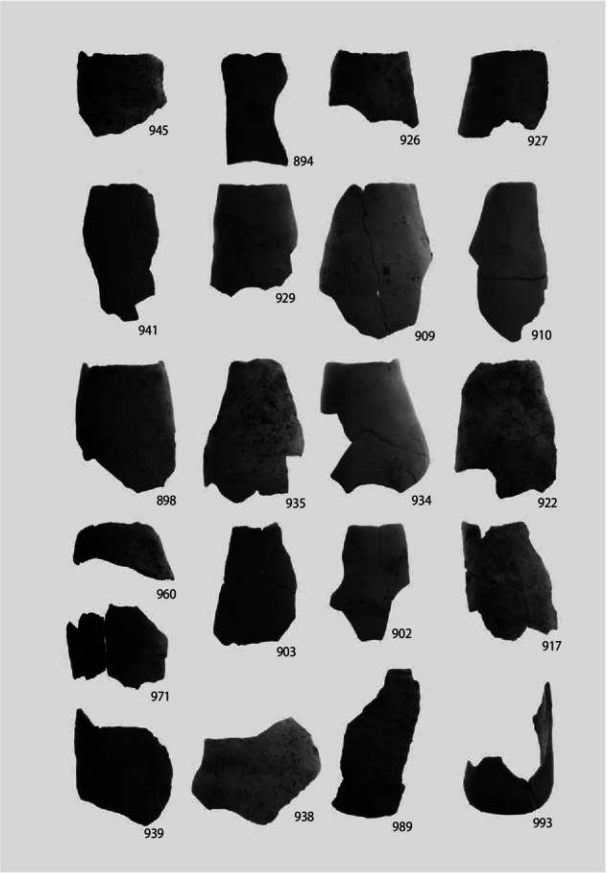


図版 90

SX524出土製塩土器

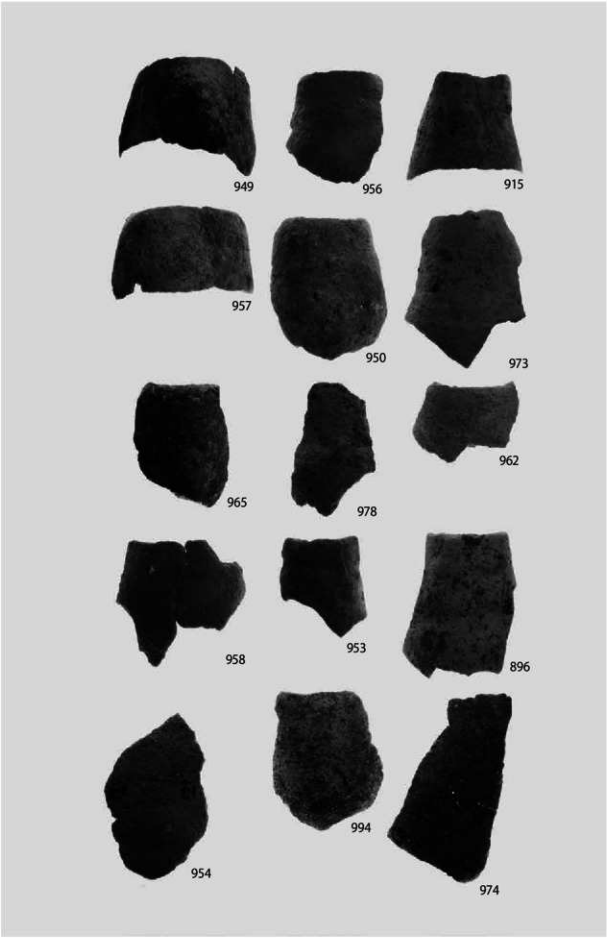


SX524出土製塩土器



図版 92

SX524出土製塩土器



SX524出土製塩土器

967

944

940

964

959

914

977

937

921

969

920

916

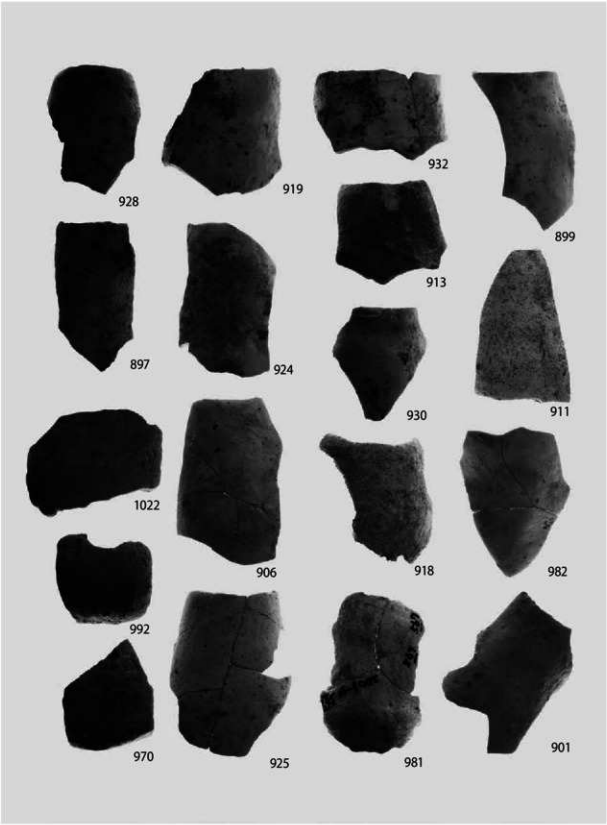
951

942

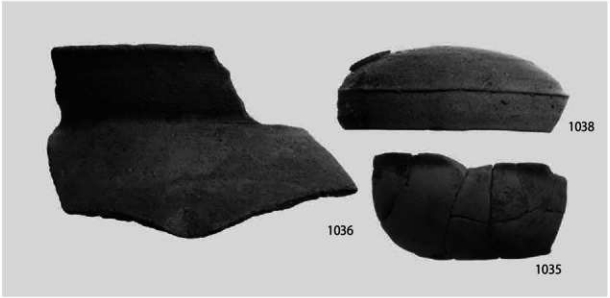
946

図版 94

SX524出土製塩土器



SX524出土石器、SX526・SK527・542出土土器



図版 96

SK540・SD160・161出土土器

1039

1043

1042

1041

1045

1046

1047

1048

1049

1050

1051

1053

1056

1059

1057

図版 98

SR525上層出土土器

1072

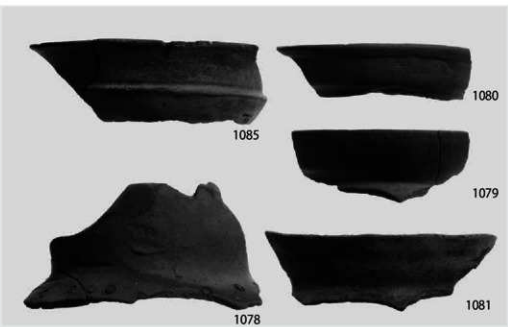
1069

1074

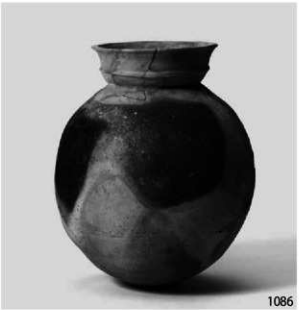
1068

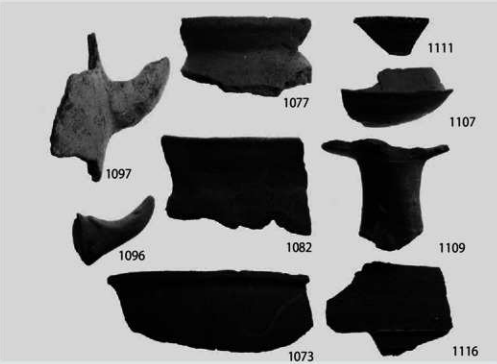
1070

1075



SR525上層出土土器





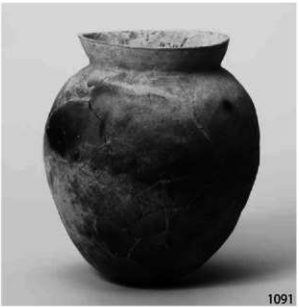
図版 100

SR525上層出土土器

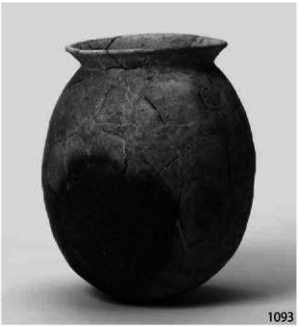
1088

1089

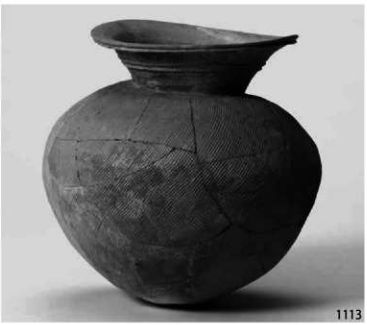
1090

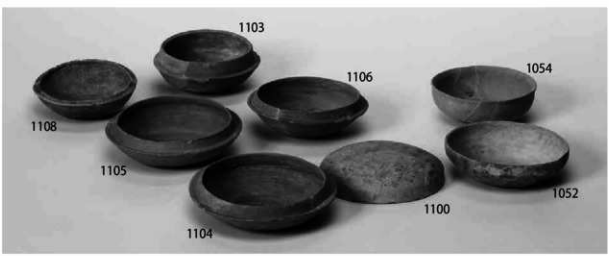

1091

1092


1093

SR525上層出土土器





1112

1114

1117

1118

1120

1124

1123

1125

SR525下層出土土器

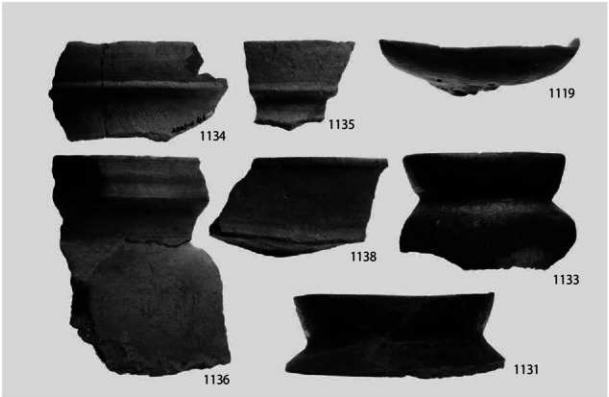
1126

1127

1128

1129

1130



図版 104

SR525下層出土土器

1132

1137

1139

1140

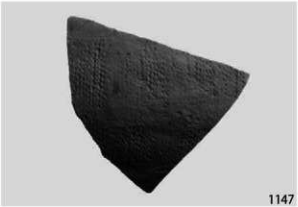
1141

1142

1143

1144

1145

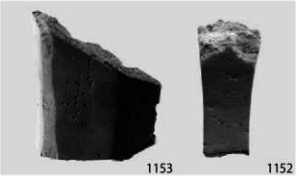

1147

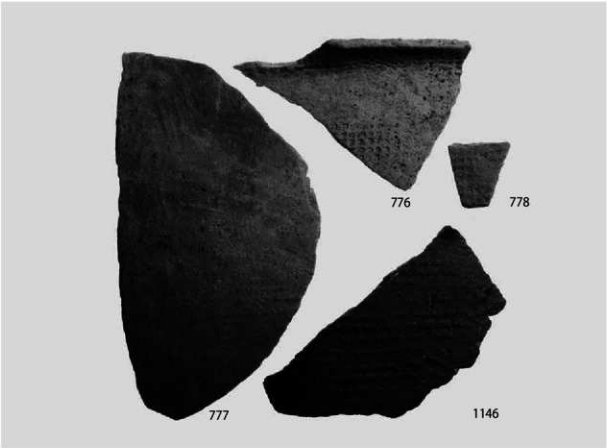
1151

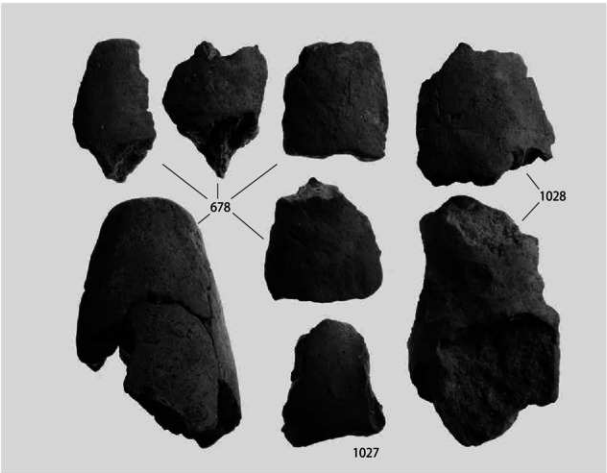
1149

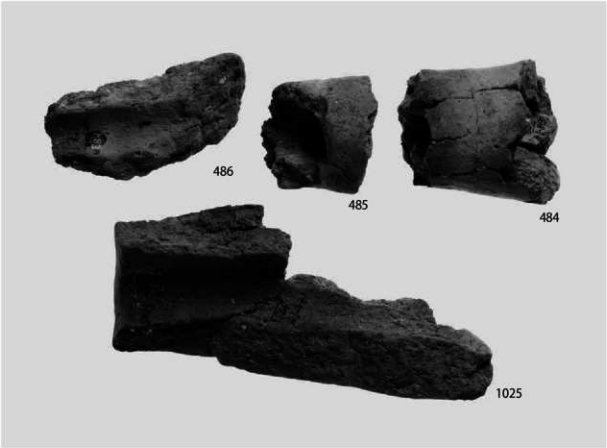
1148

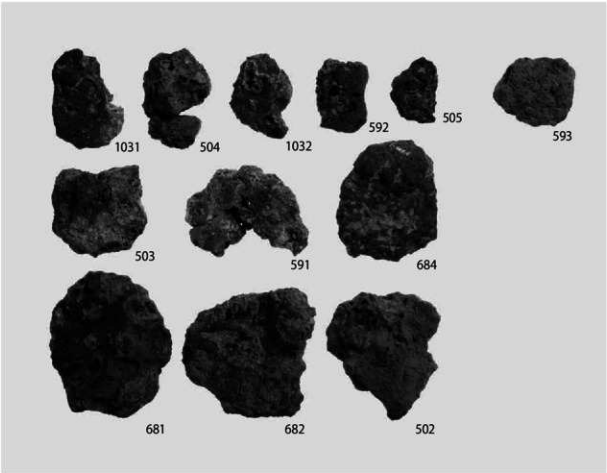
1150


1153 1152


776
778
777
1146


678
1028
1027


486
485
484
1025


1031
504
1032
592
505
593
503
591
684
681
682
502

図版 108

下層遺構面・重機掘削時出土土器

1158

1177

1172

1193

1196

1195

1163

1184

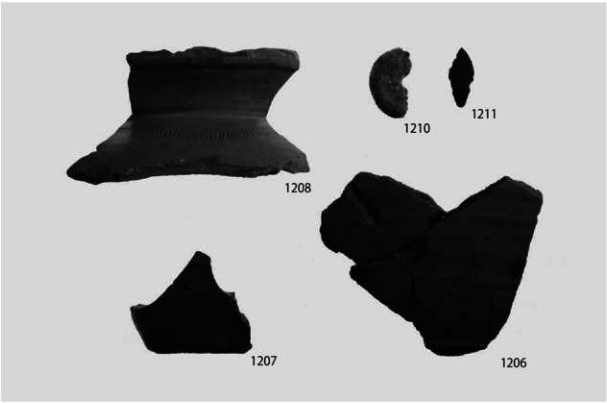
1185

1191

1209

重機掘削時出土遺物

1179
1166
1175
1168
1167
1173
1176
1170
1169
1180
1182
1171
1178
1183
1181
1174


1210
1211
1208
1207
1206

橿原市埋蔵文化財調査報告　第14冊

新堂遺跡Ⅱ

―京奈和自動車道「御所区間」建設に伴う発掘調査報告書―

発行年月日　平成30（2018）年3月9日

編集・発行　奈良県橿原市教育委員会

印　　刷　株式会社　アイプリコム

奈良県橿原市今井町3－2－5